

国道353号道路改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第1集

白井北中道II遺跡
吹屋犬子塚遺跡
吹屋中原遺跡

第1冊 (古代・中近世篇)

台帳番号検索用

1 9 9 6

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

国道353号道路改築(改良)工事に伴う

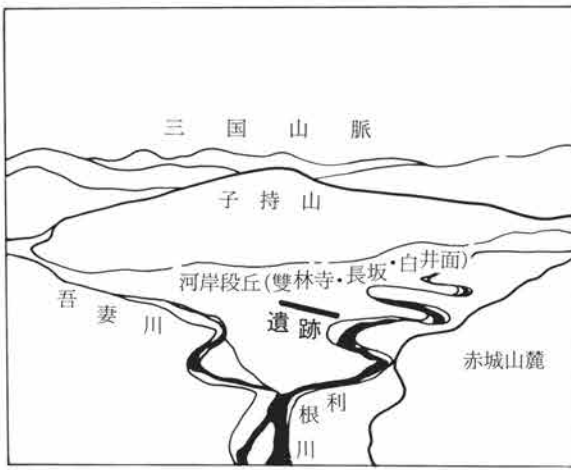
埋蔵文化財調査報告書 第1集

白井北中道II遺跡
吹屋犬子塚遺跡
吹屋中原遺跡

第1冊 (古代・中近世篇)

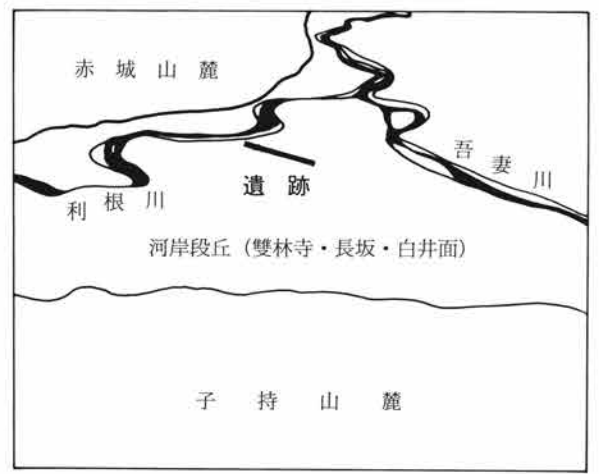
1 9 9 6

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡周辺の地形的環境。遺跡は利根川によって形成された河岸段丘上に立地するが、白井北中道Ⅱ遺跡は低位の白井段丘面、吹屋犬子塚・中原遺跡は高位の長坂段丘面に立地している。

〈南方の利根川下流上空から北方を望む〉



遺跡周辺の地形的環境。遺跡の立地する河岸段丘は、利根川(左側)と吾妻川(右側)に挟まれて舌状を呈している。 〈北方の子持山上空から南方を望む〉

6世紀第2四半期の榛名山ニツ岳降下軽石(Hr-FP)直下より発見された新段階の馬蹄跡(白色で小円にマーキングされた部分)の調査状況。後方壁面の白色の堆積物が降下軽石。〈吹屋中原遺跡Ⅱ区〉



畝立てされた畝跡を踏みつける新段階の馬蹄跡。縞状に黒い部分が畝間。〈白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区〉



空中から見た新段階の馬蹄跡群と畦状遺構(白線でマーキングされた部分)。左下方に畝立てされた畝跡が見える。〈白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区〉





榛名山ニツ岳降下軽石(Hr-FP)直下の旧地表面にスタンプされた新段階の馬蹄跡。〈吹屋犬子塚遺跡Ⅴ区〉



6世紀第1四半期の榛名山ニツ岳降下火山灰(Hr-FA)を踏み込んだ古段階の馬蹄跡の検出状況(白色にマーキングされた部分)。

〈吹屋中原遺跡Ⅱ区〉



降下火山灰(Hr-FA)を踏み込む古段階の馬蹄跡を半載した土層断面の状況。白色の半円は馬蹄のスタンプ圧力が火山灰層下面の黒色土(VI層)まで到達してその痕跡を留めたもの。土層断面の最上位は新段階の馬蹄跡が検出された軽石層直下面。断面中位の火山灰直上に載る黒色味の強い薄層は、焼き払いによる炭化物堆積層。〈吹屋中原遺跡Ⅱ区〉

序

北群馬郡子持村は、西暦6世紀前半に大爆発した榛名山二つ岳の軽石により埋没した遺跡として著名な国指定史跡「黒井峰遺跡」が有るところとして、全国的に知られています。この子持村で一般国道17号線鯉沢交差点の渋滞を解消すべく、鯉沢バイパスの建設工事とそれに接続する一般国道353号線の改良工事が並行して行われることとなり、二つの工事区域内に所存する埋蔵文化財の発掘調査が当事業団に委託されました。

一般国道353号線改良工事の発掘調査は、群馬県土木部の委託を受けて平成3年度よりこれを行い、平成5年度に未買収地の一部を残してすべて終了させました。この間、白井北中道II、吹屋犬子塚、吹屋中原の3遺跡を調査しました。何れの遺跡も黒井峰遺跡同様に榛名山二つ岳の軽石に埋もれており、軽石の下より6世紀前半の馬の蹄跡、放牧場跡、畠跡等が発見、調査され、研究者の注目をあびました。

発掘調査された3遺跡の調査報告書刊行のための整理作業は、平成6年度より3年計画で行われ、3遺跡の古墳時代から近世かけての遺構・遺物の整理作業が終了しましたので「白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡第一集」の調査報告書を上梓することにしました。発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県土木部道路建設課、渋川土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、子持村教育委員会、地元関係者等には、種々ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書がわが国並びに群馬県の歴史を解明するために、大いに活用されることを願い序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

1、本書は国道353号線道路改築（改良）工事に伴って行われた白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。これら3遺跡では多くの遺構、遺物が発見されているが、本書はそのうち、弥生時代以降の遺構・遺物を取り扱う。なお、本書で白井北中道Ⅱ遺跡と呼ぶ遺跡は、発掘調査期間中は「白井十二ノ下遺跡」と呼称されていたものであるが、その後大字・小字が混乱していたことが判明したため、今回「白井北中道Ⅱ遺跡」に変更した。

2、各遺跡の所在地は下記の通りである。

白井北中道Ⅱ遺跡 群馬県北群馬郡子持村大字白井（Ⅲ区のみ大字吹屋）

吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 群馬県北群馬郡子持村大字吹屋

3、事業主体 群馬県

4、調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5、調査・整理体制及び期間は下記の通りである。

○発掘調査

平成3年度（平成3年7月1日～平成4年3月25日）

調査遺跡 白井北中道Ⅱ遺跡Ⅰ～Ⅲ区

調査担当 石坂茂、根岸仁、高井佳弘

事務局 邊見長雄、松本浩一、佐藤勉、神保侑史、巾隆之、岩丸大作、国定均、須田朋子
吉田有光、柳岡良宏、船津茂、松下登
野島のお江、並木綾子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ

平成4年度（平成4年4月1日～平成5年3月30日）

調査遺跡 吹屋犬子塚遺跡Ⅰ～Ⅶ区、吹屋中原遺跡Ⅰ・Ⅱ区

調査担当 石塚久則、石坂茂、菊池実、岩崎泰一、高井佳弘、杉山秀宏

事務局 邊見長雄、近藤功、佐藤勉、神保侑史、能登健、斉藤俊一、国定均、笠原秀樹、須田朋子
柳岡良宏、船津茂、高橋定義、松下登
並木綾子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ

平成5年度（平成5年4月1日～平成6年3月25日）

調査遺跡 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ～Ⅴ区、吹屋中原遺跡Ⅱ・Ⅲ区

調査担当 石坂茂、高井佳弘、遠藤俊爾

事務局 中村英一、近藤功、佐藤勉、神保侑史、能登健、斉藤俊一、国定均、笠原秀樹、須田朋子
柳岡良宏、船津茂、高橋定義、松下登
吉田恵子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ、角田正子、内山佳子

○整理作業

平成6年度（平成6年4月1日～平成7年3月31日）

整理担当 高井佳弘（平成6年12月まで）、石坂茂（平成7年1月から）

整理嘱託員 浅井良子

整理補助員 高梨房江、小林恵美子、小菅優子、田中暁美、内山由紀子、荒木亜矢子

事務局 中村英一、近藤功、蜂巢実、神保侑史、中束耕志、斉藤俊一、国定均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義、大沢友治
吉田恵子、今井もと子、松井美智代、杉山ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子

6、遺構の写真撮影は各発掘調査担当者、遺物写真撮影は当事業団主任技師佐藤元彦がおこなった。

7、出土遺物の保存処理は当事業団主任技師関邦一と、小林浩一がおこなった。

8、馬蹄痕や出土遺物等の分析については、以下の方々、団体に依頼した。これらの報告は、テフラ分析を除き、第4章に掲載した。

馬蹄痕 宮崎重雄氏（県立大間々高校）

テフラ分析・植物珪酸体分析・花粉分析・寄生虫分析・土壌分析 株式会社古環境研究所

炭化材・炭化種実同定 株式会社パレオ・ラボ

電磁波探査 応用地質株式会社

9、本書の編集は高井佳弘が担当した。

10、執筆分担は下記の通りである。

第1章第1節 巾隆之

第5章第1節 石坂茂

その他 高井佳弘

11、第3章第2節の遺物観察表のうち、陶磁器の部分は西雅広の助力を得た。

12、本遺跡の記録保存資料および出土遺物は、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

13、発掘調査、整理にあたっては、下記の方々にご協力、ご教示をいただいた。記して感謝いたします。

（敬称略・順不同）

子持村教育委員会、石井克巳、伊藤寿和、大塚初重、置田雅昭、木村茂光、佐々木高明、佐原真、白石太郎、高谷好一、田中琢、前沢和之、吉崎昌一、山口英男、王才林、李準浩、趙現鐘

凡 例

- 1、本書は白井北中道II遺跡、吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡の弥生時代以降の遺構、遺物を扱う。
- 2、挿図および付図の方位記号は全て国家座標上の北を基準としている。
- 3、遺構図の縮尺は、適宜最適と思われるものを使用したので、各図中のスケールを参照されたい。
- 4、等高線、断面基準線の数値は海拔で表示し、断面基準線標高値は各図の左下にL=○○○mと表示した。
- 5、断面図中のスクリーントーンは以下の層を示している。



- 6、遺構図は以下の縮尺で掲載した。
土器・陶磁器 1/3 鉄器・石器・キセル 1/2 銅銭・白玉 1/1
- 7、陶器の実測図におけるスクリーントーンは施釉部分を表している。釉の種類は図の右下および観察表に示した。
- 8、遺物写真については261ページ以下にまとめて掲載した。写真の縮尺は不同である。
- 9、遺構（溝、畦状遺構など）の方位は北を基準とした傾きを計測し、東に傾く場合はN-○○°-E、西に傾く場合はN-○○°-Wと表記した。この角度は90°を越えない。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
抄 録	
第1章 調査の経緯・経過・方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査区などの設定と調査の方法	3
第2章 位置と環境	6
第1節 遺跡の位置	6
第2節 地形と基本層序	7
第3節 テフラ層	11
第4節 周辺の遺跡	14
第3章 調査の成果	20
第1節 調査成果の概要	20
第2節 F P上面の調査	22
第3節 F P下面の調査	66
第4節 F A下面の調査	247
第4章 遺跡の自然科学分析	268
第1節 吹屋遺跡群（北中道II・犬子塚・中原遺跡）における植物珪酸体分析	268
第2節 吹屋犬子塚遺跡における花粉分析	309
第3節 吹屋中原遺跡における寄生虫卵分析	311
第4節 白井北中道II遺跡の土壌分析	314
第5節 吹屋犬子塚・吹屋中原・白井北中道II遺跡より出土した炭化種実等について	317
第6節 白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡出土炭化材の樹種	330
第7節 吹屋犬子塚遺跡の電磁波探査報告	340
第8節 白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の馬蹄跡	358
第5章 考 察	370
第1節 畦状遺構の機能と性格について	370
第2節 F P下面の土地利用について	383

報告書抄録

フリガナ	シロイキタナカミチニイセキ・フキヤイヌコヅカイセキ・フキヤナカハライセキ
書名	白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡
副書名	国道353号道路改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第207集
編著者名	高井佳弘
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年	1996年3月27日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シロイキタナカミチニ 白井北中道II	キタダシマダコモチムラ 北群馬郡子持村 オホアザシロイ 大字白井・吹屋	10341		36°30'55"	139°1'15"	19910701～ 19920325	5,600	道路建設
フキヤイヌコヅカ 吹屋犬子塚	キタダシマダコモチムラ 北群馬郡子持村 オホアザシロイ 大字吹屋	10341		36°31'00"	139°1'00"	19920401～ 19940325	10,200	道路建設
フキヤナカハラ 吹屋中原	キタダシマダコモチムラ 北群馬郡子持村 オホアザシロイ 大字吹屋	10341		36°31'00"	139°0'50"	19920401～ 19940325	8,136	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白井北中道II	土坑 生産	中世～近代 古墳	土坑・溝 放牧地・畠・道	陶磁器・銭・キセル・釘	馬の放牧地
吹屋犬子塚	土坑 生産	中世～近代 古墳	土坑・溝・道 放牧地・水田・ 畠・道	陶磁器・銭・キセル・釘	馬の放牧地
吹屋中原	土坑 生産 祭祀	中世～近代 古墳 古墳	土坑・溝 放牧地・陸苗代 ・畠・道 祭祀跡	陶磁器・銭・キセル・釘 土師器坏・土師器甕 土師器坏・石製白玉・鉄 鏃	馬の放牧地

第1章 調査の経緯・経過・方法

第1節 調査に至る経緯

群馬県の中央部を南北に貫く国道17号線は、高崎市から前橋市・渋川市・沼田市を通り、新潟県に抜ける幹線道路として機能している。渋川市の北部を流れる吾妻川を越え北群馬郡子持村に入ると、中之条町・吾妻町を抜け長野原町に至る国道353号線と分岐する。

国道17号線は、渋川市内の混雑を避けるため、市の東側に渋川バイパスを開通させたが、関越自動車道新潟線が開通し、渋川インターチェンジと同バイパスを接続させたことで交通量が増加する結果となった。このため建設省では、新たな17号バイパスとして、渋川バイパス途中の渋川市東町付近から吾妻川を越え、利根川右岸の子持村白井・北中道と吹屋原地区を通り、現道に合流する鯉沢バイパスの建設を計画した。これに伴う埋蔵文化財の発掘調査も平成2年から開始された。

県土木部道路建設課では、県中央部と吾妻郡を結ぶ幹線道路である国道353号線の改良工事を、鯉沢バイパスの建設にあわせて計画した。工事は鯉沢バイパスの白井地区で分岐させ、現道の17号線を横断し、子持村役場の北側から北消防分署付近で現道と合流させる計画である。

道路建設課は、事業の計画に合わせ、事業地の埋蔵文化財包蔵地の有無について、県教育委員会文化財保護課に照会を行った。計画によると第1期として鯉沢バイパスの分岐点から国道17号線までの間とし、供用開始を平成5年に予定。17号線より東については用地買収等の進捗状況を見ながら、第2期工事として後日の協議としたいとのことであった。

このため、県文化財保護課では、該当地区である白井・吹屋・田尻地区について遺跡の所在の調査を行うことになった。しかし、両地区は榛名山の噴火活動による軽石層が厚く堆積しているため、表面で

の観察は難しい状況であることが判明した。しかし、鯉沢バイパスとの分岐点近くは、「白井北中道遺跡」として財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が既に発掘調査を実施していること、吹屋地区でも本路線の南側で子持村教育委員会が「温泉センターふれあい館」建設に伴い試掘調査を実施しており、遺跡であることが確認されていること、田尻地区において事前に電気抵抗による表面調査を行っており、遺構の存在が確認されているなど、全線にわたって遺跡地として認定できるため、事前に発掘調査が必要であると判断した。

文化財保護課では道路建設課と詳細な協議を重ね、平成3年度から発掘調査を実施すること、調査の委託先を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とすることなどを決定した。

平成3年度になり、県文化財保護課・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・県道路建設課・渋川土木事務所の4者間で数回にわたる協議を行い、鯉沢バイパスとの分岐点にかかる「白井十二の下遺跡(白井北中道II遺跡)」から発掘調査を実施することになった。遺跡では榛名山の軽石に覆われた古墳時代と、更に下層にある縄文時代の包含層の調査を行った。

平成4年度は、吹屋地区に所在する「吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡」の調査に順次入った。供用開始を1年延長して平成6年度に変更となったが、発掘調査については平成6年3月をもって、一部の未買収地を除き終了した。

発掘調査が終了するため、整理事業について文化財保護課・道路建設課・事業団で協議を行い、平成6年より4年計画で実施し、報告書については、平成7年度及び9年度に刊行することになった。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成3年7月から平成6年3月までの2年6ヶ月行われた。調査の経過の概略は以下のようである。ただし、縄文・旧石器時代の調査については、本書の範囲外となるため、ここでは省略した。

平成3年7月1日 白井北中道II遺跡I・II区から調査開始。表土除去ののちFP上面の調査を行う。

7月23日 FPの除去を開始。FP下面の精査はII区からI区の順序で行う。蹄跡、畦状遺構を発見。

8月6日 II区南東隅にて一号畠跡を発見。

8月26日 畦状遺構・株痕の断ち割り調査及び下層のトレンチ調査を開始。

9月6日 FA上面の調査を開始。このころは柵や杭の跡を探すことに主眼があった。

9月26日～10月4日 FA下面の調査。

12月9日 北中道II遺跡III区の調査開始。

12月17日 III区のFP除去開始。翌日からFP下面の調査を開始。

12月19日 III区にて2号畠跡発見。

平成4年1月27日～2月13日 III区FA上面の調査。これによって3号道下層の蹄痕を発見。

2月5日～27日 III区FA下面の調査。

3月2日 吹屋犬子塚遺跡の調査の準備を開始。

3月3日 犬子塚I・II区の表土除去開始。FP上面の遺構希薄のため、引き続きFP除去。

3月16日 調査事務所を吹屋地区に移転。

4月9日 犬子塚I・II区FP下面調査開始。

4月13日 吹屋中原遺跡II区・I区表土除去開始。17日より並行してFP上面調査。

5月7日～7月2日 犬子塚I区FA上面調査。

5月21日～26日 犬子塚II区FA下面調査。

5月16日 中原II・I区FP除去開始。その後6月1日中原II区、26日中原I区FP下面調査開始。

7月2日 中原I区東南隅で3号畠跡確認。

7月3日～10日 犬子塚I区FA下面調査。

9月7日～11日 中原I区FA上面調査。引き続き

9月14日～29日FA下面の調査。この過程で「下層の蹄痕」を発見。

9月21日 中原II区FA上面調査開始。引き続き10月16日～11月4日FA下面の調査。

10月22日 犬子塚IV区表土除去開始。11月4日～17日犬子塚IV区FP上面調査。

11月5日～12月11日 中原I区3号畠跡調査。

11月11日～平成5年2月19日 犬子塚Ib区調査。

11月18日 犬子塚IV区FP除去開始。

11月24日 調査班1班増。この後、平成4年度内は2班体制で調査実施。

11月26日～12月7日 犬子塚IV区FP下面調査。

12月8日 犬子塚IV区FA上面調査開始。11日FA下面調査開始。以後、上・下面の調査を並行実施。

平成5年2月25日 犬子塚III区調査開始。表土除去に並行してFP上面調査。

3月3日 犬子塚V区表土除去開始。FP上面の調査は5日から開始。

3月15日～26日 犬子塚III・V区FP除去。

4月6日～15日 犬子塚III区FP下面調査。以後4月15日からFA上面、4月21日からFA下面の調査。

5月12日～28日 犬子塚V区FP下面精査。5月25日1号水田跡発見。以後6月21日からFA上面、7月6日からFA下面調査開始。

6月30日～9月2日 北中道II・IIIb区、犬子塚Ic区調査。

7月16日～30日 中原III区表土除去。

8月4日～26日 中原III区FP上面調査。

8月31日 中原III区FP除去開始。9月6日より並行してFP下面の調査開始。20日1号祭祀跡発見。

10月13日 犬子塚V区1号水田部FA上下面調査開始。15日で一時中止。11月17日再開。この過程でFA下面1号水田跡を発見。

10月15日 中原III区FA上面調査開始。29日よりFA下面調査開始。

11月17日～平成6年3月17日 中原IIb区調査。

第3節 調査区などの設定と調査の方法

本書で報告する3遺跡の発掘調査は、一般国道353号線バイパスの建設に伴うものであり、調査対象地は幅約20～40m、長さ約750mと細長い。そのため、一つの遺跡名で呼ぶのは不都合であり、便宜上いくつかに分割することにした(図1・4)。

調査対象地全体は地形的にいくつかに分け、それを基準として、次のように3遺跡に分けた。遺跡の東部には比高差約15mの段丘崖があり、ここを境にして東と西は違う段丘面(東の低い段丘面が白井面、西の高い面が長坂面である。7ページ参照)となるので、ここでまず大きく2つに分けることができる。さらに西側については、中央やや西寄りに南北方向の谷が横断するため、ここで分けることができる。こうして分けた3遺跡は、東から、「白井北中道II遺跡」、「吹屋犬子塚遺跡」、「吹屋中原遺跡」と名付けた。この遺跡名は、遺跡所在地の大字・小字を併記したものであるが、複数の大字・小字にまたがる場合は、基本的に多く含まれる方によっている。なお、「白井北中道II遺跡」の遺跡名に「II」を付けたのは、本遺跡の東側で行われた、国道17号線鯉沢バイパスの建設に伴う発掘調査で、「白井北中道遺跡」という名称がすでに使用されていることによる。

また、本書では、この3遺跡全体を呼ぶのに「白井・吹屋遺跡群」という名称を便宜的に用いる場合がある。

次に遺跡内部の地区分けについてである。

遺跡内部は道路によっていくつかに区切られているので、それをそのまま地区分けの基準とし、それを一単位として調査を行った。図1にみるように、白井北中道II遺跡はI～III区に、吹屋犬子塚遺跡はI～VII区に、吹屋中原遺跡はI～III区に分けた。さらに吹屋犬子塚I区のように、調査の都合により一地区を2～3回に分けて発掘したことがある。その場合はI a区、I b区等として区別している。

調査グリッドの設定については、発掘調査開始当

時、東に隣接して調査が進行中だった、国道17号鯉沢バイパス建設に伴う発掘調査で用いられていたグリッドを準用することにした。

このグリッドの設定は以下のように行われている。

- 1 国家座標第IX系を利用して設定する。
- 2 最小単位は4m四方とする。
- 3 原点は国土座標IX系の、 $X=55.650$ 、 $Y=-72.800$ に設定する。
- 4 グリッド名称は、AB-12というように、アルファベットと数字との組み合わせであらわす。このうち、アルファベット2文字は南北方向をあらわす。原点をAAとし、そこから北へ4m進むごとに、AB、AC、ADというように、後ろのアルファベットを変化させる。そして、100m進むごとに前のアルファベットを変化させる(すなわち、原点から100m北でAZとなるが、これをBAとする)。数字は東西方向をあらわす。原点を0とし、そこから西へ4m進むごとに1、2、3と変化させていく。この数字は本来無限大に変化させる原則であったが、本遺跡群においては、100になるごとに、0に戻すことにしている。

以上が鯉沢バイパスの調査区で用いたグリッドの設定基準であるが、この基準は、本来南北に長い鯉沢バイパスの調査区に対応したものであり、東西に長い本遺跡群にそのまま適応するのはやや不適当である。そのため、本遺跡群においては、この基準の一部を改訂した方がよいと考えられる。しかし、白井北中道II遺跡のみについては、鯉沢バイパスの調査区と同一の段丘面上にあるので、同一の基準を使用した方が遺跡の構造を統一的に理解する上で有利であるという事情もある。そこで、折衷案として、白井北中道II遺跡については鯉沢バイパスの調査区との関連から、「白井地区グリッド」としてこの基準を

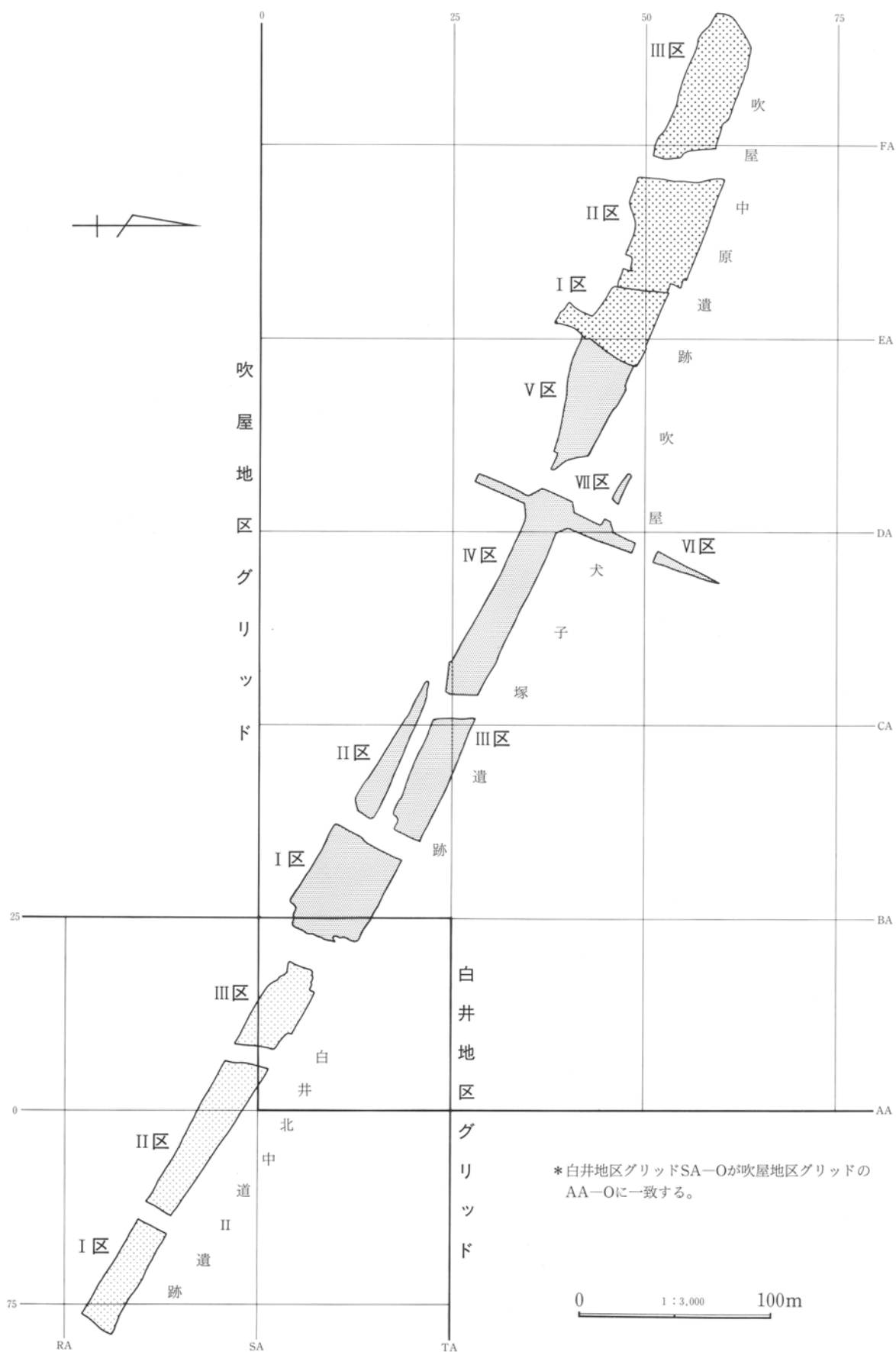


図1 グリッド設定図

そのまま使用し、上位段丘面に存在する吹屋犬子塚・吹屋中原の両遺跡については、「吹屋地区グリッド」として次の点を改訂することにした。

- 5 原点を「白井地区グリッド」のSA-0に設定する。このSA-0は、鯉沢バイパスの基準ではSA-100となる点であり、国土座標系では、 $X=57.450$ 、 $Y=-73.200$ となる。
- 6 アルファベット2文字と数字2桁とであらわすのは同様だが、そのあらわす方向を変更し、アルファベットは東西方向を、数字は南北方向をあらわすことにする。

グリッドの設定基準は以上である。最小単位のグリッド、すなわち、東西4m、南北4mのグリッドの代表杭（その杭の名称がグリッドの名称となる）については、基準点が南東方向にあることから、本来南東隅のものを用いるべきであるが、本遺跡群では、手違いから北東隅を用いてしまった。この点、南東隅を用いる鯉沢バイパスの調査区とは異なってしまったが、混乱を避ける意味から、本書では訂正を行っていない。

調査方法の詳細については第3章以下で述べるが、各区に共通する原則は以下の通りである。

- 1 表土（I・II層）及びFP層はバックホーによって掘削した。
- 2 各面で、それに適した方法で遺構確認作業を行った。
- 3 平面測量は基本的に平板を用いた。縮尺は各面それぞれに適したものを用いた。FP下面では1/20、FP上面・FA下面などでは1/40を原則としたが、FA上面の耕作痕など、細かい遺構などは適宜1/10などとした。なお、FP上・下面、FA下面など、広い範囲の平面測量については、測量会社（株式会社 測研）に委託したほか、一部では株式会社 シン技術コンサルに委託して写真測量を行った。

- 4 遺構の調査に当たっては、適宜土層堆積状況を観察するベルトを設定し、セクション図を作成した。この縮尺は1/20を基本とした。特にFP下面の畦状遺構については、その全体について縦断のベルトを設定し、土層を詳細に観察・記録した。
- 5 必要に応じて、各面で理化学分析のためのサンプル採取を行った。特に、FP・FA直下面の土壌については、栽培植物の種子やその他植物遺存体を検出するため、IVa層・VI最上層を中心に土壌サンプルを数多く採取した。
- 6 記録写真の撮影は、基本的に6×7及び35mmのモノクロと、35mmのリバーサルを用いて行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、地区ごとの全景写真撮影には高所作業車や気球を用いて行った。

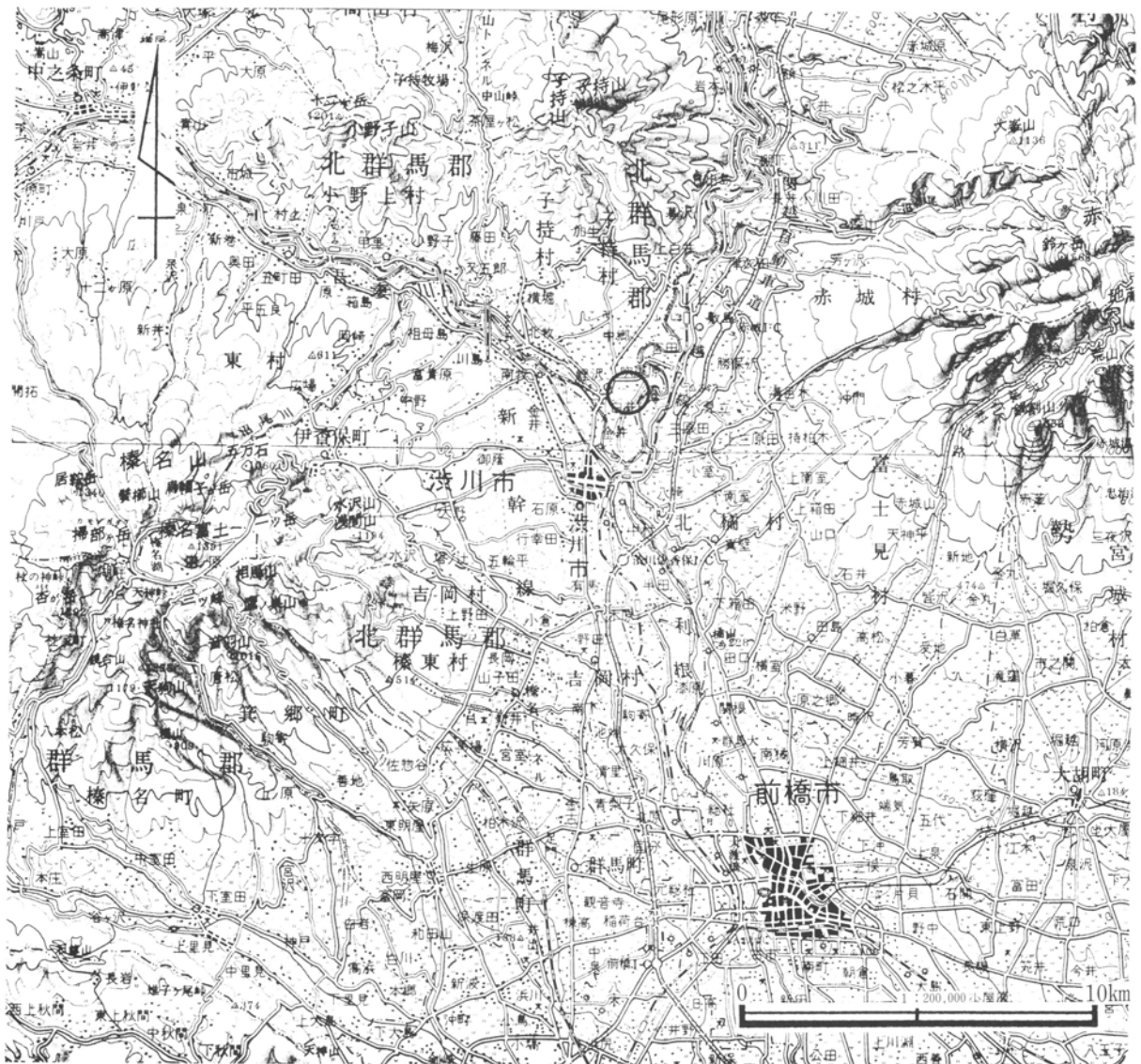
第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

白井・吹屋遺跡群は、群馬県北群馬郡子持村の大字吹屋と大字白井にまたがって存在する。子持村は群馬県のほぼ中央、前橋中心部からは北に約15km離れたところにあり、関東平野の北端部で、平野部と山間部とのちょうど境目に位置する。村の東には赤城山、北には子持山、西には榛名山があって三方を

山に囲まれ、さらに東には利根川、西から南には吾妻川が流れ、それが村の南端部で合流している。遺跡はこの子持山の南斜面の末端で、利根川と吾妻川に挟まれた、河岸段丘の発達した地域にある。

なお、遺跡付近の標高は図4にみる通り、約220~205mである。



国土地理院発行「宇都宮」[長野]
1:200,000地勢図より作成

図2 遺跡の位置

第2節 地形と基本層序

遺跡の周辺の地形を特徴づけているのは、利根川と吾妻川とによって形成された河岸段丘である。子持村には大小いくつかの段丘面がみられるが、『子持村誌』ではそれらを雙林寺面・長坂面・西伊熊面・白井面・浅田面の5面に分類している。これら各段丘の概要は以下の通りである。(ここでの記述はおもに『子持村誌』上巻・1987によった)

雙林寺面

子持村内では最も高い段丘で、標高は300～250m。川との比高は段丘中央部(子持中学校付近)で測って、利根川から約60m、吾妻川から約65mある。形成年代は中部ローム層以下が粘土化しているため直接には明らかにすることができないが、次の長坂面より高いことから、沼田市街地のある沼田面とほぼ同時期であると考えられる。

長坂面

子持村でもっとも広い平地がこの長坂面である。吹屋犬子塚、吹屋中原の両遺跡がこの段丘上にある。利根川との比高は北端部では約80m、南端近くの吹屋で約37mである。形成年代は、中部ローム層の下に下部ローム層の一部が堆積している可能性が強いことから、約6、7万年前と考えられる。

西伊熊面

子持村の北部、西伊熊付近にある細長い段丘。段丘面の幅は広いところでもわずか150mしかない。利根川との比高は北端で約40m、南端では約15mである。形成年代は、上部ローム層が堆積している

ことから、約2万2,000年前と考えられる。

白井面

白井付近に広がるのがこの段丘面である。白井北中道II遺跡と、国道17号線鯉沢バイパスの建設に伴って発掘調査した諸遺跡はみなこの段丘面上にある。同時代の所産と考えられる段丘は吾妻川に沿ってもみられる。川との比高は約15m前後である。

白井面上には不明瞭なロームしかみられないことから、その形成年代は約1万年前と考えられる。

浅田面

川との比高が数mの、最も低い段丘。関東ローム層は全くみられないため、形成年代は数千年前と考えられ、ごく新しい段丘である。

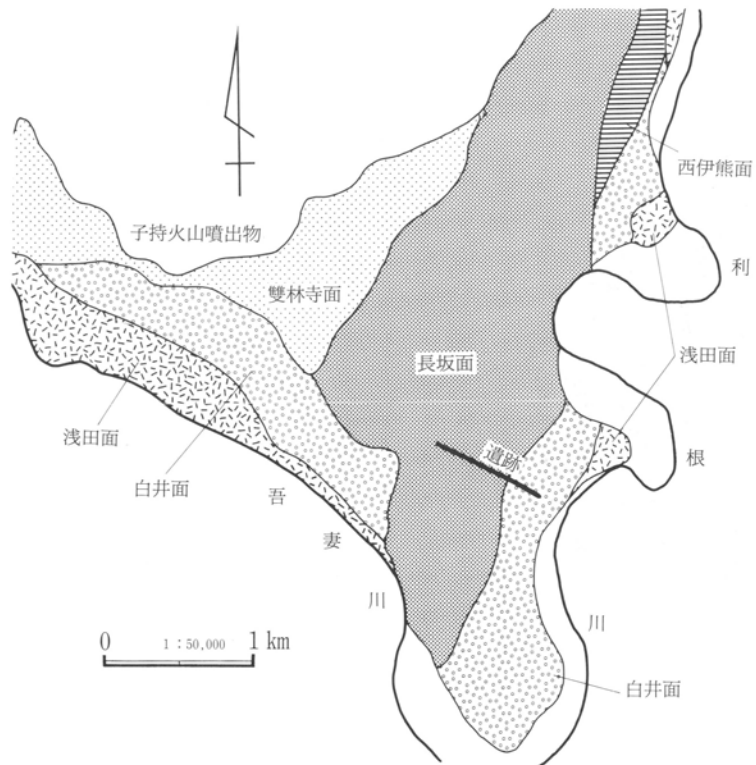


図3 段丘の名称

第2章 位置と環境

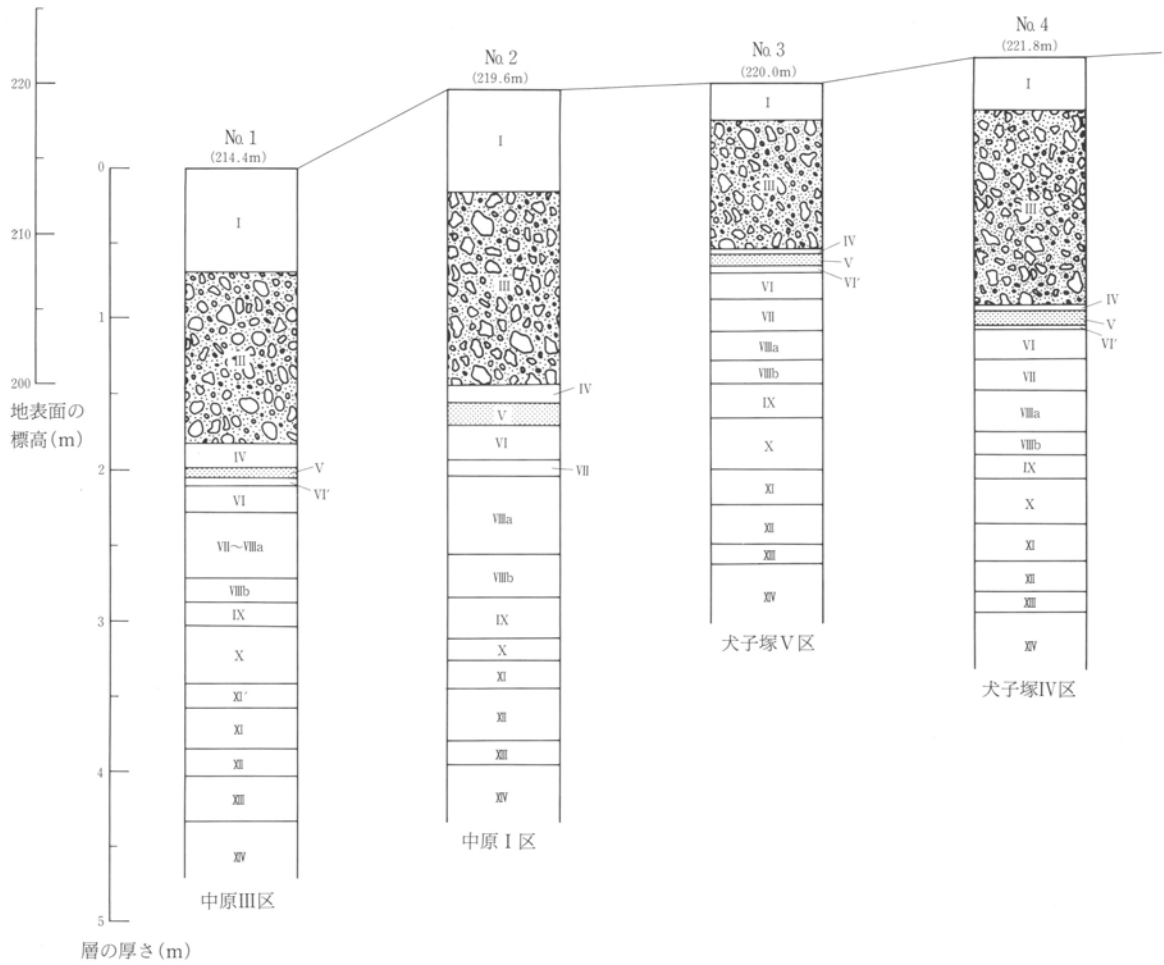
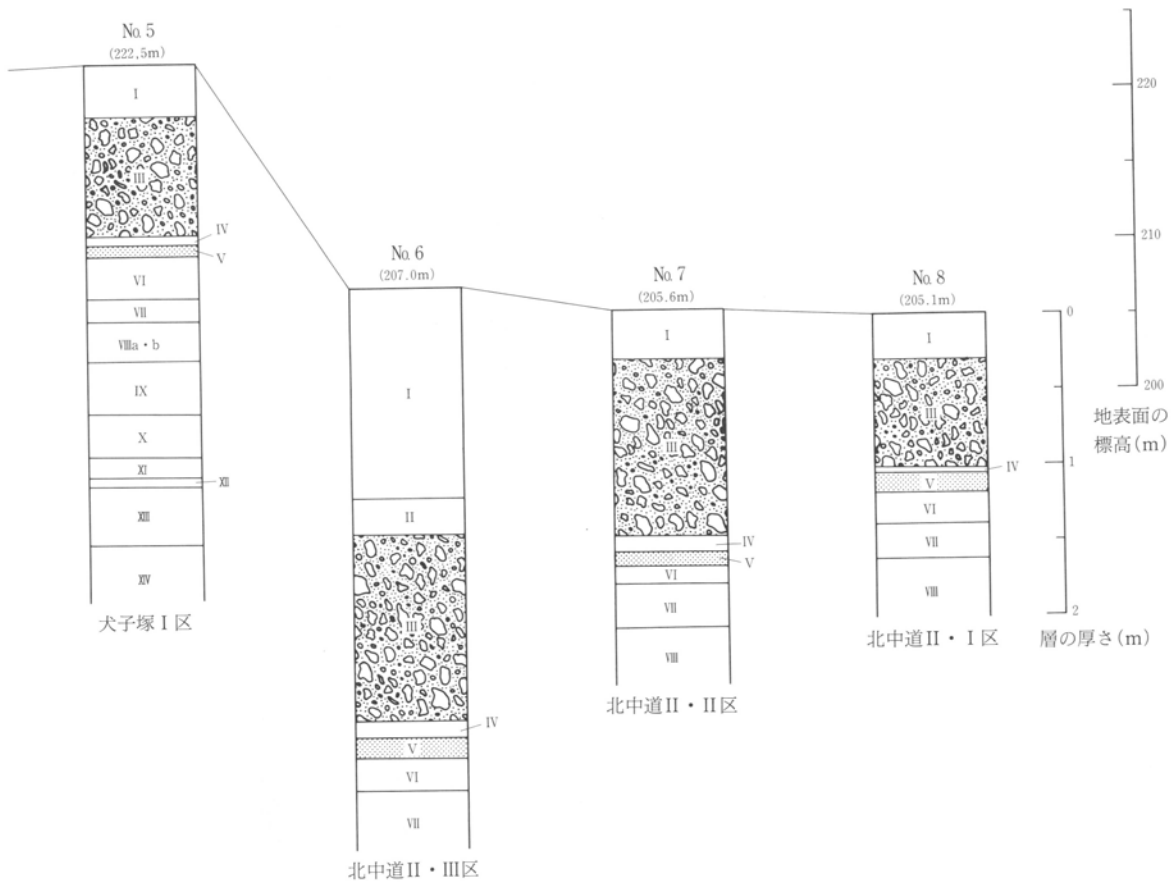


図4 調査区の

第2節 地形と基本層序



位置と基本土層

第2章 位置と環境

遺跡周辺の地形、および基本的な土層は図4にみる通りである（より広い範囲の地形図は付図参照）。

基本土層

- I層 表土層。現耕作土。F P混じり暗灰褐色土。
- II層 旧耕作土。F P混じり暗灰褐色土。I層より黒く、しまっている。F P粒を多く含む。
- III層 榛名山噴出の軽石層(F P)。これについては、11ページ以下で詳細に述べる。
- IV層 F Aが土壌化した層であり、炭化物やF Aの含有の多少により次のように4層に細分することができる(72ページでも再述)。
- IVa層 黒褐色土。IVb層に炭化物が多量に混入したもの。F A粒はない。層厚は薄く、厚い場合でも1cm前後であるのが普通。F P直下の地表面にはごく薄いIVa層が広範に存在するが、畦状遺構などではその下層にさらに1~2枚のIVa層が存在する。そのため、それらを区別する必要が生じるので、表面にあるものをIVaとし、以下原則として上からIVa'、IVa''と名付ける。
- IVb層 暗灰黄色土。炭化物、F A粒(主にS10・S11)を含む。F P下面の土壌ではこの層が主体をなす。同様な土層が複数存在する場合の区別は、原則として上からIVb、IVb'、IVb''とする。
- IVc層 黄褐色土。F Aを多く含む。炭化物は少ない。複数ある場合の区別はIVb層と同様。
- IVd層 黄褐色土。F Aが攪乱を受けた層であり、夾雑物は少ない。
- V層 榛名山噴出の火山灰層(F A)。これについては、11ページ以下で詳細に述べる。
- VI層 黒色土。粘性をもち、しまりの少ない黒ボク土。浅間C軽石(As-C)を含む。
上面にF A(S-1)を混じえたごく薄い層がある場合があり、これをVI'層とする。

- VII層 黒褐色土。VI層よりも粘性、しまりともに少ない。いわゆる淡色黒ボク土。
- VIIIa層 黒色土。粘性は少ないが、しまりが強い。浅間Y P軽石(As-YP)を含む。
- VIIIb層 漸移層であり、VIIIa層とIX層とが混合している層。斑状になっているところもある。
- IX層 黄褐色土。しまりのある土で、ハードルームに相当。Y PまたはS P軽石を30%程度含む。Y Pに伴う火山灰もブロック状に存在。炭化物粒をごく少量含む。
- X層 黄褐色土。IX層とX I層の攪乱土であり、しまりのない土。
- XI'層 黄褐色土。X層とX I層との混土層で、固くしまっている。
- XI層 橙色軽石。浅間S P軽石(As-SP)の純層。
- XII層 明褐色土。いわゆる暗色帯ローム層で、しまり弱く、粘性に富む。
- XIII層 明黄褐色軽石。浅間B P軽石(As-BP)の純層。
- XIV層 にぶい黄褐色土。「前橋泥流層」で、多量の岩石を含む。

第3節 テフラ層

この遺跡の弥生時代以降の土層を特徴づけるのは、6世紀に起きた二度の榛名山二ツ岳の噴火による堆積物である。以下、この2層を中心に、本遺跡におけるテフラ層の様相について簡単にまとめておく。ただしここでの記述は、平成3年度から平成5年度にかけて（株）古環境研究所に調査・分析を委託した「テフラ分析」（調査・分析・報告は早田勉氏）の報告をまとめたものであり、その内容は、すべて早田氏の研究成果に負っていることを明記しておく。

吹屋犬子塚遺跡に見られるテフラ層の層序を図5に掲げる。これらは白井北中道II遺跡、吹屋中原遺跡においてもほとんど変わらない。本書では弥生時代以降を扱っているため、関係するテフラ層は、最も上層のHr-FPから、As-Cまでであり、より下層のテフラについては、つづく「旧石器 縄文編」に譲ることとする。

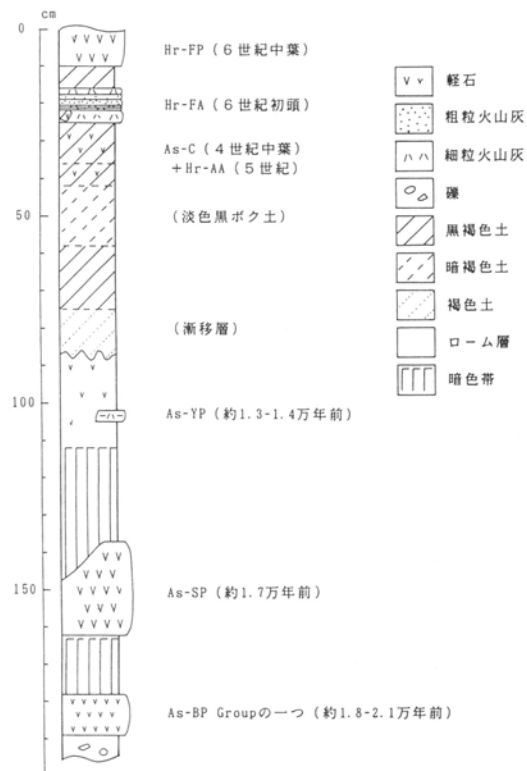


図5 吹屋犬子塚遺跡のテフラ層

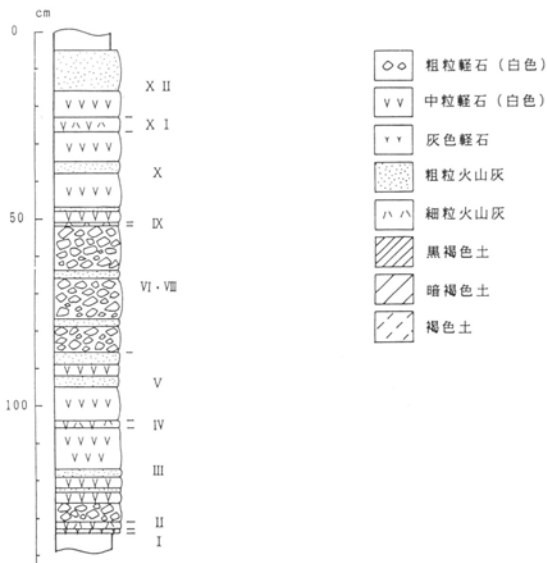


図6 F Pの層序（白井北中道II遺跡）

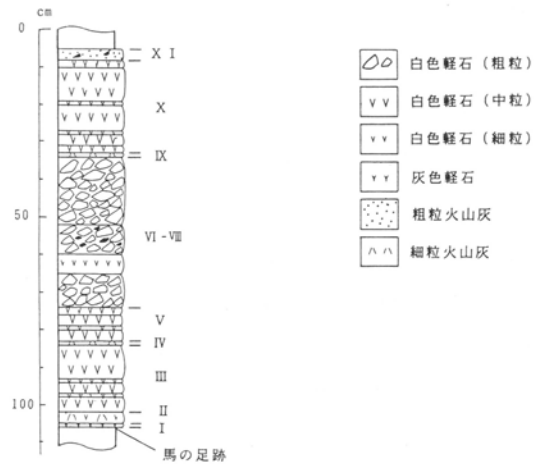


図7 F Pの層序（吹屋犬子塚遺跡I・II区）

第2章 位置と環境

Hr—FP (図6・7・9)

榛名山二ツ岳起源の軽石層である。降下年代は6世紀中頃(第2四半期頃)とされている。一般にFP(Pはパミス(pumice)=軽石の略)と呼ばれているが、この時の噴火による堆積物には、地域によっては火砕流などによるものもあることから、より広い意味の名称として、榛名—伊香保テフラ(Hr—I)という名が早田氏によって提唱されている。ただし、本遺跡では軽石のみからなる厚い層となっており、それが非常に特徴的であることから、従来通り、FPという名称を用いている。

このFPは、図9にみるように、火口から北東方向に向かって飛散しており、その降下範囲はきわめて細長い。遺跡の場所は大きな黒丸で示したところである。この地点は降下範囲の中心線からややはずれたところにあたり、そのためFPの厚さは黒井峯遺跡(約2m)ほど厚くはないが、それでも0.8~1.3mの厚さがある。

FP層は火口に近い地域では30層以上に細分できるようであるが、本遺跡の地域で見られるのは12層程度である。その層序は図6・7にみるとおりである。

I層は灰色軽石であり、粒径5mm程度で細かい。さらにその上にも比較的細かい軽石層が堆積している。このように、最下層に位置する軽石が細かかったことが、馬蹄痕を保存する上で役だったに違いない。

さらに上の軽石は、ほとんどが白色の粗粒の軽石であり、層を見分けるのはそれほど容易ではない。粒径は3~5cm程度がふつうであるが、まれには20cm近いものも混じっている。

なお、有名な黒井峯遺跡を埋没させたのがこのFPであることはいうまでもない。また、この噴火によって引き起こされた火砕流と洪水の堆積物は群馬県内に広く分布しており、多くの水田・畠跡がそれによって埋没している。

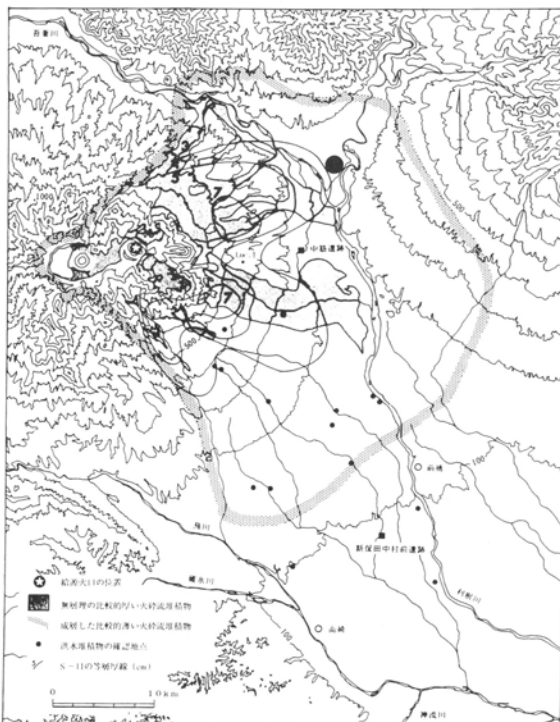


図8 Hr—S (FA) の降下範囲と洪水堆積物等の分布

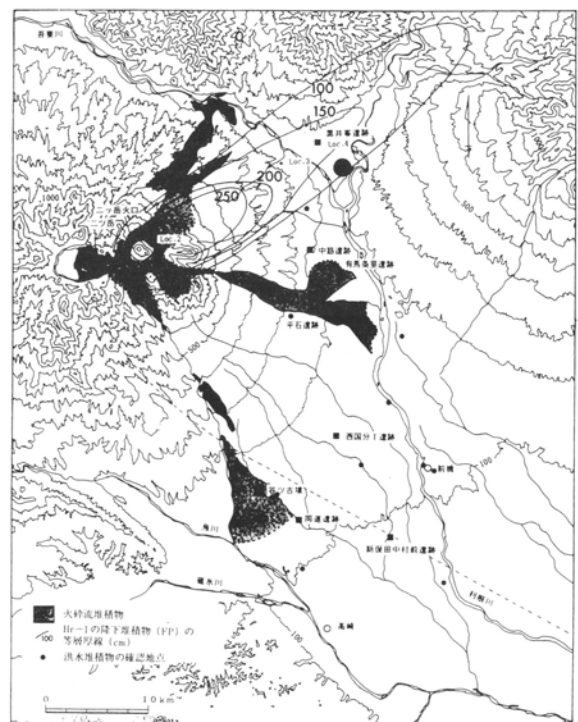


図9 Hr—I (FP) の降下範囲と洪水堆積物等の分布

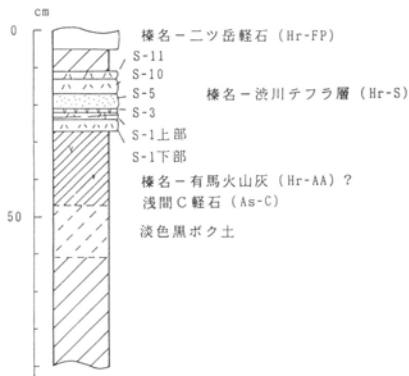


図10 FAの層序(白井北中道II遺跡)

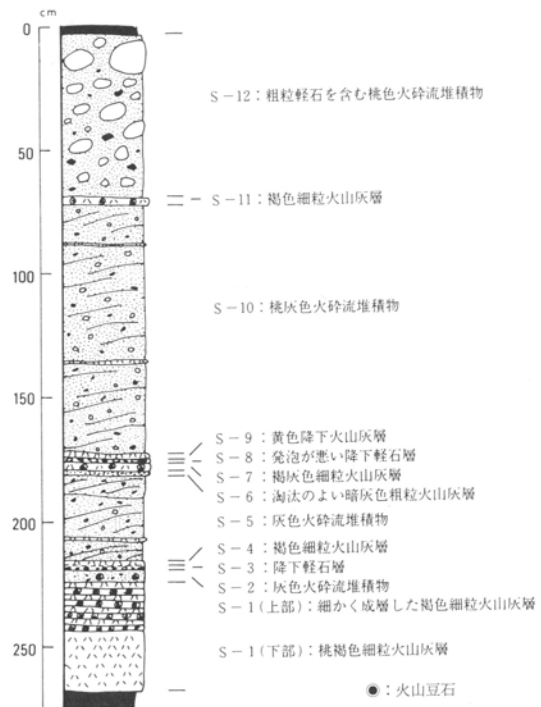


図11 FAの層序(渋川市南原・給源から5 km)

Hr-FA (図8・10・11)

FPと同じく榛名山二ツ岳起源の火山灰層であり、6世紀初頭(第1四半期)ごろのものと考えられている。一般にFA(Aはアッシュ(ash)=火山灰の略)と呼ばれているが、これもやはり早田氏によってより広い意味の名称である榛名-渋川テフラ(Hr-S)が提唱されている。実際、本遺跡においても、S-3といった軽石層やS-5といった火砕流堆積物が堆積しているので、FAという名称はやや不適當なのであるが、FPとの関係から今回はFAという名称をそのまま用いることにする。ただし、その細分については、早田氏の研究成果をそのまま用いているので、S-〇という名称を使っている。

FAの降下範囲はやや広く、火口の東側に広く降下している(図8)。本遺跡周辺では厚くとも10~15 cm程度であるが、火口から東に5 kmはなれた渋川市南原では約2.5 mもあり、12層に細分されている(図11)。これに対して本遺跡では、肉眼では図10のようにS-1、3、5、10、11の5層しか見ることがで

きない。本遺跡の調査では、後述するように、FA層中に残る耕作の痕跡や馬蹄痕を詳細に調査したので、FA層を細かく分ける必要が生じた。そのため、以上の細分を本書のセクション図にそのまま用いることにしている。

S-1 上部・下部に分かれるが、セクション図では特に区別しなかった。桃褐色~褐色の細粒火山灰層で、5 cm程度の厚さがあり、遺跡の全範囲で残りがよい。

S-3 降下軽石層。本遺跡ではごく薄く存在するだけなので、セクション図に表すことはできなかった。

S-5 灰色火砕流堆積物 灰色の砂層のようにみえる。全範囲でみられるが、厚さにはばらつきがあり、とぎれているところが多い。

S-10 桃灰色火砕流堆積物 S-5よりも粒子が細かく、火山灰層のようにみえる。攪乱さえ受けていなければ5 cm近い厚さがあり、全

範囲で観察できる。

S-11 褐色細粒火山灰層。本遺跡ではもっとも上層にあるため、攪乱を受けやすく、面的に残っているところはほとんどない。逆に、この層が残っているかどうか、攪乱を受けているか否かを判断する基準となった。

肉眼ではっきりとした層として認識できるテフラ層は以上であるが、図5にみるように、FAの下

黒褐色土中には、5世紀に降下した榛名有馬火山灰(Hr-AA)と4世紀中頃に降下した浅間C軽石(As-C)とが混入していることが判明している。

Hr-AAは5世紀の小規模な噴火に伴うもので、詳細はまだ不明確であるが、白色の軽石を混じえた細粒火山灰が榛名山東側一体に薄く堆積している。また、As-Cは群馬県内に広くみられ、これによる埋没水田も日高遺跡を始め多く知られているが、本遺跡では層をなした状態ではなかった。

第4節 周辺の遺跡

本節では、周辺にみられる多くの遺跡のうち、弥生時代以降のものについて、特に本遺跡との関連に留意しながら、時代別に概観することにする。

弥生時代

前期後半から中期にかけての遺跡はあまり多くないが、この時期に特徴的な再葬墓は、渋川市南大塚遺跡(26)、子持村押手遺跡(22)で見つかっている。住居跡は渋川市中村遺跡(53)、同有馬条里遺跡(55)で確認されている。中村遺跡では中期後半の3軒の住居跡とそれを取り巻く数本の溝が確認され、環濠集落の可能性が考えられている。有馬条里遺跡では、関越自動車道の建設に伴う発掘調査によって、9軒の住居が確認・調査されている。

後期に入ると遺跡数が増加する。住居跡はいずれも渋川市の中筋遺跡(50)、有馬条里遺跡、後田東遺跡(58)、有馬廃寺遺跡(69)、有馬遺跡(72)で数多く見つかっている。利根川対岸の赤城村には、弥生時代後期から古墳時代初頭の「樽式土器」の標式遺跡である樽遺跡(77)がある。墓跡には、方形周溝墓が押手遺跡、渋川市空沢遺跡(49)、中村遺跡、有馬条里遺跡でみられるほか、有馬条里遺跡や有馬遺跡で礎床墓が確認されている。

なお、吹屋犬子塚遺跡V区西端で見つかったのは樽II式土器であるが、該期の遺跡はごく近傍にはみることができない。

古墳時代

まず、前期から中期、すなわち4～5世紀代の遺構・遺物は本遺跡群内では希薄であるが、この時期の遺跡は特に吾妻川の対岸、渋川市内において多く発見・調査されている。有馬条里遺跡(55)では前期から中期にかけての住居跡とともに榛名有馬火山灰(Hr-AA・5世紀降下)に埋もれた畠跡が、有馬遺跡(72)では前期の住居跡と同じく有馬火山灰に埋もれた畠跡が調査されている。その他、行幸田山遺跡(60)で前期古墳が調査されている。吾妻川北岸の子持村内ではこの時期の遺跡の調査・報告例は少ないが、黒井峯遺跡(9)では方墳4基が見つかっている。

続く古墳時代後期を特徴づけるものは、やはり6世紀前半における2度の榛名山二ツ岳の噴火であろう。この噴火による噴出物は本遺跡群の周辺に広く降り積もっている。

FAに直接埋没した集落跡として名高いのは、渋川市の中筋遺跡(50)である。この遺跡では、噴火によって引き起こされた火砕流のために壊滅した村の跡が、きわめて良好な形で発見されている。発見された遺構は竪穴住居のほか、平地式住居、祭祀場跡、道、畠などであり、当時の村を視覚的に復原するに足る資料を提供している。

FAに埋もれた畠・水田跡は、特に渋川市南部を中心に広く発見されている。代表的なものに有馬遺

跡（畠）、有馬条里遺跡（畠）、中村遺跡（畠・水田）などがある。

また、F Aに覆われる古墳には、金井前原古墳（32）、坂下古墳群（36）、東町古墳群（37）、大崎3号墳（38）、石原東古墳群（48）、空沢遺跡（49）の古墳群などが知られている。このうち、坂下古墳群、東町古墳群は本遺跡群に位置的にも近いが、これらはいずれも川原石で築かれる積み石塚状の特徴的な古墳であり、注目される。

F A降下前後の注目される遺跡は以上のようなものであるが、これをみると、本遺跡群のごく近くには、この時期の遺跡がさほど多くないことがわかる。これに対し、F P下面は本遺跡群の中心となる時期であり、周囲の遺跡との関係が注目されるが、この時期の遺跡は、近隣からも数多く発見されている。

この時期の遺跡としてまず取り上げるべきものは、本遺跡群の西約1 kmに位置する子持村黒井峯遺跡、西組遺跡（21）である。これらの遺跡では、2 m近いF Pに瞬間的にパックされた形で当時の村の跡が埋まっており、竪穴住居の他、平地式住居、畠やそれを囲む柵、道、水場など、当時の村を形作る多種多様な遺構が非常に良好な状態で発見された。

さらに、この周辺では各種開発行為に伴って、小規模な発掘調査が子持村教育委員会の手によって数多く行われており、この両遺跡と同様な状況でF P直下の遺跡が発見されている。

これらの遺跡の中には田尻遺跡のように馬の蹄痕が見つまっているものもある。この遺跡は吹屋中原遺跡の最西端から約600m北西に当たるため、本遺跡群の馬蹄痕と一連のものと思われ、これによって放牧地の範囲がさらに西に広がることがわかった。しかし、より重要なのは、この遺跡と、すぐ東の八幡神社遺跡とに集落跡の存在が判明していることである。さらにその西は、黒井峯・西組遺跡へと続く。巨視的にみれば、この付近を境として、西から北西に集落跡、東から東南にかけての広い地域に放牧地が広がっていたらしい。この周囲の発掘調査がまだ十分ではないので、これらの集落跡と放牧地とがど

のような関係にあったかは明確ではないが、黒井峯遺跡から発見された平地式住居の中には、脂肪酸分析の結果「家畜小屋」と判定されたものも含まれており注目される。特定された動物は馬ではなく牛だというのが、想定される放牧地の広さを考えれば、本遺跡群と黒井峯遺跡との距離はあながち遠いともいえず、これらの遺跡が本遺跡群と有機的な関係を持っていた可能性も否定できない。今後の発掘調査の進展が期待される。

F P直下の生産遺跡は、やはり黒井峯・西組遺跡周辺で水田・畠跡が数多く見つかっている。本遺跡群周辺では、水が容易に得られる場所では水田が、そうではない場所では畠が広く作られていたらしい。こういった状況が、本遺跡群のF P下面の土地利用をいかに考えるかという時に重要な鍵となると思われる。なお、渋川市南部では、有馬条里遺跡、中村遺跡で水田跡が調査されている。

F A以後に構築され、F Pに埋没した古墳としては、子持村の中ノ峯古墳（23）が有名である。特にこの古墳は、F Pで埋没したあともその軽石を除去して追葬を行っており、F P降下直後も人々がこの地域で生活を続けていたことが判明する点で重要な存在である。

F P降下後～7世紀にかけての遺跡としては、本遺跡群と並行して調査が行われていた白井二位屋遺跡（4）・白井南中道遺跡（5）でこの時期の住居跡が見つかっている。F P上に構築された古墳としては加藤塚古墳（18）をはじめとする白井古墳群（19）、稲荷塚古墳（10）、吹屋I・III号古墳（12・13）、不動塚古墳（15）など、多くの古墳が知られている。中ノ峯古墳の存在とあわせて、F P降下後のこの地域の再建過程を示す貴重な遺跡である。

奈良・平安時代

本遺跡群内では遺構・遺物とも希薄な時期であるが、周囲では数多くの遺跡が発見されている。

白井城南郭遺跡（16）、白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡では、集落跡が調査された。この時期、本遺

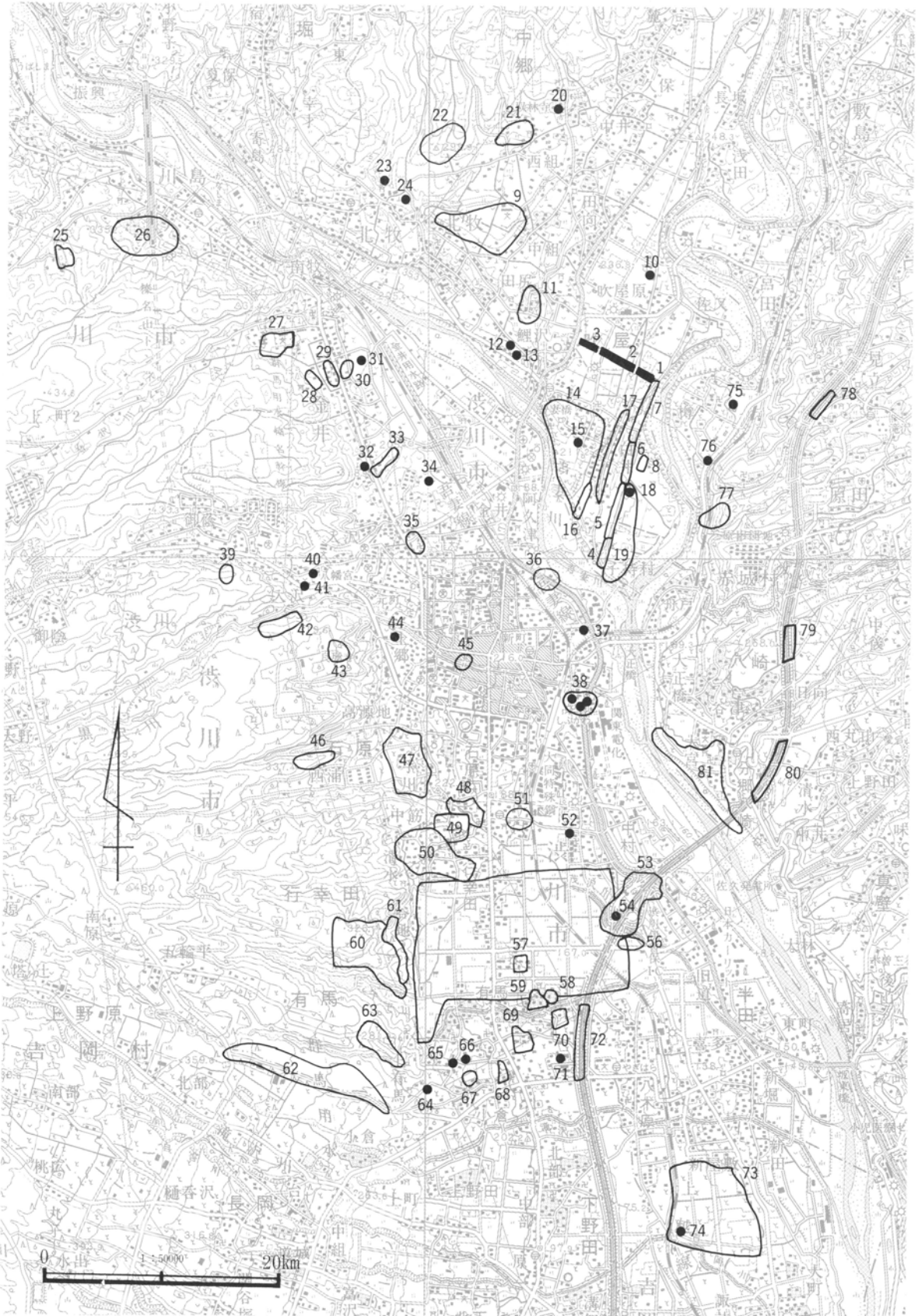


図12 周辺の遺跡 (弥生時代以降)

国土地理院発行「前橋」「榛名山」「沼田」
「中之条」1:50,000地形図から作成

表1 周囲の遺跡

番号	遺跡名	時代・種別	文献	備考
1	白井北中道Ⅱ遺跡	F P直下畠・馬蹄圧痕		今回報告遺跡
2	吹屋犬子塚遺跡	F P直下畠・馬蹄圧痕		〃
3	吹屋中原遺跡	F P直下馬蹄圧痕		〃
4	白井二位屋遺跡	奈良・平安時代集落中世城館	50、51	国道17号（鯉沢バイパス）関係
5	白井南中道遺跡	奈良・平安時代集落	50	〃
6	白井丸岩遺跡	F P直下馬蹄圧痕	38	〃
7	白井北中道遺跡	F P直下馬蹄圧痕	37	〃
8	白井大宮遺跡	F P直下馬蹄圧痕	49	
9	黒井峯遺跡	F P直下古墳時代集落	5、7、9	F P直下集落、古墳
10	稲荷塚古墳	古墳時代墳墓	3	F P上古墳、方墳か
11	東田尻遺跡	古墳時代集落	3	F P下集落
12	吹屋Ⅲ号墳	古墳時代墳墓	3	F P上古墳、両袖型の横穴式石室をもつ
13	吹屋Ⅰ号墳	古墳時代墳墓	3	F P上古墳、両袖型の横穴式石室をもつ
14	白井城跡	中世城跡	2、3	長尾景仲築城か（15c中頃）
15	不動塚古墳	古墳時代墳墓	3	F P上古墳、径約20mの円墳
16	白井城南郭遺跡	平安時代集落	3	昭和60年調査、住居5軒
17	白井宿	白井城下町	3	実際は市場町
18	加藤塚古墳	古墳時代墳墓	3	綜覧長尾村第17号、封土なし。径10mの円墳か
19	白井古墳群	古墳時代墳墓	3	F P上古墳、20基以上存在
20	雙林寺	寺院	3	15c前半～中頃創建。曹洞宗。
21	西組遺跡	F P直下古墳時代集落	6	
22	押手遺跡	弥生時代再葬墓、古墳時代集落	8	弥生前期再葬墓、後期方形周溝墓、F P下集落
23	中ノ峰古墳	古墳時代墳墓	4	
24	丸子山塚古墳	古墳時代墳墓	3	平成5年調査
25	川島中祖遺跡	中世馬場跡	36	室町時代のものとして推定される
26	南大塚遺跡	弥生時代再葬墓	10	弥生前期再葬墓、土壇3基
27	金島中学校内遺跡	縄文～歴史包蔵地		遺物は金島中学校所蔵
28	吾妻山遺跡	縄文～歴史	36	
29	西裏遺跡	古墳時代集落		遺物は金島中学校所蔵
30	金井城跡	中世館跡	10	原氏
31	金井丸山古墳	古墳時代墳墓	10	箱式棺状石室
32	金井前原古墳	古墳時代墳墓	10	円墳
33	逆川遺跡	弥生時代集落	10	中期集落
34	金井製鉄遺跡	平安製鉄遺構	10、11	精錬炉1基、炭窯8基
35	金井原古墳群	古墳時代墳墓	31、43	円墳4基とされていたが、1基は中世以降の塚
36	坂下古墳群	古墳時代墳墓	34	6基。川原石で築く。箱式棺状の堅穴式石室。
37	東町古墳	古墳時代墳墓	34	川原石で築く。
38	大崎古墳群	弥生包蔵地・古墳時代墳墓	10	5c後半～6cか
39	中砂居沢遺跡	平安時代製鉄遺跡	36	製鉄遺跡
40	かね塚古墳	古墳時代墳墓	36	出土遺物は群大保管
41	入沢2号墳	古墳時代墳墓	10	昭和156年調査
42	渋川古城址	中世城跡址	36	五輪塔、板碑破片等出土。
43	上の原遺跡	縄文時代～奈良・平安時代	36	
44	延暦塚古墳	古墳時代墳墓	36	
45	中之町遺跡	弥生包蔵地	36	
46	塚山古墳群	古墳時代墳墓	36	円墳4基
47	石原西浦遺跡	古墳時代～近世集落	12	平安時代集落が主。江戸時代屋敷跡もあり。
48	石原東古墳群	古墳時代墳墓	36	円筒埴輪、耳環、勾玉など出土。
49	空沢遺跡	縄文～奈良・平安時代集落	13、20、22 25、29、31	F A～F P古墳等。
50	中筋遺跡	F A直下古墳時代集落	16、21、23 28、29、32	史跡公園となっている。
51	石原東遺跡	古墳時代水田	24、26	
52	十二山古墳	古墳時代墳墓	36	横穴式石室。耳環等出土。
53	中村遺跡	弥生～近世	43	F A・F P下水田、As-A泥流下畠。
54	真下塚	古墳時代墳墓	43	
55	有馬条里遺跡	弥生～平安集落、条里遺構	14、46、48	
56	八木原沖田遺跡	奈良・平安集落	23、26、30	条里遺構。
57	中井遺跡	弥生時代・古墳時代包蔵地		
58	後田東遺跡	弥生時代集落	19	

第2章 位置と環境

59	後田遺跡	古墳時代包蔵地	36	
60	行幸田山遺跡	旧石器～古墳時代・中世跡	15	昭和57～58年調査。古墳6基、古墳～平安住居円墳10数基。
61	行幸田古墳群	古墳時代墳墓		
62	有馬堂山古墳群	古墳時代墳墓	10	12基ほど存在したが、1基を除きほぼ破壊。
63	城の上遺跡	中世城館址・縄文包蔵地	36	本丸、空堀、犬走り等存在。
64	外貝戸古墳	古墳時代墳墓		
65	神戸1号墳	古墳時代墳墓		
66	神戸2号墳	古墳時代墳墓		
67	有馬神戸遺跡	縄文時代～奈良・平安時代		
68	有馬赤貝戸遺跡	古墳時代包蔵地		
69	有馬廃寺遺跡	弥生時代～奈良・平安時代	17	
70	愛宕塚遺跡	縄文・弥生時代集落		昭和55年調査。
71	有馬小貝戸遺跡	古墳時代墳墓		
72	有馬遺跡	弥生時代～奈良・平安時代	45、47	
73	半田中原・南原遺跡	古墳時代～奈良・平安時代	10、27、33	弘仁9年地震跡、古墳、牧（有馬島牧推定地）
74	半田南原古墳群	古墳時代墳墓	10	7c古墳群。横穴式石室をもつ円墳。
75	弁天塚古墳	古墳時代墳墓	35	
76	稲荷塚古墳	古墳時代墳墓	35	横穴式石室をもつ円墳
77	樽遺跡	弥生時代集落	1	樽式土器の標式遺跡
78	見立溜井遺跡	古墳時代集落	41	古墳時代初頭住居10軒調査
79	羽場遺跡	奈良時代鍛冶工人集落	42	奈良時代住居6軒、小鍛冶工房1
80	分郷八崎遺跡	旧石器～中・近世	42	弥生末～古墳初頭住居6、奈良～平安集落。
81	八崎城址	中世城跡	2、42	

- (1) 杉原莊介「上野樽遺跡調査概報」『考古学』第10巻10号1939
- (2) 「群馬県古城墓址の研究」山崎一 1972
- (3) 「子持村誌 上巻」子持村1987
- (4) 「中ノ峯古墳発掘調査報告書」子持村教育委員会 1980
- (5) 「黒井峯遺跡Ⅰ」子持村教育委員会 1985
- (6) 「西組遺跡発掘調査報告書」子持村文化財調査報告 第2集 子持村教育委員会 1985
- (7) 「黒井峯遺跡確認調査概報」子持村文化財調査報告 第4集 子持村教育委員会 1986
- (8) 「押手遺跡発掘調査概報」子持村文化財調査報告 第5集 子持村教育委員会 1987
- (9) 「昭和61年度黒井峯遺跡発掘調査概報」子持村文化財調査報告 第6集 子持村教育委員会 1987
- (10) 「渋川市誌 第二巻」通史編・上 原始～近世 1993
- (11) 「金井製鉄遺跡発掘調査報告書」渋川市教育委員会 1975
- (12) 「石原西浦遺跡」渋川市教育委員会 1986
- (13) 「空沢遺跡」渋川市文化財発掘調査報告書渋川市教育委員会 1979
- (14) 「有馬条里遺跡」渋川市発掘調査報告書第7集渋川市教育委員会 1983
- (15) 「行幸田山遺跡」渋川市発掘調査報告書第12集 渋川市教育委員会 1987
- (16) 「中筋遺跡」渋川市発掘調査報告書第13集 渋川市教育委員会 1987
- (17) 「有馬廃寺発掘調査報告書」渋川市発掘調査報告書第16集 渋川市教育委員会 1988
- (18) 「中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書」渋川市発掘調査報告書 第18集 渋川市教育委員会 1988
- (19) 「市内遺跡発掘調査報告書」渋川市発掘調査報告書第19集 渋川市教育委員会 1988
- (20) 「空沢遺跡 第8次」渋川市発掘調査報告書第22集 渋川市教育委員会 1989
- (21) 「市内遺跡Ⅱ」渋川市発掘調査報告書第23集 渋川市教育委員会 1989
- (22) 「空沢遺跡 第9次」渋川市発掘調査報告書第24集 渋川市教育委員会 1990
- (23) 「市内遺跡Ⅲ」渋川市発掘調査報告書第25集 渋川市教育委員会1990
- (24) 「石原東・中村日焼田遺跡」渋川市発掘調査報告書第26集 渋川市教育委員会 1991
- (25) 「空沢遺跡 第10次」渋川市発掘調査報告書第27集 渋川市教育委員会 1991
- (26) 「市内遺跡Ⅳ」渋川市発掘調査報告書第28集 渋川市教育委員会 1991
- (27) 「半田工業団地取付道路遺跡」渋川市発掘調査報告書第29集 渋川市教育委員会 1991
- (28) 「中筋遺跡-第5次調査概報」渋川市発掘調査報告書第30集 渋川市教育委員会 1991
- (29) 「市内遺跡Ⅴ」渋川市発掘調査報告書第31集 渋川市教育委員会 1992
- (30) 「八木原沖田Ⅲ遺跡」渋川市発掘調査報告書第32集 渋川市教育委員会 1993
- (31) 「市内遺跡Ⅵ」渋川市発掘調査報告書第33集 渋川市教育委員会 1993
- (32) 「中筋遺跡 第7次発掘調査報告書」渋川市発掘調査報告書第34集 渋川市教育委員会 1993
- (33) 「半田中原・南原遺跡」渋川市発掘調査報告書第41集 群馬県企業局・渋川市教育委員会 1995
- (34) 大塚昌彦「坂下古墳群出土の巫女人物埴輪(双耳杯を捧げ持つ女)について」『群馬文化』217号 1989
- (35) 「群馬県遺跡台帳 東毛編」群馬県教育委員会 1971
- (36) 「群馬県遺跡台帳 西毛編」群馬県教育委員会 1972
- (37) 「年報10」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991

- (38) 「年報11」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (39) 「年報12」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (40) 「年報13」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (41) 「見立溜井遺跡・見立大久保遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書KC.V 赤城村教育委員会 1985
- (42) 「分郷八崎遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 北橋村教育委員会 1986
- (43) 「中村遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書KC 渋川市教育委員会 1986
- (44) 「三原田城遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第13集 (財)群埋文 1987
- (45) 「有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第26集 (財)群埋文 1989
- (46) 「有馬条里遺跡Ⅰ」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第29集 (財)群埋文 1989
- (47) 「有馬遺跡Ⅱ」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第32集 (財)群埋文 1990
- (48) 「有馬条里遺跡Ⅱ」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第35集 (財)群埋文 1991
- (49) 「白井大宮遺跡」群馬県企業局渋川工業用水貯水池関係に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)群埋文 1993
- (50) 「白井遺跡群-中世編」一般国道17号線(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 (財)群埋文 1993
- (51) 「白井遺跡群-集落編Ⅰ」一般国道17号線(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 (財)群埋文 1994

跡群の南側、吾妻川・利根川の合流点付近が集落域となっていたらしい。大量のF Pが堆積した地域で、なにを生業としていたのか興味深い。白井二位屋遺跡などでは大量の鉄滓が出土しており、少なくとも鍛冶を行っていたことは判明している。なお、この周辺には、金井製鉄遺跡(34)をはじめ、製鉄遺跡が少なからず見つかっている。

渋川市内では、半田中原・南原遺跡(73)が目ざれよう。この遺跡では、奈良～平安時代の多くの住居跡が発見されたが、そのほかに溝で囲まれた空閑地があり、これが牧の施設の一部ではないかと推定されているのが注意される。白井・吹屋遺跡群では、馬の飼育に直接関わる施設は発見されていないので、この溝が本当に牧の一部だとすれば、「牧」の構造を知るための貴重な資料となる。また、この地域は『延喜式』にみえる有馬島牧の推定地であり、馬の飼育の伝統が古墳時代以来連綿と続いていたことがわかる。

中・近世

中世の遺跡には、本遺跡群の南に白井城跡(14)がある。この城跡は15世紀中頃長尾氏(景仲か)によって築城されたと推定される城跡で、その後17世紀初頭に廃城となるまでこの地域の歴史の中心となった。現在も土塁・堀をはじめとして遺構がよく保存されている。

近世には白井城跡の東側に白井宿跡(17)がある。実際は宿場町ではなく、市場町であると考えられているが、当時を偲ぶ町並みが現在でも道の両側に続いている。

本遺跡群では、この時期に特定できる遺構は見つかっていないが、少なからぬ遺物が見つかっていることから、F P上面の遺構のうちのいくつかがこの時期のものである可能性はある。とすれば、その時期の遺構の性格は、上記二つの遺跡との関連で考えなければならないであろう。

第3章 調査の成果

第1節 調査成果の概要

本書で扱う古墳時代以降の遺構は、他に類例をみない特殊なものが多いので、まずその概要を、その記述の方針とともに説明しておく必要がある。

本遺跡を特徴づけているのは、古墳時代後期—6世紀—にあった二度の榛名山二ツ岳の噴火による堆積物である。それは先述したように、上からFP、FAと呼ばれるものであるが、本遺跡の数多くの遺構は、この二層の堆積物によって明確に時期区分することができる。本書の記述も、この二層の堆積物を軸に、3つの節に分けて行いたい。すなわち、第2節「FP上面の調査」、第3節「FP下面の調査」、第4節「FA下面の調査」である。それらで扱われる遺構は、以下の通りである。

FP上面（本章第2節） FPは6世紀中頃のものなので、その上面にある遺構は、当然6世紀中頃以後のものとなるが、本書の対象とする範囲内では、確実に古代にさかのぼる遺構は発見されていない。

FP上面の遺構としては、土坑304、溝状遺構9、溝6、道1がある。土坑のほとんどは狭長な長方形で、埋土の特徴から4種類に分けられる。近現代の遺物が多く出土することから、多くはその時期の所産と考えられる（いわゆる「芋穴」か）が、近世・中世の陶磁器・銅銭・キセルなども出土しているので一部はその時期にまでさかのぼる可能性もある。

FP下面（本章第3節） FP下面は本書の中心となる部分である。この下面は6世紀中頃の「ある日」の地表面であり、その地表面がFPという軽石によって瞬間的にパックされたため、他の遺跡ではみられない、多くの貴重な痕跡が発見された。

まず、本遺跡の調査の前年に、白井北中道遺跡VI区で発見された馬蹄痕は、本遺跡においても分布していることが確認された（第3節2「馬蹄痕」）。白井北中道II遺跡と吹屋犬子塚遺跡との間には、比高

差15mにも及ぶ段丘崖が存在しているので、調査当初、馬蹄痕はその上までは分布しないのではないかと考えられていた。つまり、放牧地は下位段丘（白井面）に限られるのではないかと考えられていたのである。しかし、調査の結果、上位段丘（長坂面）上にまで馬蹄痕が分布することが分かり、放牧地の想定面積は格段に広がることになった。しかも、馬蹄痕は調査区の西端にまで続き、結局放牧地の範囲はさらに西に延びることになった。放牧地の西端の把握は、今後予定される調査の結果を待つことになる。

蹄痕には、FP下の地表面に残るもののほかに、地表面では見ることができないが、下層にめり込んだ状態で発見されるものがある。その典型例は白井北中道II遺跡3号道跡の下層に見られる蹄痕である（99ページ）。これは、雨などで土が軟らかくなっていったときに馬の蹄が地中にめり込んでしまった痕跡と思われるが、同様な痕跡がFA層の中に残ることが吹屋犬子塚・中原遺跡で発見された（第3節8「下層の蹄跡」）。これらの馬蹄痕は、FP下の地表面からは見えないことから、そこに残された馬蹄痕よりも古いものであることは確実で、この地区における馬の放牧が、さらに遡るものであることを示すものである。土地利用の変遷を示す痕跡は他にもいくつかあり、それらとあわせ考えることで、この地域の土地利用の詳細を考えることができる。

FP下面の目立つ遺構としては、調査区の全域に畦状の土盛りが縦横に走っているのがみられるほか、踏み分け道がみられる（第3節3「畦状遺構と踏み分け道」）。この土盛りは幅1～3m、高さ5～10cm程度のもので、これによってFP下面はいくつかの不整形の区画に分割されている。この畦状の高まりは、調査担当者の見解の相違によって、「畦」「柵跡」などという数種類の呼称で呼ばれてきたが、用

途を厳密に確定することができないため、本書の事実記載の部分では「畦状遺構」と呼ぶことにした。これは、呼び方によって先入観を与えないように配慮したものである。また、踏み分け道は幅30cm前後の狭い道で、その表面は堅く踏みしめられている。人間ばかりではなく、馬もこの道を利用して歩いているようである。

地表面には土地利用を示す痕跡がほとんどみられないが、白井北中道II遺跡では畝立てされた2面の畝跡が発見され、吹屋犬子塚遺跡と中原遺跡とを分ける谷部分では、荒起こし直後と思われる水田跡と広い畝を持つ畝跡（陸苗代と考えられる）が各1面発見された(第3節4「畝跡・水田跡」)。これによってF P下面の一部で確実に農耕が行われていたことが判明したが、他の大部分の区画では、地表面には何の痕跡も見られない。しかし、F P下の土壌(IV層)は攪乱を受けていることは確実であり、それが人為的なものである可能性は強く、何らかの農耕行為が行われていたことは十分考えられる。それを証明するため、F A上面に耕作の痕跡(鋤や鋤の刃先の痕跡等)が残っていないかどうかを調査した。その結果、中原II区で確実に人為的な耕作痕を発見したが(214ページ)、その他の部分では明らかな耕作痕を把握することはできなかった。

F P下面には、当時生えていた植物の様々な痕跡を見ることができる。本書ではそれらを「植物痕」「立木痕」「株痕」と呼んで報告する(第3節6)。「植物痕」とは、植物そのものが地表面に倒れた痕跡、「立木痕」とは樹木の根跡、「株痕」とはススキ・灌木の株の跡と考えられる土の高まりである。これらは当時の植生・土地利用を考える上で重要なものである。

その他の遺構としては、中原III区で祭祀跡が発見されている(第3節5「1号祭祀跡と出土遺物」)。9点の土師器坏と2点の鉄鏝、34点の白玉が2×1mの範囲内に散っていたもので、道跡の脇にあったことから、道に関わる祭祀跡であると思われる。

その他の出土遺物は犬子塚V区以西で少量みられ

る(第3節9「その他の出土遺物」)。いずれもF P下の地表面に置かれていたと考えられるもので、土師器坏・椀9点、土師器甕3点がみられる。

F P下面の調査成果については、以上のように遺構の種類ごとに項を改めて記述したが、各地区の全体的な特徴などについては、第3節3「畦状遺構と踏み分け道」の中で触れるように努めた。

F A下面(本章第4節) F Aは6世紀初頭の降下であり、その下面はその当時の「ある日」の地面であるが、ここで発見された遺構はきわめて少ない。

F P下面で多くみられた畦状遺構は、中原I区で1本がみられたのみである(第4節2「畦状遺構」)。

土地利用を示すものとしては、犬子塚と中原の境にある谷で、水田跡が見つかった(第4節3「水田跡」)。そのほか、吹屋地区を中心として立木痕が多く見つかっている(第4節5「立木痕」)。

F A下面に直接関わる遺構はこれのみで、遺物は全く出土していない。これ以外に、F A下面の時点ではすでに埋没していた竪穴状遺構が中原II区に1棟ある(第4節4「竪穴状遺構」)。

また、F A下面の土壌=VI層には若干の遺物が含まれていた。樽II式の甕は、犬子塚V区の谷の斜面に散乱していたものである。そのほか、石鏝5点、鉄鏝1点が出土したが、当該時期の遺構は全く発見されていない。

本書で扱う遺構の概要は以上である。それぞれの節の初めには、本節と重複してしまうが、扱う遺構の概要を簡単に述べることにしている。それは、各遺構が全体の中でどのような位置を占めているのかという視点を、常に意識しながら記述を進めようという意図に基づいている。そのため、重複部分が多くなっているが、特殊な遺構が多いという事情から、このような記述方針が最適なのではないかと判断したものであり、ご了承願いたい。

第2節 FP上面の調査

1 遺構の概要と土坑の分類

FP上面では、土坑、溝、道跡などの遺構を調査した。その内訳は以下のとおりである。

白井北中道II遺跡	
土坑	32
溝状遺構	9
吹屋犬子塚遺跡	
土坑	145
溝	2
道	1
吹屋中原遺跡	
土坑	127
溝	4

白井北中道II遺跡の溝状遺構とは、長大な土坑のことである。発掘調査当時は長さがきわめて長いため、他の土坑と性格が異なるものと思い、「溝状遺構」と名付けた。しかし、その後数多く調査した土坑と比較した結果、1～5号溝状遺構は他の土坑と特徴的に異なる点がなく、本来土坑の範疇に含めるべきものであることが明確となった。そのため、本書では、この5基の溝状遺構に限って他の土坑と同様の扱いとする。ただし、混乱を避けるために名称の変更は行わないこととするので注意していただきたい。

これら数多くの遺構の時期は、近現代の遺物が多く出土することから、大部分は新しい時期のものと思われるが、中世～近世の遺物や古代の須恵器坏なども出土していることから、一部はその時代にまで遡る可能性がある。ただし、遺物を出土しない遺構も少なからずあること、古代・中世・近世の遺物のみを出土する遺構はほとんどみられなかったこと、遺物はほぼすべて埋土・覆土からの出土であり、遺構の年代に直接関わるものではないことなどから、

近世以前に遡る遺構を正確に指摘することはできなかった。

土坑は合計304基と、きわめて多くの数を調査したが、これらの土坑のほとんどは幅の狭い長方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれるなど、互いに共通した特徴をもっている。これら数多くの土坑をすべて逐一取り上げるのは、掘られた時期がきわめて新しいものが大部分であると思われることと、性格不明のものが多いことから、あまり意味のあることとは思えない。そのため本書では、共通した特徴をもつものについては、以下に述べるような基準でいくつかに細分した上で、その位置・計測値などを図・表によって報告するにとどめることとした。それに当てはまらない土坑は数少ないので、これらについては、個別に平面図・断面図・写真をあげて報告することにした。

土坑の細分については、埋土の様相によって4層に分類したが、その埋土についても大別して3層に分けて記述の簡素化を図っている。それぞれの分類内容は以下の通りである。

土層

各遺構の土層は、記述の煩雑さを避けるため、下記のように3層に大別し、可能な限りこれによってあらわすことにした。3層を区別する基準は、基本的に、含まれるFP粒の多寡によっている。

- ①層 基本土層のI・II層と同じ黒色土が主体をなす層。FP粒はごくわずかしか含まれていない。
- ②層 黒色土とFP粒との混合層。①層と③層との中間の様相を示す。
- ③層 FP粒を主体とする層。

A型 (吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区80号土坑)

B型 (吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区92号土坑)

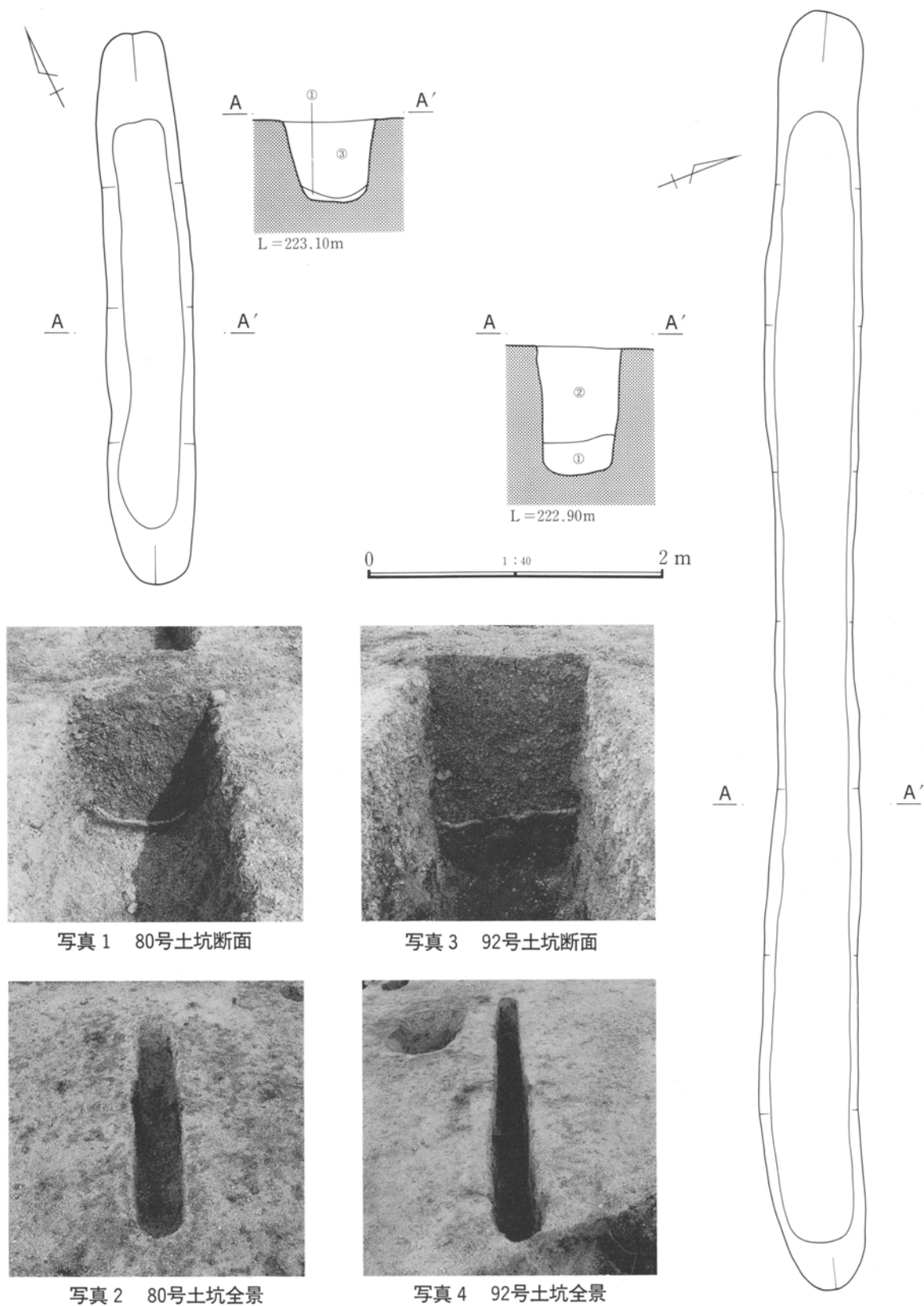


図13 土坑の分類 (A型・B型)

C型 (吹屋犬子塚遺跡IV区51号土坑)

D型 (吹屋犬子塚遺跡III区66号土坑)

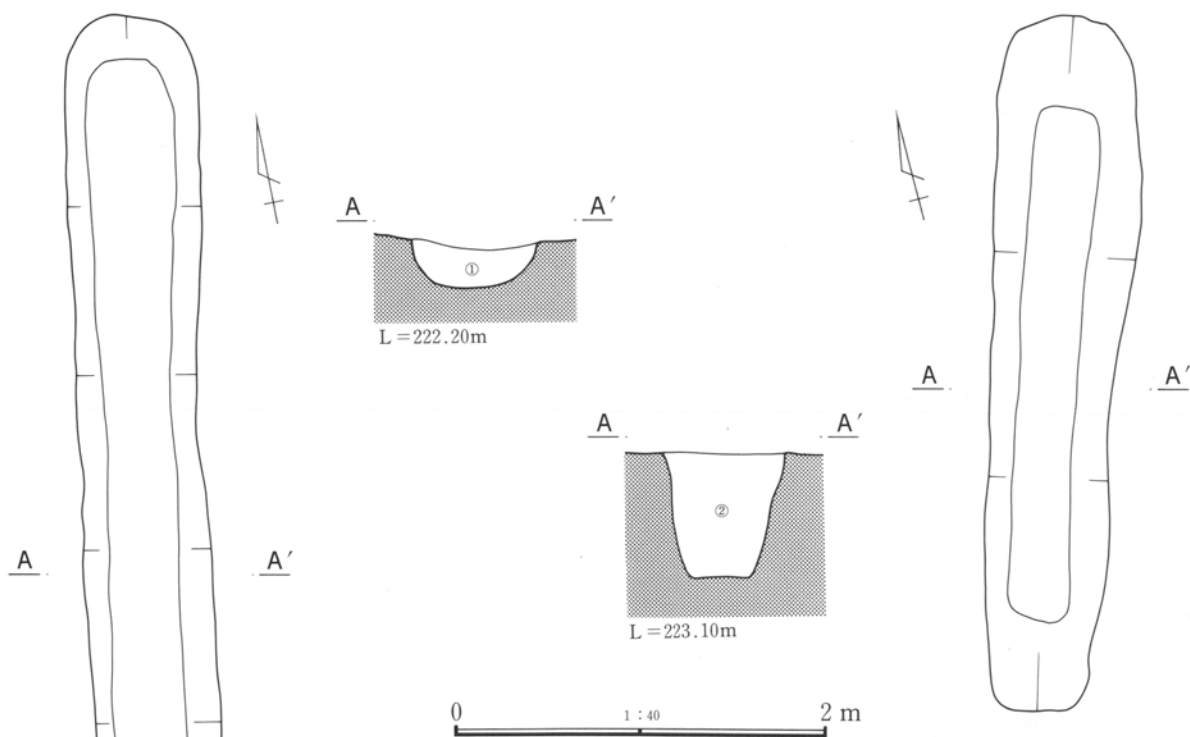


写真5 51号土坑断面

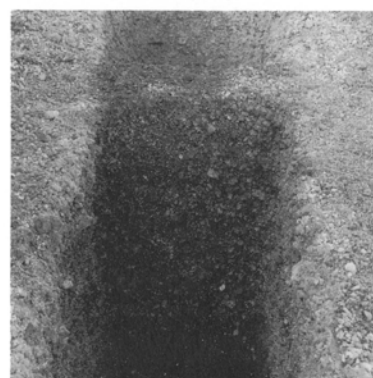


写真7 66号土坑断面

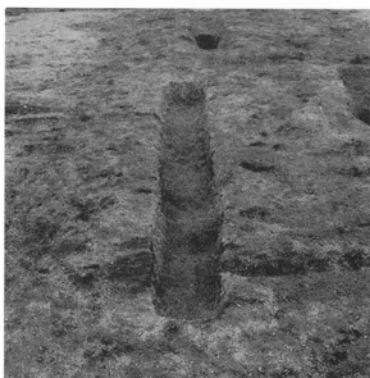


写真6 51号土坑全景

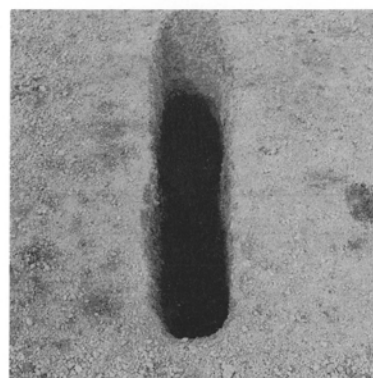


写真8 66号土坑全景

図14 土坑の分類 (C型・D型)

土坑の分類

土坑は平面形に有意な差がみられないため、主に埋土の特徴から、以下のように4種類に分類した(図13・14)。

A型(吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区80号土坑など・図13左)

底面にごく薄い①層がみられ、その上を②ないし③層のどちらかで一気に埋めているもの。②ないし③層は途中でさらに①層が入り、複数に分けられる場合もあるが、その場合はA'型として区別する。

B型(吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区92号土坑など・図13右)

底面に厚い①層(10cm以上)がみられ、その上を②ないし③層のどちらかで一気に埋めているもの。A型と同様に、②ないし③層が複数に分けられる場合は、B'型とする。

C型(吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区51号土坑など・図14左)

底が浅く、①層のみで埋められているもの。その浅さから考えて、B型土坑の底の部分である可能性もあるが、断定できないので本書ではC型として別に扱うことにした。

D型(吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区66号土坑など・図14右)

②ないし③層で一気に埋められているもの。層が複数に分けられる場合は、D'型とする。

4種類の型の土坑の配置を図16~18のような平面図で見ると、同じ型のものが集中していたり、ほぼ同一の方向を向いて並んでいることがあり、ある程度の規則性を認めることができる。これは、土坑の型の違いが、用途や構築した人や構築時期の違いを反映している可能性を示すものである。

これらの土坑は一定の方向性をもって分布してい

ることが多い。たとえば、犬子塚Ⅲ区ではほぼすべての土坑が発掘区の長軸と一致する方向か、それと直角の方向かのどちらかを向いている。この方向は圃場整備以前の地割の方向であると思われ、これによって土坑の時期の一端を窺うことができる。

2 白井北中道II遺跡

白井北中道II遺跡のI・II区のFP上面は近現代の耕作に伴うと考えられる攪乱が多く入っており、他の地区に比べて遺構として把握できたものは少なかった。III区の土坑の数が2基と少ないのは、FP層上に堆積するI・II層が厚いためであろう。

みつかった土坑・溝状遺構はI区で土坑13基、溝状遺構4本、II区で土坑16基、溝状遺構5本、III区で土坑2基である。

溝状遺構のうち、1～5号は先述の通りやや長めの土坑と同様と考えられる。これに対し、6～9号の4本はきわめて長く、埋土も土坑と異なることから、溝と考えられるものである。ただし、9号を除けば深さ0.1～0.2m程度と浅く、埋土の状態も他の攪乱とほぼ同じであり、ごく新しい耕作に伴うものと考えられる。

〔I区〕

土坑のほとんどはD型である（図16）。大部分の

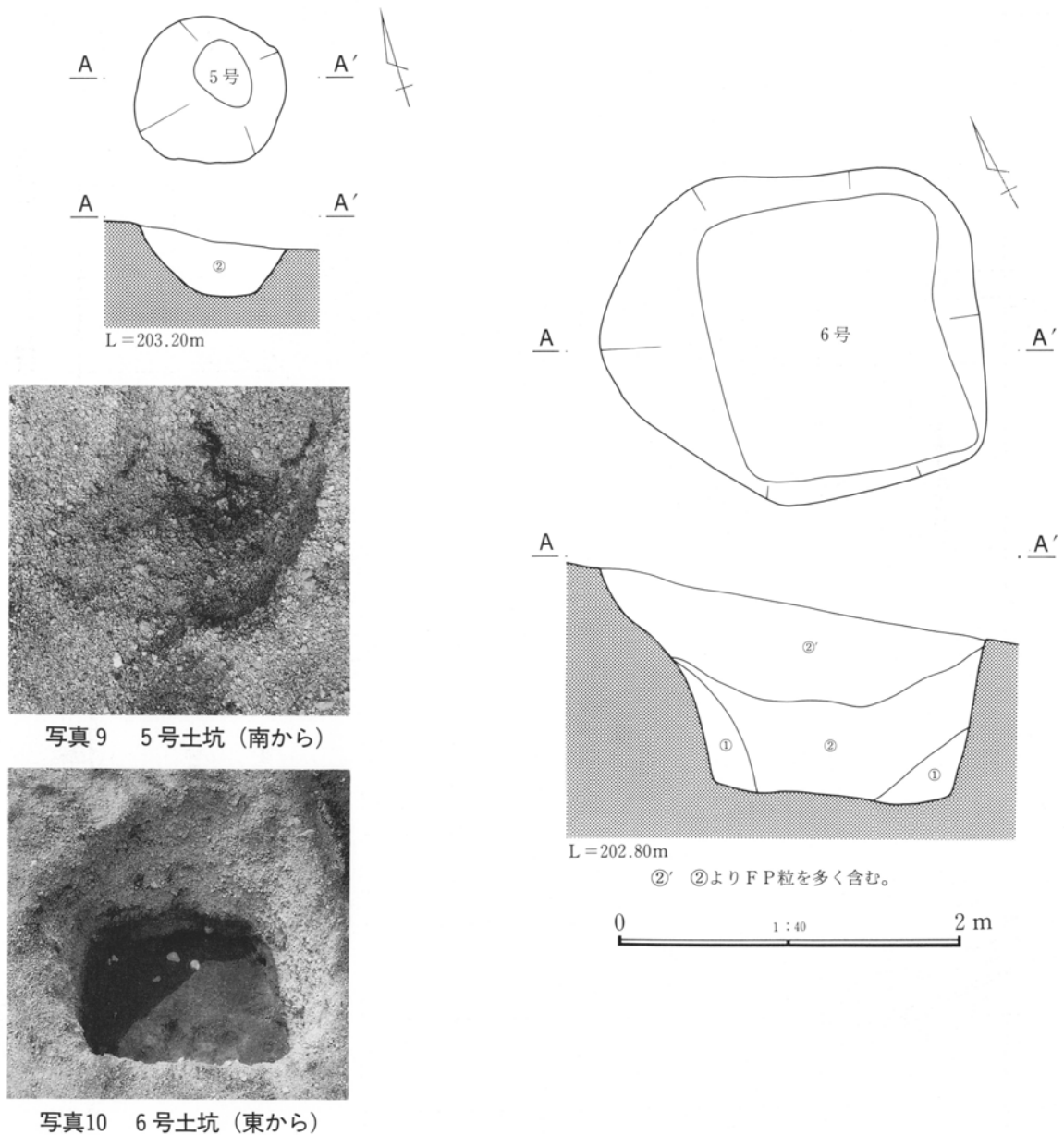


図15 白井北中道II遺跡I区5・6号土坑

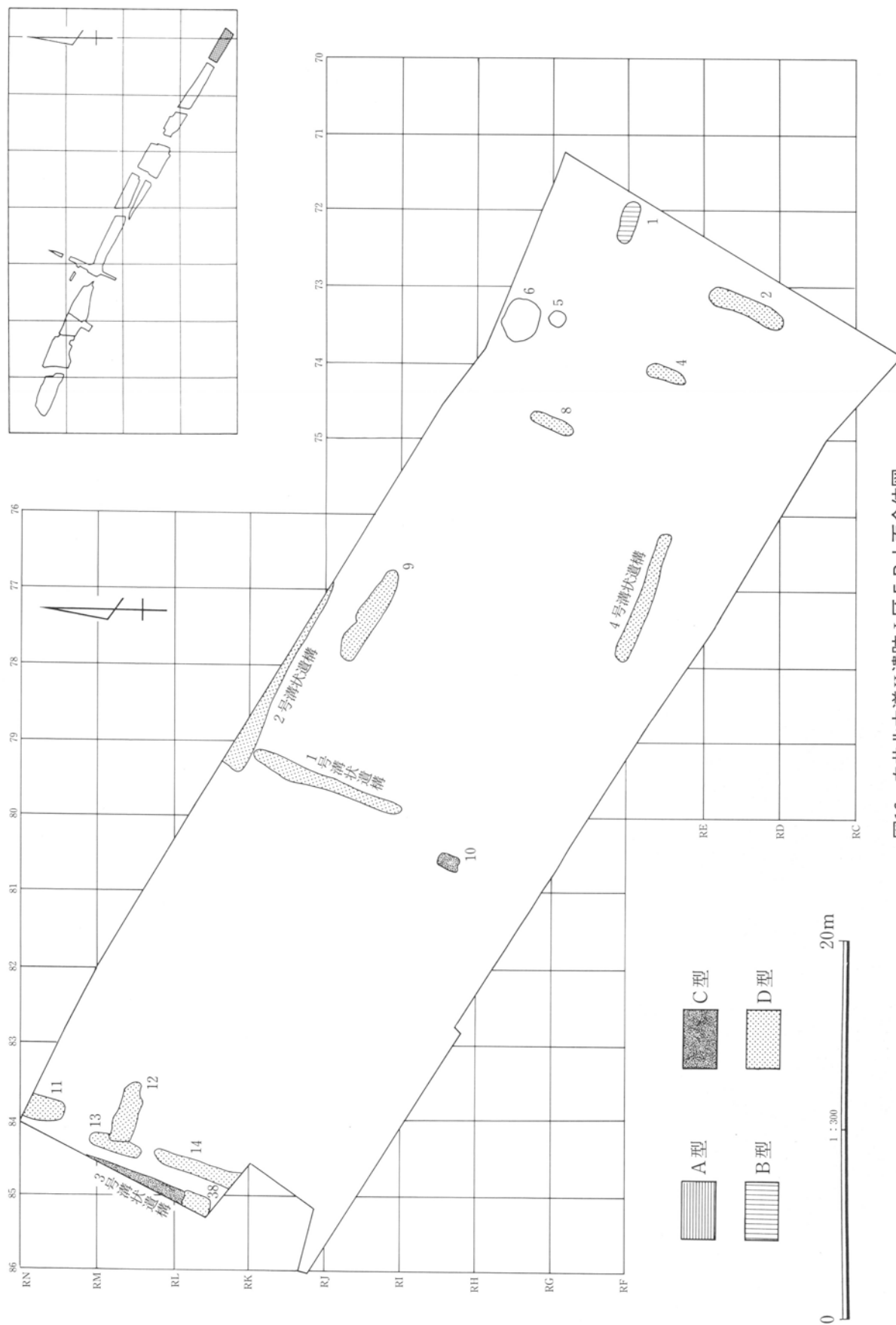


図16 白井北中道II遺跡I区FP上面全体図

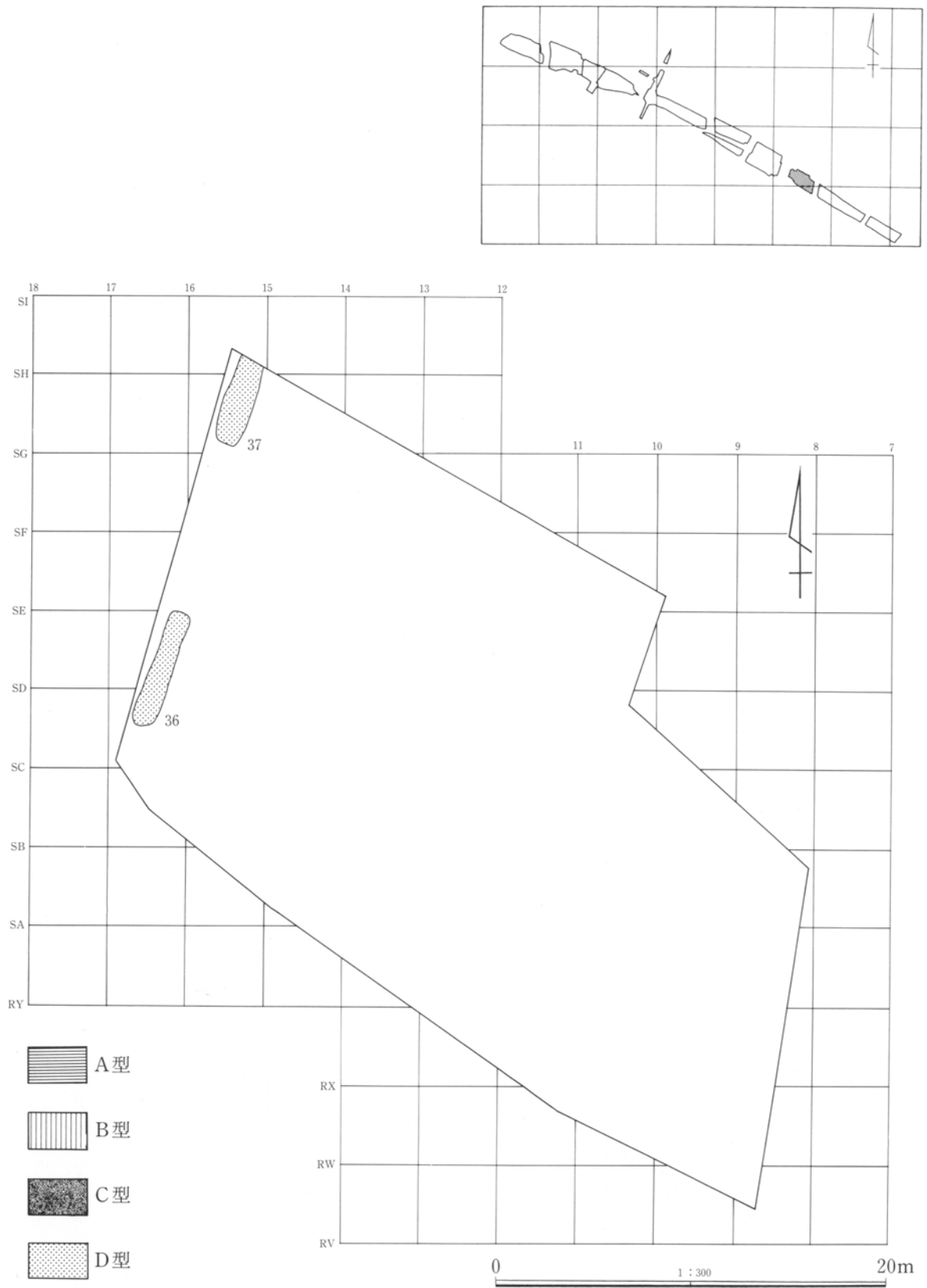


図17 白井北中道II遺跡III区F P上面全体図

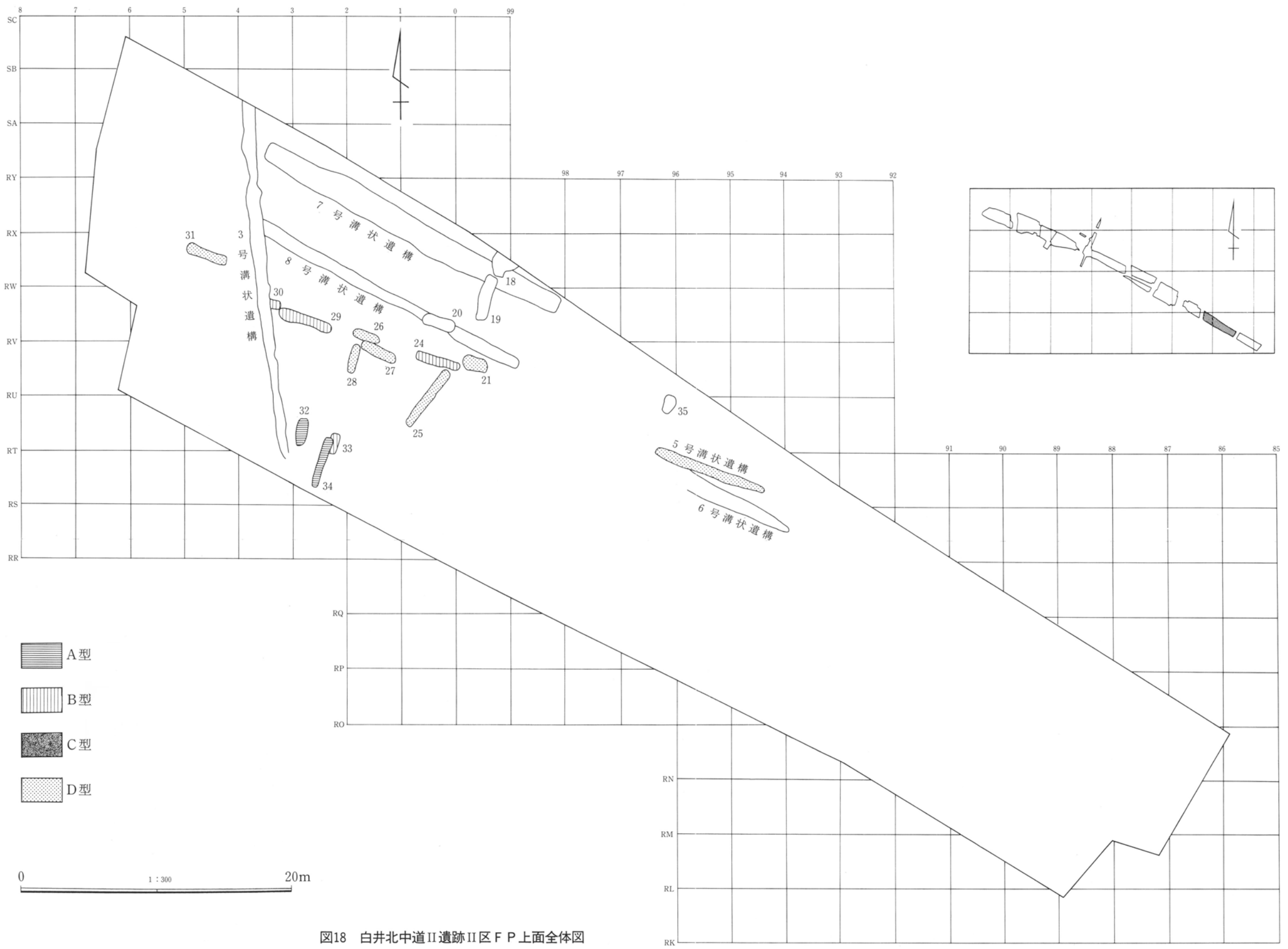


图18 白井北中道II遗迹II区FP上面全体图

土坑は、N-20°-Eとそれに直交する方向をとっている。この方向は現在の耕地の地割と概ね一致するが、この地割は耕地整理前のそれをほぼ引き継いでいるため、土坑の方向がいつの時期の地割を反映しているのかは定かでない。

A~Dの4分類に当てはまらない土坑は5・6号の2基である。

5号土坑 (図15、写真9)

I区北東隅付近にある。長さ0.84m、幅0.82mのほぼ円形であり、深さは0.42mと浅い。伴出遺物はなく、性格は不明である。

6号土坑 (図15、写真10)

I区北東隅付近にある。長さ2.2m、幅1.8m、深さ1.35m。平面形は、西壁がやや崩れているがほぼ

正方形である。底はF P層を突破してIV層に達し、平坦に作られている。その整った形から、特別な意図をもって掘られたものと思われるが、明確な伴出遺物はなく、性格は不明である。

〔II区〕

土坑にはA・B・D型がみられ、それぞれ集中する傾向がある。方向をみると、N-72°-Wとそれに直交する方向 (24・26・29・30・31・32・33・34号土坑と5号溝状遺構など) と、N-62°-W (27号土坑、6・7・8号溝状遺構など) との2方向に大部分が収まる。現在の地割は前者に近いので、そちらの方がより新しい可能性が高い。その他、9号溝状遺構、25号土坑がまったく異なる方向を示す。この

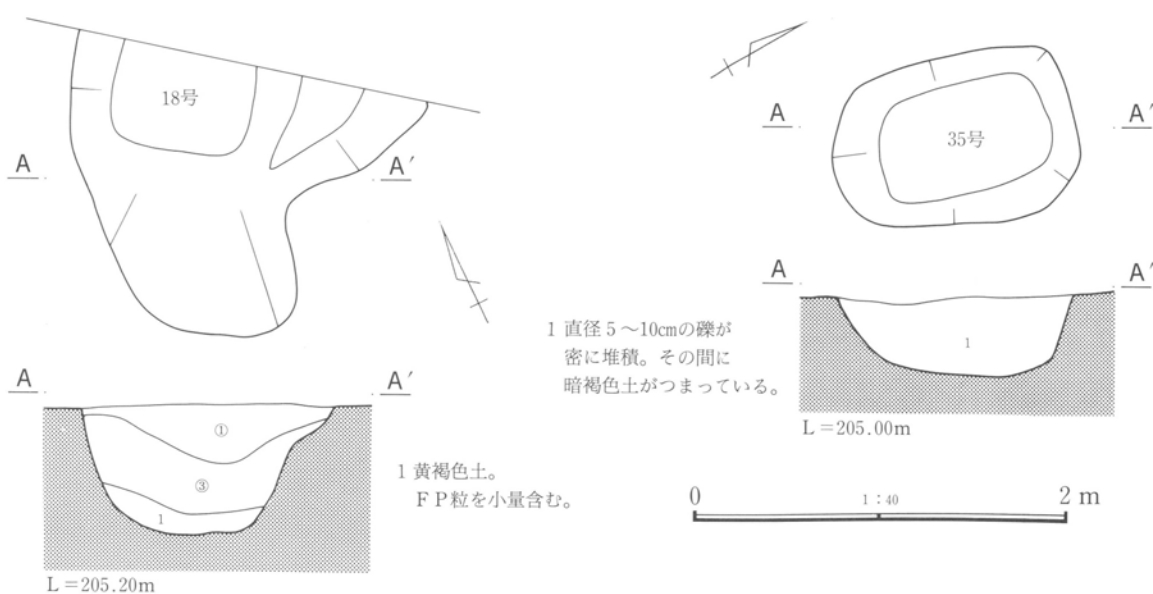


図19 白井北中道II遺跡II区18・35号土坑



写真11 18号土坑 (南西から)

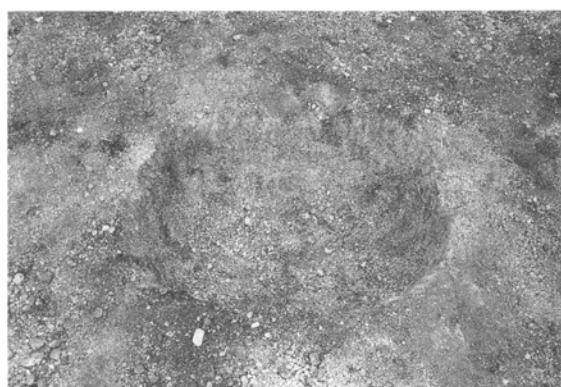


写真12 35号土坑 (東から)

第3章 調査の成果

うち9号溝状遺構は30号土坑に切られるので、より古い時期のものであることが分かるが、この溝は掘り込みがはっきりせずシミ状であるため、遺構としては明確なものではなく、溝の底部の痕跡がF P層にまで染み込んでいるものかもしれない。

A～D型にあてはまらないものは18・35号の2基であり、19・20号の2基は不明である。

18号土坑 (図19、写真11)

II区中央やや西寄り、北壁際にある。発掘区の境にかかっているため全形は不明である。

35号土坑 (図19、写真12)

II区中央やや北寄りにある。長さ1.3m、幅0.9mの長方形の土坑で、深さは0.42mと浅く、内部には礫が詰まっていた。その性格を明確にすることはできないが、耕作の際邪魔となる礫を廃棄した土坑であると考えられることもできよう。

〔Ⅲ区〕

Ⅲ区は段丘崖の直下に位置するため、西に向かって急激に高くなっている。F P層上のI・II層はその傾斜に伴い、西から東に向かって厚くなっており、東端付近では2mに近くなる(中央北壁では、9ページの図4にみるように1.6mある)。土坑が西端に2基しかみられないのは、この厚いI・II層のため、上層から掘り込まれた土坑がF P層にまで届かなかったためなのであろう。

〔出土した遺物〕

遺物は中世～近・現代のものが出土した。

図20・21にあげたもののうち、2は中世の内耳土器であり、その他はすべて近世以降のものであると思われる。ほとんどが表土あるいは遺構埋土からの出土であり、確実に遺構に伴うものはまったくない。

表2 白井北中道II遺跡F P上面土坑一覧表

I区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1	B	RG-72	2.30	0.98	0.40	
2	D	RE-73	4.10	0.90	0.86	
3	欠番					
4	D	RF-74	2.02	0.70	0.41	
5	他	RG-73	0.84	0.82	0.42	円形
6	他	RH-73	2.20	1.80	1.35	ほぼ正方形
7	欠番					
8	D	RH-74	2.44	0.58	0.59	
9	D	RJ-77	5.35	0.94	0.35	
10	C	RI-80	1.16	0.80	0.38	短い
11	D	RN-83	(1.90)	1.30	0.74	
12	D	RM-83	3.38	1.12	0.62	
13	D	RM-84	2.26	0.72	0.33	
14	D	RL-84	(4.30)	0.78	0.80	
22	欠番					
38	D	RL-85	1.54	0.82	1.09	
1溝		RJ・RK-79	8.10	0.84	0.52	土坑D型
2溝		RK-77・78	11.2	(0.80)	0.64	土坑D型
3溝		RM-84	(4.40)	0.80	0.49	土坑C型
4溝		RF-76・77	7.20	0.70	0.45	土坑D型

II区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
15	欠番					
16	欠番					

17 欠番						
18	他	RX-99	—	—	0.68	幅広い
19	不明	RW-99	3.32	0.94	—	
20	不明	RW-0	2.40	0.82	—	
21	D	RV-99	1.74	1.01	0.60	
23 欠番						
24	B	RV-0	3.20	0.62	0.35	
25	D	RU-0	4.92	0.68	0.73	
26	D	RW-1	2.00	0.71	0.44	
27	D	RV-1	2.80	0.68	0.40	
28	D	RV-1	2.60	0.62	0.39	
29	B	RW-2	4.10	0.68	0.51	
30	B	RW-3	—	0.62	0.34	
31	D	RX-4	3.00	0.76	0.31	
32	A	RU-2	1.92	0.74	0.34	
33	B	RU-2	1.48	0.69	0.24	
34	A	RU-2	3.83	0.54	0.34	
35	他	RU-96	1.30	0.90	0.42	礫が充満
5溝		RT-95	8.50	0.60	0.50	土坑D型
6溝		RT-95	(9.00)	1.10	0.18	浅い
7溝		SA-3	24.0	2.00	0.22	
8溝		SX-2	(21.0)	0.80	0.10	浅い
9溝		SA-3	(25.8)	0.10	0.39	

III区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
36	D	SD・SE-16	6.02	1.18	0.82	
37	D	SH-15	4.08	1.50	1.08	

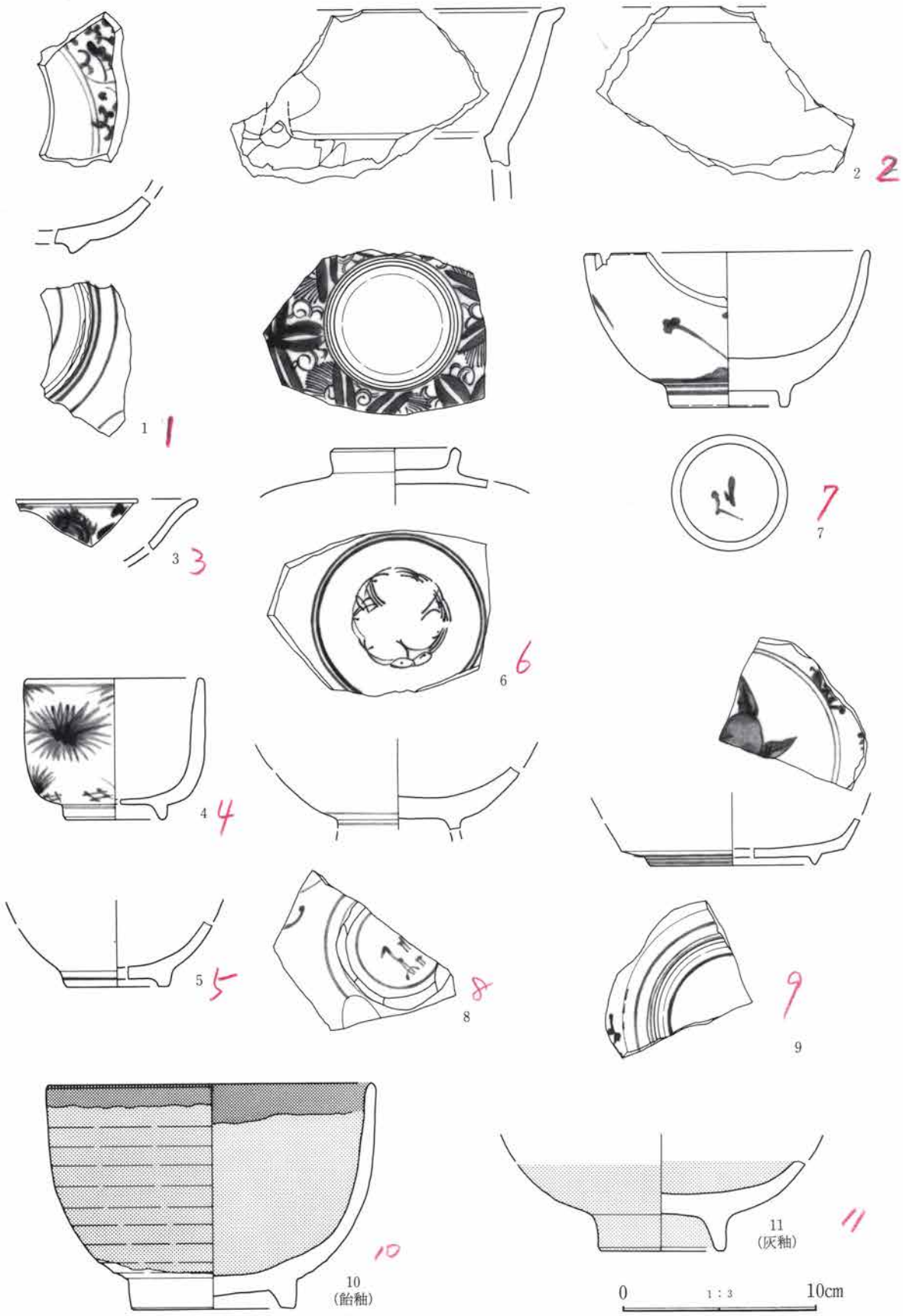


図20 白井北中道II遺跡FP上面出土遺物(1)

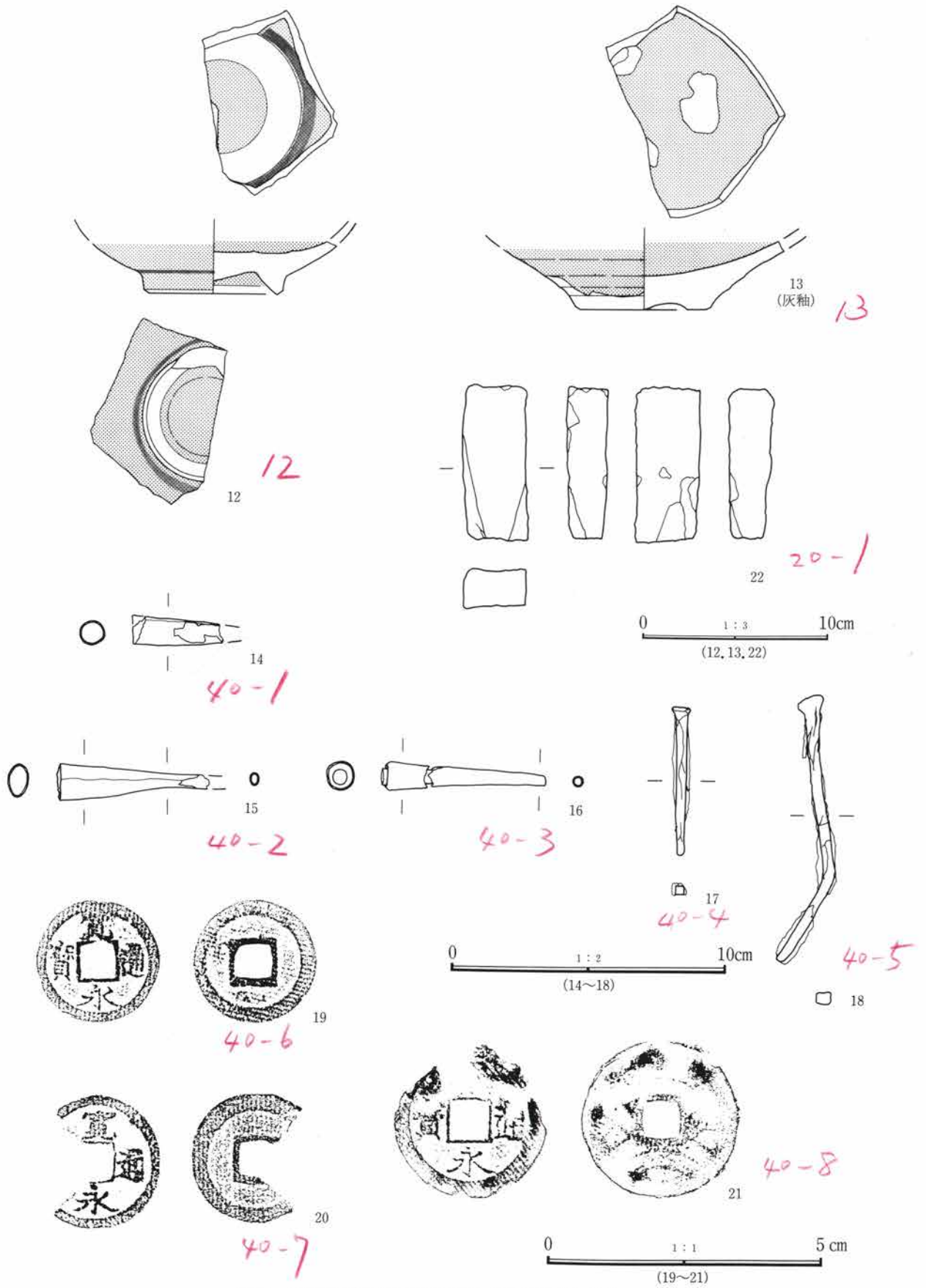


図21 白井北中道II遺跡F P上面出土遺物 (2)

表3 白井北中道II遺跡F P上面出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
1 234-1	染付皿	I区 11号土坑	底部 小破片			高台内圏線1条。(肥前磁器。)
2 234-2	内耳鍋	I区 3号溝状遺構	口縁部 小破片		胎土砂粒・赤色粒子含む 焼成良好	耳部残存。(15世紀。)
3 234-3	染付碗	II区表土	口縁部 小破片			口縁端部内面うすい圏線1条。外面は宝珠文部分が残る。(中国製磁器。明。)
4 234-4	染付碗	II区表土	1/4	器高 4.9 口径(7.0) 底径(4.0)		底部器壁濃い。(瀬戸・美濃系磁器。幕末～明治初。)
5 234-5	赤絵瓶	I区表土	底部破片	底径(3.5)		高台外面に赤絵。内面無釉。 (肥前磁器か。)
6 234-6	染付蓋	I区表土	つまみの み	つまみ径 4.2		内面崩れた三友。 (肥前磁器。19世紀前半。)
7 234-7	染付碗	II区表土	1/4	器高 5.4 口径(10.0) 底径(4.2)		外面雪輪梅樹。高台内不明銘。(肥前磁器。)
8 234-8	染付碗	I区表土	底部破片	底径(4.2)	焼成不良	底部外面「大明年製」くずれ銘か。(肥前磁器)
9 234-9	染付鉢	I区表土	底部破片	底径(5.8)		内面は桃の文様か。釉が少し白濁するが、呉須は紫色を帯びている。(肥前磁器。)
10 234-10	胎釉碗	I区表土	1/3	器高 7.8 口径11.2 底径 5.7		高台脇以外を除いて胎釉を施し、口縁部に藁灰釉をかける。いわゆる尾呂茶碗。(瀬戸・美濃陶器。)
11 234-11	灰釉碗	I区表土	底部	底径(4.2)		いわゆる呉器手碗。(肥前陶器。)
12 235-12	染付皿	I区表土	底部破片	底径(4.6)		見込み蛇の目釉はぎ。(肥前磁器。)
13 235-13	唐津皿	I区表土	底部破片	底径(4.8)		内面に胎土目3ヶ所。内面から高台脇にかけて灰釉。(唐津。17c前。)
14 235-14	キセル	I区表土		最大径 1.0		
15 235-15	キセル	I区表土		最大径 1.3		
16 235-16	キセル	III区表土		長さ 5.8 最大径 1.0		内部に羅字が残る。
17 235-17	鉄釘	I区		長さ 5.3		
18 235-18	鉄釘	II区 24号土坑				
19 235-19	銅銭	I区		直径 2.3		「寛永通宝」。
20 235-20	銅銭	I区		直径 2.5		「寛永通宝」。
21 235-21	銅銭	I区		直径 2.9		「寛永通宝」。波銭。火を受けている。
22 235-22	砥石	I区 8号土坑				

3 吹屋犬子塚遺跡

吹屋犬子塚遺跡では、I・II区で顕著な遺構を発見できなかったため、III区以下について報告する。

見つかった遺構の数は、III区が土坑50、溝1、道1、IV区が土坑52、V区が土坑41、溝1、VI区が土坑2である。

〔III区〕

土坑は合計50基で、ほぼ全面に分布する。その方向はN-65°-Wとそれに直交する方向に大部分が収まるが、66号、69～71号、92号、105・106号などはそれと約5°異なった方向、すなわちN-70°-Wとそれに直交する方向を示す。III区西端付近の68号・69号の切り合関係をみると68号の方が古いので、前者の方向をとるものの方がより古い時期の所産で

あると思われる。

図23の土坑の分布図に明らかなように、同じ型の土坑はある程度集中する傾向がある。特に調査区南辺近くに列をなす一群にB型が集中すること、南東部にA型(98～101・104号)が集中すること、南西部の67～73号にD型が集中することなどは注目に値する。

A～D型に当てはまらない土坑は88号土坑のみである。

88号土坑(図22、写真13)

III区中央南にある。長さ2.78m、幅1.56m、深さ0.88mの長楕円形の土坑である。埋土の上半分は径5～10cmの大きなF P粒が詰まっている。性格・時期ともに不明であるが、その位置がやや特徴的である。図23の土坑分布図にみえるように、この付近は調査区南辺にそって2列に土坑が並んでおり、ちょう

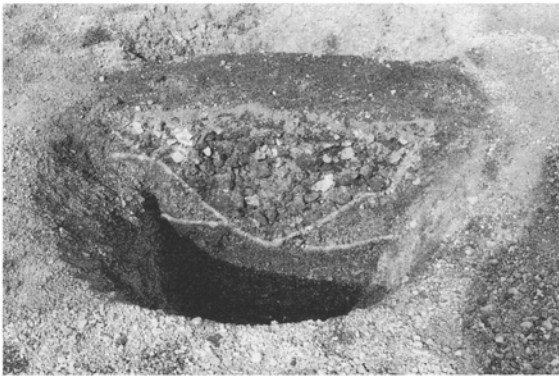
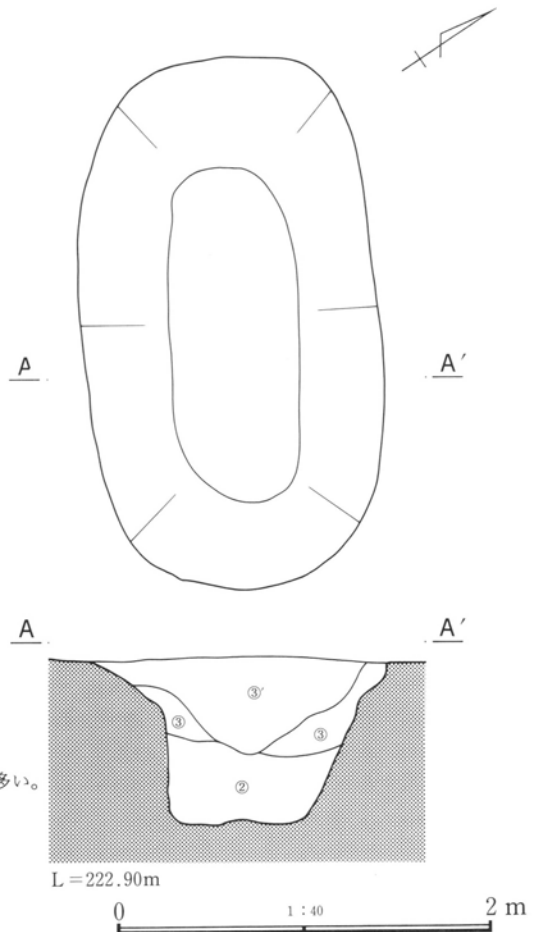


写真13 88号土坑断面(南から)



③' 径5～10cmの大形のF P粒が多い。

図22 吹屋犬子塚遺跡III区88号土坑

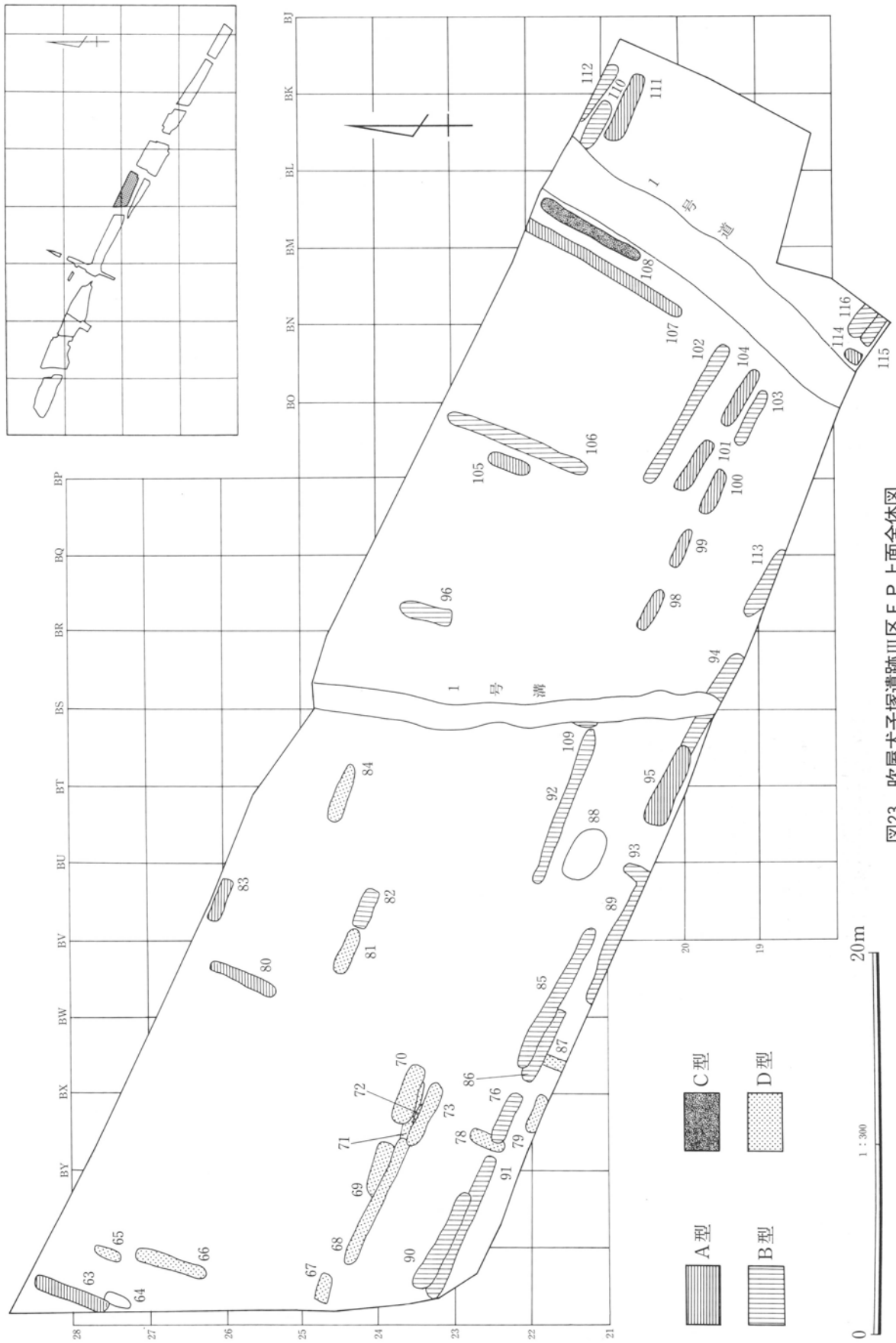


図23 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区F P上面全体図

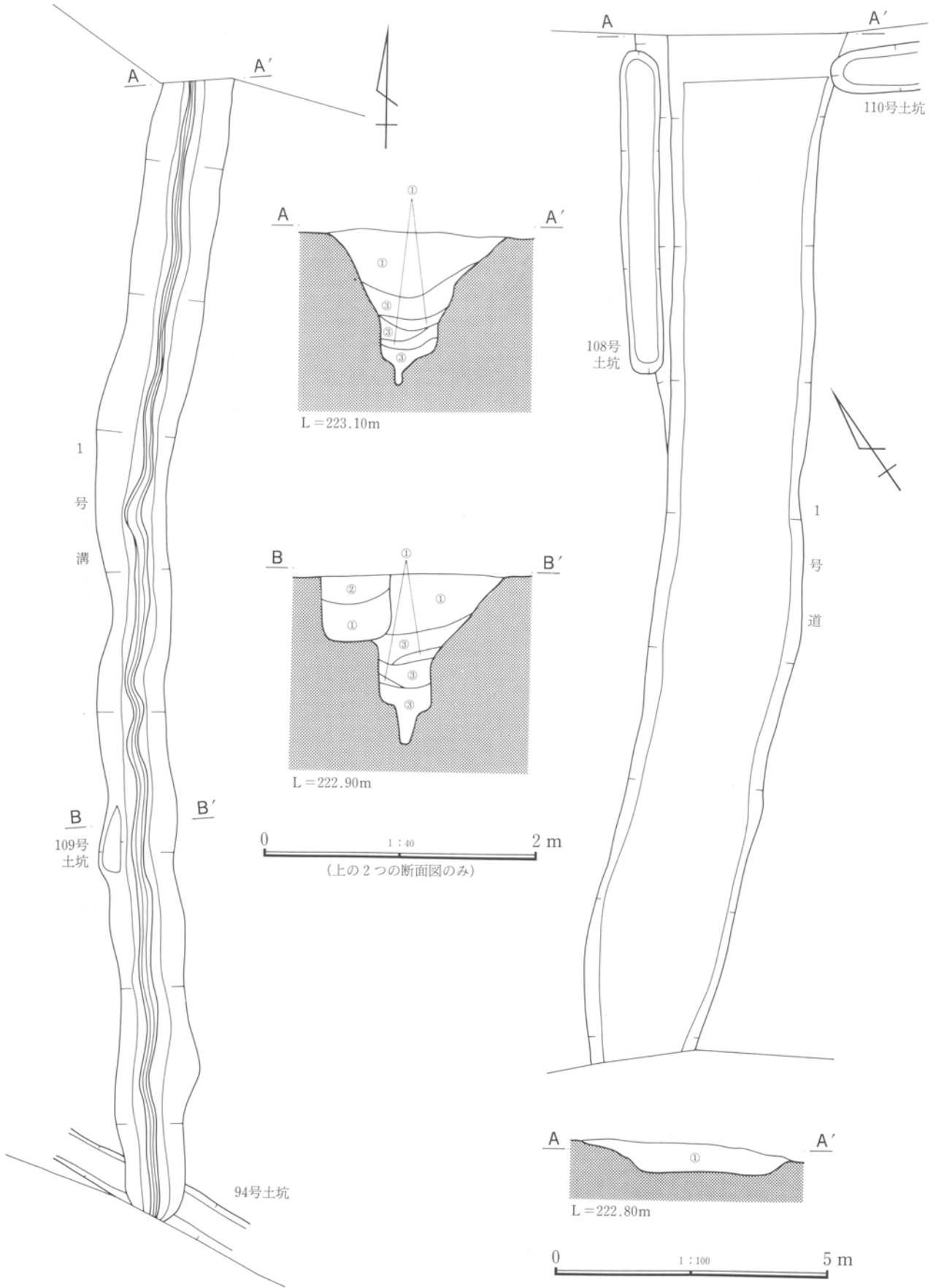


図24 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区1号溝・1号道



写真14 1号溝 (南から)



写真15 1号道 (南から)

どその間は幅3～4mほどの空白部になっている。88号土坑は、その空白部の中央に位置しているのである。

1号溝 (図24、写真14)

III区の中央部、ちょうどBSラインに沿って南北に延びる溝である。断面はきわめて特徴的な形で、深さ1.2m位までは斜めに掘り込み、その後垂直に0.6～0.8m掘り、いったん平坦部を作った後、さらに幅の狭い溝を掘っている。このような形態となったのは、おそらく掘り込まれる土層に影響されたのであろう。すなわち、底部付近の幅の狭い部分は崩れにくいIV層以下に掘り込まれているのに対して、それより上の広い部分は崩れやすいFP層に掘り込まれているためと思われる。この底部付近の狭い部分は、幅5～15cm、深さ15～30cmであり、発掘するのに苦労するほど狭い。このような狭い溝をわざわざ掘っていることから、この1号溝は何か特別な目的をもった溝であると考えられるが、やはり出土遺物

がなく、明確な性格は不明である。

掘削の時期は、中央やや南よりで109号土坑に、南端部で94号土坑に切られているため、それらより古い遺構であることが分かる。走行方向がまったく違っていることから、大部分の土坑より古い時期のものであると思われる。

なお、この1号溝はより南側のII区にも続いている。付図6にみえている溝の痕跡（一点鎖線で描かれている）が1号溝の底の部分である。

1号道跡 (図24、写真15)

III区東端近くにあり、東辺にほぼ並行する。形状としては幅3.3m、深さ0.4mほどの浅い溝であるが、底が平坦で幅広くしかも底面が固く締まっているため、道跡と判断した。底面幅は約2.2mで、これが路面幅となろう。南半部ではやや蛇行するものの、北半部は107・108号土坑に並行しているため、これらの土坑と同時期のものであると思われる。

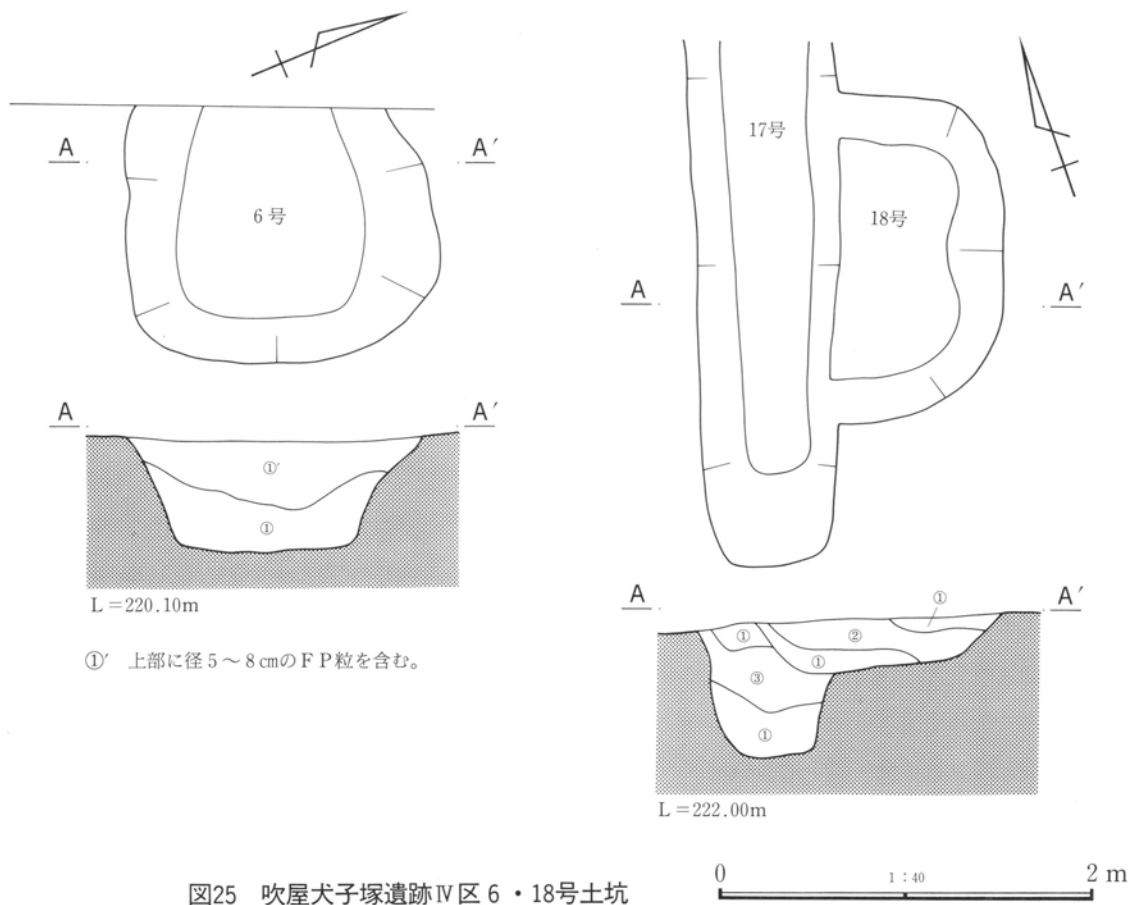


写真16 6号土坑 (南東から)

〔IV区〕

土坑は合計52基で調査区全面にみられるが、配置が比較的まとまる傾向にあり、空白部が多いのが特徴的である。IV区は範囲が広いためか、土坑の方向にも多くの種類がみられる。ただし、互いに90°違う方向のものがひとつのグループとなり、同じ型の土坑がある程度集中することは他の区と同様である。

A～D型に当てはまらない土坑は2基である。



写真17 17・18号土坑断面 (南から)

6号土坑 (図25、写真16)

IV区南西隅付近にある。西側が発掘区の境にかかるため全形不明であるが、幅が他の土坑に比べて広く、断面は箱形である。

18号土坑 (図25、写真17)

IV区北側、CX-47グリッドにある。西側は17号土坑を切っている。長さは1.70m、幅は1.27mと広く、深さは0.28mと浅い。

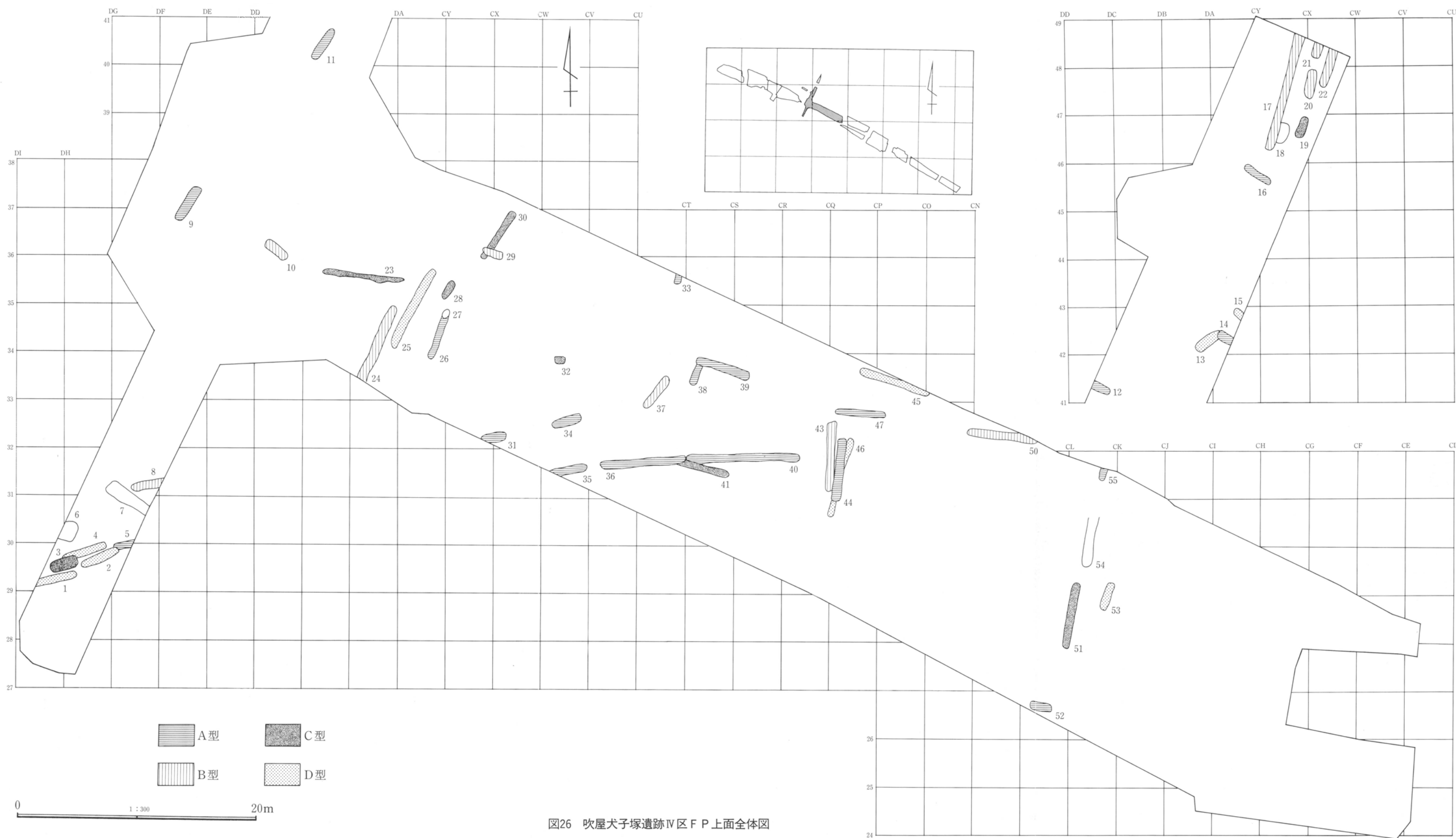


图26 吹屋犬子塚遺跡IV区F P上面全体図

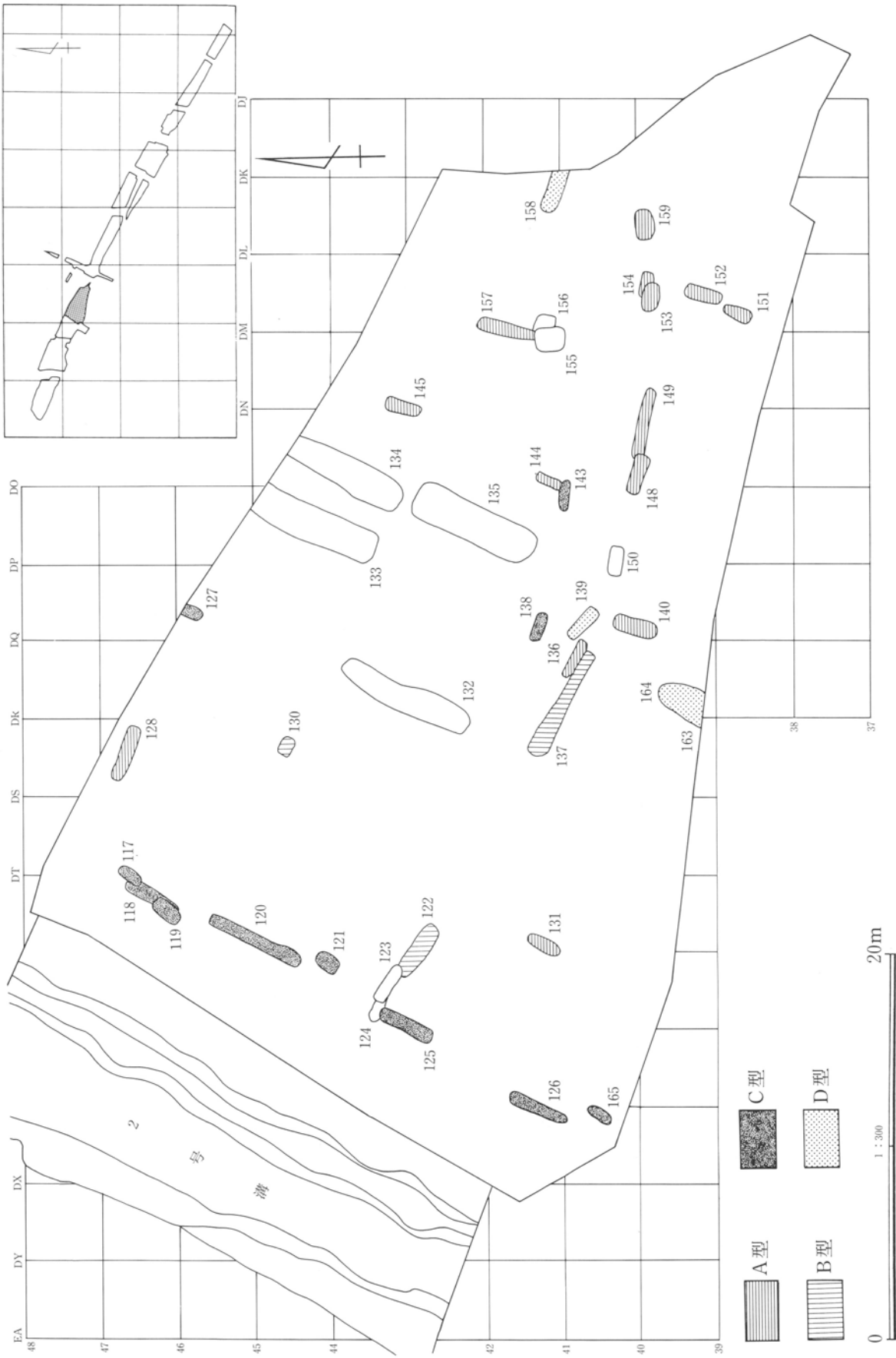
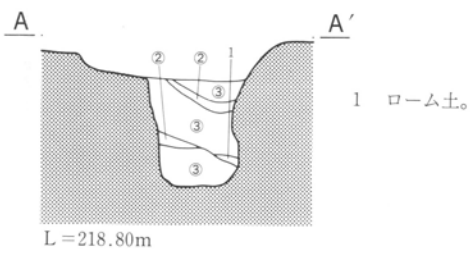
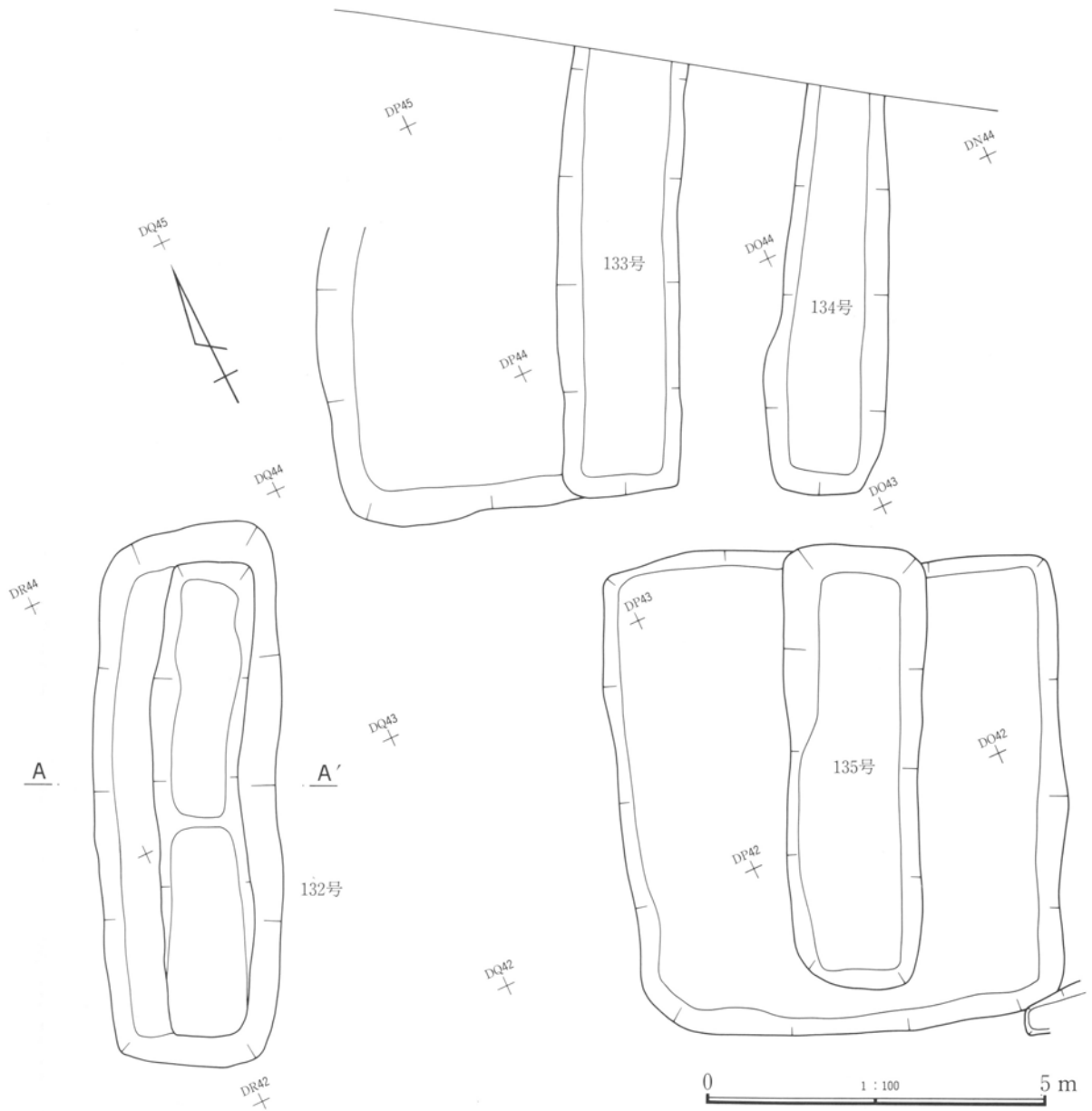


図27 吹屋犬子塚遺跡V区F P上面全体図



1 ローム土。



写真18 132号土坑断面（南西から）

図28 吹屋犬子塚遺跡V区132~135号土坑

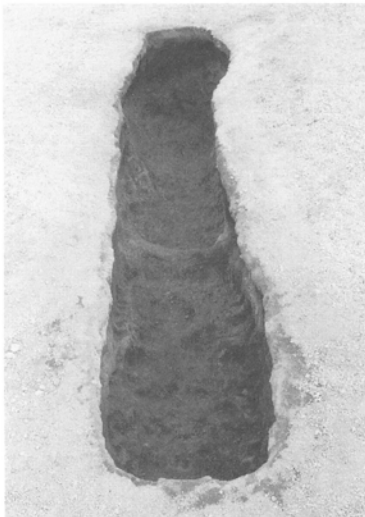


写真19 132号土坑 (南西から)

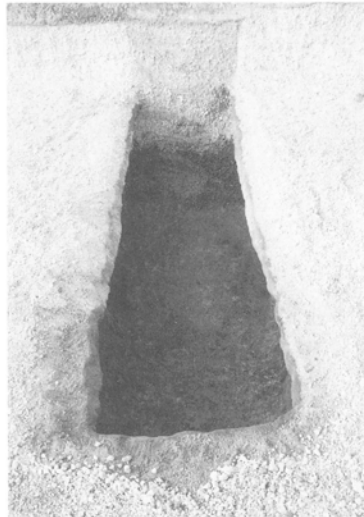


写真20 133号土坑 (南西から)

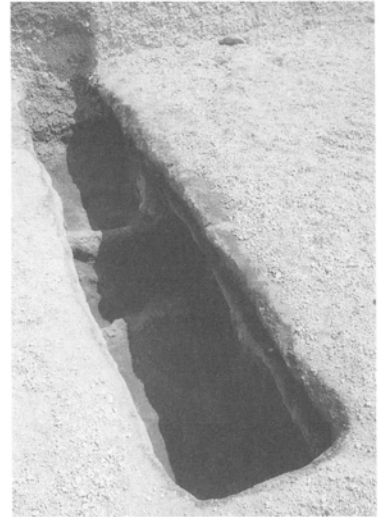


写真21 134号土坑 (西から)



写真22 135号土坑 (南西から)



写真23 134号土坑東壁の工具痕



写真24 135号土坑西壁の工具痕

〔V区〕

土坑は合計41基で、ほぼ全面に分布する。互いに90°違う方向のものが一つのグループをなすことは他の区と同様である。ただし、この区では、ちょうど中央付近を境にして、東側と西側とで方向が異なるようである。さらに、土坑の型も、東側にA型が多いのに対して、西側にはB・C型が多い。また、中央北側には、大型の土坑が4基あるのが注目される。

A～D型に当てはまらないのは、4基の大型土坑を含め、6基である。

132～135土坑 (図28、写真18～24)

V区中央北側にある。長さ6.4～6.9m、幅1.4～1.9m、深さ0.9～1.5mのほぼ同形・同大の土坑群である。方向も同じであることから、同時期の所産と考えてよいと思われる。132～135号の3基にみるように、土坑の周囲を長方形ないし正方形に掘り下げ(深さ10～40cm)、その中に土坑を掘っている。

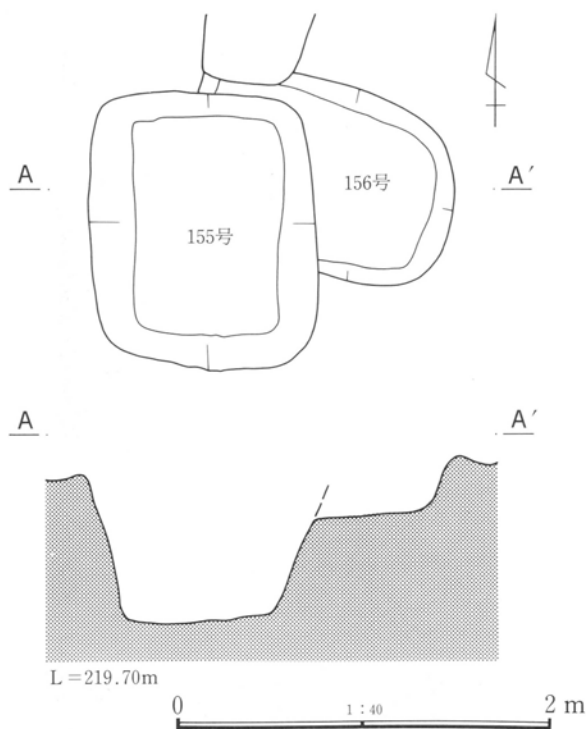


図29 吹屋犬子塚遺跡V区155・156土坑

それぞれの土坑はF P層を突破してローム層を深く掘り込んでおり、その部分の壁はややオーバーハングし、壁面には工具の刃先の痕跡が明瞭に残っている(写真23・24)。白井南中道遺跡で見つかった粘土採掘坑には同様な刃先痕をもつものを見ることができることから、この土坑群もローム採掘を目的としたものである可能性が考えられる。

この土坑群の時期は、出土遺物がほとんどないため明確にはしがたい。最上層からガラス製の「おはじき」が見つかったことを重視すれば、ごく最近の土坑ということになるが、おはじきのような小型の遺物は軽石の間に落ち込むことも考えられるので、確証とはならない。ただし、土坑群の方向が周囲の土坑とほぼ同じであることから、それらと同時期であることは確実であろう。

155・156号土坑(図29、写真25)

V区中央東寄り、DM-42グリッド付近にある。155号土坑は長さ1.45m、幅1.20m、深さ0.79mであり、底は平坦でIV層上面に達する。156号は155号に



写真25 155・156号土坑(西から)

1/2を切られている。長さ1.45m、幅0.98mで156号とほぼ同規模の土坑であるが、深さは0.16mとごく浅い。

2号溝(図30、写真26・27)

吹屋犬子塚遺跡V区と吹屋中原遺跡I区との間にある小さな谷の中央に掘り込まれた溝である。A-A'にみるように、F P上面を深さ0.6mほど掘り下げた後、逆台形の溝を掘っている。溝の幅は凹凸があるが、北端では上端幅2.45m、底面幅0.85m、深さ1.0m、南端では規模が小さくなり上端幅1.2m、底面幅0.6m、深さ0.8mである。

この谷は、現状では、F P下面に豊富な地下水が流れている。2号溝の底面は、ちょうどその地下水の上面にあたっており、このため発掘後のこの溝には深さ10cm前後の水が流れていた。ただし、地下水の水位は時代によって変化することが考えられるので、このような状況が溝掘削当初からのものかどうかは明らかではない。

溝の掘削時期は、明確な遺物が出土せず、はっきりしない。他の土坑からは出土する近世以後の陶磁器がまったくみられず、そのかわり須恵器長頸瓶の頸の基部と思われる小破片(実測不能)が1点のみ出土しているため、あるいは古代～中世にまで遡る可能性がある。

なお、地下レーダー探査によって、この溝はさらに100m下流まで谷に沿って掘られていることが確認された(第4章第7節参照)。

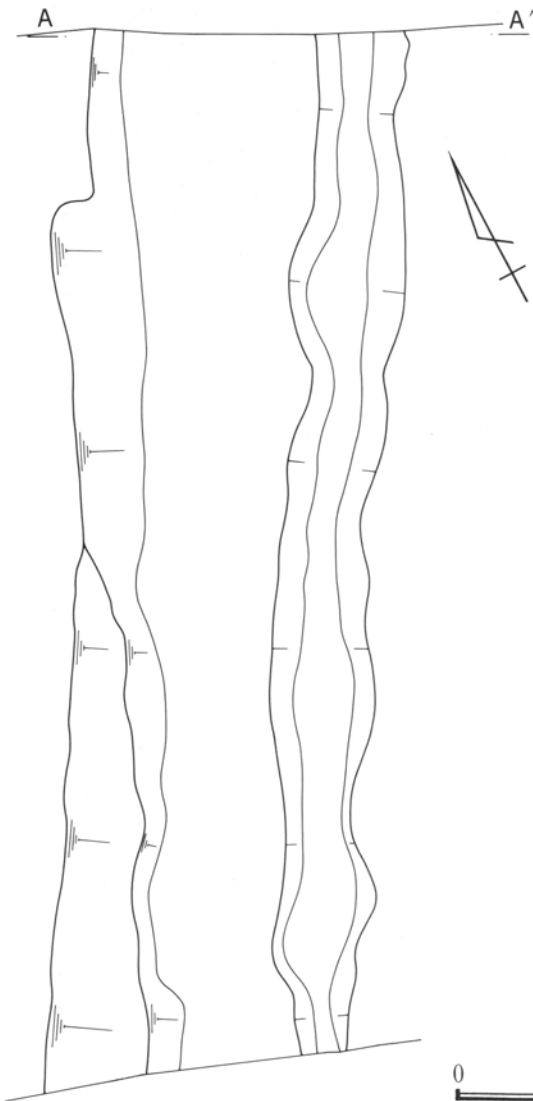
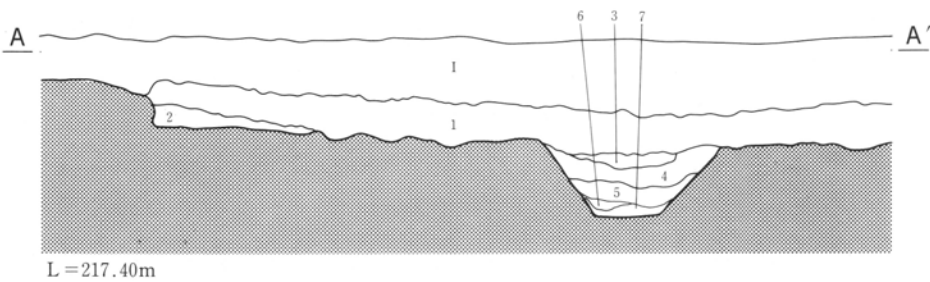


写真26 2号溝 (南西から)



写真27 2号溝断面 (A~A')



- 1 軽石を多量に混入する黒褐色土。
- 2 褐色土。軽石の混入は少ない。
- 3 暗褐色土。
- 4 暗褐色土。上部には砂粒を含み、軽石の混入も多い。
- 5 暗褐色土。軽石の混入は少ない。
- 6 軽石の崩落層。
- 7 暗褐色土。軽石の混入が多く、全体に砂質。

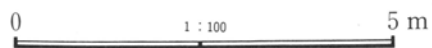


図30 吹屋犬子塚遺跡V区2号溝

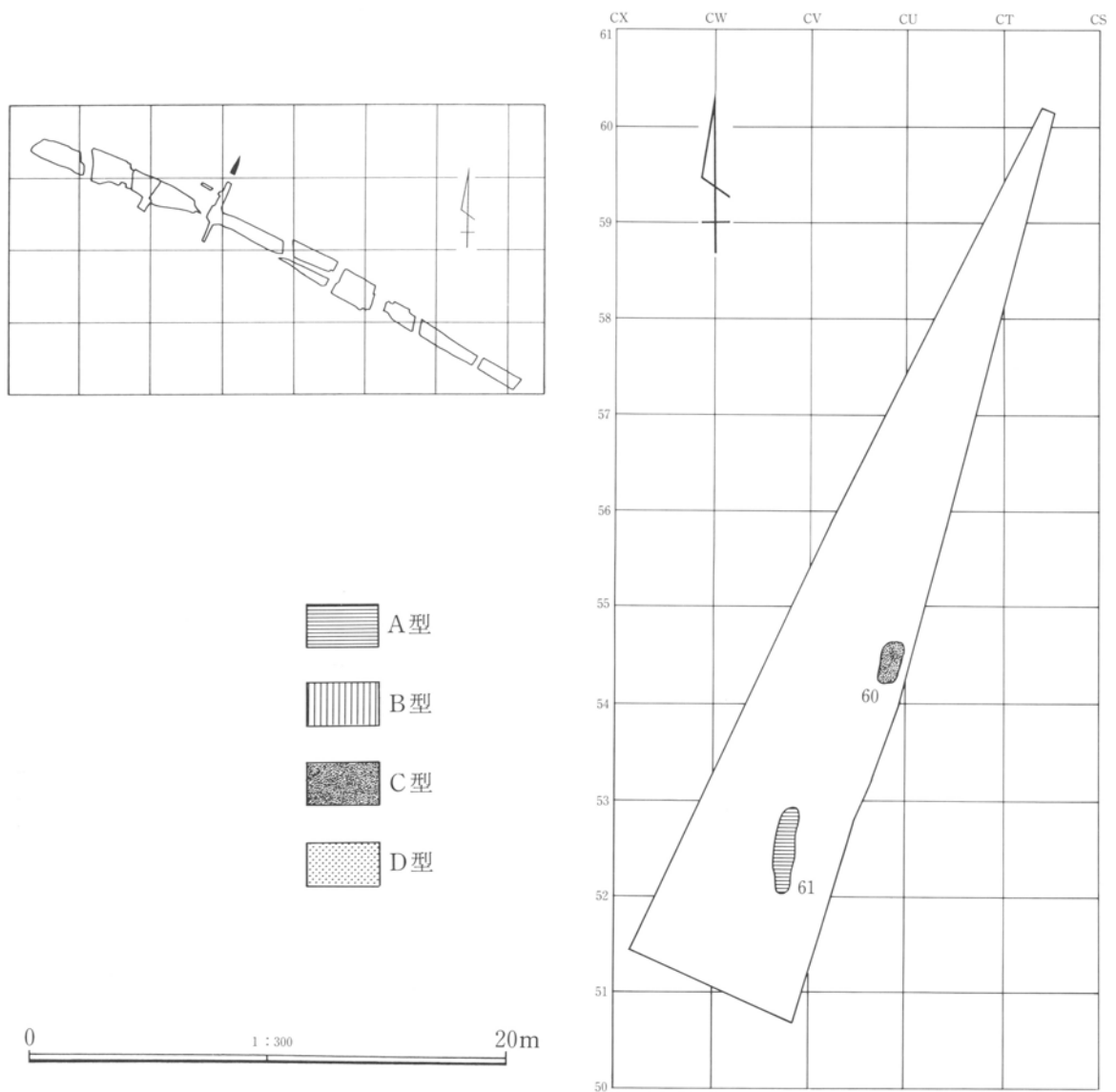


図31 吹屋犬子塚遺跡VI区F P 上面全体図

〔VI区〕

VI区はIV区の北西に位置するごく狭い調査区であり、土坑も2基がみられるのみである。

〔出土した遺物〕

遺物は近世～近・現代のものが出土した。ここでは近世の遺物を中心に取り上げる（図32・33）

注目すべき遺物としては、14の鉄滓があるが、単独での出土であり、近傍で鉄生産が行われていたと断定できるものではない。その他、小破片であるが、

中国陶磁が出土している（1）。

いずれも白井北中道II遺跡と同様、表土や土坑埋土からの出土であり、確実に遺構に伴うものはない。

表4 吹屋犬子塚遺跡F P上面土坑一覧表(1)

III区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
63	A	CA-28	3.90	0.72	0.67	
64	不明	CA-28	1.40	0.56	0.18	
65	D'	CA-28	1.32	0.54	0.63	
66	D	CA-27	3.68	0.65	0.65	
67	D	CA-25	1.46	0.55	0.55	
68	D'	BY-24・25	7.09	0.58	0.86	
69	D	BX-24	2.72	0.74	0.54	
70	D	BW・BX-24	3.12	0.88	0.36	
71	D	BX-24	—	—	0.20	
72	D	BX-24	—	—	0.22	
73	D	BX-24	3.46	0.75	0.34	
74	欠番					
75	欠番					
76	B	BX-23	2.88	0.70	0.47	
77	欠番					
78	D	BX-23	1.90	0.70	0.46	
79	D	BX-22	2.00	0.58	0.37	
80	A	BV-26	3.67	0.58	0.56	
81	D'	BV-25	2.48	0.76	0.53	
82	B'	BU-25	2.12	0.77	0.70	
83	A	BU-26	2.36	0.54	0.23	
84	D'	BT-25	3.22	0.73	0.74	
85	B'	BV・BW-22	8.04	0.70	0.53	
86	B	BW-22	2.72	0.66	0.47	
87	D	BW-22	(1.45)	0.57	0.52	
88	他	BT-22	2.78	1.56	0.88	幅広い。
89	B	BU-21	(6.70)	0.68	0.78	
90	B'	BY・CA-24	5.56	0.64	0.63	
91	B	BY-23	8.02	0.68	0.65	
92	B	BS・BT-22	8.48	0.60	0.85	
93	B	BU-21	(1.26)	0.70	0.57	
94	B	BR・BS-20	9.95	0.64	0.50	
95	A'	BS-21	4.40	0.73	0.55	
96	B	BQ-24	2.50	0.84	0.37	
97	欠番					
98	A	BQ-21	2.23	0.65	0.37	
99	A	BP-21	2.16	0.62	0.45	
100	A	BP-20	2.44	0.76	0.37	
101	A	BO-20	3.00	0.72	0.35	
102	B	BO-21	8.04	0.62	0.20	
103	B	BO-20	3.15	0.54	0.43	
104	A	BN-20	3.28	0.72	0.28	
105	A	BO-23	2.20	0.74	0.37	
106	B	BO-22・23	7.58	0.75	0.57	
107	A	BM-21	9.10	0.60	0.53	
108	C	BL-22	5.85	0.70	0.36	
109	B	BS-22	—	0.50	0.47	1号溝中
110	B'	BK-22	2.75	0.85	0.67	
111	A'	BK-22	3.70	0.82	0.87	
112	B'	BJ-21	(3.40)	(0.60)	0.86	
113	B	BQ-19	3.80	(0.75)	0.59	
114	A'	BN-18	(0.82)	0.65	0.75	
115	B'	BN-18	(1.60)	(0.60)	0.54	
116	B'	BM-18	(1.70)	(0.80)	0.60	

IV区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1	D	DH-30	3.10	0.56	0.78	
2	D	DG-30	3.32	0.75	1.00	
3	C	DH-30	2.35	1.00	0.63	深い
4	D'	DG-30	3.70	0.62	0.26	
5	A	DF-31	(1.60)	0.60	0.81	
6	他	DG-31	(1.34)	1.66	0.62	幅広い
7	不明	DF-32	4.00	1.04	0.80	
8	B	DF-32	2.10	0.70	1.35	
9	A	DE-38	3.12	0.76	0.73	
10	B	DC-37	2.26	0.74	1.07	
11	A	DB-41	2.86	0.62	0.85	
12	A	DC-42	1.60	0.67	0.88	
13	D	DA-43	(2.30)	0.70	0.43	
14	A	DY-43	(1.30)	0.70	0.65	
15	D	DY-43	(0.85)	0.67	0.35	
16	A	CY-46	2.60	0.56	0.37	
17	B'	CX-47・48	(9.50)	0.72	0.67	
18	他	CX-47	1.70	(0.90)	0.28	幅広い
19	C	CX-47	1.80	0.72	0.37	
20	B'	CW-48	2.56	0.87	0.54	
21	B	CW-49	1.20	0.80	0.48	
22	B	CW-49	3.20	0.67	0.30	
23	C	DA-36	7.00	0.40	0.10	細長く浅い
24	B	DA-35	6.70	0.82	0.78	
25	D	CY-36	7.25	0.66	0.62	
26	A	CY-35	3.20	0.55	0.30	
27	不明	CY-35	0.86	0.60	0.57	
28	C	CX-36	1.70	0.58	0.30	
29	B	CX-37	1.82	0.60	0.43	
30	C	CW-37	4.70	0.64	0.22	
31	A	CX-33	2.06	0.80	0.42	
32	C	CV-34	1.05	0.60	0.19	
33	A	CT-36	(0.70)	0.62	0.42	
34	A	CV-33	2.60	0.67	0.43	
35	A	CV-32	(2.90)	0.60	0.34	
36	A	CT・CU-32	7.10	0.60	0.37	
37	B'	CT-34	3.18	0.54	0.37	
38	A	CS-34	1.70	0.56	0.30	
39	A	CS-34	4.50	0.70	0.64	
40	A	CR・CS-32	9.30	0.62	0.60	
41	C	CS-32	4.30	0.60	0.12	
42	欠番					
43	B	CQ-33・32	5.75	0.64	0.30	
44	A	CP-32	5.40	0.65	0.28	
45	D	CO-34	0.60	0.52	0.18	
46	D	CP-32	6.54	0.45	0.27	
47	A	CP-33	4.16	0.48	0.20	
48	欠番					
49	欠番					
50	B	CM-33	5.70	0.62	0.28	
51	C	CK-29	1.82	0.70	0.23	
52	A	CL-27	5.46	0.68	0.57	
53	D	CK-30	2.36	0.66	0.14	浅い
54	C	CK-31	(4.15)	0.74	0.13	
55	A	CK-32	(0.86)	0.58	0.14	浅い

第3章 調査の成果

表5 吹屋犬子塚遺跡F P 上面土坑一覧表(2)

V区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
117	C	DS-47	1.35	0.67	0.34	
118	C	DT-47	3.10	0.64	0.27	
119	C	DT-47	0.66	0.80	0.40	
120	C	DT-46	5.07	0.64	0.34	
121	C	DU-45	1.18	0.76	0.33	
122	B	DT-43	3.07	0.96	0.73	
123	不明	DU-44	2.00	0.60	0.35	
124	不明	DU-44	1.10	0.58	0.18	
125	C	DU-44	2.86	0.74	0.30	
126	C	DV-42	3.10	0.54	0.15	
127	C	DP-46	(0.86)	0.54	0.30	
128	A	DR-47	2.92	0.56	0.37	
129	欠番					
130	B	DR-45	1.04	0.64	0.37	
131	A'	DF-42	1.90	0.70	0.50	
132	他	DQ-44	6.90	1.36	1.46	大型
133	他	DO-45	6.40	1.80	0.93	大型
134	他	DN-44	5.90	1.55	0.89	大型
135	他	DO-43	6.40	1.90	0.92	大型
136	A	DQ-41	2.16	0.46	0.23	
137	B	DQ-42	6.06	0.70	0.60	
138	C	DP-42	1.42	0.46	0.08	浅い
139	D	DP-41	2.05	0.60	0.15	浅い
140	A	DP-41	2.14	0.78	0.47	
141	欠番					
142	欠番					
143	C	DO-42	1.58	0.60	0.13	
144	A	DN-42	1.24	0.56	0.50	

145	A'	DM-44	1.85	0.60	0.59	
146	欠番					
147	欠番					
148	A	DN-41	1.92	0.68	0.68	
149	A	DN-41	3.60	0.82	0.75	
150	不明	DO-41	1.52	0.64	0.67	
151	A	DL-39	1.50	0.67	0.42	
152	A	DL-40	1.92	0.66	0.52	
153	A'	DL-40	1.56	0.68	0.57	
154	A	DL-40	1.35	0.60	0.39	
155	他	DM-42	1.45	1.20	0.79	幅広い
156	他	DL-42	1.45	0.98	0.16	幅広い
157	A	DL-42	2.96	0.66	0.78	
158	D	DK-42	(2.15)	0.80	1.12	
159	A	DK-41	1.58	0.88	0.98	短い
160	欠番					
161	欠番					
162	欠番					
163	D	DQ-40	—	—	—	
164	D	DQ-40	(2.40)	1.75	0.80	
165	C	DW-41	1.28	0.52	0.20	

VI区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
56	欠番					
57	欠番					
58	欠番					
59	欠番					
60	C	CU-54	1.30	0.85	0.31	
61	A	CV-52	3.70	0.80	0.53	
62	欠番					

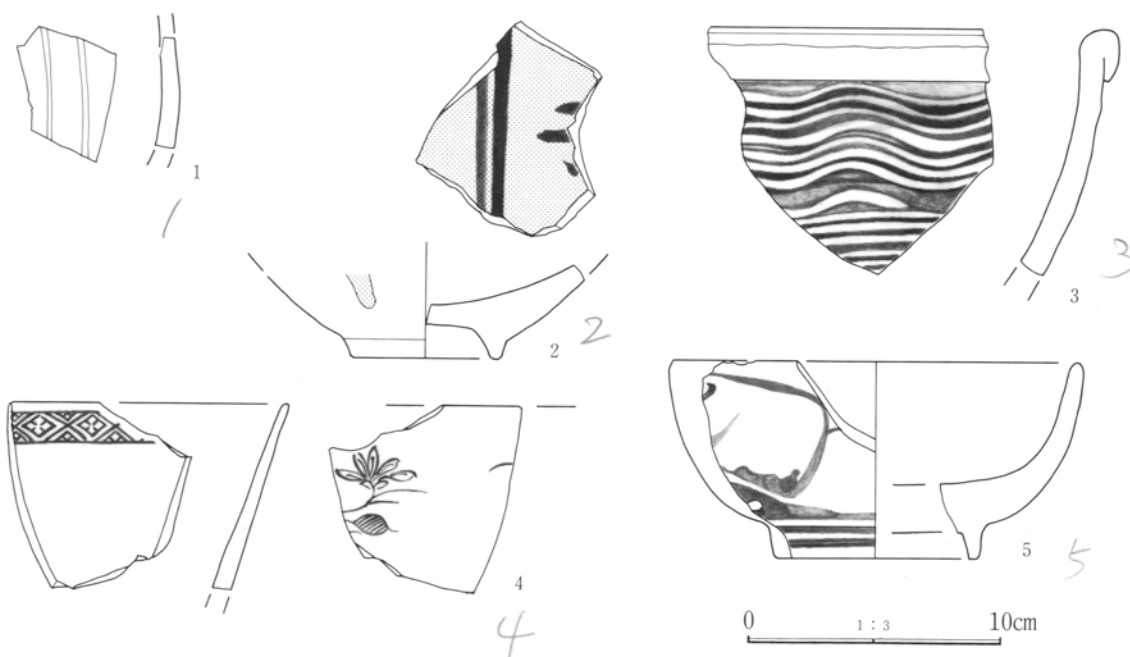


図32 吹屋犬子塚遺跡F P 上面出土遺物 (1)

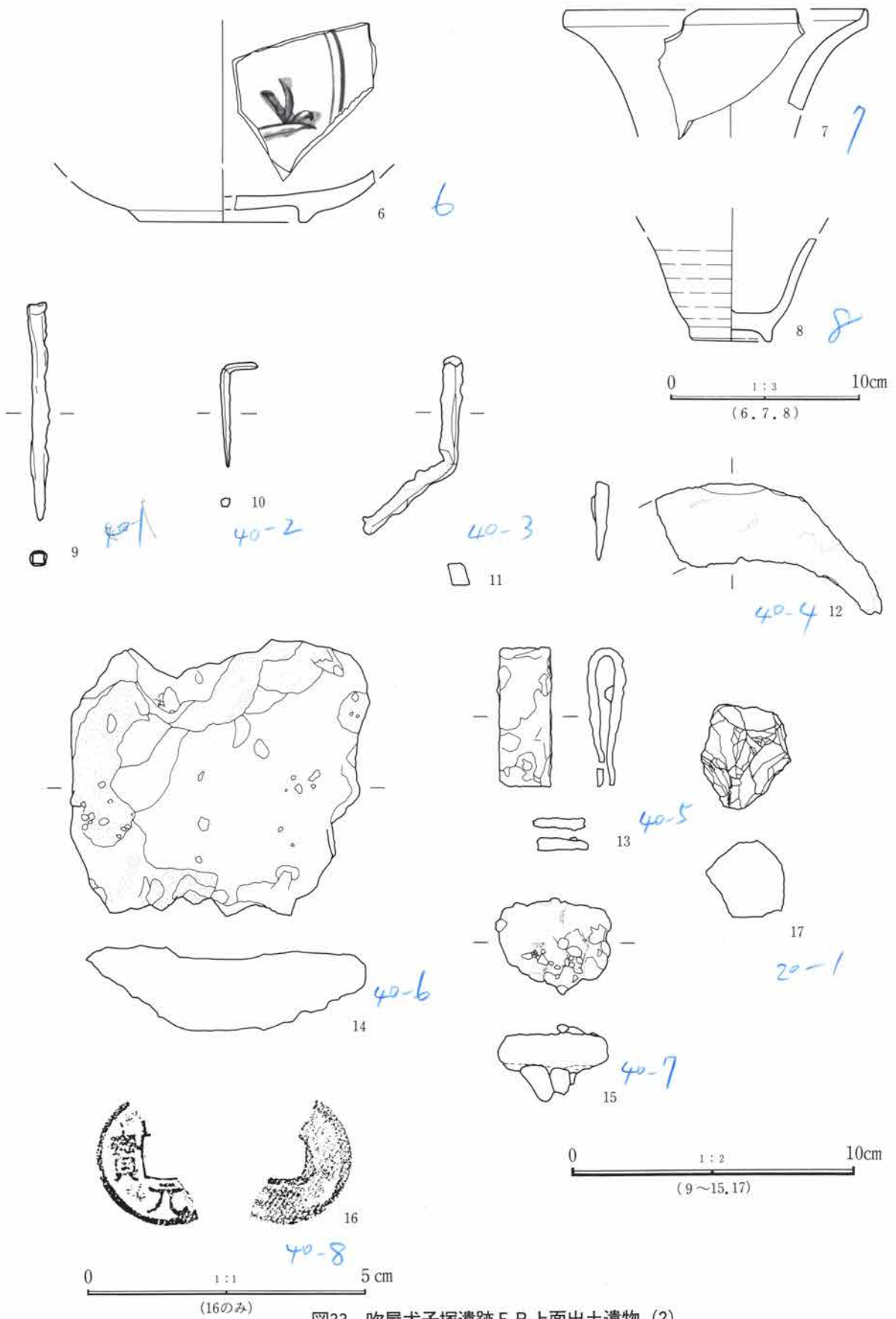


図33 吹屋犬子塚遺跡 F P 上面出土遺物 (2)

第3章 調査の成果

表6 吹屋犬子塚遺跡F P上面出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
1 235-1	青磁 器種不明	III区 77号土坑	小破片			青磁碗か。外面線描による蓮弁文か。 (中国磁器。明。)
2 235-2	絵唐津 碗	III区 88号土坑	底部破片	底径(4.0)		内面鉄絵。内面から口縁部外面に施釉。 (唐津系肥前陶器。)
3 235-3	唐津鉢	IV区 25号土坑	口縁部 破片			内外面とも白土による刷毛目。口縁部無釉。 (唐津系肥前陶器。)
4 235-4	染付猪 口	V区 159号土坑	口縁部 破片			外面素描きによる草花文。(肥前磁器。)
5 235-5	染付碗	IV区表土	1/4弱	器高(5.2) 口径(10.7) 底径(5.3)		外面雪輪梅樹文。(肥前磁器。)
6 236-6	染付皿	V区表土	底部破片	底径(5.7)		内面2重圏線内に草文。(肥前陶器。)
7 236-7	白磁瓶	V区表土	口縁部 破片	口径(10.7)		残存部に染付なし。(肥前磁器。)
8 236-8	白磁小 坏	V区表土	底部破片	底径 2.9		釉薬に透明感はなくやや濁る。(肥前磁器。)
9 236-9	鉄釘	III区 68号土坑		長さ 7.7		
10 236-10	鉄釘	V区 121号土坑		長さ 3.7 太さ 0.3		
11 236-11	鉄釘	V区 157号土坑		長さ 7.7 太さ 0.8		
12 236-12	鉄鎌	V区表土		長さ 8.5 幅 2.8 厚さ 0.45		
13 236-13	留金具	V区表土		長さ 5.0 幅 1.9		12鉄鎌の留金具か。釘穴は片方のみ。
14 236-14	鉄滓	V区表土		長軸長10.2 短軸長 8.5 厚さ 2.5		いわゆる「椀型滓」。磁石が付く力は弱い。
15 236-15	鉄塊	IV区表土		長さ 3.8 幅 2.7		
16 236-16	銅銭		1/2			銭種不明。
17 236-17	火打ち 石	V区表土				打ち割られた状態のもので、使用度は低い。玉 ずい。

4 吹屋中原遺跡

吹屋中原遺跡で発見された遺構は、I区で土坑26、II区で土坑53、III区で土坑48、溝4である。

〔I区〕

土坑は26基で、やや中央部に集まる傾向がある。方向は、ズレがみられるものの、N-60°-Wとそれに直交する方向とに概ね収まる。型ごとの集中は他区ほど顕著ではなく、配置も不規則に見える。また、土坑の大きさはどれも小さく、その点でII・III区と

は対照的である。

A～D型に当てはまらない土坑は14・15・19号の3基である。

14号土坑 (図34、写真28)

I区中央にある。直径1.0mの円形の土坑で、深さは0.43m。壁は直立し、底面は平坦である。

15号土坑 (図34、写真29)

I区北東隅付近にあり、北側は発掘区の境にかかる不整形の土坑である。幅は断面図の部分で1.02m、深さは0.56mであり、壁は直立し底面は平坦であるため、断面は箱形を呈する。

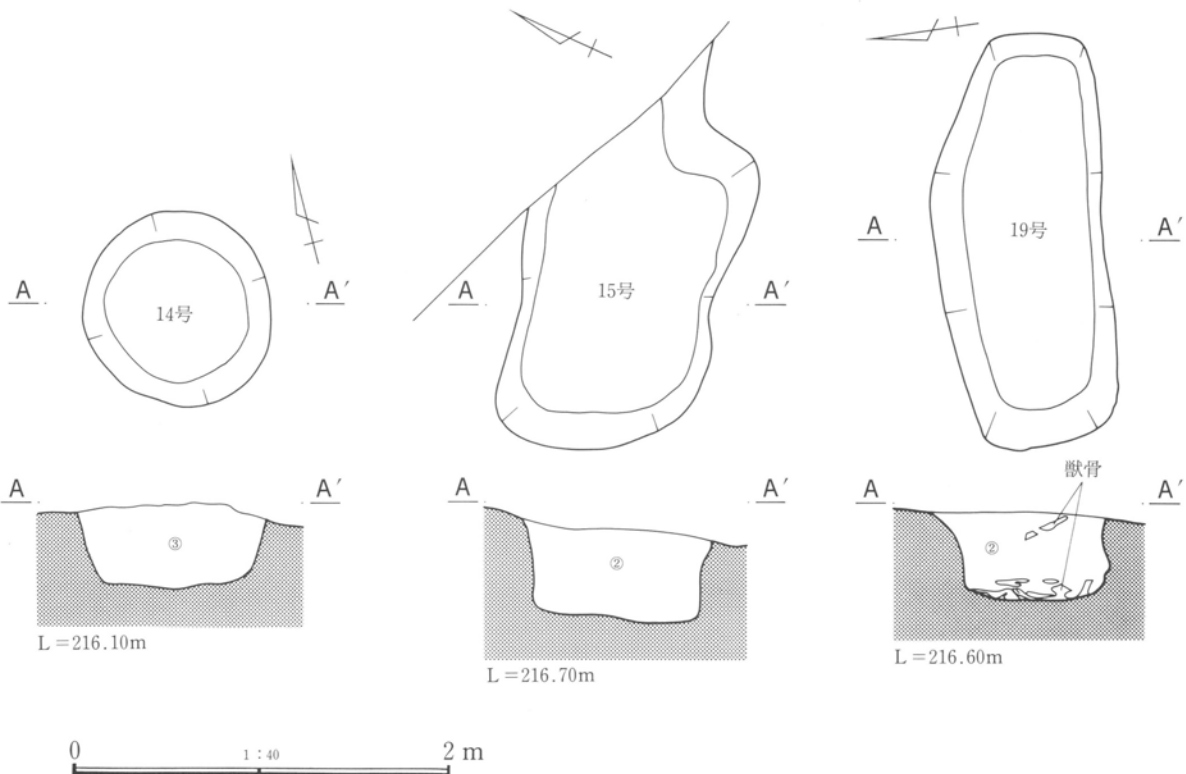


図34 吹屋中原遺跡 I区14・15・19号土坑



写真28 14号土坑 (南から)



写真29 15号土坑 (南西から)



写真30 19号土坑 (西から)

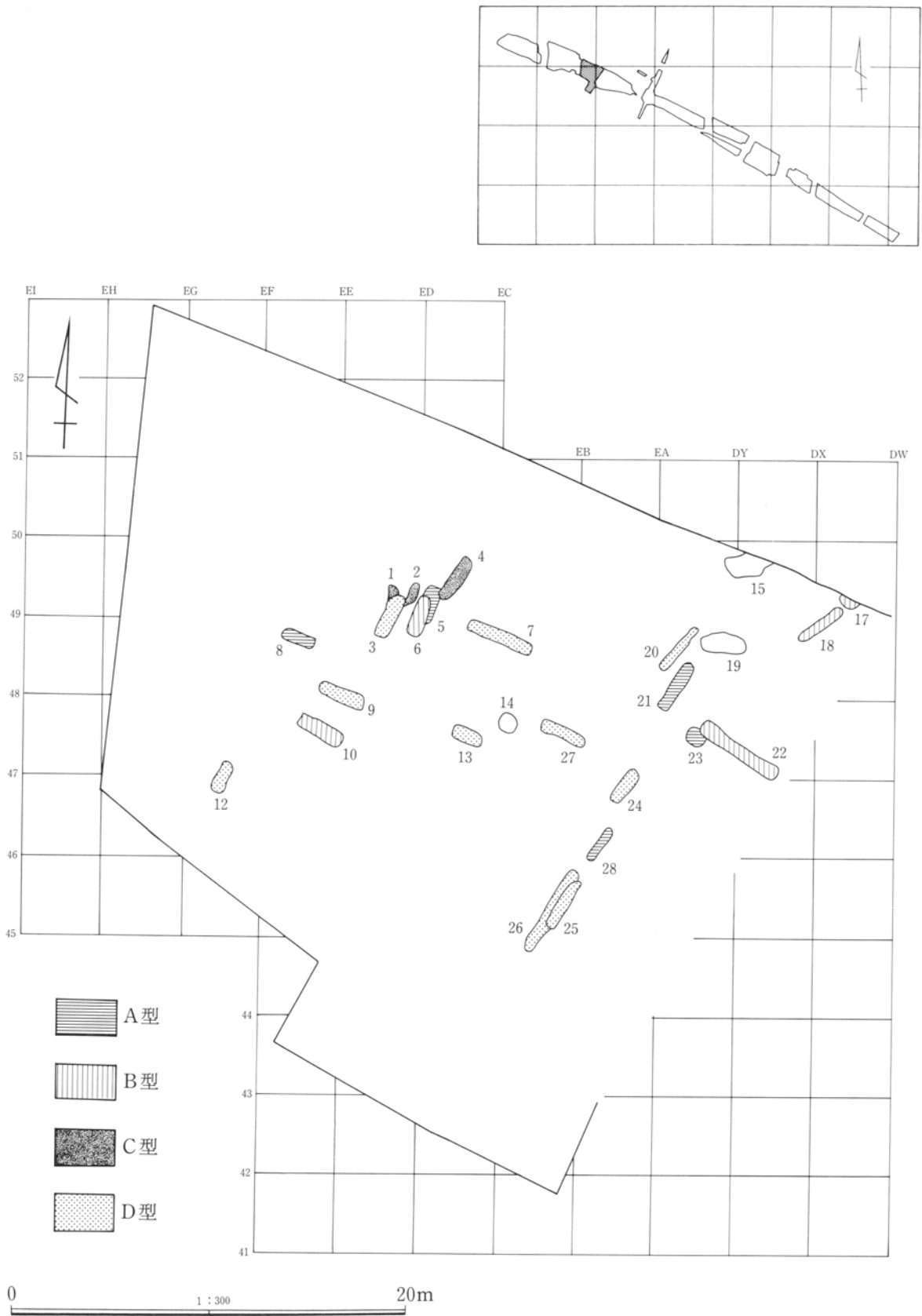


図35 吹屋中原遺跡 I 区 F P 上面全体図

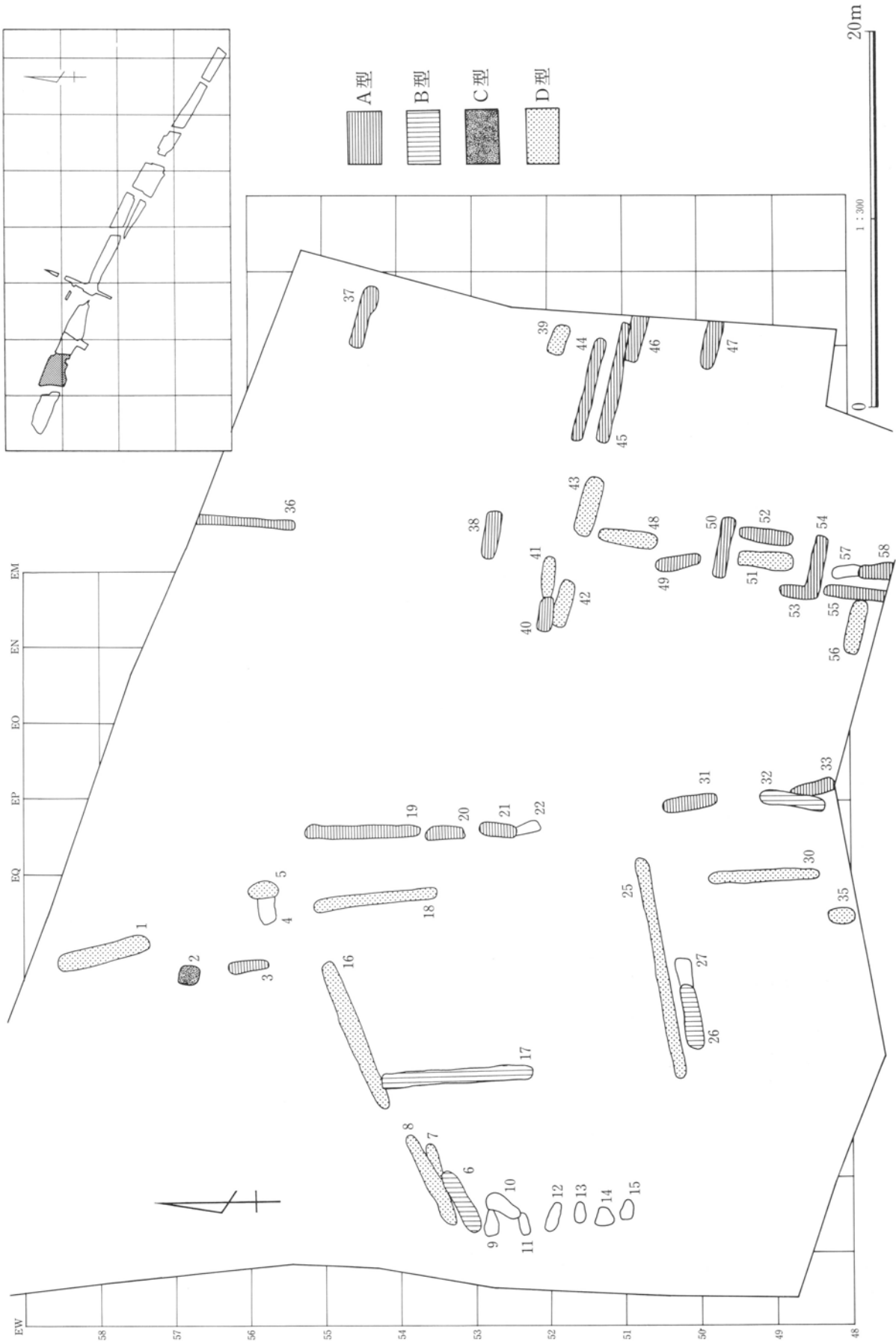


図36 吹屋中原遺跡Ⅱ区 F P上面全体図

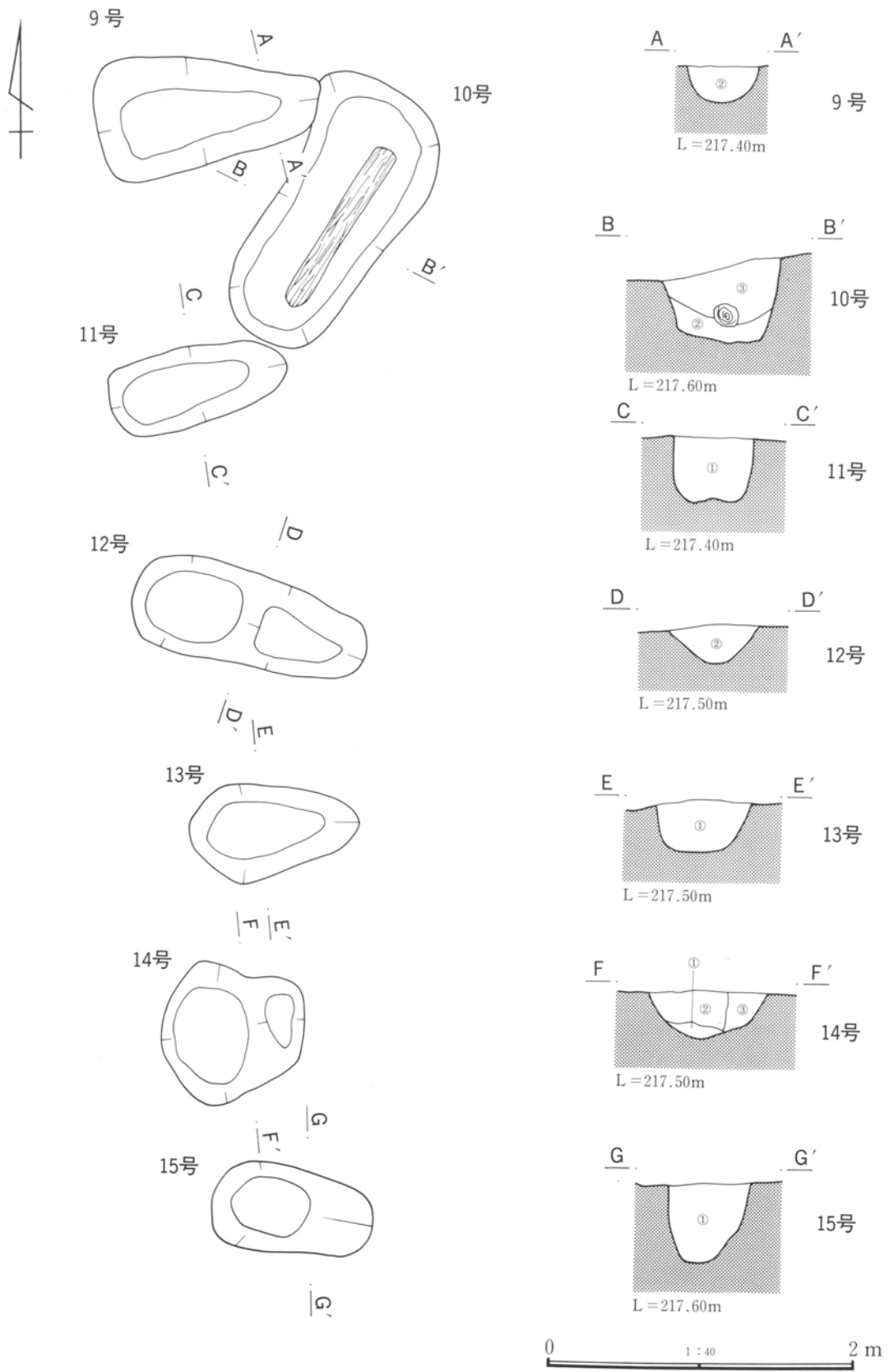


図37 吹屋中原遺跡II区9～15号土坑



写真31 9～11号土坑（西から）



写真32 9～15号土坑（南から）

19号土坑（図34、写真30）

I区北東隅付近にある。長さ2.20m、幅0.90m、深さ0.45mのやや歪んだ長方形の土坑である。内部には獣骨がバラバラの状態ではいていた。

〔II区〕

土坑は53基で全面に分布する。配置には規則性が認められ、地割をある程度反映しているようである。土坑の型も集中する傾向があるが、方向はズレが大きい。

A～D型に当てはまらないものは9～15号の7基である。

9～15号土坑（図37、写真31・32）

II区南西隅付近にある。10号を除いた6基はほぼ南北に並ぶので、一連のものと考えられる。その間隔は心々で測って1.25～1.75mであり、ややばらつきがある。それぞれの形は不整形で、断面形も様々であり、きちんとした形を意識して掘ったものではないらしい。その性格としては、杭列・塀・植木などの可能性が考えられる。10号は長さ1.82m、幅0.78m、深さ0.56mの不整形の土坑で、内部に直径15cm、長さ1.2mの丸太が横になっていた。丸太材はほとんど腐食していなかったため、ごく新しいものであると考えられる。

〔III区〕

III区は発掘直前まで住宅が建っていたため、F P 上面の攪乱が激しかった。特に東半分はF P層のか

なりの部分が削平されており、土坑はほとんどみられなかった。また、南側を中心として現代のゴミ穴が多くみられ、これによっても遺構が大きく破壊されていた。このようななかで、遺構として把握できたのは、土坑48基、溝4本である。

土坑のほとんどは西半分集中する。その形は場所によって傾向がことなるが、中央付近に集中している土坑群は長さが短い割に幅が広いものが多く、しかもD型が多いという特徴がある。

A～D型に当てはまらない土坑は27・28号の2基である。この土坑の付近は攪乱が激しく、とくに28号は全形が不明であるが、いずれも正方形に近い方形で、27号では長さ2.82m、幅2.24mである。深さは両方とも浅く、0.40m程度である。

その他、50号土坑としたものは、建物の基礎によって大部分を破壊され、ごく一部しか残っていなかったものであるが、埋土から完形の須恵器環（図42-4）を出土した。この時代の遺物はこの遺跡ではきわめて珍しく、また、完形であることから、この土坑の時期はその時代にまで遡る可能性があるが、残念ながら土坑の形すらまったく分からず、それ以上のことは不明である。

溝は断面不整形で浅い1・3・4号と、断面が逆台形で深い2号とがあり、性格が異なるものと思われる。

1号溝（図39）

III区東半分ほぼ中央にある。FD-59グリッドから発し、南西に向かって直線的にのびたあとクラン

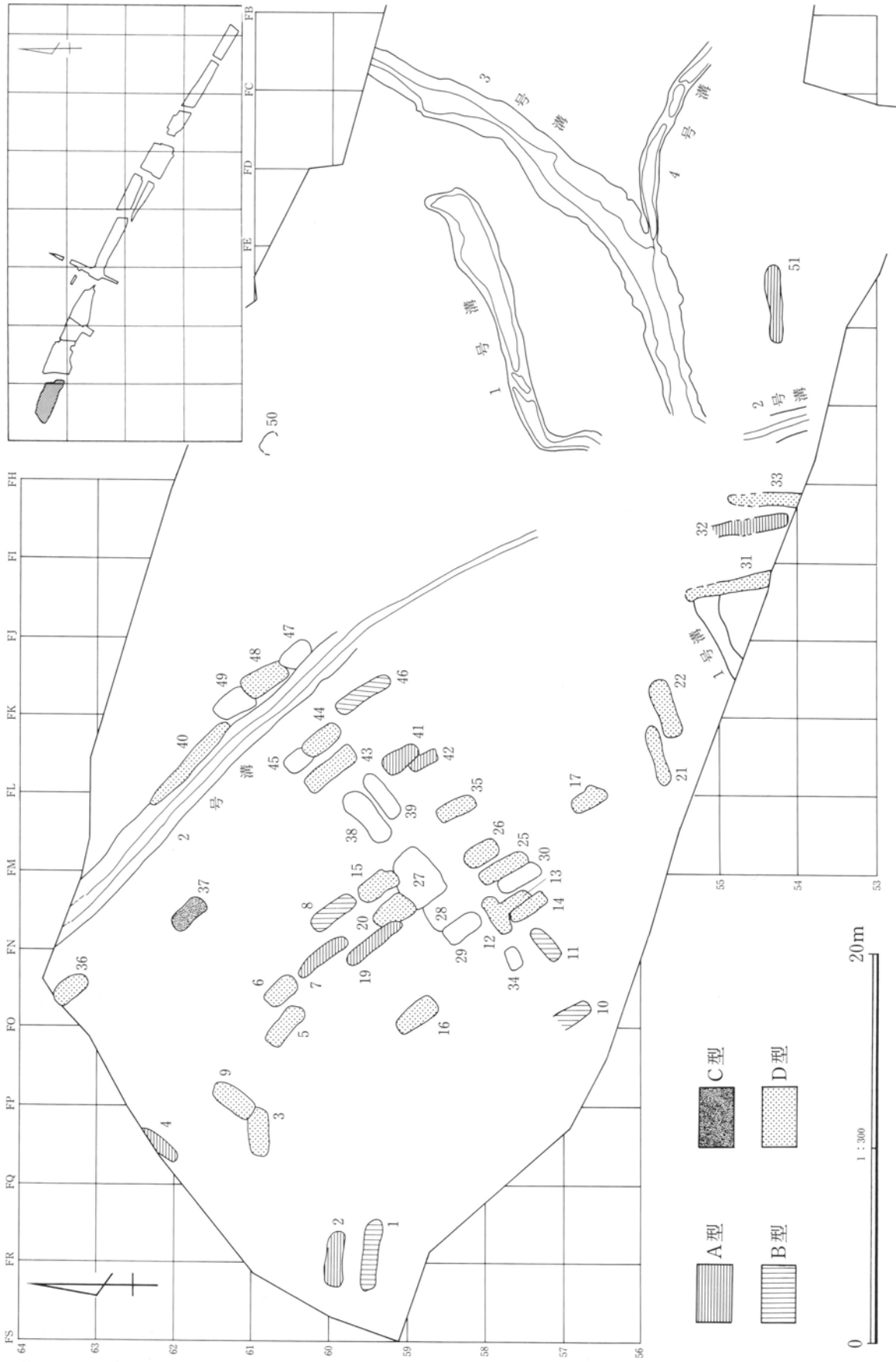


図38 吹屋中原遺跡Ⅲ区F P上面全体図

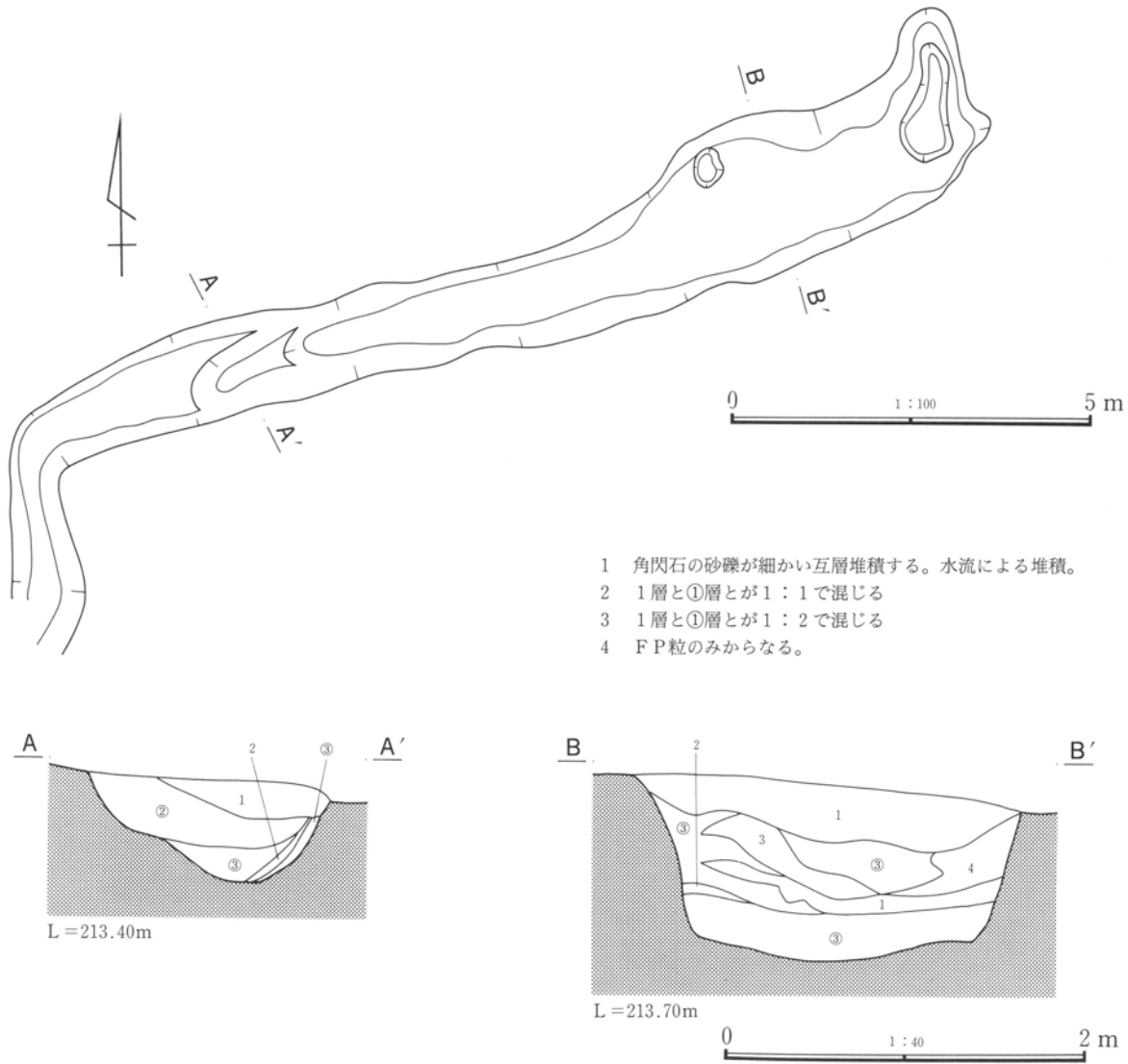


図39 吹屋中原遺跡Ⅲ区1号溝

ク状にまがり、さらに南西へと続くが、この先は攪乱によって破壊され、はっきりしない。31号土坑を切って西側に延びる溝は、その方向と埋土の特徴から、この1号溝の続きであると考えられる。

底面や壁面には凹凸が激しくところもあるが、全体的には直線の部分が多いため、人工の施設であると思われる。埋土中に砂礫がラミナ状に互層堆積する層がみられるため、水が流れていた時期があったと考えられる。

2号溝 (図40、写真33～35)

Ⅲ区中央やや西側を斜めに横断する溝。FJ-60付近で緩やかに折れ曲がる他は、ほぼ直線的である。

ちょうど屈曲点付近から南側が建物の基礎のために破壊されていたが、南端部では続きを調査することができた。Ⅲ区のFP上面は、東から西に向かって標高が低くなっているが、ちょうどこの溝付近ではその傾斜が急になっている。この溝は、その傾斜面を横切る形で設けられており、そのため、南北両端にほとんど標高差がなく、底面の標高で比べると、北端部が211.22mであるのに対して、南端部では211.61mあり、わずか0.4mの差しかない。

断面形状は、断面図A-A'にみるように、上半は緩傾斜、下半は急傾斜となっている部分が多いが、逆台形を呈する部分もある(B-B')。底面はFP層

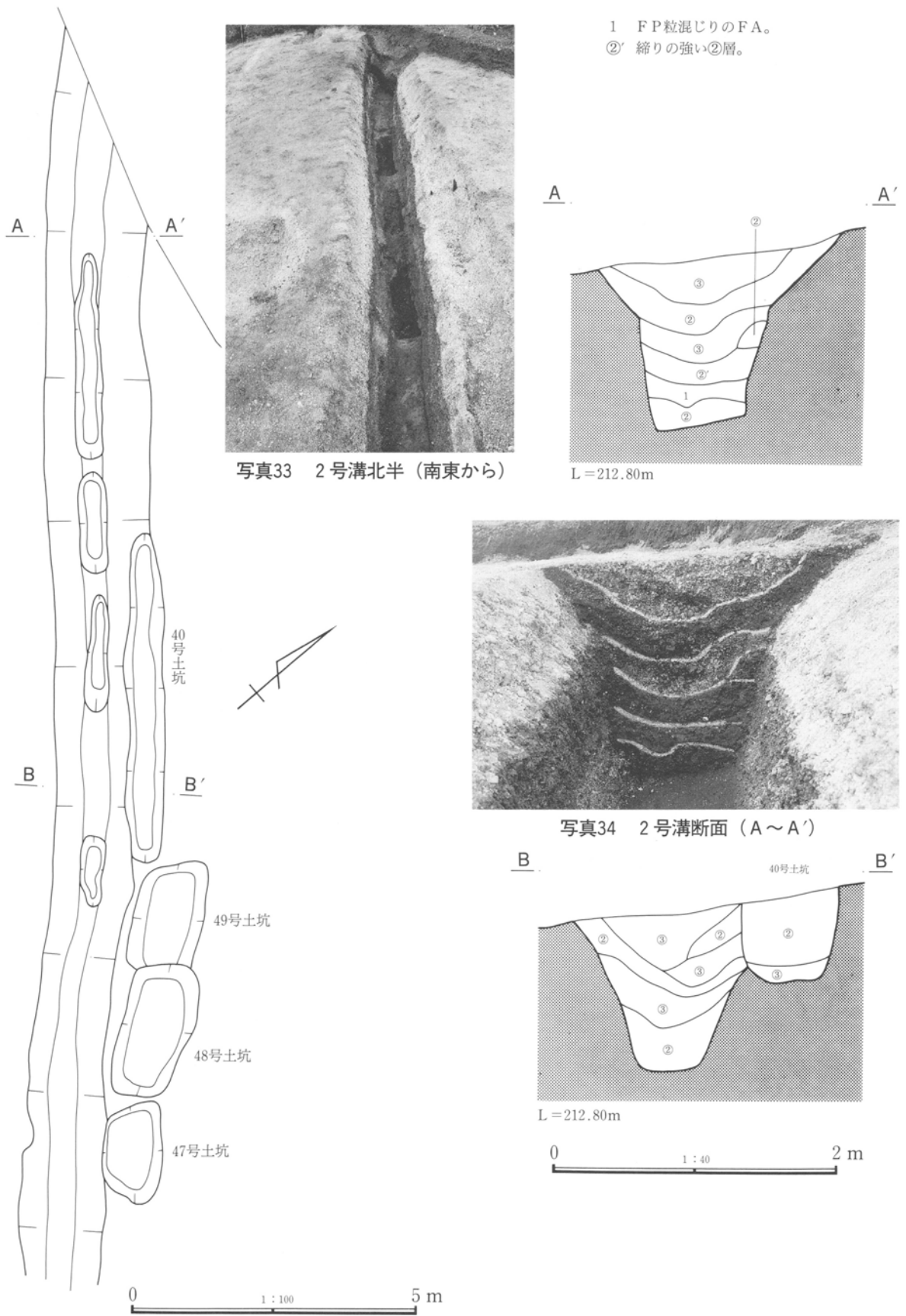


図40 吹屋中原遺跡Ⅲ区2号溝 (北半部)

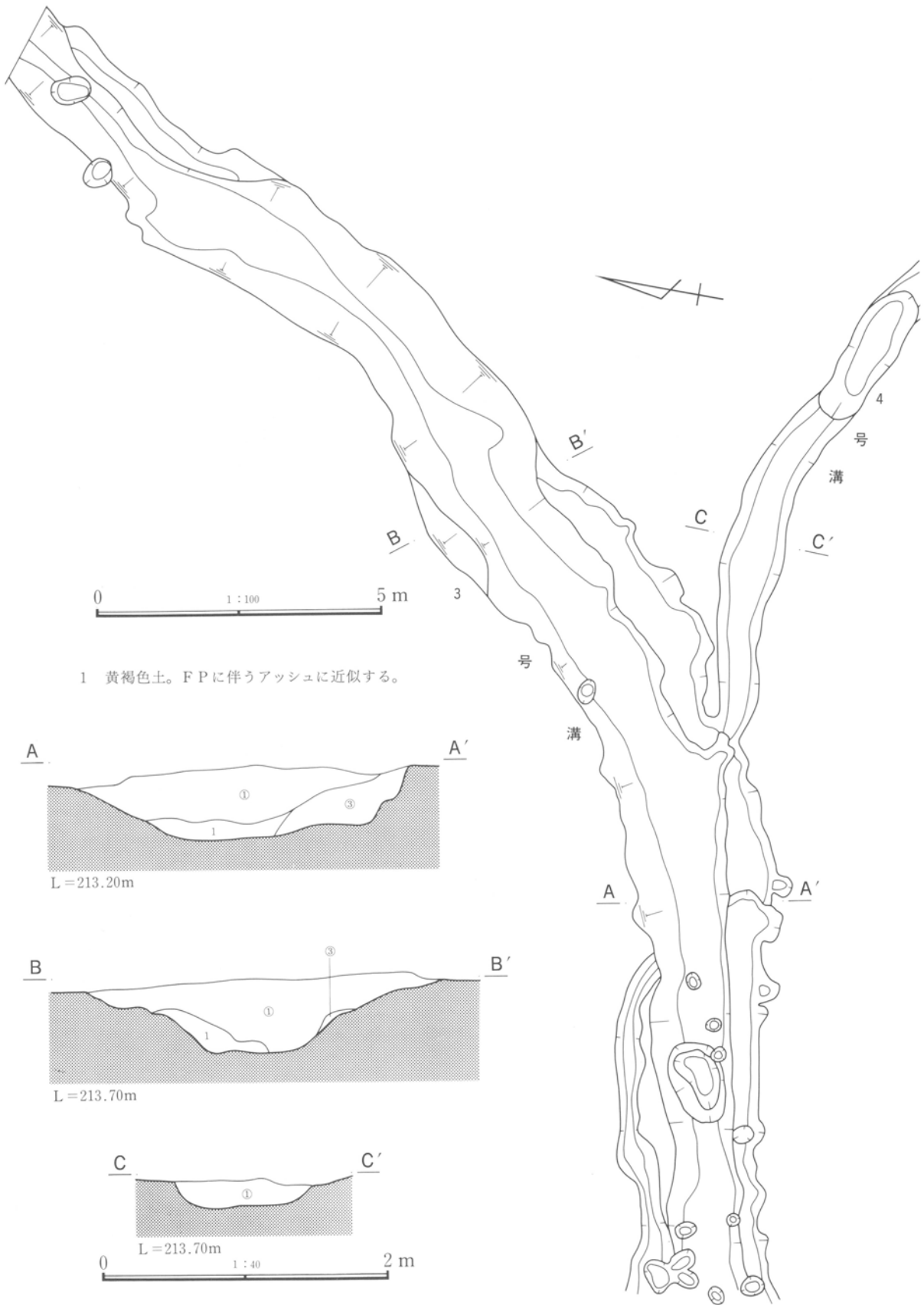


図41 吹屋中原遺跡Ⅲ区3・4号溝



写真35 2号溝全景(南東から)

を突破してIV・V層にまで達し、そこで平坦になっている。その規模は、A-A'断面で測って、上端幅1.75m、底面幅0.60m、深さ1.40mである。

また、底面には何ヶ所か、細い溝状に掘られているところがある。その深さは0.1~0.3mほどである。

3・4号溝(図41)

III区東半部にある。3号は幅1.5~2.5m、深さ約0.5mである。断面形が不整形で、底面も凹凸が激しく、人為的なものとは思えない。底面には部分的に水流によると思われる砂礫層の堆積があり、かつて水が流れていたと思われる。

4号は3号に合流するより細い溝で、幅0.8~1.1m、深さは約0.2mである。顕著な砂礫層はみられな

かったが、様相が3号とほぼ同様であり、やはり水が流れた溝であると思われる。

〔出土した遺物〕

遺物は白井北中道II・吹屋犬子塚両遺跡に比べて多く出土したが、近・現代のものがほとんどであり、近世以前に遡るものはむしろ少なかった(図42)。

4は須恵器坏であり、吹屋中原遺跡III区50号土坑から完形のまま出土した。古代(奈良・平安時代)の遺物としては、今回報告の3遺跡で唯一の出土である。50号土坑は57ページで述べているように、建物の基礎によって大部分を破壊されているため、詳細が不明である。5の徳利も完形のまま出土した。

表9に明らかなように、遺構からの出土がやや多い傾向にあるが、他の2遺跡同様、確実に遺構に伴うものはない。

表7 吹屋中原遺跡F P 上面土坑一覧表(1)

I区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1	C	ED-50	1.18	0.50	0.13	
2	C	ED-50	1.20	0.34	0.07	
3	D'	ED-49	2.30	0.70	0.41	
4	C	EC-50	2.36	0.66	0.42	
5	A	EC-50	1.80	0.70	0.38	
6	B	ED-49	1.96	0.70	0.42	
7	D	EB-49	3.48	0.62	0.42	
8	A	EE-49	2.00	0.58	0.43	
9	D	EE-49	2.38	0.62	0.87	
10	B	EE-48	2.40	0.70	1.12	
11	欠番					
12	D	EF-47	1.68	0.60	0.42	
13	D	EC-48	1.64	0.70	0.84	

14	他	EB-48	1.02	1.00	0.43	円形
15	他	DX-50	(1.82)	1.02	0.56	不整形
16	欠番					
17	B	DW-50	0.92	0.48	1.16	底に穴有
18	B	DW-49	2.18	0.48	0.74	
19	他	DY-49	2.20	0.90	0.45	不整形。獣骨
20	D	DY-49	2.82	0.40	0.34	
21	A	DY-48	2.70	0.62	0.60	底に段有
22	B	DX・DY-48	4.64	0.62	0.72	
23	A'	DY-48	1.14	0.74	0.70	
24	D	EA-48	1.14	0.74	0.70	
25	D	EB-46	2.72	0.59	0.74	
26	D	EB-46	4.62	0.62	0.22	浅い
27	D	EB-48	2.44	0.60	0.37	
28	A	EA-47	2.54	1.00	0.91	上部攪乱

第2節 F P上面の調査

表8 吹屋中原遺跡F P上面土坑一覽表(2)

II区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1	D	ER-59	4.94	1.82	0.51	
2	C	ER-57	1.02	1.00	0.32	
3	A	ER-56	2.02	0.68	0.52	
4	不明	EQ-56	(1.34)	0.80	0.38	
5	D	EQ-56	1.44	0.90	0.66	
6	B	EU-54	3.52	0.91	0.56	
7	D	ET-54	(1.74)	0.58	0.35	
8	D	EU-54	5.20	0.72	0.49	
9	他	EU-53	1.42	0.72	0.22	小さい不整形
10	他	EU-53	1.82	0.78	0.56	丸太材入り
11	他	EU-53	1.14	0.54	0.42	小さい不整形
12	他	EU-52	1.52	0.58	0.26	小さい不整形
13	他	EU-52	1.10	0.64	0.34	小さい不整形
14	他	EU-52	0.94	0.84	0.29	小さい不整形
15	他	EU-51	1.06	0.56	0.50	小さい不整形
16	D	ER・ES-55	8.28	0.74	0.46	
17	B	ES-54	7.98	0.66	0.52	
18	D	EQ-55	6.48	0.60	0.46	
19	A	EP-55	5.94	0.62	0.49	
20	A	EP-54	2.04	0.66	0.52	
21	A	EP-53	1.88	0.60	0.41	
22	不明	EP-53	(1.24)	0.48	0.23	
23	欠番					
24	欠番					
25	D	EQ・ER-51	1.18	0.48	0.27	
26	B	ER-51	3.50	0.82	0.84	
27	B	ER-51	(1.46)	0.74	0.40	
28	欠番					
29	欠番					
30	D	EQ-50	5.84	0.68	0.43	
31	A	EP-51	2.90	0.88	0.68	
32	B	EP-49	3.48	0.62	0.48	
33	A	EO-49	(2.24)	0.63	0.56	
34	欠番					
35	D	EQ-49	1.42	0.78	0.86	
36	A	EL-56	(5.21)	0.46	0.56	
37	A	EI-55	3.28	0.68	0.69	
38	A	EL-53	2.61	0.70	0.57	
39	D	EI-52	1.72	0.84	0.51	
40	A	EM-53	1.78	0.66	0.59	
41	D	EM-52	2.20	0.58	0.70	
42	D	EM-52	2.52	0.74	0.44	
43	D	EL-52	3.36	0.94	0.70	
44	A	EJ-52	5.60	0.54	0.49	
45	A	EJ-52	6.54	0.60	0.28	
46	A	EI-51	(2.50)	0.80	0.48	
47	A	EI-50	(2.58)	0.84	0.43	
48	D	EL-51	2.88	0.72	0.44	
49	A	EL-51	2.24	0.70	0.56	
50	A	EL-50	3.12	0.68	0.39	
51	D	EL-50	2.92	0.88	0.64	
52	A	EL-50	2.81	0.68	0.66	
53	A	EM-49	1.92	0.59	0.36	
54	A	EL-49	(3.12)	0.72	0.44	

55	A	EM-48	3.00	0.66	0.66	
56	D	EM-48	2.88	0.70	0.74	
57	不明	EL・EM-49	1.32	0.64	0.48	
58	A	EL・EM-48	(1.02)	0.80	0.79	

III区

番号	型	位置	規模(m)			備考
			長さ	幅	深さ	
1	B	FQ・FR-60	3.56	0.78	0.88	
2	A	FQ・FR-60	2.74	0.89	0.45	
3	D	FP-61	2.42	0.98	1.03	
4	A	FP-63	2.40	0.68	0.45	
5	D	FO-61	2.42	0.94	0.61	
6	D	FN-61	1.82	1.06	0.92	
7	A	FN-61	3.04	0.68	0.28	
8	B	FM-61	2.48	0.81	0.35	
9	D	FO-62	2.40	1.02	1.01	
10	B	FN-57	1.90	0.84	0.56	
11	B	FM-58	2.04	0.66	0.27	
12	D	FM-58	2.00	0.72	0.46	
13	D	FM-58	(15.2)	0.52	0.41	
14	D	FM-58	2.16	0.74	0.42	
15	D	FM-60	2.12	1.02	0.60	
16	D	FN-59	2.38	1.14	0.41	
17	D	FL-57	1.78	0.90	0.49	
18	欠番					
19	A	FM・FN-60	3.40	0.72	0.29	
20	D	FM-60	(1.92)	1.20	0.41	幅広い
21	D	FK-56	3.12	0.68	0.43	
23	欠番					
24	欠番					
25	D	FL・FM-58	2.62	0.84	0.32	
26	D	FL-59	1.89	0.90	0.54	
27	D	FM-59	2.82	2.24	0.39	正方形に近い
28	他	FM-59	—	(1.54)	0.43	正方形に近い
29	不明	FM-59	1.98	1.02	0.48	
30	不明	FM-58	2.34	0.80	0.34	
31	D	FI-55	(4.32)	0.70	0.62	
32	A	FH-55	(3.92)	0.72	0.58	
33	D	FH-55	(3.60)	0.70	0.53	
34	不明	FN-58	1.13	0.68	0.28	
35	D	FL-59	2.10	0.84	0.51	
36	D	FN-64	1.89	0.92	0.46	
37	C	FM-62	1.98	0.88	0.34	
38	不明	FL-60	3.08	1.00	0.67	
39	不明	FL-60	2.70	0.92	0.70	
40	D	FK-62	5.72	0.68	0.66	
41	A	FK-60	1.92	0.98	0.40	
42	A	FK-60	1.54	(0.69)	0.51	
43	D	FK-61	2.92	0.92	0.63	
44	D	FK-61	(2.10)	0.94	0.51	
45	不明	FK-61	(1.30)	0.90	0.30	
46	B	FJ-60	3.14	0.72	0.87	
47	不明	FJ-61	1.72	1.02	0.40	
48	D	FJ-61	2.32	1.22	0.64	
49	不明	FJ-62	1.82	1.22	0.55	
50	不明	FG-61	—	—	0.56	須恵坏出土
51	A	FE-55	4.06	0.62	0.46	

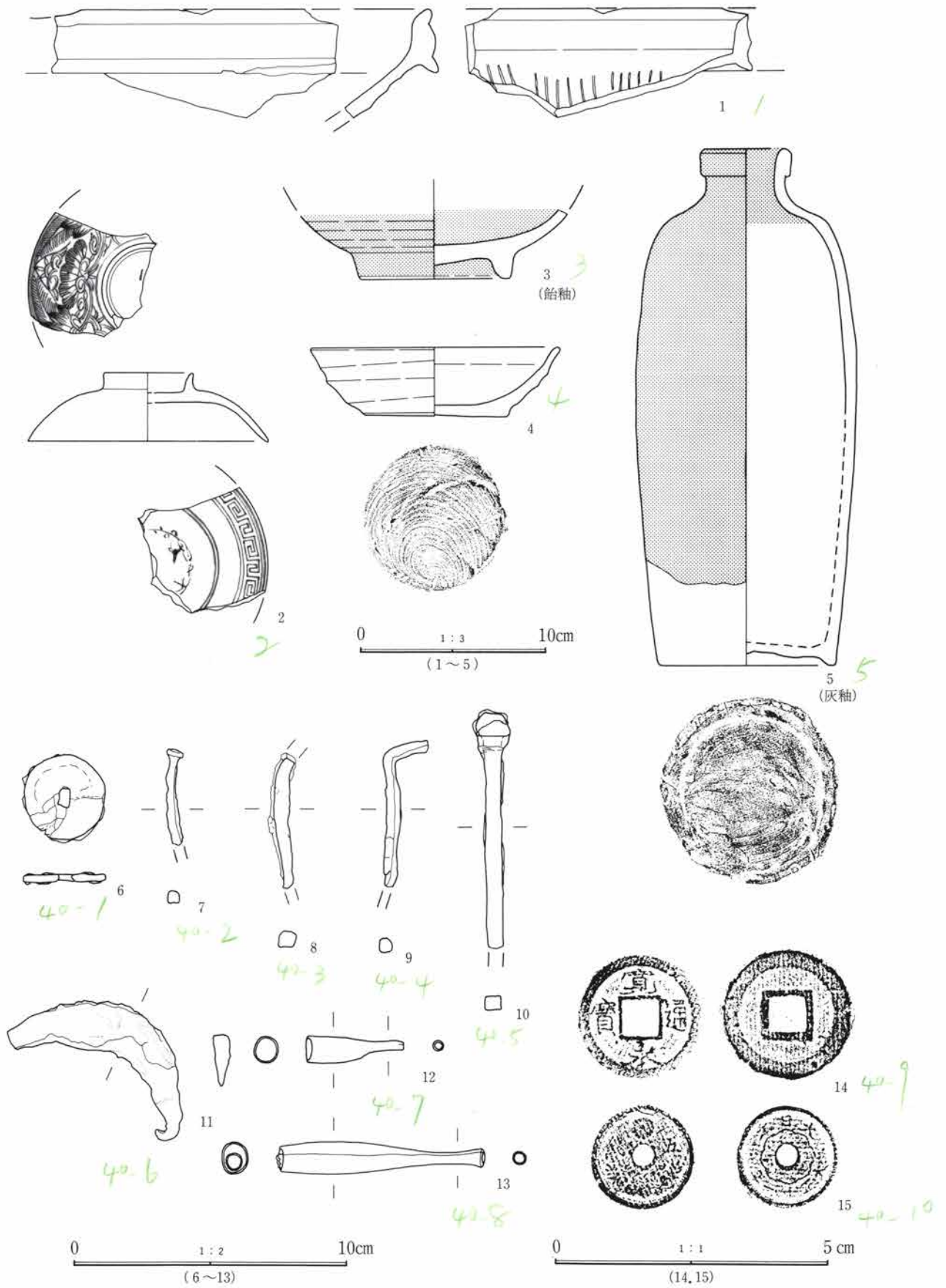


図42 吹屋中原遺跡 F P 上面出土遺物

表9 吹屋中原遺跡F P上面出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
1 237-1	播鉢	II区 1号土坑	口縁部破片			片口部破片。すり目6本1単位。 (信楽系陶器。)
2 237-2	染付碗蓋	I区 4号土坑	1/3	器高 2.5 口径(8.7) つまみ径(3.2)		端反碗蓋。内外面共に素描きによる文様。 (肥前磁器。)
3 237-3	胎釉碗	III区 3号土坑	底部破片	器高(2.3) 底径 5.5		高台端部を除いて胎釉を施す。 (瀬戸・美濃陶器。)
4 237-4	須恵器坏	III区 50号土坑	口縁 1/4欠	器高 3.7 口径13.3 底径 7.5	胎土小礫、砂粒含む 焼成やや不良。 色調 灰白	右回転糸切り無調整。
5 237-5	灰釉德利	III区表土	口縁部 一部欠	器高18.7 口径 3.0 底径 6.3 最大径 8.0		外面灰釉。底部指痕。いわゆる高田德利。美濃窯か。
6 237-6	鉄製円盤	I区 25号土坑		径 3.0 厚さ 0.3		貨幣状。用途不明。
7 237-7	鉄釘	I区表土		残存長 3.5 太さ 0.45		
8 237-8	鉄釘	I区表土		残存長 5.0 太さ 0.65		
9 237-9	鉄釘	III区 1号溝		残存長 5.4 太さ 0.45		
10 237-10	鉄釘	III区 3号土坑		残存長 8.6 太さ 0.6		
11 237-11	鈎状鉄製品	III区 1号溝		残存長 7.2 幅 1.8 厚さ 0.6		
12 237-12	キセル	III区 1号溝		長さ 3.5 最大径 0.9		
13 237-13	キセル	III区 1号溝		長さ 7.5 最大径1.15		内部に羅字が残る。
14 237-14	銅銭	III区 表土		径 2.3		「寛永通宝」
15 237-15	銅銭	III区 表土		径 1.9		「大正11年五銭銅貨」

第3節 F P下面の調査

1 遺構の概要と調査の方法

F P下面の調査は、特殊な遺構が多く、また、調査方法によって得られる情報の質・量に顕著な差が出るのが予想されたため、試行錯誤の連続となった。以下、個別の遺構の解説にはいる前に、調査の概要を調査方法を中心にして述べておくことにする。

F P下面の調査にあたって最も注意したのは、F P直下の面をなるべく傷つけないで掘り出すことである。この面はいうまでもなく二ツ岳が噴火した、ある特定の「日」の地面であり、どのような情報がそこに残されているのか、予想がつかないからである。そのため、どんなに小さな痕跡も消してしまうことのないよう、地面を全く削らずに掘り広げることには注意を注いだ。馬蹄痕や植物痕など、当時の地面に残る微細な痕跡は、このようにして発見したものである。具体的には、

- ① バックホーを用いてF Pを厚さ15～20cm位まで取り除く。
- ② ジョレンを用いて慎重に掘り下げ、最下層のF P層（11ページ図6・7のI層）のみとする。
- ③ 主に手ボウキを用いて残ったF P粒を掃きとっていく。

という、三段階の作業を行った。③のように、手ボウキでF P粒を掃きとることが可能であったのは、F P層の最下層が細粒の軽石層であったからである。この細粒軽石層の存在がクッション的な役割を果たし、植物痕のような微細な痕跡も残ることができたのだと考えられる。

もちろん、黒井峯遺跡などで発見されたように、F P層中に柵列などの痕跡が残っていることも考えられたので、調査当初から2年目にかけて、F P上面からのトレンチ調査を実施したり、F P層の途中で掘り広げてみるという作業を行ってみた。しかし、そのような痕跡は一切発見できなかった。そのため、

その後のF P層中の痕跡確認は、バックホーによる掘り下げの際に注意したり、遺跡の断面などで行うにとどめた。結局最後まで、そのような痕跡は発見されなかった。

また、当時の地表面がどのように利用されていたのか、それを考える上で重要な情報がF P直下面からF A上面までのごく薄い土壌（IV層）の中に残されていることが予想されたため、これを薄くスライスするようにして注意深く掘り下げ、調査した。もちろん、畦状遺構や畠などの遺構や、必要と思われる場所にはセクションベルトを残して掘り下げた。その結果、畦状遺構の盛り土の中には1～3層の炭化物の層、あるいは焼土の層があることがわかり（図43左端）、畦状遺構の作られる過程や土地利用の変遷を考える資料を得ることができた。

以上の作業により発見できた主な遺構は、図43の通りである。これら遺構の概要については、すでに20・21ページで述べたので、ここではごく簡単に触れることにする。

F P下面の精査では、馬蹄痕、畦状遺構、踏み分け道跡、植物の痕跡（植物痕、立木痕、株痕）などが調査区全域からみつかったほか、白井北中道II遺跡から2面、吹屋中原遺跡から1面（陸苗代か）の畠跡、吹屋犬子塚遺跡から1面の水田跡、吹屋中原遺跡で祭祀跡などが発見された。また、スライス作業によって、F P下面からは見られなかった各種の痕跡が見つかった。

馬蹄痕（本節2、68ページ～）は直径10～15cmくらいのごく浅い凹みであり、遺跡全域に無数に分布する。この蹄痕には、F P下面に見えるもののほかに、下層のF A層中にめり込んだと思われるものがある（本節8、229ページ～）ことが、スライス作業とF A上面の精査の結果、判明した。

畦状遺構（本節3、72ページ～）は幅1～3m、高さ5～10cm程度の細長く低い土盛りで、これも遺跡全域に縦横にのびているのが確認された。

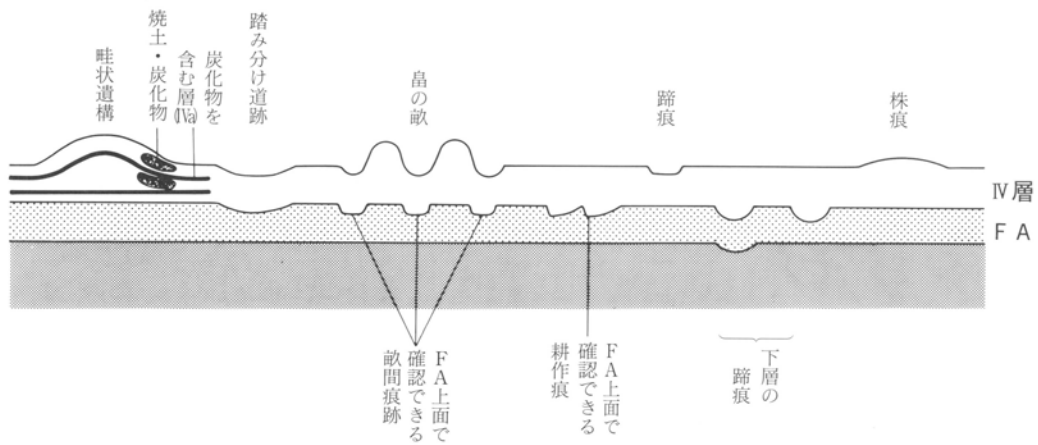


図43 F P下面関係遺構概念図

踏み分け道跡（本節3、72ページ～）は、人、あるいは馬が歩くことによって作られたと思われる、幅約30cmのごく狭い道の跡である。

畠や水田の跡（本節4、194ページ～）は白井北中道II遺跡II区・III区、吹屋中原遺跡I区で畠が各1面の計3面、吹屋犬子塚と中原とを分ける谷部分では荒起こし直後と思われる水田跡が1面見つかった。これらのうち、中原遺跡の畠跡は幅の広い畝をもつもので、陸苗代の可能性が指摘されている。畠の畝間は、FA層上面の精査によって、FAをかなり削り込んでいることが判明した。また、FA上面に耕作痕と思われるものが見られることがあり、F P下面に何らの痕跡が見られなくとも、耕作行為が行われている場合があることが判明した。

F P下面には、当時生えていた植物の痕跡と思われるものが見られる（本節6、224ページ～）。「植物痕」としたものは、地表面に残る倒れた植物遺体（ススキやイネ科の植物が主）とその痕跡、「立木痕」は樹木の根の跡、「株痕」とはススキや灌木の株の跡と考えられるわずかな丸い高まりである。

その他の遺構としては、中原III区で祭祀跡と思われる土器、白玉、鉄鏃、鉄滓などの集積が見つっ

ている（本節5、219ページ～）。

2 馬蹄痕

F P下の古墳時代の地表面に、馬の蹄の跡、つまり馬蹄痕が残っていることが発見されたのは、本遺跡の調査の前年、平成2年のことであり、場所は白井北中道遺跡VI区であった。この白井北中道遺跡VI区とは、本書で扱う白井北中道II遺跡のI区の東に隣接する遺跡である。

馬蹄痕の発見の端緒は、F P層を取り除いていったときに、その直下の地表面に丸い凹みが無数にあることに気づいたことである。それは、F Pを水平に取り除く作業を行った時に、F P粒のつまった丸い凹みとして認識されるものであり(写真36)、さらにこのF P粒取り除くと、直径約10cm、深さ0.5~2cmほどの底の平らな凹みが現れる(写真38・39)。このような凹みが、F P下面には無数に分布しているのである(写真40)。それらは、どれも形状・大きさにあまり差がなく、しかも、底は他の地表面に比べ明らかに堅いことから、何か重量のあるものが地面を押圧した痕跡であると思われ、おそらく動物の足跡であると考えられた。そして足跡だとすれば、その形態から蹄によるものであることは明らかで、しかもこのような奇蹄目の大型動物は日本には馬しかいないので、おそらく馬の蹄跡であろうと推定された。その後大江正直氏、西中川駿氏、宮崎重雄氏などの動物学の専門研究者に見ていただいた結果、それらが馬の蹄の特徴をよく留めていることが判明し、この推定に間違いがないことが確実となった。

馬の蹄の形状は図44の通りである。右が足を横から見たところ、左が蹄を裏からみたところで、上がつま先である。ここで注意すべき点は、前蹄と後蹄とでは形状が異なることと、蹄の後ろ側に三角形の切れ込み(これを蹄叉という)があることである。この蹄の形態上の特徴が、F P下面から発見された馬蹄痕にもよく残っている。写真では撮影の角度のため形状がややわかりにくい、写真38が前蹄のもの、写真39が後蹄のものである。両写真の蹄痕とも奥の方が明瞭で手前がやや不明瞭に見えるのは、奥

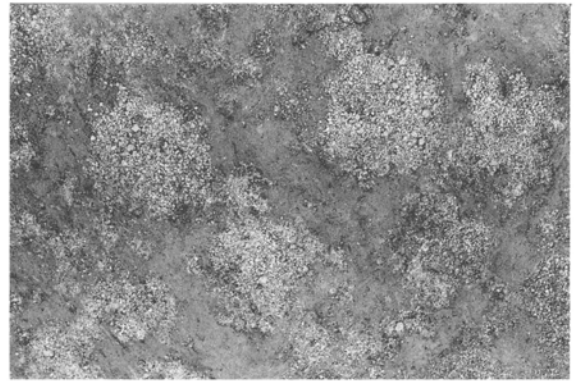


写真36 馬蹄痕の凹み (F P粒がつまっている)



写真37 馬蹄痕調査作業 (中原遺跡II区)



写真38 前蹄跡 (北中道II・II区144号蹄跡)



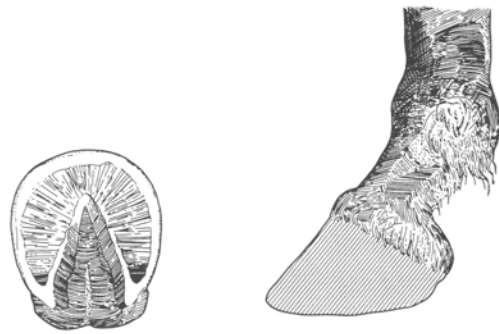
写真39 後蹄跡 (北中道II・II区142号蹄跡)

がつま先で手前が蹄叉に相当するからである。残存度の違いにより、これほど特徴がはっきりしないものも多いので、調査担当者が「馬蹄痕」と判断したものの中に馬蹄痕ではないものが含まれている可能性は否定できないが、大部分の「馬蹄痕」はよく似た形状を示しており、それらが馬蹄痕であることは間違いないものと思われる。

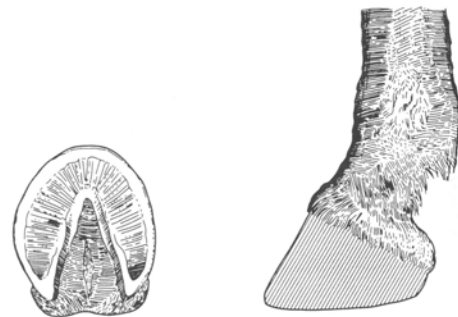
馬蹄痕はF P下面の全域に無数に見られるため、F P下面の調査では、その検出作業に主眼が置かれることになった。その調査方法は、以下の通りである。まずバックホーを用い、F Pを厚さ15~20cmだけ残して取り除く。その後F Pをジョレンで慎重に掘り下げ、最下層だけを残す状態にする。さらにF Pの最下層を移植ゴテ、竹べら、手ボウキを用いて丁寧に取り除き、F P直下の地表面を出していく(写真37)。最後の地表面を出す作業は、主に手ボウキを用いることが重要である。移植ゴテはあくまでも掃き出された軽石を集めることに用いるだけであり、竹べらは地表面にめり込んだ軽石を取り除くことのみ使用する。このようにしないと地表面を削ってしまうことになり、微細な痕跡がなくなってしまうのである。この地域のF Pの最下層は主に粒の小さな軽石からなっており、手ボウキで容易に取り除くことができる。このように、

F Pの最下層が粒の細かい軽石であることが、蹄痕のようなわずかな凹凸を保存する上で大いに役立ったものと思われる。

そしてF P下面が完全に現れたら、その表面に残る蹄痕を探し、ラッカーズプレーでマークする。マークをしないでおくと、蹄痕の凹みは数日間で不明瞭になってしまうのである。このことは、これらの蹄痕が残された期間が、F P降下



前蹄



後蹄

図44 馬蹄の形

A. Goubaux and G. Barrier
"The Exterior of the Horse" (1892) より



写真40 馬蹄痕集中部(白井北中道II遺跡II区)

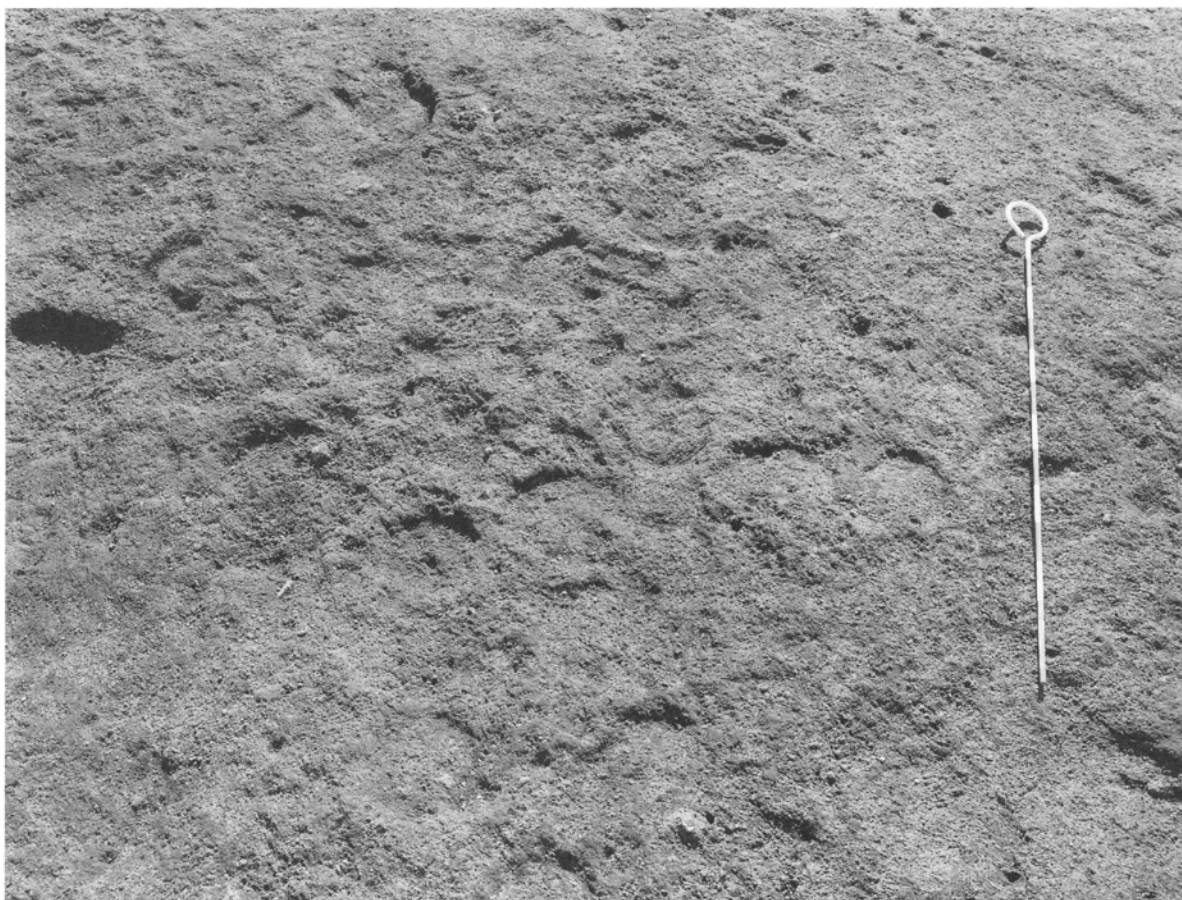


写真41 馬蹄痕集中部（吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区・CS-35グリッド付近 北から）

前の何日間であったのかを考える材料となるであろう。

蹄痕のすべてをマークし、畦状遺構などの遺構を検出し終わったら平面図を作成するが、その前に、状態のよい蹄痕を選び、大きさ、方向、前蹄・後蹄の別などについて記録を取る。この鑑定・測定は宮崎重雄氏に依頼して行っていただいた。記録を取った蹄痕には、それを特定する番号をつけた。付図にみられる番号はこの番号であり、それは第4章第8節（358ページ以下）の表の番号と一致している。

この馬蹄痕は、FP下面の全域に無数に見られる。その集中度には場所によって差が見られるが、周囲の地形や遺構に特別な差異は見られないため、それが有意な差であるとは思われない。おそらく土の軟らかさの違いなど、偶然の結果によって蹄痕が集中する部分ができたとと思われる。集中する部分で

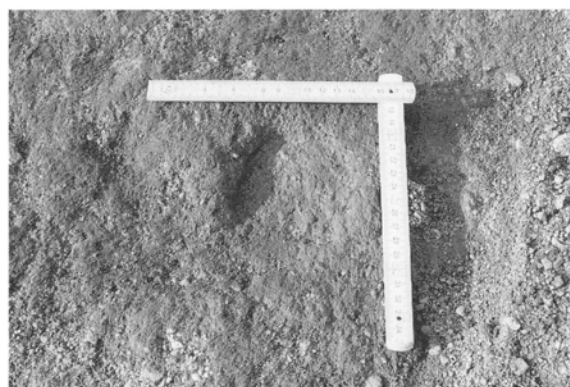


写真42 子馬の蹄痕（北中道Ⅱ・Ⅱ区153号蹄痕）

は、写真41に見られるように、一面に蹄痕が残っている状態が観察できる。

それぞれの蹄痕の方向は全く不規則であり、一定の方向に向かって歩いているような場所はない。このことから、馬は自由に歩き回っている状態であったと考えられる。また、1頭の馬が歩いたこと

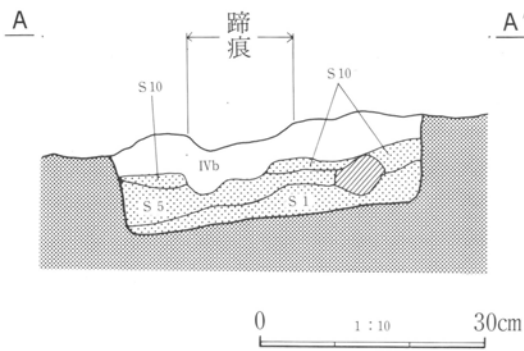


図45 蹄痕の断面 (吹屋中原遺跡Ⅲ区131号)

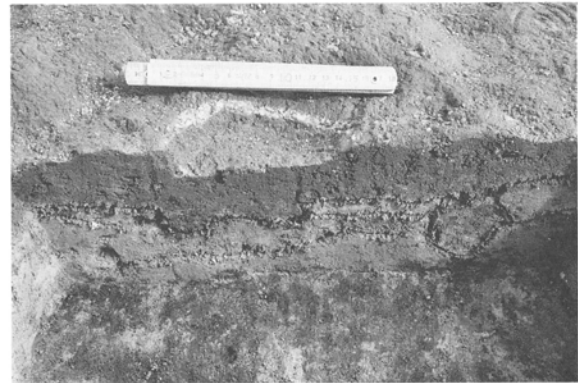


写真43 蹄痕の断面 (吹屋中原遺跡Ⅲ区131号)

によって残される蹄痕の列を把握することもできない。これは、馬の歩幅が大きく、次の蹄痕がどこについているかを推定しにくいこと、地表面の柔らかさ具合によって馬蹄痕の残りに大きな差があり、すべての蹄痕が残るわけではないことによるものと思われる。列をなす蹄痕が全く認識できなかったことから考えれば、跡が残る場合の方が少なかったのかもしれない。この点、水田などに残る足跡・蹄痕とは事情が大きく異なる。

以上のように、ある1頭の馬が残した蹄痕を特定することができず、しかも、観察できる蹄痕がどのくらいの時間幅の中でつけられたものであるかも不明であるので、ここに何頭の馬が存在したのかという問題については、蹄痕の分析のみからは答えを得ることはできない。

蹄痕の幅は、前蹄・後蹄とも9～11cm位のものが多いが、ごくまれに7cm前後の小さなものがみられることがある(写真42)。これはおそらく子馬のものであると思われる、ここに放牧されていた馬が親馬だけではないことが判明する。蹄の大きさの傾向やそれから復元できる馬の大きさなどの詳細については、第4章第8節(宮崎重雄「白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の馬蹄跡」)を参照していただきたい。

蹄痕の断面は図45・写真43の通りである。229ページ以下で述べるように、本遺跡ではさらに下層にも馬蹄痕が存在しているが、それとの違いを明確にす

るため、F P下面の馬蹄痕についても断面調査を行ったものである。この図にあげた、中原Ⅲ区131号蹄痕では、F P直下面における蹄痕の凹みは、その下層に堆積するF A層の上部にまで影響を与えているが、影響はそこまで留まっている。このように、F P下面の蹄痕はF Aの上面を凹ませることはあるが、それ以下にまでは影響が及ぶことはない。この点、229ページ以下に取り上げる「下層の蹄痕」とは大きく異なっている。

最後に、蹄痕が残った要因について述べておかなければならない。

このように広い範囲に蹄痕が残されるのは、ある限定された条件下でないと無理であると考えられる。草が広がっていればその根などに邪魔されて蹄痕はつかないし、地面が固ければやはり蹄痕は残り得ないからである。また、地面が柔らかい場合でも、サラサラに乾燥しては、蹄痕はきれいには残らないであろう。また逆に地面がぬかるむほどであれば、蹄は地面にかなりめり込んでいると考えられる。実際にそのような蹄痕が下層から発見されている。以上のようなことから考えると、F Pが降下する直前の地面はほぼ裸地に近い状態(ススキのような植物が生えていたことは間違いはないが)で、適度な湿り気と柔らかさをもっていたということができる。蹄痕はそのような限られた条件下で残ったのである。

3 畦状遺構と踏み分け道跡

(1) 概要

本書で「畦状遺構」・「踏み分け道跡」と呼ぶ遺構は遺跡全域からみつまっている。

畦状遺構とは、本節1（66ページ）で前述したように、幅約1～3mの細長い「畦状」の土の高まりである。高さは約5～10cmとごくわずかであるため、断面図のみではその高まりが分からないものも多いが、帯状に高まりがみられるため、遺構として把握することができる。この畦状遺構は、一部に湾曲しているものもあるが、大部分のものは直線的に延び、遺跡全域はそれらによっていくつもの区画に分けられたようになっている。走行方向は、付図1にみるように、東西南北を意識して設定されているようにみえるものが多いが、かなりばらつきは大きく、また、その配置や相互の接続はきわめて不規則であり、畦状遺構に囲まれた区画は不整形となっている。このため、畦状遺構＝区画施設と単純に決めつけることはできず、その性格の決定には慎重な検討が必要である。本書がこの遺構を単に「畦」とは呼ばず、「畦状遺構」としたのはそのためである。

畦状遺構の断面には、炭化物を多く含む層（＝IVa層）が複数みられることが多いほか、焼土や炭化物が集中してみられる場合もある。IVa層は畦状遺構以外の場所では、FP直下面に1層だけみられるのが普通である。そのIVa層が畦状遺構では複数みられることは、畦状遺構の形成過程、本遺跡の構造を知る上で重要な事実である。

また、畦状遺構とそれ以外の部分とのFAの残存度の違いも注目される。両者のFAの残り具合を比較すると、畦状遺構の部分ではよく残っているのに対し、それ以外の部分ではFAの上層、特にS11・S10がなくなっていることが多い。このことは、畦状遺構よりもそれ以外の部分の方が、より多く攪乱を受ける状況にあったことを示しており、FP下面の土地利用の状況を反映していると思われる。

なお、畦状遺構の盛り土の仕方については、断面調査の際その把握に努めたが、問題となる土層（IVb層やIVc層）がきわめて薄いため、明確な盛り土を把握することはほとんどできなかった。

踏み分け道跡は幅30cm前後のものである。表面が浅くくぼみ、しかも固くしまっているため（本節7「硬度測定結果」参照）、道の跡と判断できる。ただし、この道を歩いたのは人間に限らない。白井北中道II遺跡III区3号道跡下層（FA上面）確認の馬蹄痕や、吹屋中原遺跡III区6号道跡の表面に残るおびただしい馬蹄痕からも分かるように、馬もこの道を利用して歩いていることは確実である。

土層

土層名については以下のように統一し、特別な場合は、そのつど注記した。

IV層 FAが土壌化したものである。炭化物やFA粒の含有の多少により、次の4層に分けた。

IVa層 黒褐色土。IVb層に炭化物が多く混じったもの。FA粒は少ない。層厚は薄く、厚い場合でも1cm前後であるのが普通。FP直下の地表面にはごく薄いIVa層が広範に存在するが、畦状遺構などではその下層にさらに1～2層のIVa層が存在する。そのため、それらを区別する必要が生じるが、表面にあるものをIVaとし、以下原則として上からIVa'、IVa''と名付ける。

IVb層 暗灰黄色土。炭化物、FA粒（主にS10・S11）を含む。FP下面の土壌ではこの層が主体をなす。同様な土層が複数存在する場合の区別は、原則として上からIVb、IVb'、IVb''とする。

IVc層 黄褐色土。FAを多く含む。炭化物は少ない。複数ある場合の区別はIVb層と同様。

IVd層 黄褐色土。FAが攪乱を受けた層であり、夾雑物は少ない。

FAは第2章第3節（13ページ）で述べたように、S1、S2……と呼び分ける。それぞれの層の特徴などは、第2章第3節参照。

(2) 白井北中道II遺跡

〔I区〕

I区の東側には小さな段差が南北方向に走っている。このためこの区の地形は、西半分は標高約204mでほぼ平坦であるが、76~77ライン付近を境にして東へ向かって急激に下がり、東端付近でまた平坦となっている。北東隅の標高は200.55mであるので、段差の比高は約3.5mである。

畦状遺構は6~14号まで9本みられる。10~12号の3本は東側段差の傾斜面の裾付近に平行して設けられており、特別な目的をもったものと思われる。9号はL字形に曲がって8号・10号に接続し、ごく小さな区画を作りだしている。13・14号の2本は6号にほぼ平行して走るもので、ほぼ同規模である。2本平行していることと、他の畦状遺構と比べて低

く幅が狭いことから、当初畝の畝のようなものとも思われたが、この2本しかみられないこともあって畝跡と断定することはできず、畦状遺構と同様のものと判断した。

なお、この区では踏み分け道跡はみつかっていない。

6号畦状遺構 (図47~49・51、写真45~48)

I区西側にある。南半部はほぼ直線で方向はN-5°-Eであるが、7号畦状遺構との接続部付近から北は、西へ向かって大きく弧を描いている。このため、南半部と北半部とは同時に作られたものではない可能性もある。幅はR Jラインで測って2.5m、C-C'セクションライン (図51) では1.4mである。高さは5~10cmで、盛り上がりは比較的是っきりしている。

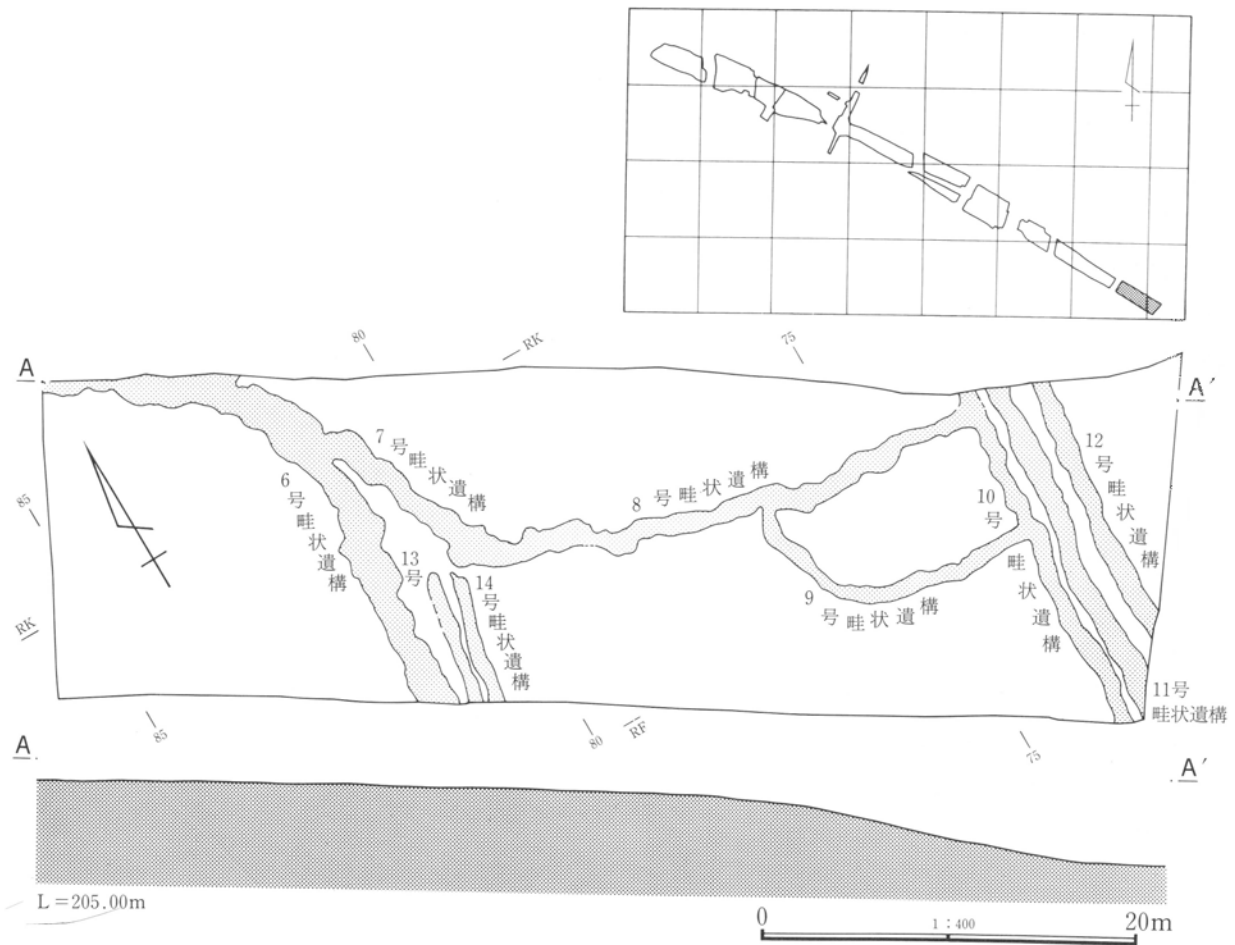


図46 白井北中道II遺跡I区F P下面全体図

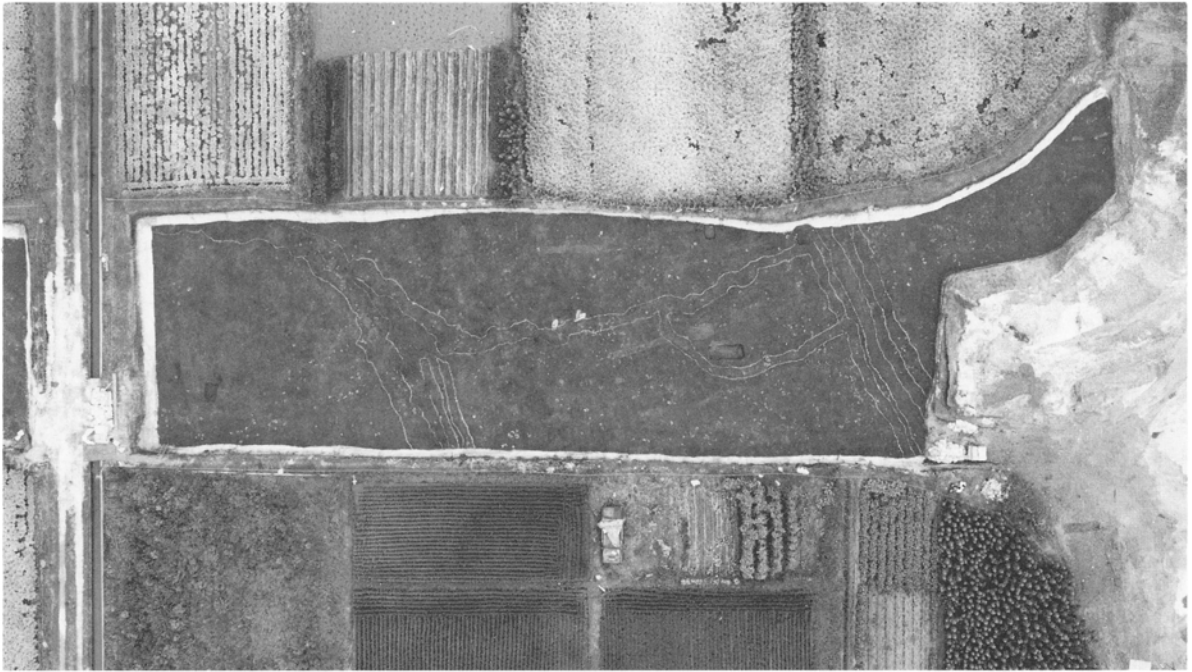


写真44 白井北中道II遺跡I区FP下面全景



写真45 6号畦状遺構(北西から)



写真46 6号畦状遺構中の炭化物集中部No.10

畦状遺構中には炭化物の集中する部分がみられる(図47)。写真46は北端付近の炭化物集中部である。断面をみると、それら炭化物を多く含む層(IVa層)は遺構中になかなか分布しており、B1~B3セクションでみるように2層ある部分も多い。このIVa層は、A~A'セクションではFP直下面とFA直上面に存在するほか、その中間にも間層をはさんで1層あるので、本来少なくとも3層あった可能性が高い。

盛り土の作り方については、南半部のC~C'・D~D'セクションでは観察できなかったが、北端部のA~A'セクションでは比較的明瞭に観察できた。そ

れによると、畦状遺構のIVb層は人為的な盛り上げの可能性が強いと判断できる。その下面にあるIVa'層のレベルをみると、畦状遺構以外の部分の地表面とほぼ同じ高さであるため、このIVa'層の上面がある時期の地表面であり、そこにIVb層が盛り上げられたと考えられる。表面のIVa層はその後に形成されたものであろう。

7号畦状遺構(図49~51、写真49)

I区中央やや東にあり、6号と8号をほぼ直線的につないでいる。方向はN-20°-Wである。幅は1~1.6m、高さは5cm前後で低い。

縦断面(E1~E4)をみると、IVa層はFP直下



図47 白井北中道II遺跡I区6号蛙状遺構北半部

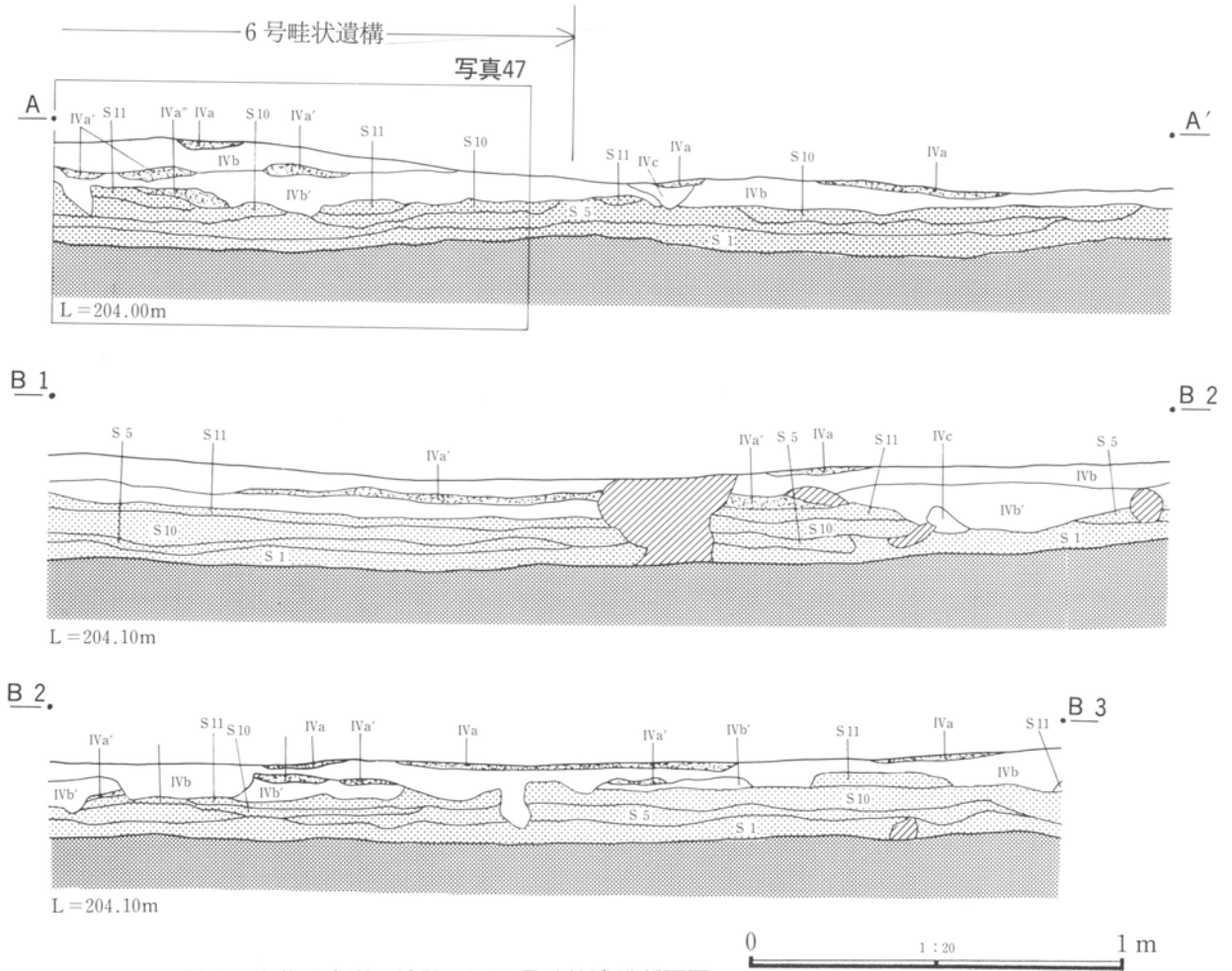


図48 白井北中道II遺跡I区6号畦状遺構断面図



写真47 6号畦状遺構断面

面、F A直上面に2層あり、中間のものはみられない。

8号畦状遺構 (図50～53、写真49～52)

I区中央を東西に走る。西端は7号南端に接続し、東端は10号畦状遺構に直角に接続する(接続部分に攪乱がはいつているため詳細不明)。方向は9号との接続部から東側ではほぼ東西方向であるが、接続部

より西側ではN-75°-Wとなる。幅は0.6～1.5m、高さは5～10cmであるが、西側はかなり低くなる。

IVa層は、縦断面(F 1～F 3)では2層あるが、横断面(G～G')ではごく一部で3層みえる。

9号畦状遺構 (図52・54、写真51・52)

I区中央やや東にある。8号の中央部から南側のび、湾曲しながら東に向きをかえ10号に直角に接

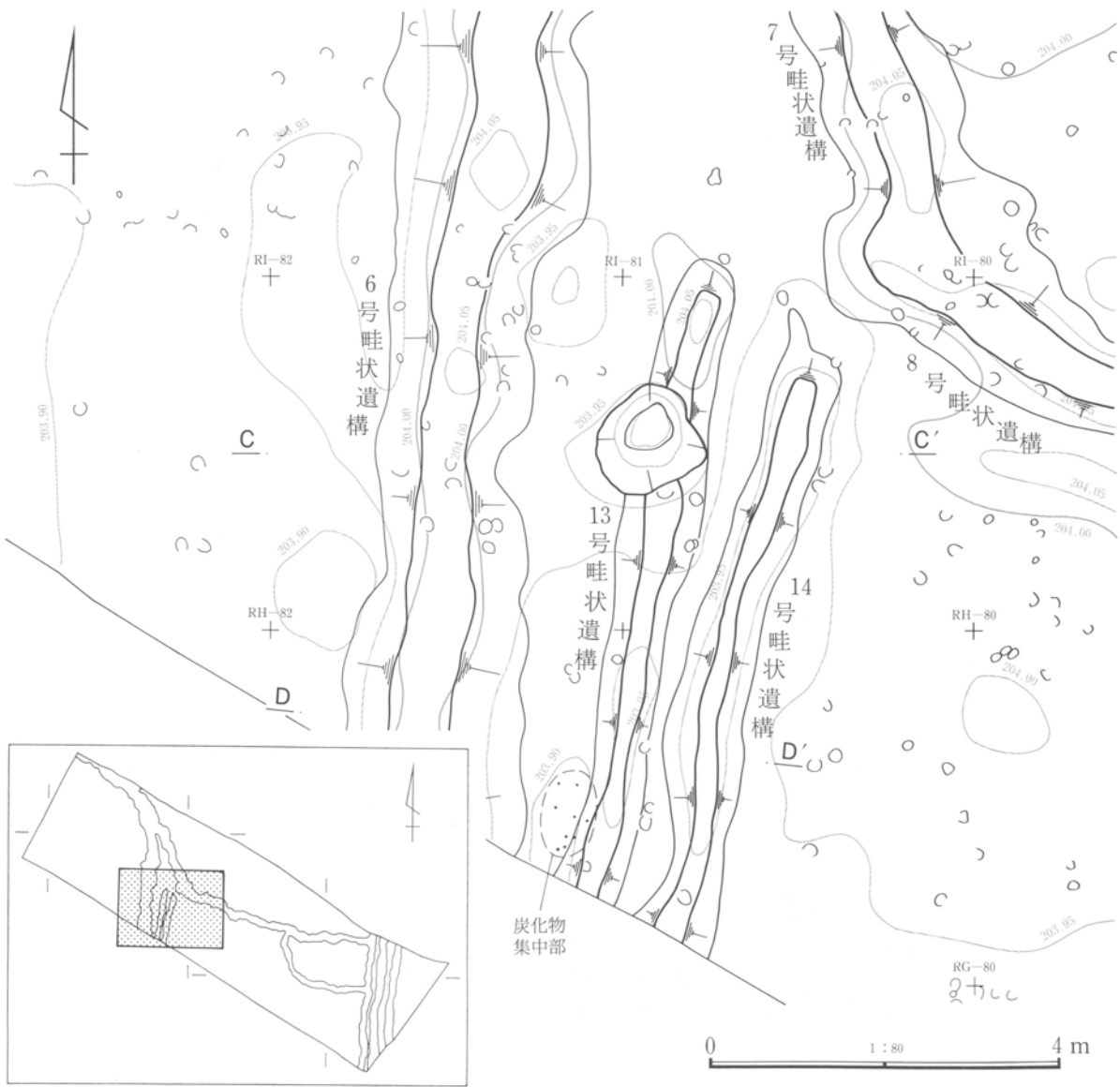


図49 白井北中道II遺跡I区6・13・14号畦状遺構

写真48 6・13・14号
畦状遺構 (南から)



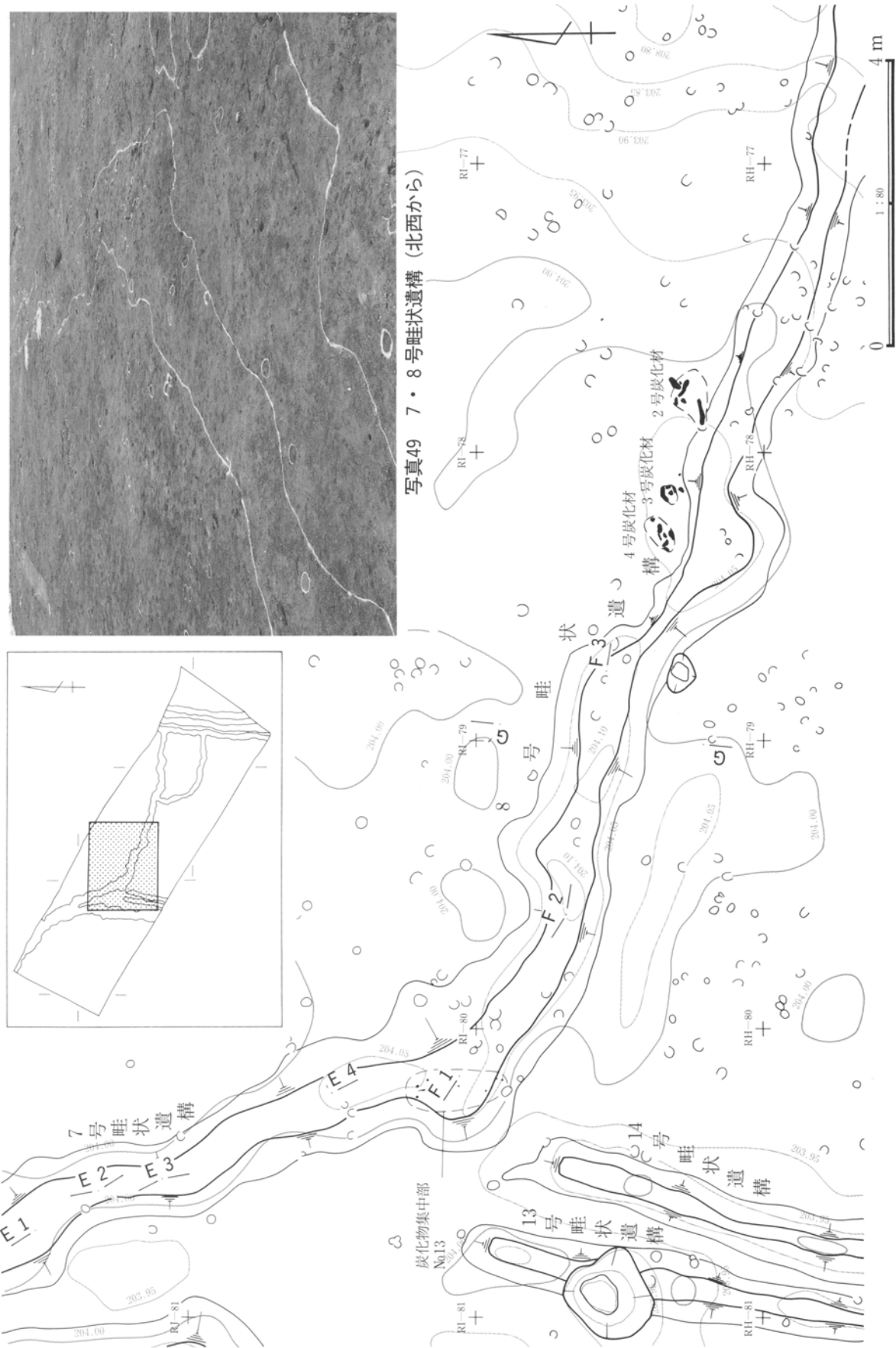


図50 白井北中道Ⅱ遺跡Ⅰ区7・8号畦状遺構

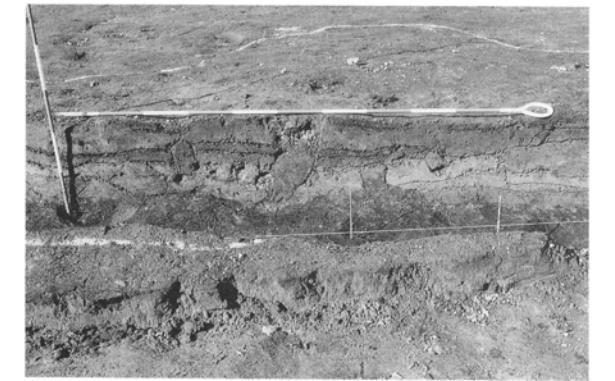
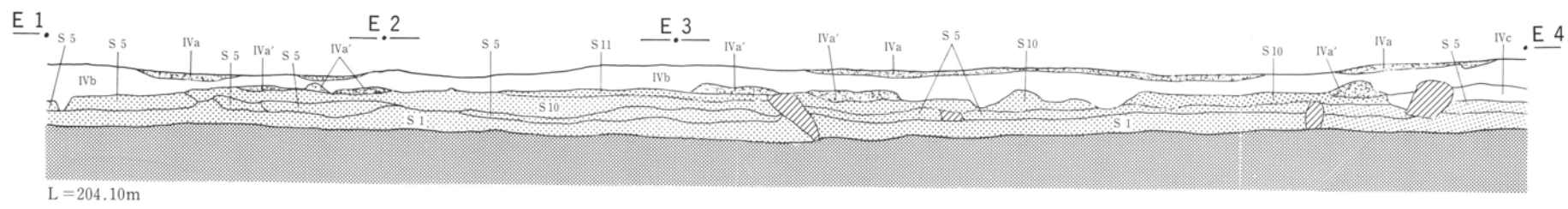
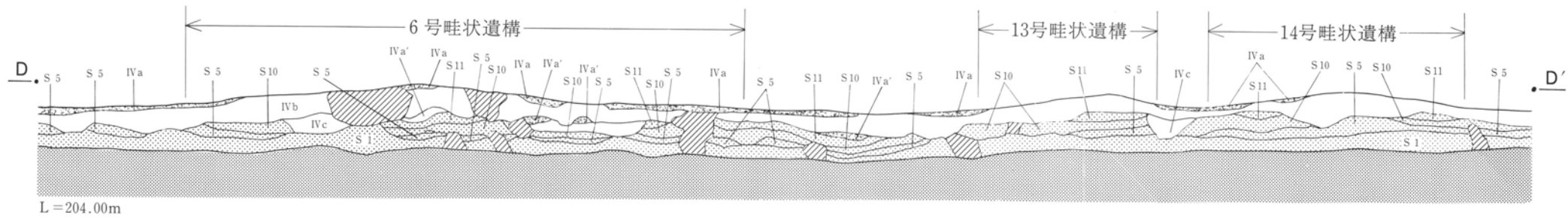
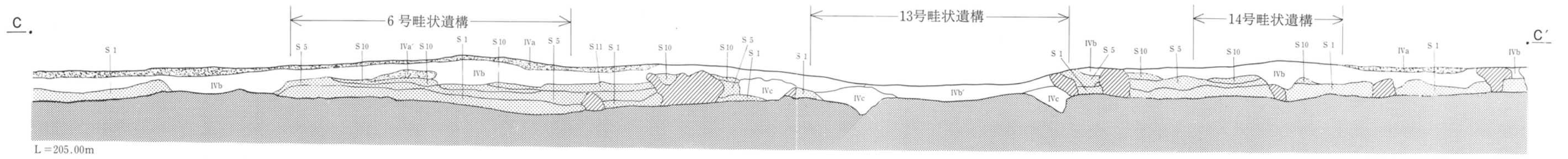


写真50 8号畦状遺構断面

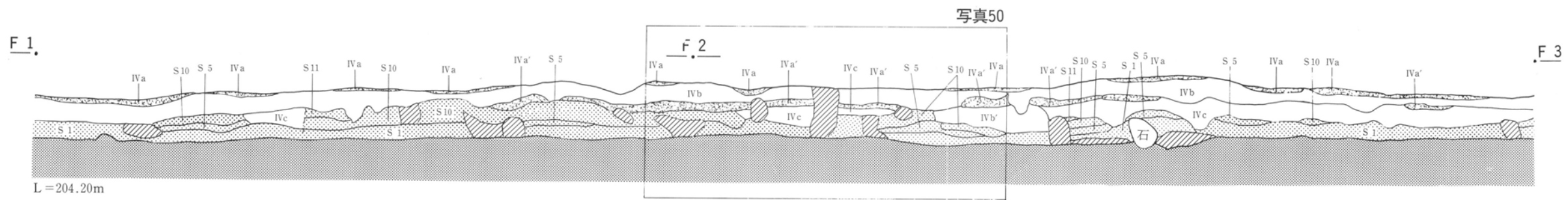


图51 白井北中道II遺跡I区6・7・8・13・14号畦状遺構断面图



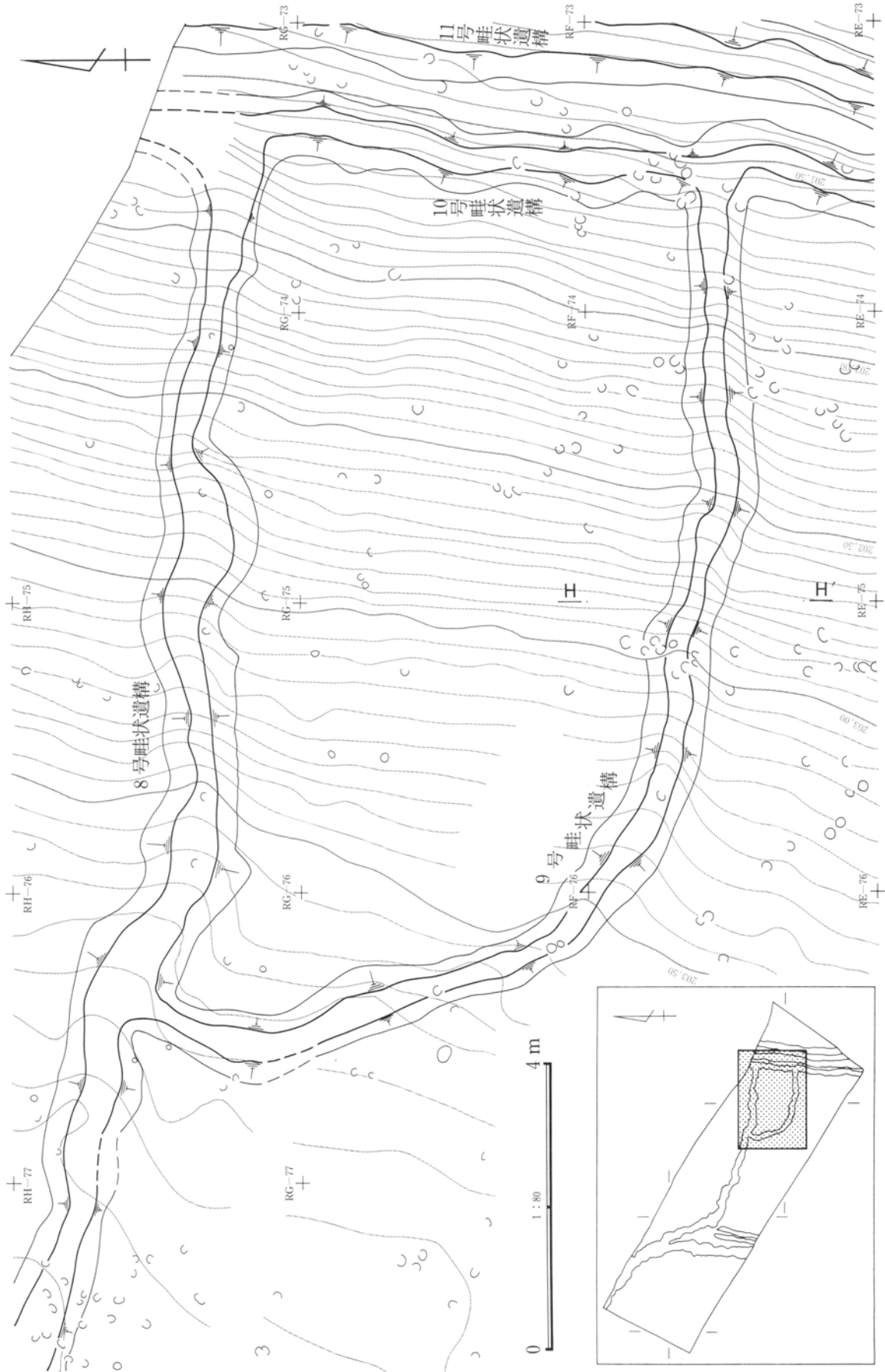


図52 白井北中道II遺跡I区8・9号畦状遺構

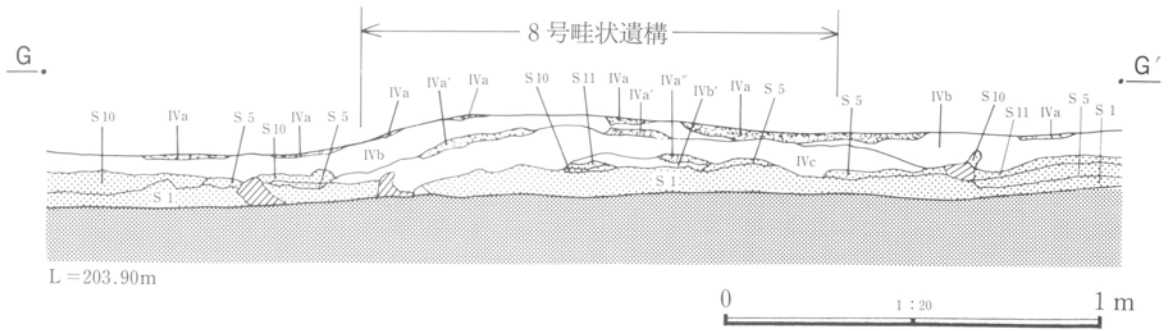


図53 白井北中道II遺跡I区8号蛙状遺構断面図



写真51 8～12号蛙状遺構（南東から）



写真52 8・9号蛙状遺構（北西から）

続する。この8・9・10号によって東西12m、南北6mのほぼ台形の区画が作り出されるが、区画の内外の地表面に顕著な違いはみられないので、区画の目的・意味については明らかにしがたい。幅は0.6m～1mと狭い。高さはごく低く、横断面（H～H'）では盛り上がりが判然としないほどである。

IVa層はH～H'では表面に1層みえるのみであり、しかも高まりの頂上付近では流失してしまったのか、みることができない。

10・11・12号蛙状遺構

（図55・56、写真51・53～55）

I区西端付近にある。東に向かって急激に下がる傾斜面の裾付近に、等高線に沿って3本が平行して走っている。幅はいずれも0.8～1.5m、高さはごく低い。

横断面（I1～I3）、縦断面（11号のみ、J～J'）をみると、11・12号には断続的であるがIVa層が2層あることがわかる。10号にはきわめて

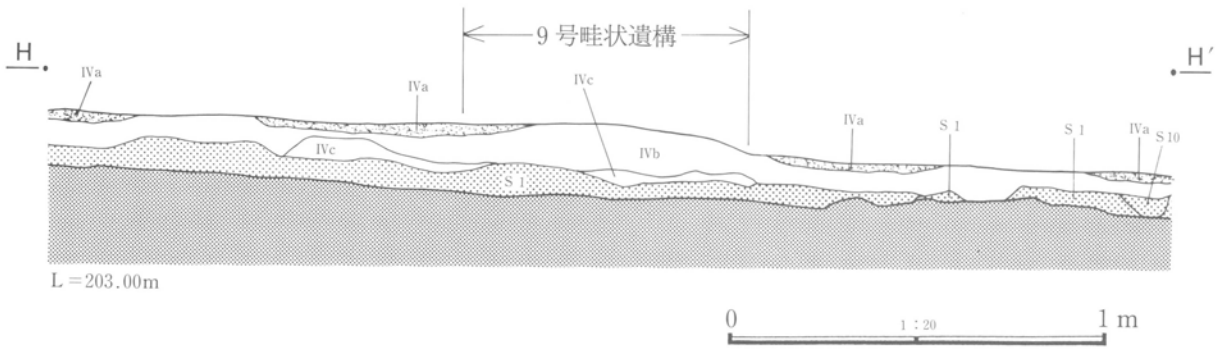


図54 白井北中道II遺跡I区9号蛙状遺構断面図

僅かのIVa層しか存在しないので明らかな差があるが、この違いが何から生じているのかは不明である。

13・14号蛙状遺構（図49・51、写真48）

I区中央やや東、6号蛙状遺構の東側に2本平行する形で存在する。幅はいずれも0.6~0.9mと狭く、高さもごく低いやや不明瞭な高まりをもっている。

断面をみると（C~C'、D~D'）、IVa層は表面に1層みえるのみであり、しかも高まりの頂上付近にはなく、低い部分に堆積している。この特徴は、C~C'における6号の断面と比較すれば明らかである。

13号の北端付近には、直径約1.2m、深さ約10cmの落込みがみられる。C~C'をみると、FAがこの部分ではまったくなくなっており、攪乱がより深くまで及んでいることが分かる。その意図ははっきりしないが、ある時期にこの

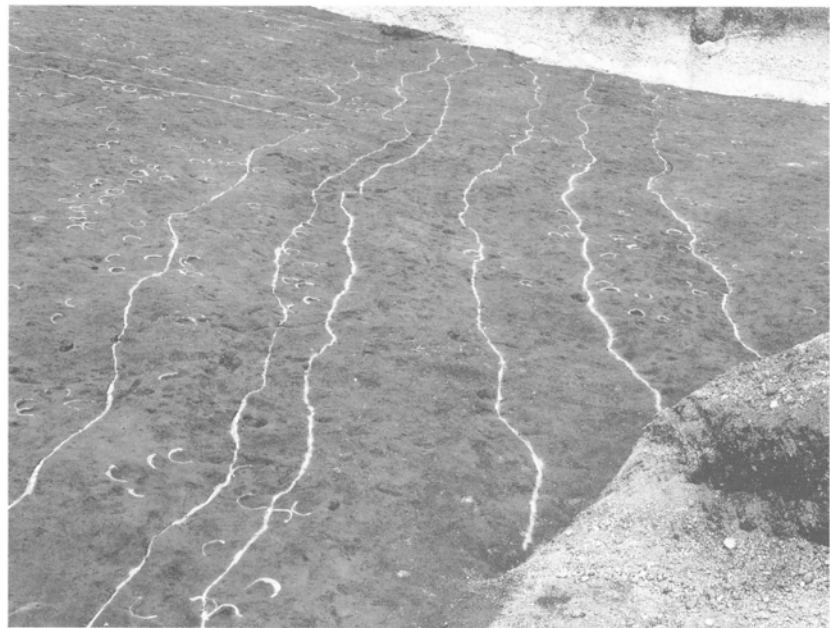
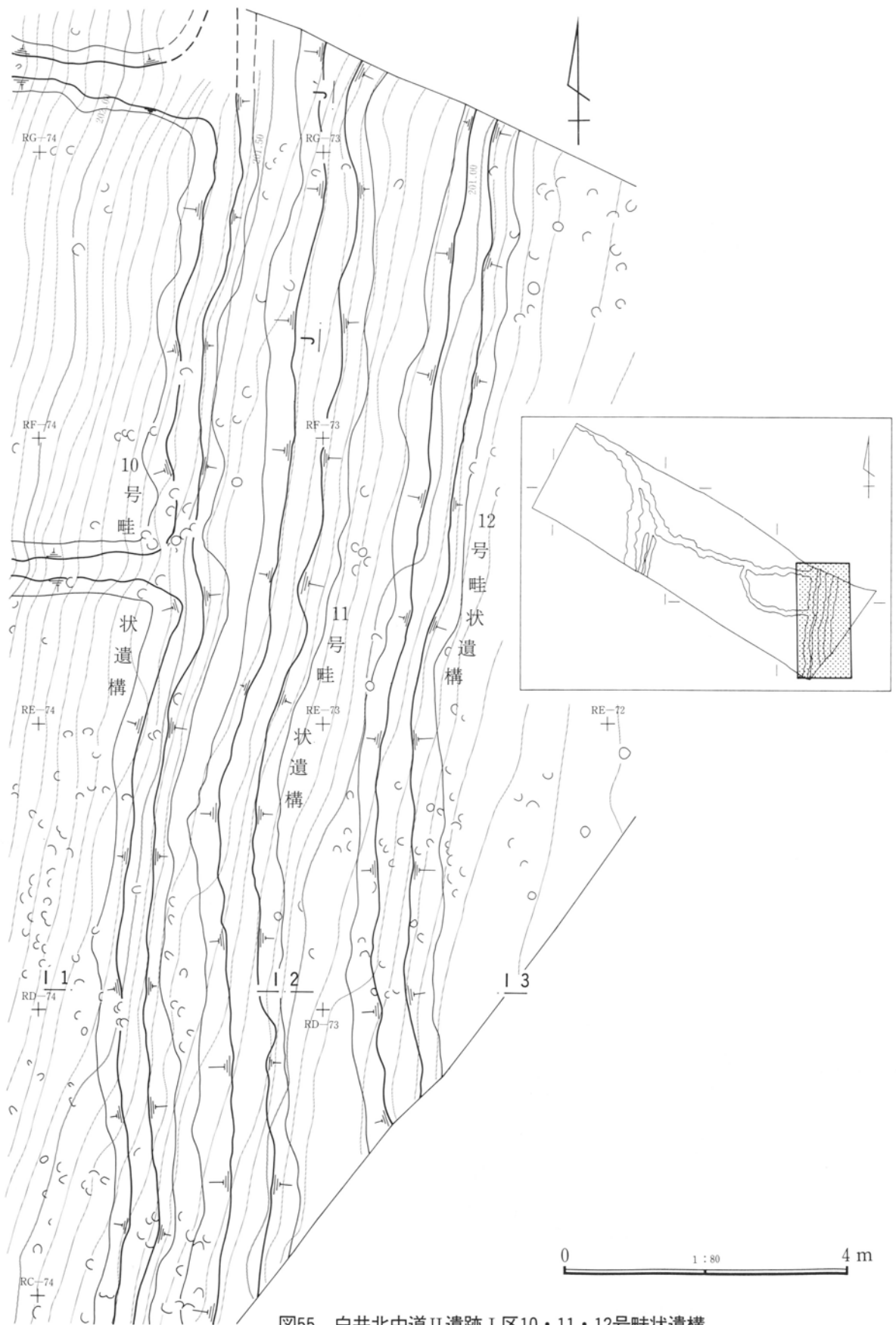


写真53 10~12号蛙状遺構（南から）



写真54 10~12号蛙状遺構（北から）



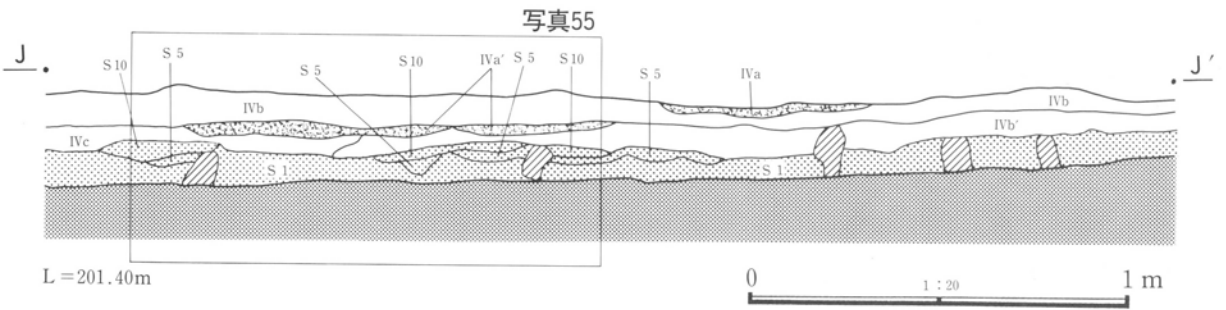
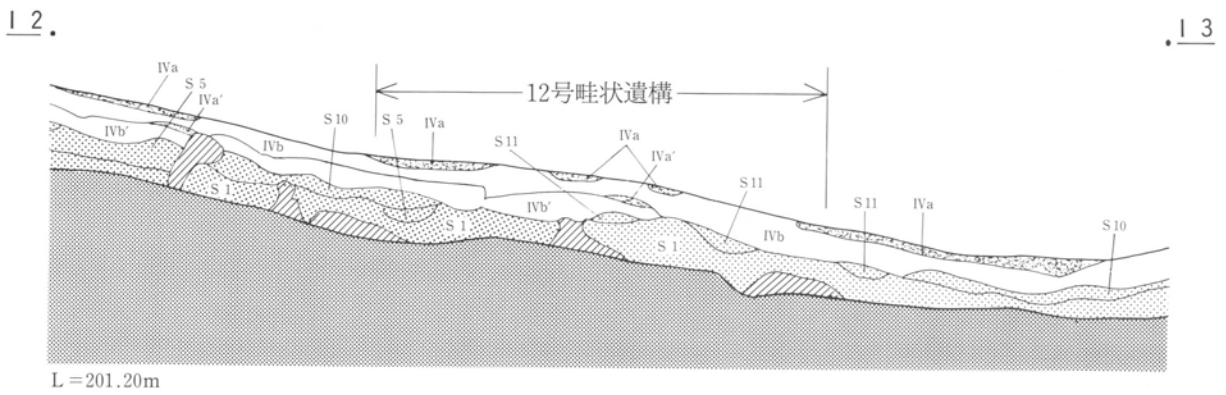
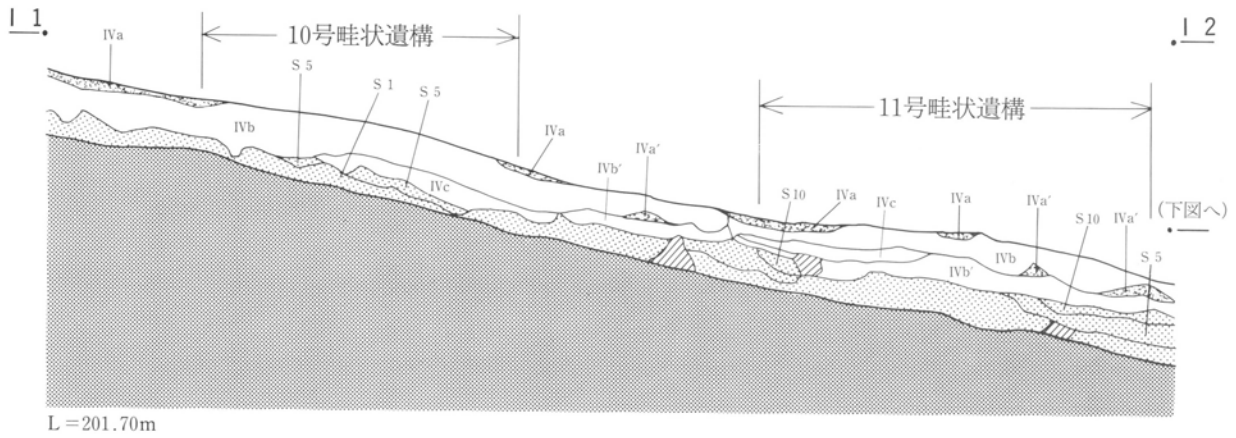


図56 白井北中道II遺跡I区10・11・12号畦状遺構断面図

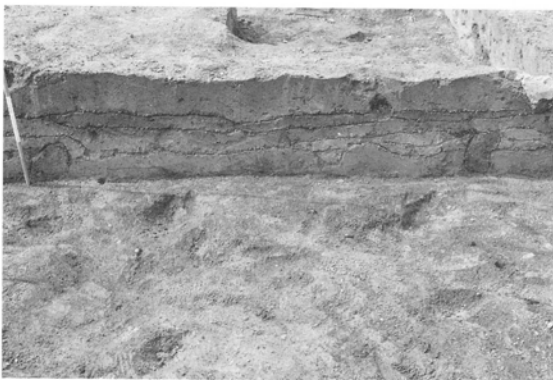


写真55 11号畦状遺構断面

部分を皿状に掘り窪めたことがあったのであろう。

(Ⅱ区)

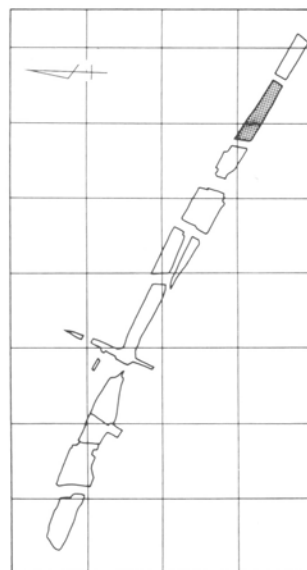
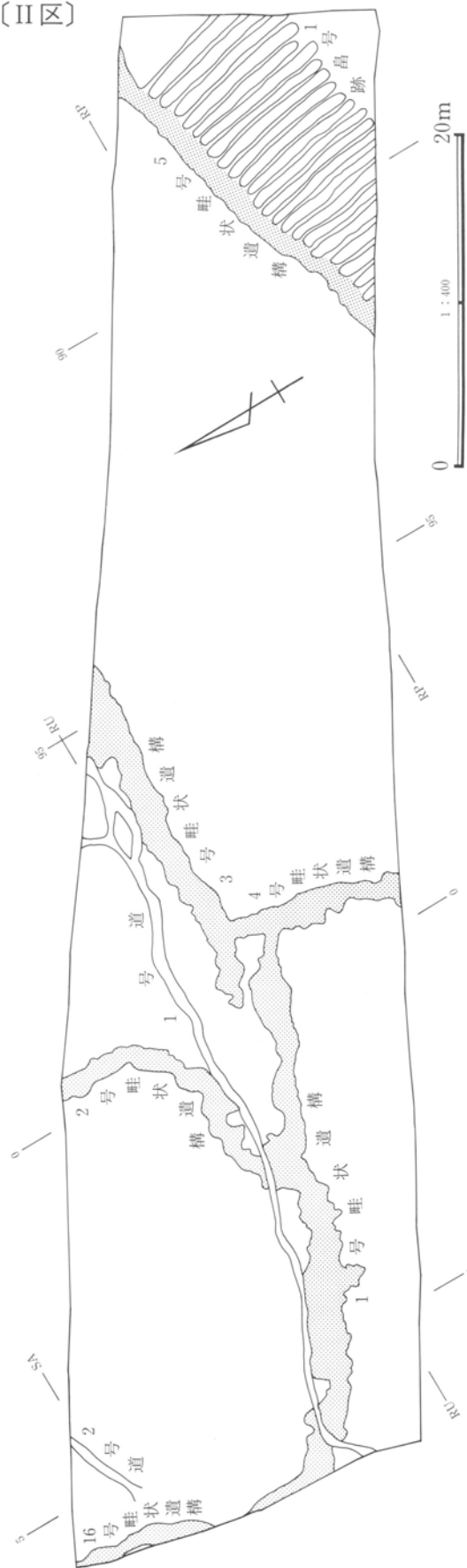


図57 白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区F下面全体図

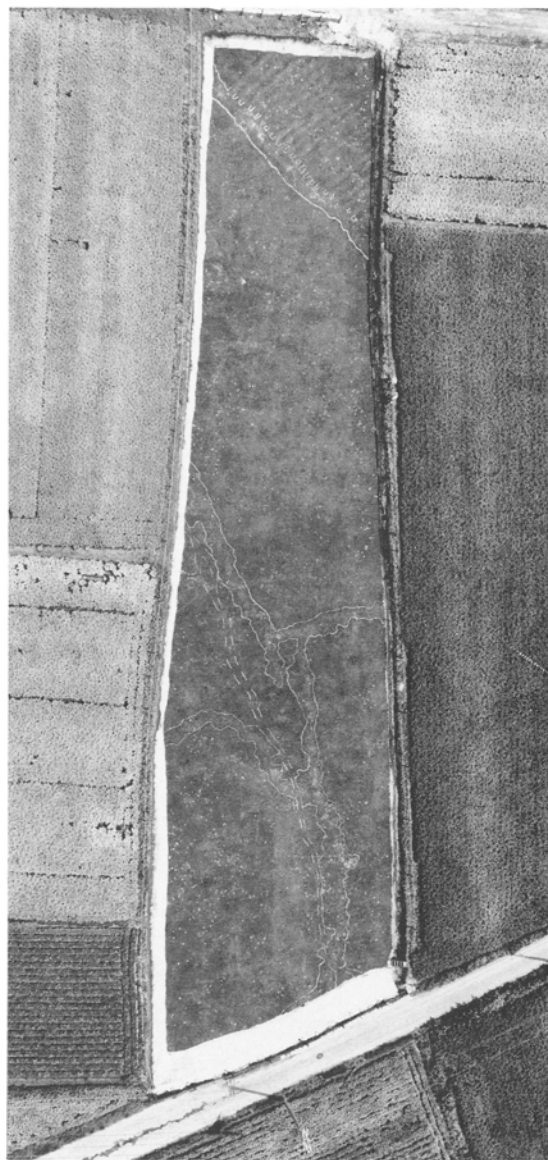


写真56 白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区F下面全景

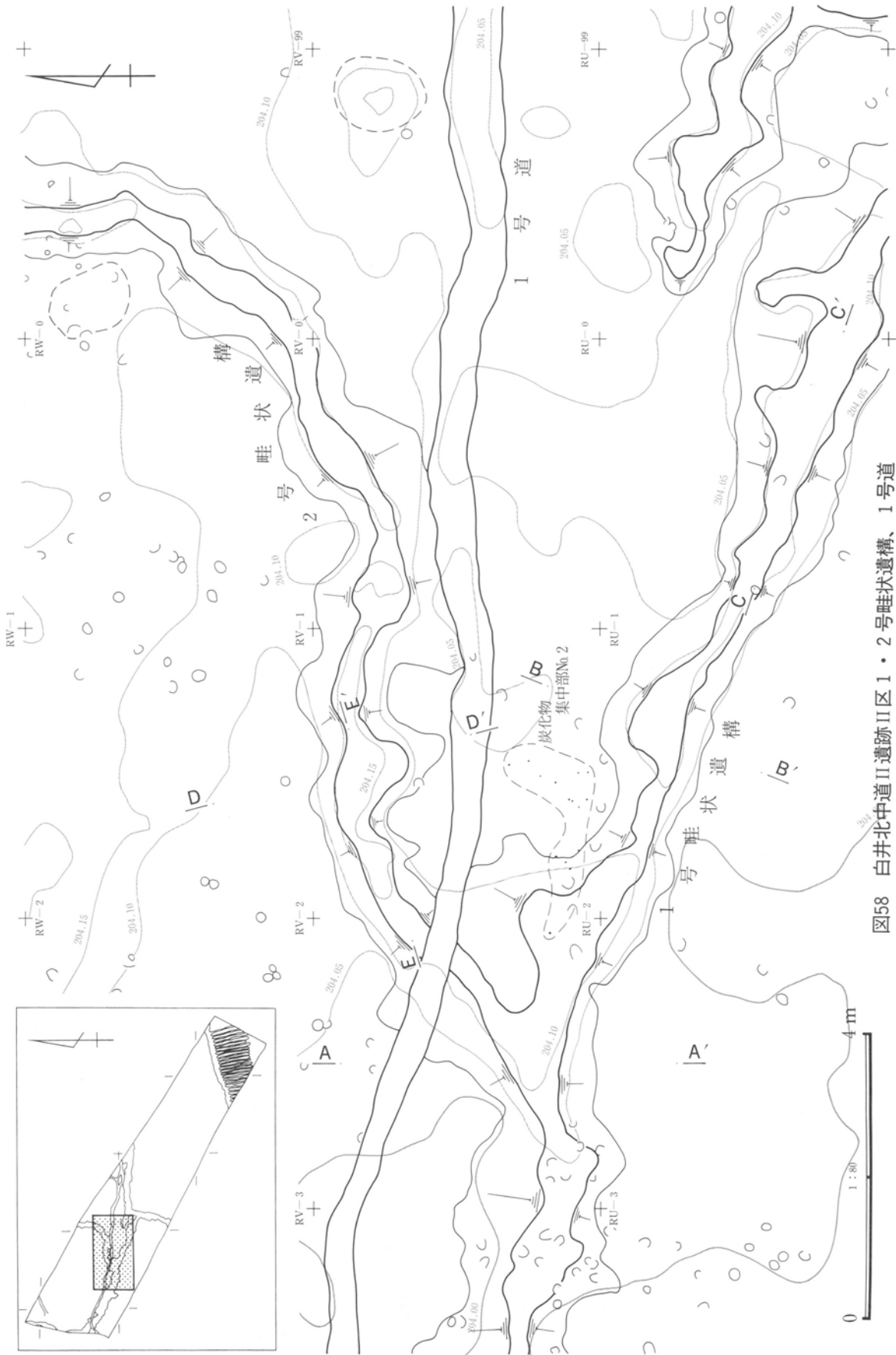


図58 白井北中道II遺跡II区1・2号畦状遺構、1号道

II区はほぼ平坦な地形である。標高のもっとも低いのは東・西両端でどちらも約203.6m、もっとも高いのは中央やや西付近で約204.2mであり、全体の標高差はわずか60cmに収まる。

畦状遺構は6本みられる。このうち注目されるのは1号畠跡の北側を区切る5号畦状遺構であるが、その図・写真等は、畠跡の記述の関係から「4 畠跡」(194ページ)で取り上げ、併せて5号畦状遺構の一部の記述もそちらに譲る。

畦状遺構相互の接続はきわめて不規則で、特に1・3・4号の接続部は甚だしい。走行方向はばらつきがあるものの、東西南北を意識しているようにみえる部分もある。

踏み分け道は1・3号畦状遺構に沿って東西に延びるものが1本みられ、これを1号道とした。そのほか、調査区域内には人の踏み跡の可能性が高い、幅30cm位の細長く続く硬化面が数カ所認められた。このうち、北西隅にある特に明確な痕跡を2号道としたが、その他のものは遺構と把握するまでには至らなかった。

1号畦状遺構 (図58・59、写真57・59)

II区西側にある。西端から4号畦状遺構に接続するまで約32mを確認した。西端では北に大きく延びる部分があるが、これは1号が屈曲しているのか、あるいは別の畦状遺構が接続しているのか、はっきりしない。幅は凹凸が大きく、狭いところで0.8m、広いところで2.5mある。高さも場所により大きく違うが、比較的高くはっきりした高まりをもつ。

IVa層はみられない部分が多いが、図59に示す3本の断面図にみえるように、表面とIVb層下との2層が存在する。

2号畦状遺構 (図58・60、写真58)

II区中央やや西側にある。1号畦状遺構の中央から分かれて東向きに延び、すぐに大きく湾曲して北に90°向きを変え、調査区外へ延びていく。幅は0.7~1.5m、高さは10cm以下であるが、高まりは比較的是っきりしている。

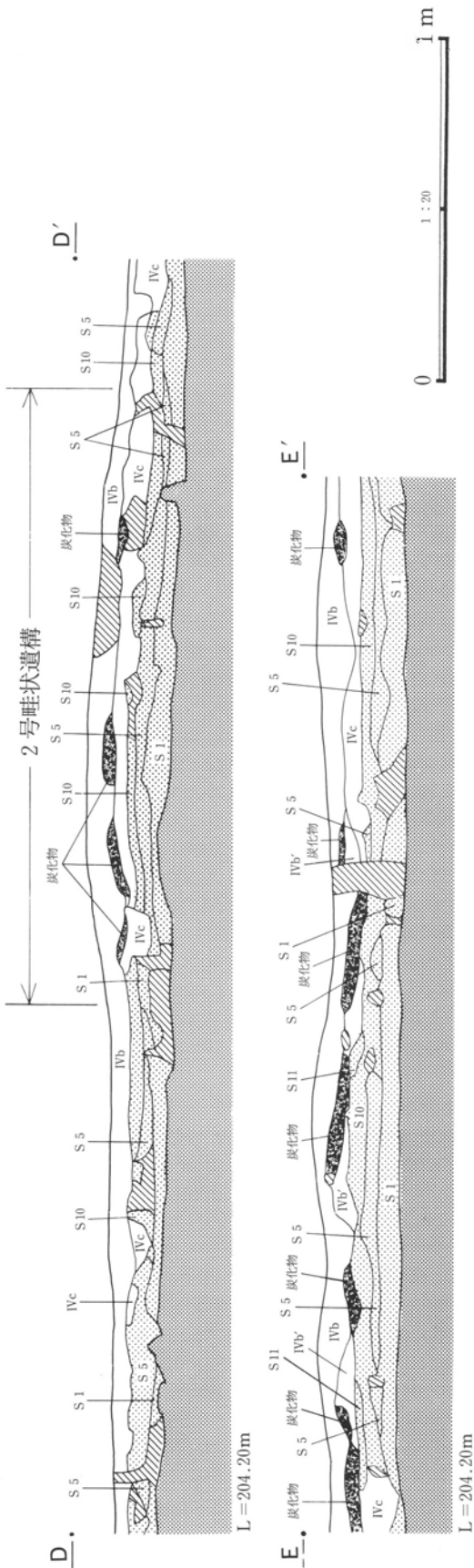


図60 白井北中道II遺跡II区2号畦状遺構断面図



写真57 1号畦状遺構と1号道（西から）

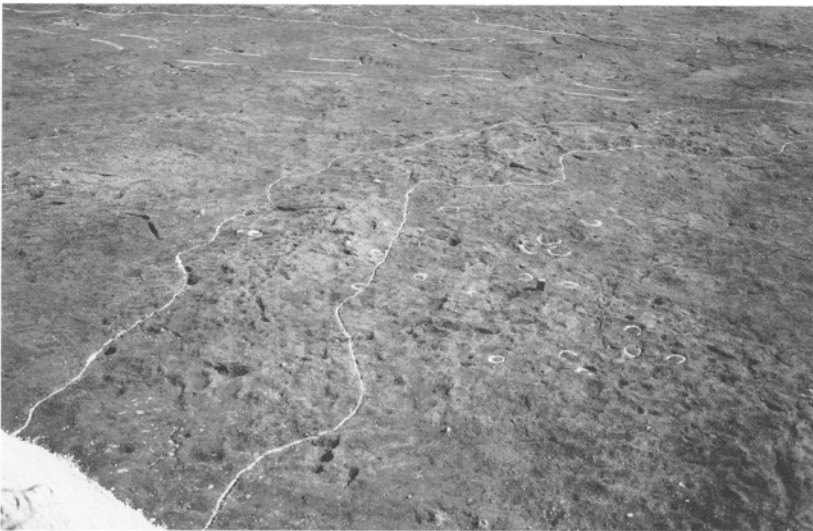


写真58 2号畦状遺構（北から）



写真59 1・3・4号畦状遺構の接続部と1号道（南西から）

畦状遺構中の炭化物層は広範に存在するが、表面のIVa層はみられない部分が多い。

3号畦状遺構（図61～63、写真59～63）

II区中央にある。西端から約5mのところまで4号畦状遺構と接続する。走行方向はほぼ正しい東西方向に近いが、全体としては西側でやや北に傾いている。幅は1.5m前後であるが、東端部では著しく広がるので、この付近で他の畦状遺構が接続している可能性もある。高さは10cm以下であるが、高まりは比較的是っきりしている。

東端部では畦状遺構中とその周囲のIV層に多くの炭化物が含まれている（図62、写真61）。表面のIVa層はほとんどはっきりしないが、IVa'層は広範に存在する（F-F'セクション参照）。

4号畦状遺構（図61・64、写真59）

II区中央やや西側にある。北端は3号と、そこから3m南では1号と接続する。走行方向はN-15°-Eで、直線的にのびる。1・3・4号の接続はきわめて不規則であり、このため、1～4号の4本の畦状遺構で囲まれた区画は、非常な不整形となっている。幅は1～2.3m、高さは5～10cmで、高まりはあまり明瞭ではない。



図61 白井北中道II遺跡II区3・4号畦状遺構、1号道

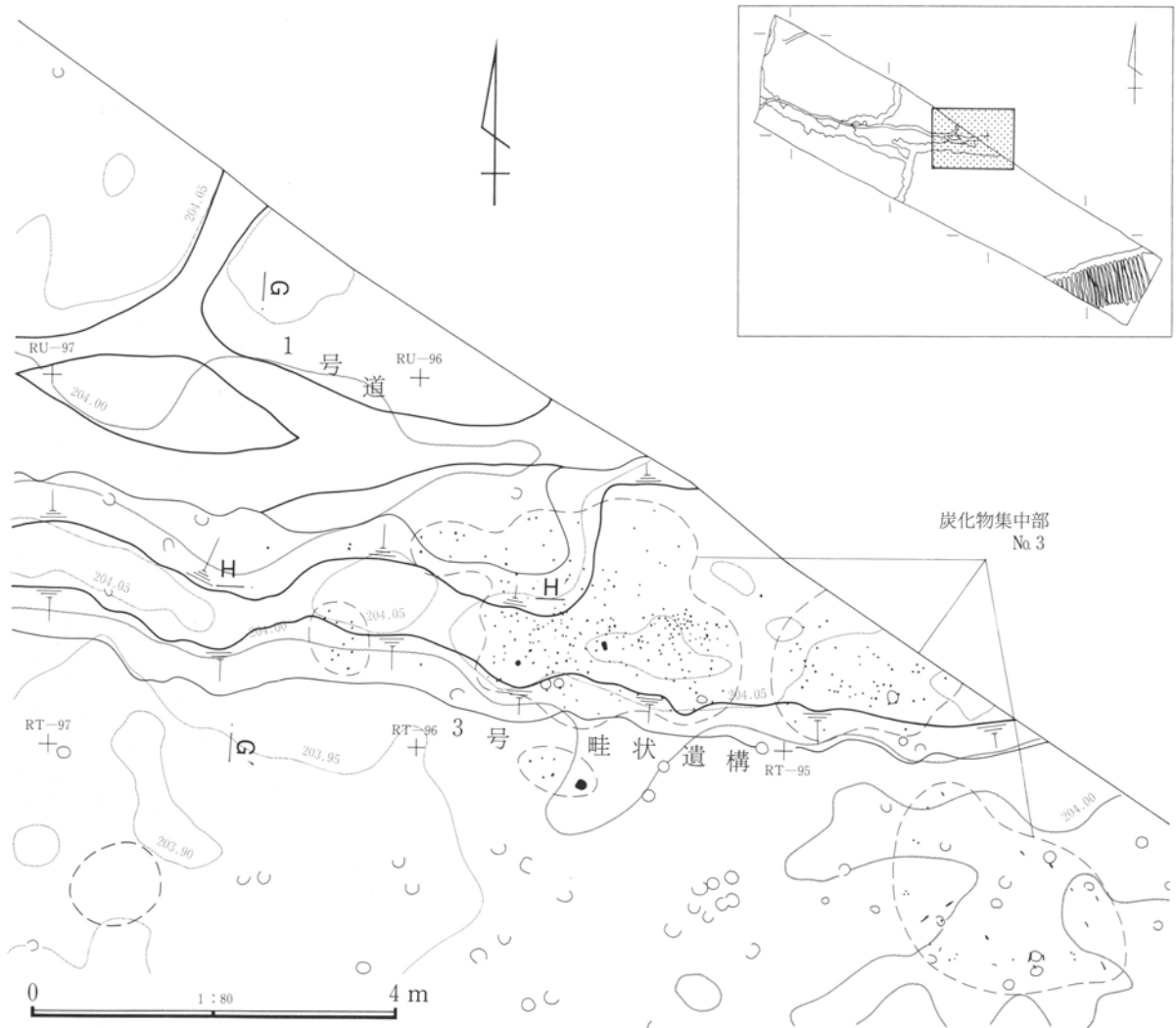


図62 白井北中道II遺跡II区3号畦状遺構、1号道



写真60 3号畦状遺構と1号道（東から）



写真61 炭化物集中部No.3（西から）

断面をみると、IVa層はほとんど存在せず、高まりが低いことと相まって、遺構としてはやや不明瞭である。

5号畦状遺構（図140・142、写真175・176）

II区東端付近にある。1号畠跡の北に接し、しかも、走行方向が畝と直交している。このため、5号畦状遺構と1号畠跡とが関連して設けられていることは確実であると考えられる。畦状遺構の性格を考

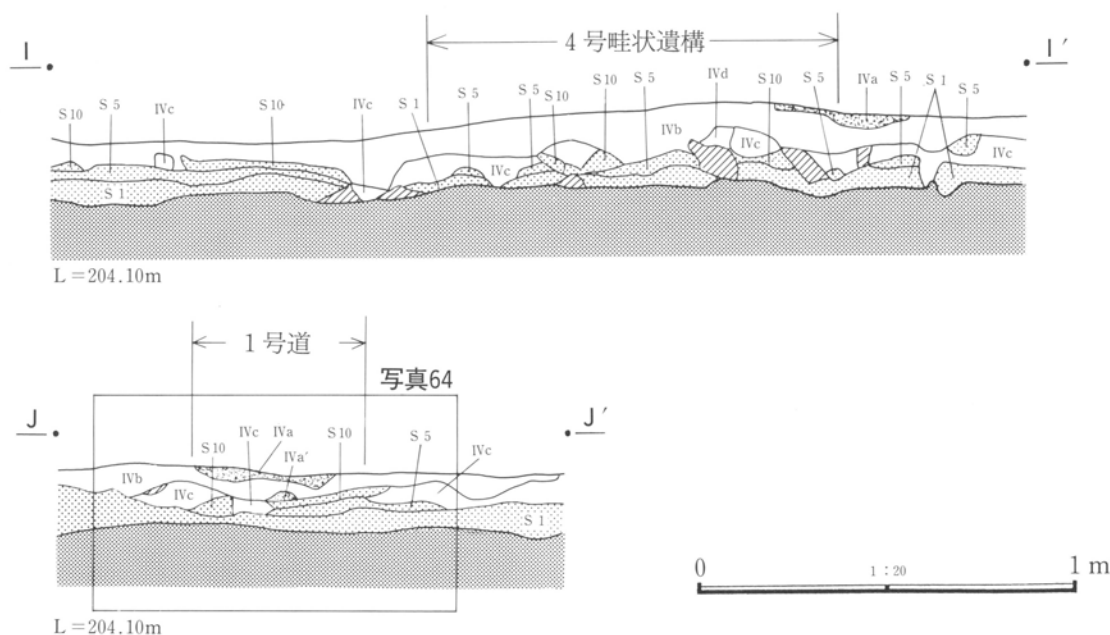


図64 白井北中道II遺跡II区4号蛙状遺構・1号道断面図



写真64 1号道断面

える上で、この遺構の存在は重要である。走行方向はN-75°-Eで、直線的にのびる。幅は約1.5m、高さは北側の地表面から測って約10cmあり、比較的高くはっきりとした高まりをもつ。

1号道跡 (図58・61・62・64、写真57・59・60・64)

II区南西隅から調査区北壁中央部にかけてほぼ東西に走る。走行方向は、やや蛇行しているが、概ねN-80°-Wである。1号蛙状遺構を越えるところでは大きく南にまがっている。幅は0.3~0.5mである。

道の表面はよく踏まれて硬化しており、まわりの地表面に比べ2、3cmくぼんでいるところが多い(図64参照)。このくぼみは特に蛙状遺構を越える部分で明瞭である。道の断面をみると、表面には硬化した

IVa層がごく薄く存在する。

この道跡は、東端付近でやや不明瞭となり、踏み跡がいくつかに分かれてしまう。ちょうどこの部分で一直線に歩く必要がなくなる(あるいは逆方向からみて、ここから一直線に歩く必要が生じる)ことを示していると思われるが、それがどのような要因によるものかははっきりしない。本遺跡内には、歩かれている度合いから、幹線道とそこから分岐した道といった二種類の道跡が認められるが、この道は、幹線道から分かれ道へと変化しているということもできよう。

2号道跡

II区北西隅にある。方向はN-67°-Eで、約5m分のみ確認できる。道跡として認定できる部分の地表面は、周囲の面に比べて2~3cmくぼんでいるため、きわめて明瞭に道跡と分かるが、その西端部では急に不明瞭となり、西側がどこに向いているのかはまったく確認できない。

〔Ⅲ区〕

Ⅲ区は工程の都合上、2回に分けて調査を行った(図65)。ここでは、Ⅱ区の西に隣接し、西半分が段丘崖の斜面にかかる地区をⅢa区(平成3年度調査)、さらに西側の急斜面に位置する地区をⅢb区(平成5年度調査)と名付け、区別することにする。この区は、河岸段丘の白井面と長坂面とを分ける段丘崖の裾部に位置しているため、高低差が大きい。Ⅲa区東南隅付近の最も低い部分の標高は203.3m、Ⅲb区南西隅の最も高い部分の標高は212.2mであり、その差は8.9mある。

東端部は広くごく浅い谷地形をなしている。このため、この付近の土は現在でも水分を多く含み、粘土化しているところが多い。

西側は段丘崖となり、傾斜を増しながら急激に高度を上げている。この段丘崖は、その中間部分を工事によって壊されてしまっており、白井北中道Ⅱ遺跡と吹屋犬子塚遺跡との間は、約20mにわたって調

査の空白区となってしまう。

斜面には大小さまざまな石が散らばっているが、石の表面に人工が加わった痕跡はなく、段丘崖から転落した自然石であると思われる。配置にも特に作意的なところはみられない。

畦状遺構は、東南隅近くにやや不明瞭なものが1本みられ、これを15号と名付けた。浅い谷を遮るようには設けられているが、ごく一部が発掘区にかかっているだけであり、詳細は不明である。本区にはこれ以外の畦状遺構は見られず、斜面に作られている2号畠跡にも関連するものはみられない。

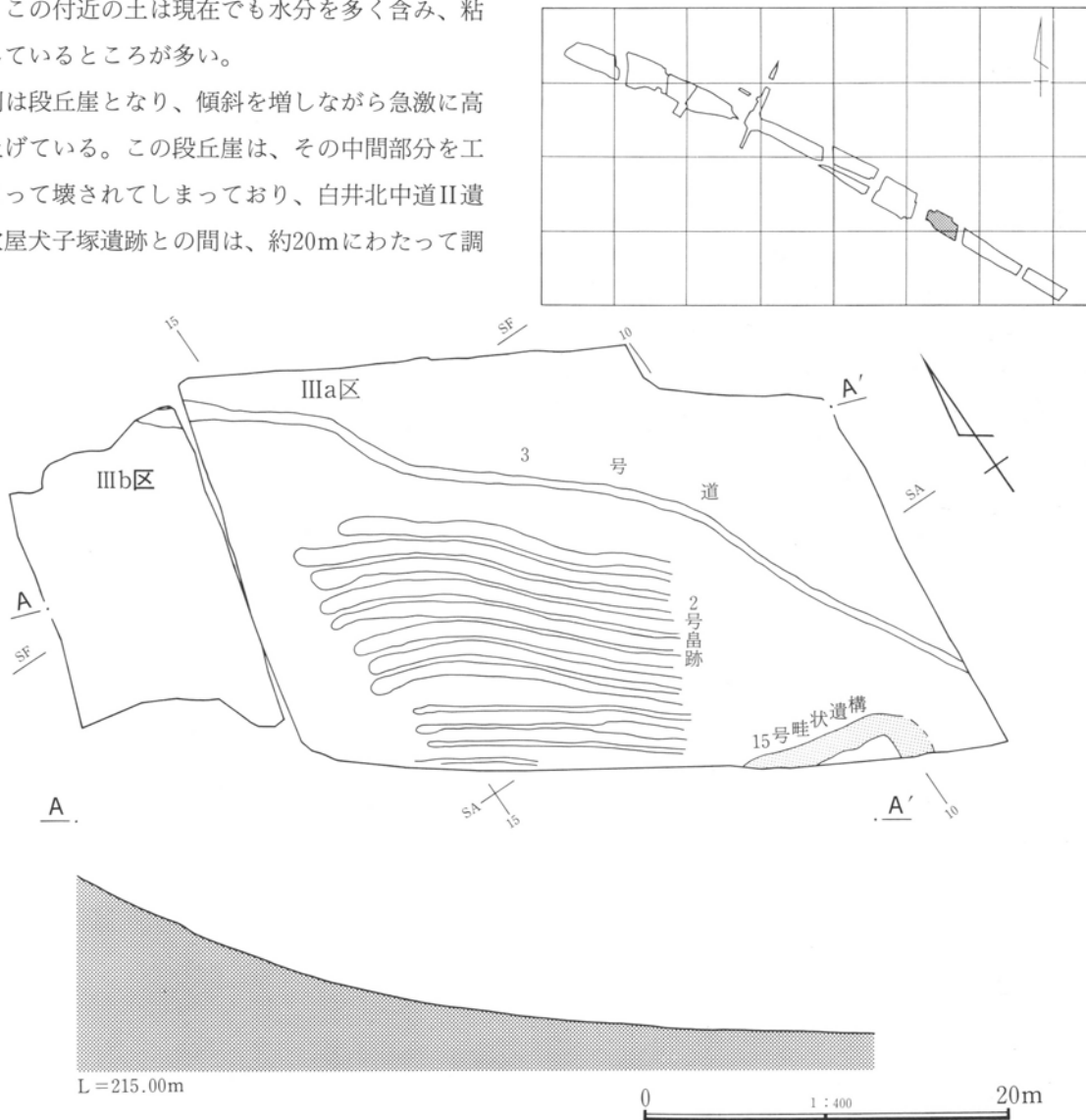


図65 白井北中道Ⅱ遺跡Ⅲ区F P下面全体図

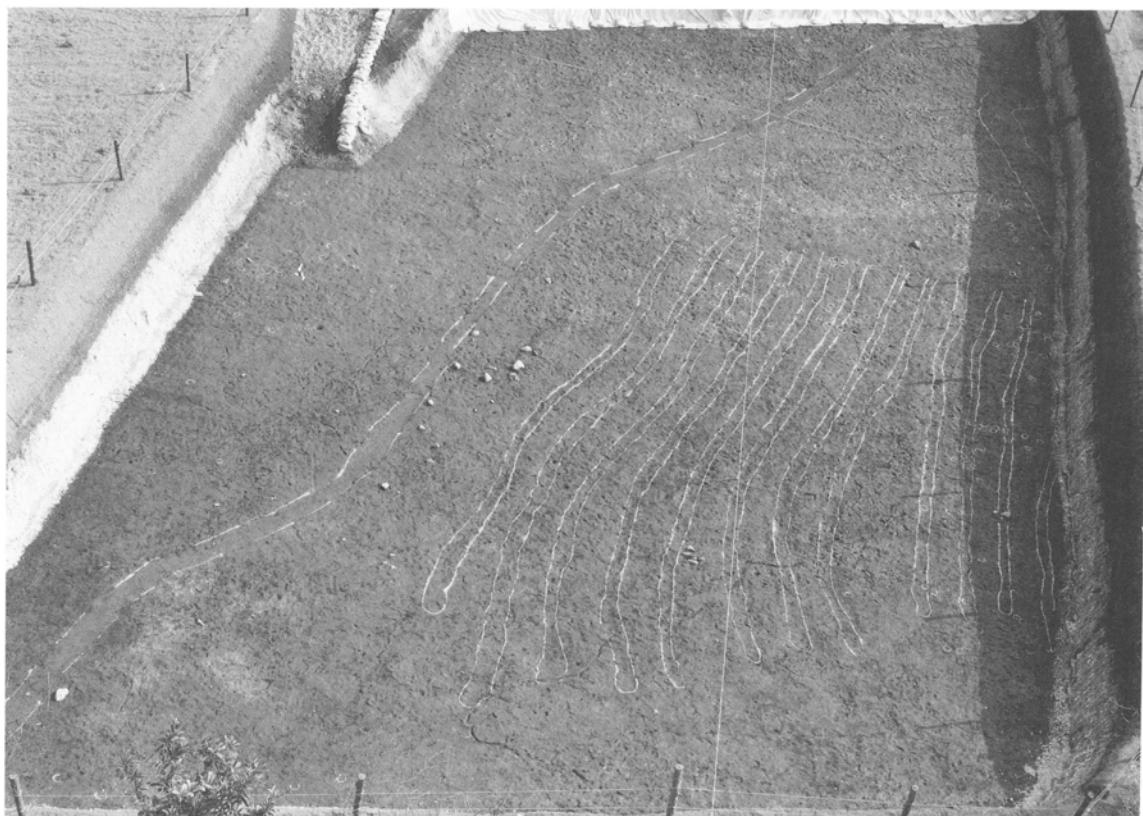


写真65 白井北中道II遺跡IIIa区全景（北西から）

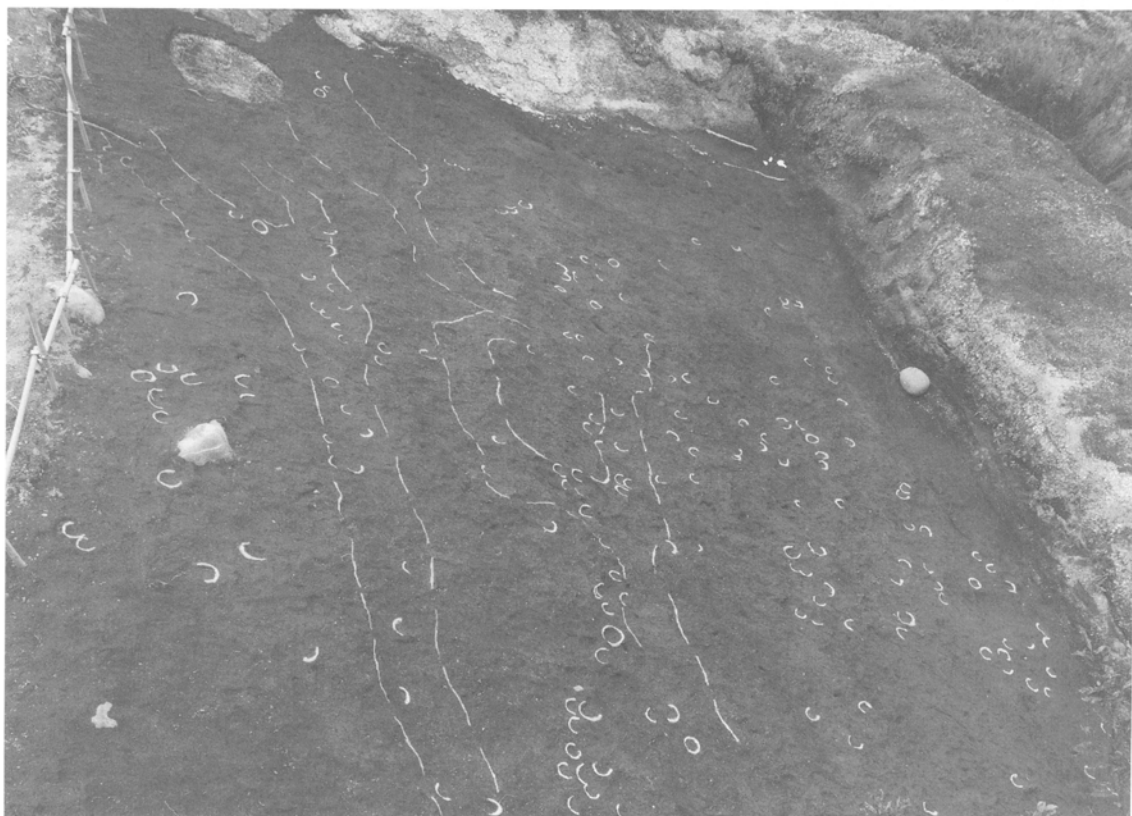


写真66 白井北中道II遺跡IIIb区全景（南から）

第3節 FP下面の調査

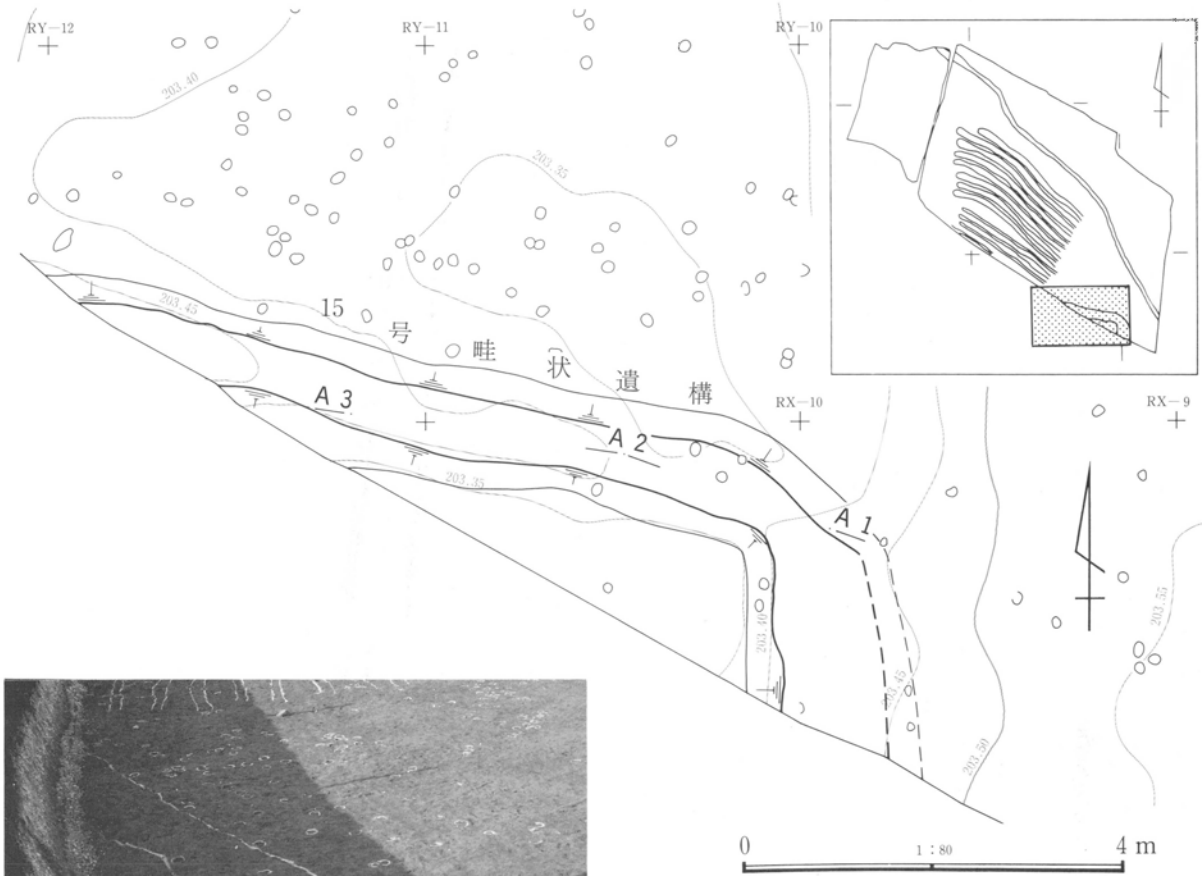


写真67 15号蛙状遺構 (南東から)

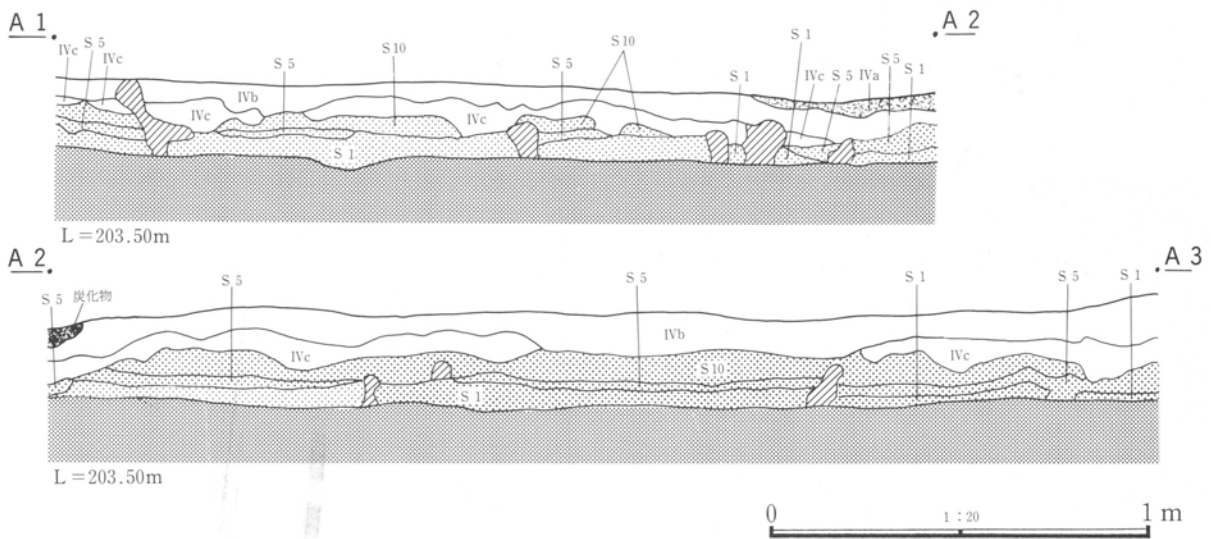


図66 白井北中道II遺跡Ⅲ区15号蛙状遺構

第3章 調査の成果

踏み分け道跡は南東隅から北西隅にかけて、斜面を斜めに上るものが1本みつきり、3号道跡と名付けた。この道跡の下層では、道跡に重複してより古い時期の蹄痕が見つかっている。時期の異なる蹄痕が発見されたのはこれが最初であるが、この遺跡の構造を考える上で非常に重要なものであると共に、この発見を一つのきっかけとして、他の地区でもより古い時期の蹄痕が発見されることとなった（本節8「下層の馬蹄痕」参照）。

そのほかIIIb区では、斜面の等高線にそって、多くの踏み跡状の痕跡がみつまっている（写真66・71の白線）。

15号畦状遺構（図66、写真67）

III区東南にある。発掘区の東端付近には浅く広い谷地形が南北方向に入っているが、この15号はその谷を遮るように設けられている。ただし、発掘区内

にはL字形にまがる約5m分がかかっているにすぎず、全容は知り得ない。東端付近では、図66に破線で示したように、周囲の地表面との高低差がほとんどなくなってしまう部分があり、遺構としてはやや不明瞭である。幅は明瞭なところで測って、1～1.3mである。

断面のIVa層は、表面に1層が部分的にみえるのみであり、畦状遺構としてはやや特徴に乏しいと言わざるを得ない。

3号道跡（図67・68、写真68～70・72～79）

III区南東隅付近から北西隅付近へと、発掘区を斜めに横切っている。斜面の部分では等高線に対してやや斜めになって傾斜をやわらげているが、さらに西側は発掘区外に延びているため、段丘崖の最も急な斜面をどのように越えていくかは明らかでない。幅は0.4～0.5mであり、表面はよく踏まれてくぼみ、固く締まっている。

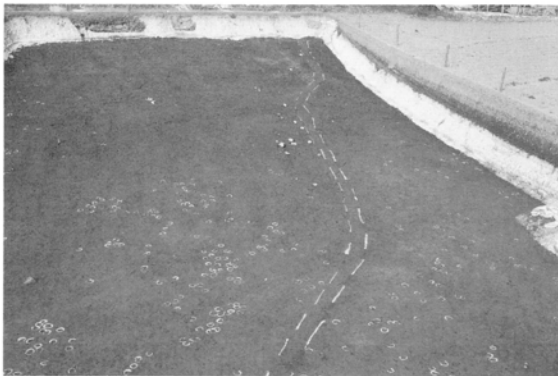


写真68 3号道（南東から）



写真69 3号道（北西から）



写真70 3号道西半部（南東から）



写真71 IIIb区の道跡（北から）



この3号道跡の周辺を数cm掘り下げ、FA上面で精査したところ、FA中にIV層が丸く落ち込んでいるのが多数発見された(写真72・75)。この丸い落ち込みは直径15cm前後で、ちょうど道跡に重複する位置に幅1～3mの列をなしている(写真72～74)。また、これを発掘したところ、底が平らで、FP下面の馬蹄痕に酷似した形状であった(写真77・78)。以上のことから、この痕跡は自然のものとは考えられず、馬が3号道上を列をなして歩いた時の蹄の跡であると考えられる。FA層中に深くめりこんでいるのは、ちょうど地面が軟弱で、蹄が体重によって沈み込んでしまう状態であったためなのであろう。地面が軟弱となる要因としては長雨などが考えられるが、この部分にだけこれほど明瞭な蹄痕がみられるのは、この部分が浅い谷地形の底付近で水が集まりやすく、現在でも水分の多い土質であることが大きな原因であると思われる。

スクリーントーンは
3号道の位置を示す。

図67 白井北中道II遺跡III区3号道下層の馬蹄痕



写真72 3号道下層馬蹄痕確認状況（南東から）



写真73 3号道下層馬蹄痕完掘状況（南東から）



写真74 3号道下層馬蹄痕完掘状況（北西から）

この蹄痕が残された時期は、地表面（FP下面）でこの蹄痕がみられなかったことから、FP下面に残された蹄痕よりも遡ることは確実である。断面をみると（A1～A3）、大部分の蹄痕がIVb層によって上半を削り取られたようになっており、IVb層の形成の時点以前にも遡ると思われる。このことは、FP降下のかかなり以前から馬がこの地に存在していたことを示し、この遺跡における馬の飼育がある程度の時間幅の中で行われていたことを物語る。

また、この蹄痕が3号道跡に沿っている事実も興味深い。3号道跡は、遅くとも下層の蹄痕が残された時点には既に存在していたのであり、かなり長期にわたって同一場所にあったことが分かるからである。つまり、この遺跡の構造は、流動的にみえる側面もあるものの、ある程度の永続性も同時に備えているとみることができるのである。

さらに、馬が踏み分け道を列をなして歩いている

事実は、踏み分け道を作ったのが人間だけではないことを示唆する。馬は、人間の誘導によらなくても、何か目的をもって進む場合には一列になって歩くことがあり、そのため、牧場内には馬の作った道ができることがある。この3号道跡も、そのようにして馬が歩いてできた可能性がある。他の地区にある、馬の蹄痕が多く残る道跡にも（吹屋中原遺跡III区6号道跡など）、同様の可能性が考えられよう。もちろん、同じ道を人間が歩いていたことも考えられる。この3号道が遺跡を東西に走る幹線道の一部であるらしい（付図1）ことを考慮に入れば、人間が歩いていないとはむしろ考えにくい。この遺跡に残されている数多くの踏み分け道は、人間と馬双方のさまざまな行動によって作られていたと考えられ、それらの関連により各々の道の性格は微妙に異なっていたと思われる。



写真75 3号道下層馬蹄痕確認状況

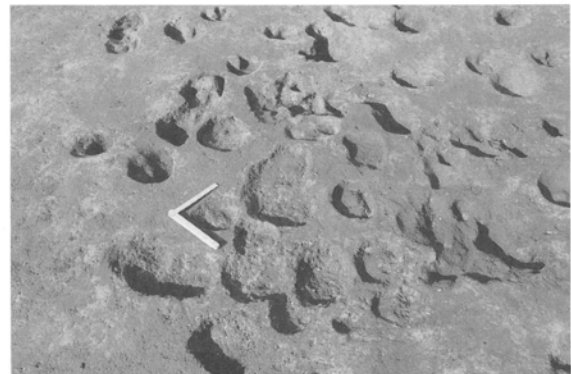


写真76 3号道下層馬蹄痕完掘状況

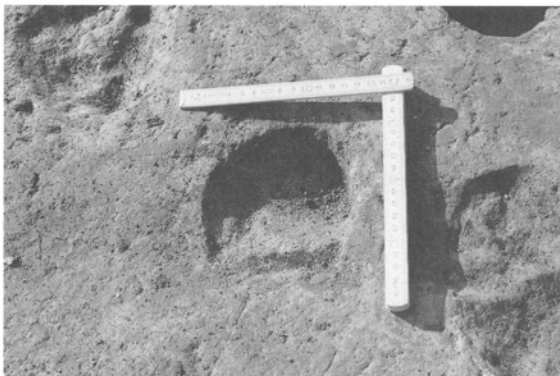


写真77 3号道下層馬蹄痕(1)

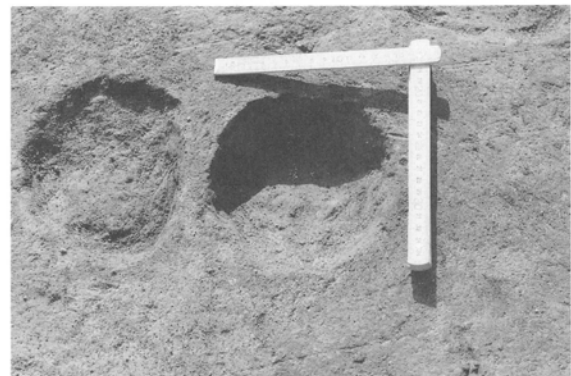


写真78 3号道下層馬蹄痕(2)

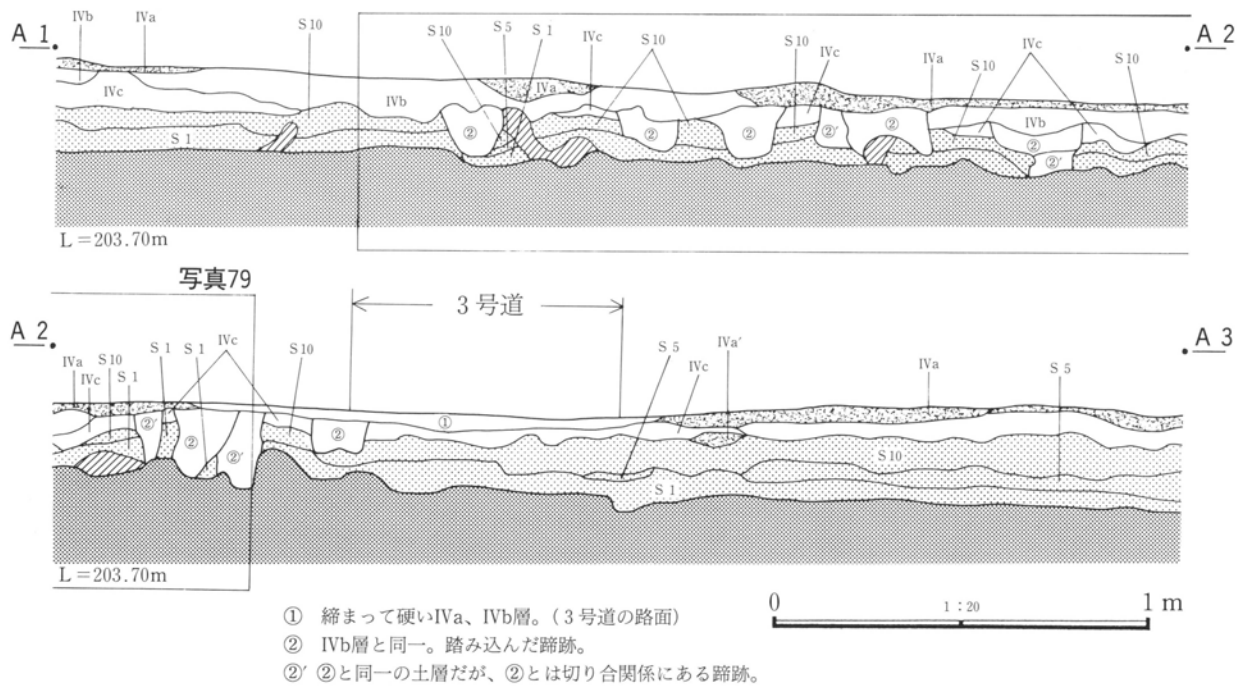


図68 白井北中道II遺跡III区3号道断面図



写真79 3号道断面

IIIb区にみられる道跡 (写真66・71)

IIIb区の斜面には、等高線に沿った形で数本の踏み跡状の痕跡がみられる。この部分の傾斜面は斜度25°以上のきわめて急な斜面であり、斜面に直角に登り下りするのはかなり難しく危険である。おそらく、ここにみられる踏み跡は、そのような急斜面に対処するための道の一部であると考えられる。

(3) 吹屋犬子塚遺跡

〔I区〕

I区は段丘崖の直上に位置する。東端はその段丘崖にかかるが、ちょうどその部分から東は工事によって破壊されており、本来の段丘崖の形状はわからない。

調査は崖の擁壁の撤去と農道の移動の都合から、3回に分けて行った。本書では、平成4年に調査を行った最も面積の広い調査区をIa区、平成5年度に調査を行った南側の農道下の調査区をIb区、東側の崖際の調査区をIc区と呼んで区別する(図69)。

調査区はIc区を除けばほぼ平坦な地形で、東から西に向かってごく緩やかに高くなっている。Ic区は崖に近いこともあって、傾斜がやや急である。標高が最も低いのはIc区東端の219.5m、最も高いのは

1a区西端近くの3号畦状遺構上の221.6mであり、その差は2.1mである。

畦状遺構は6本みつまっている。そのうち1・2・3・5号の4本はほぼ直線的に並び、長方形の区画を作っている。それぞれの方向には若干のずれがあるものの、ほぼ東西南北方向に近くっており、この方向をある程度意識して設定されているものと思われる。

また、1号を詳細にみると、2本の畦状遺構が平行しているように見え、また、2号と3号とが平行

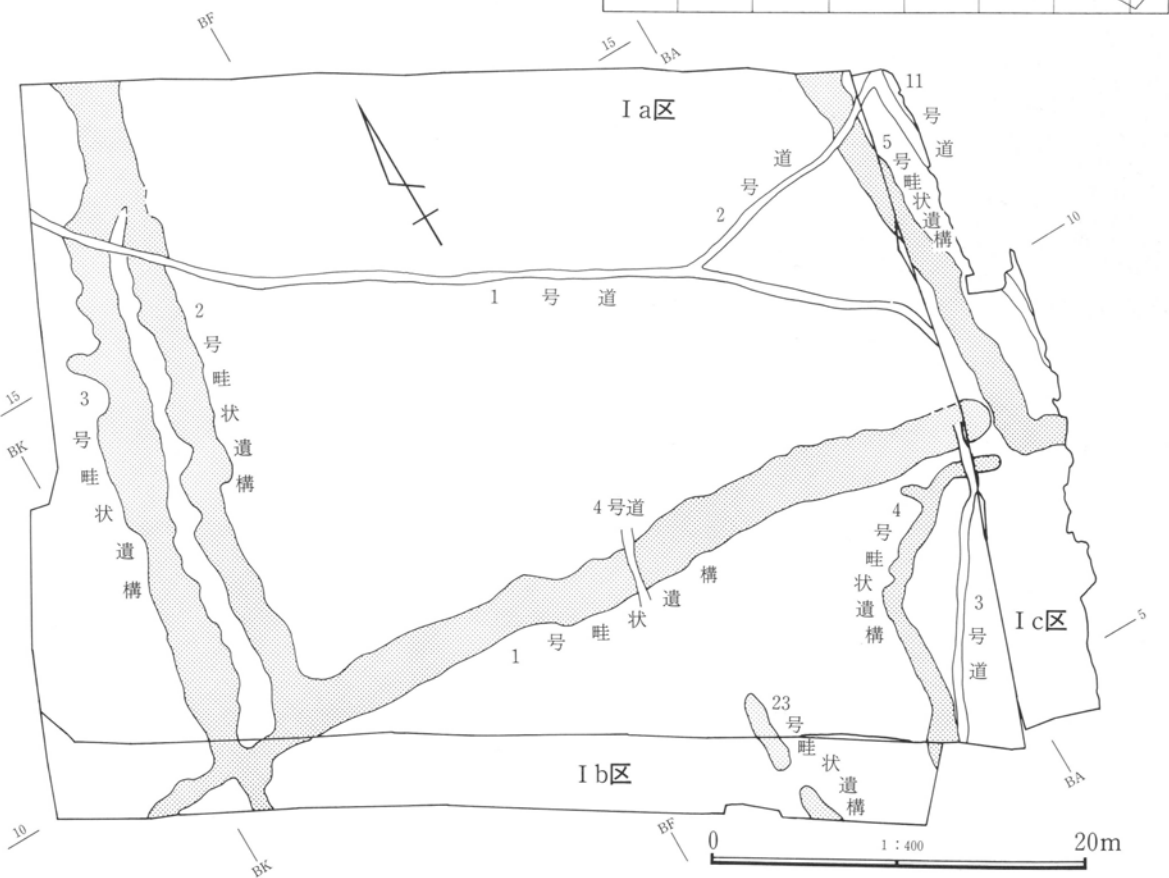


図69 吹屋犬子塚遺跡 I区 FP下面全体図



写真80 吹屋犬子塚遺跡 I a区FP下面全景（北西から）

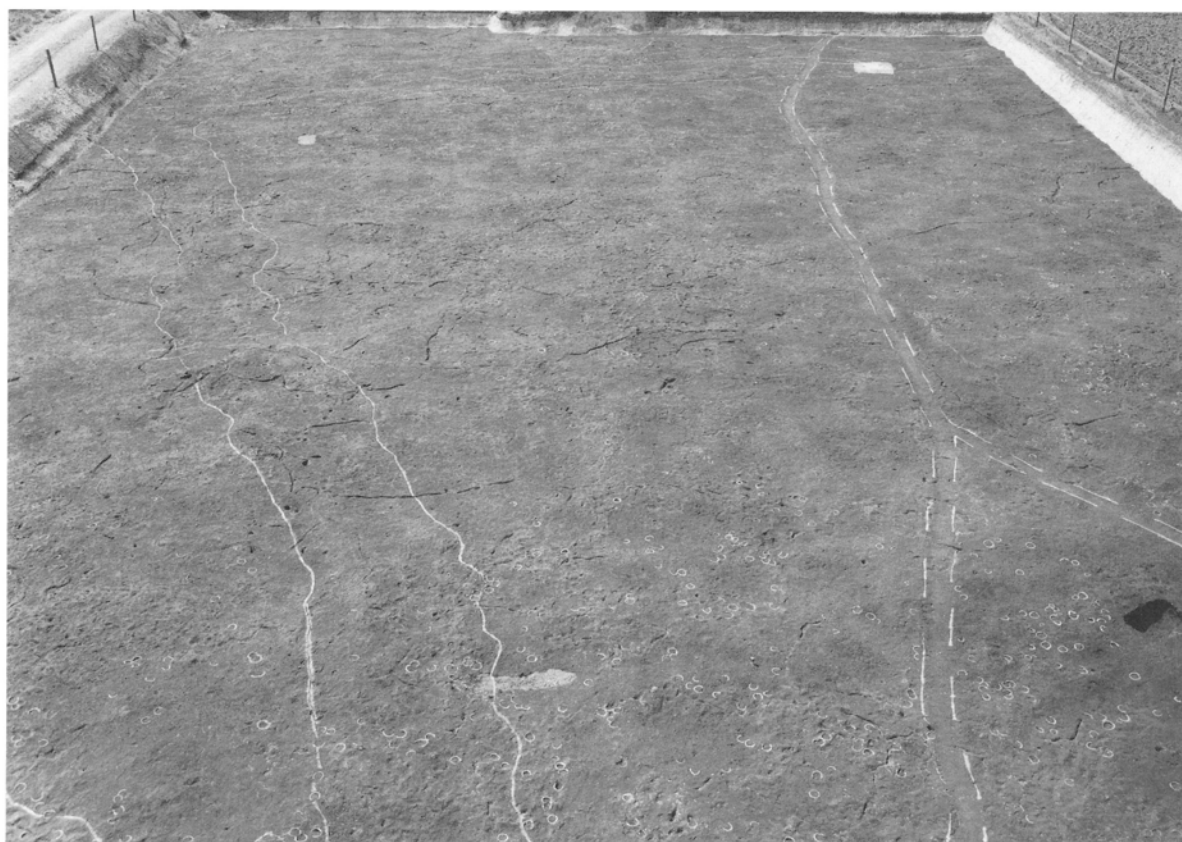


写真81 吹屋犬子塚遺跡 I a区FP下面全景（南東から）

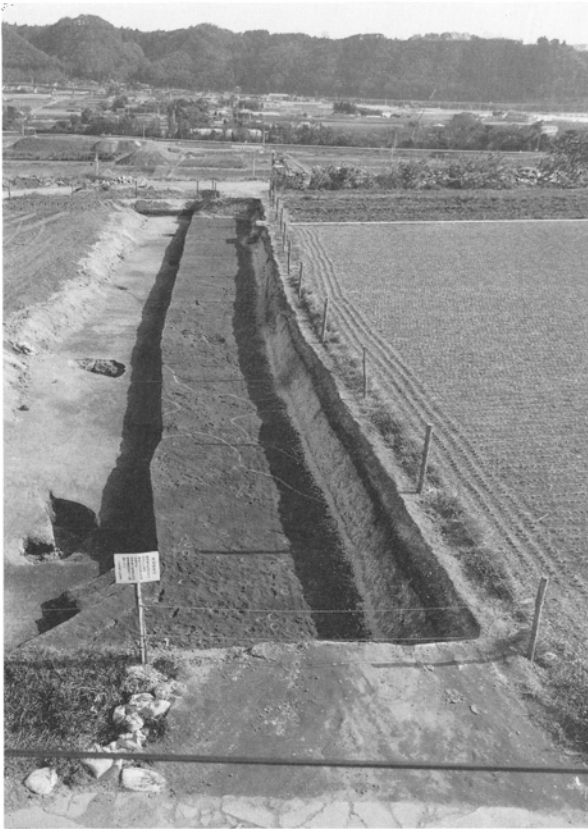


写真82 I c区FP下面全景（北から）



写真83 I b区FP下面全景（北西から）

して走っている点も注目される。このため、この部分ではあたかも2本一組で設置されているようにも思えるが、畦状遺構の新旧の問題もあり、もともと2本一組を意図していたものかどうかは明らかではない。

なお、3号の西側裾部では、FA上面の調査で3号に平行して走る溝状の遺構が発見された。これは、畦状遺構の盛土を行うためにその脇を掘り下げた痕跡であると考えられる。畦状遺構の作り方に関わる遺構がほとんど見つからないので、この溝状遺構の存在は貴重である。

踏み分け道は1～4号と11号の5本がある。ただし、1号東端と3号北端とは、共にI a区とI c区との境にかかり、不明瞭になってしまっている。それぞれの方向から考えて、この2本が接続している可能性は高い。

1号は表面の硬化・へこみが著しく、頻繁に使用されていた道と考えられ、しかも、その延長と考え

られる道がより西側の調査区に延々と現れることから、この遺跡内を東西に走る幹線道であると考えられる。この道は、2号・11号道を経由して、段丘崖の下へとつながっていくものと思われる。

1号畦状遺構（図70～73、写真84～89・92）

I区中央やや南を東西に走る。ほぼ直線状で、その走行方向はN-85°-Wである。調査区東南隅で2号・3号畦状遺構とほぼ直角に交差する。東側はI c区にかかったところで終端となり、5号とは接合しない。

盛り土のピークが約1mの間隔をおいて2列あり、2本の畦状遺構がほとんど間をおかずと並行しているような形態をしている。ここでは南のものを1A号、北のものを1B号と名付けて区別する。横断面(D～D')では、1A号を一旦削り込んだ後に1B号を盛っていることが確認でき、この2本は時期を違えて作られている可能性が強い。2号との接

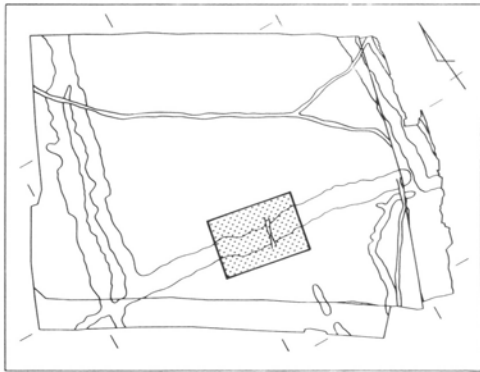


図70 吹屋犬子塚遺跡1区1号蛙状遺構中央部、4号道



写真84 1号蛙状遺構中央部（西から）

合部より西側では幅が半減しているが、その位置・方向から考えて、西側に延びているのは1A号であり、1B号は2号に接合する部分で終わっていると考えられる。幅は2本が並行する1a区部分で2～3m、1A号のみとなる1b区部分では約1mである。高さは比較的高く、最も高いところで約15cm

ある。G～G'横断面では1A号の方が高くみえるが、他の場所では1B号が高いところもあり、どちらがより高いということはない。

IV層中には炭化物や焼土が多くみられる。地表面のIVa層は厚さが10cmに近いところもあり、多くの炭化物、焼土を含んでいる。これらの炭化物には、

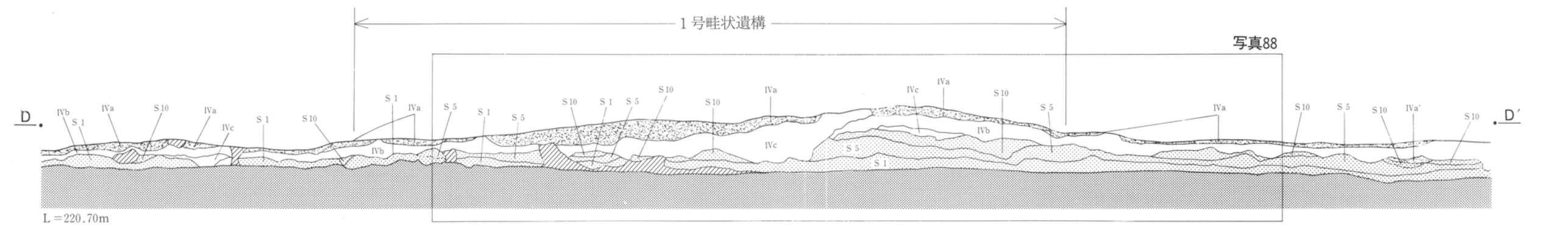
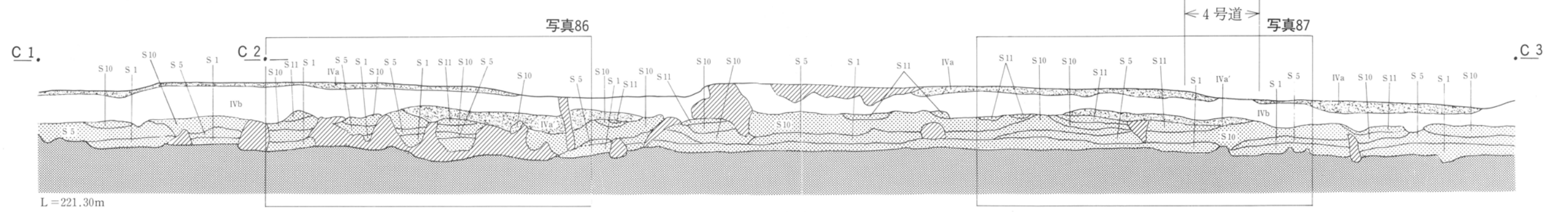
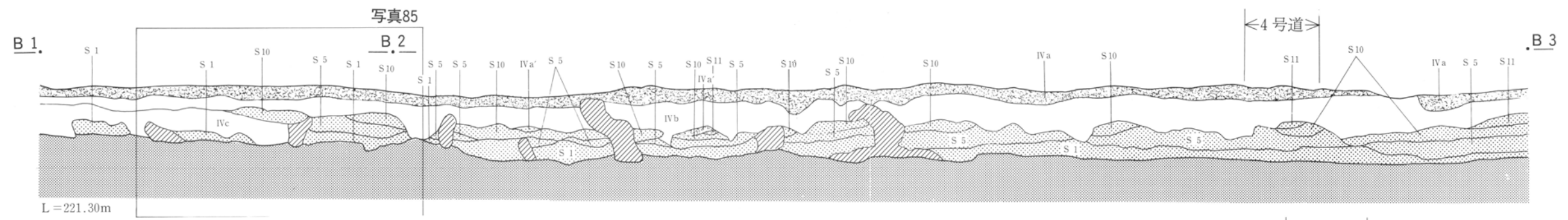
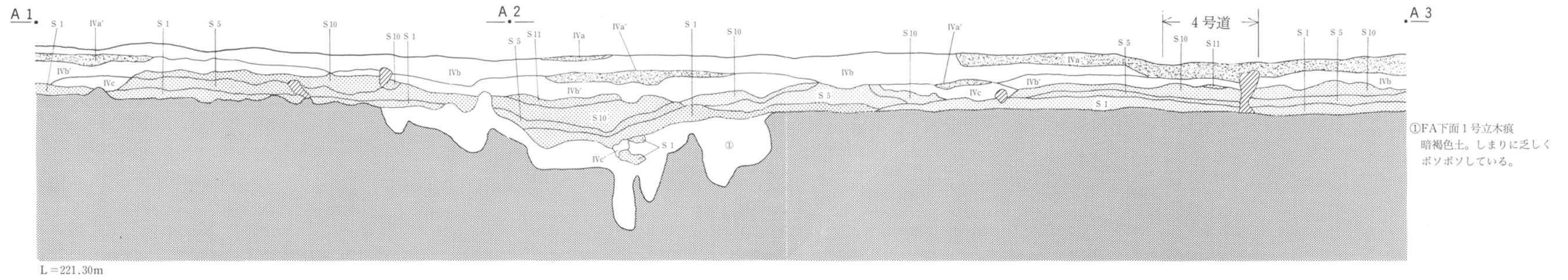


図71 吹屋犬子塚遺跡 I 区 1号畦状遺構断面図

笹類の根と思われるものが目立った（第4章第6節「炭化材の樹種」参照）。

この畦状遺構は、後述する2・3・5号と同様にほぼ直線状の伸び、しかもややずれはあるもののその方向が東西南北を意識しているようにみえる。さらに、この4本に囲まれる区画は、北側が発掘区外

に延びるために不明ではあるが、東西南の3辺はほぼ長方形をなすように配列されており、互いに密接な関係にあると思われる。現状では推測の部分が大きいですが、1～3号と5号とは、一定の計画性をもって配置されていた可能性は強いと考えられる。なお、この区画の東西幅（つまり2号と5号との距離）は、畦状遺構の心々で測って、約37～41mである。

また、発掘区の南西隅付近をみると、1号と3号が直角に交わったあと、さらに西・南に延びている。この2本の畦状遺構が、このまま直線的に延びてい



写真85 1号畦状遺構断面(1)



写真86 1号畦状遺構断面(2)



写真87 1号畦状遺構断面(3)

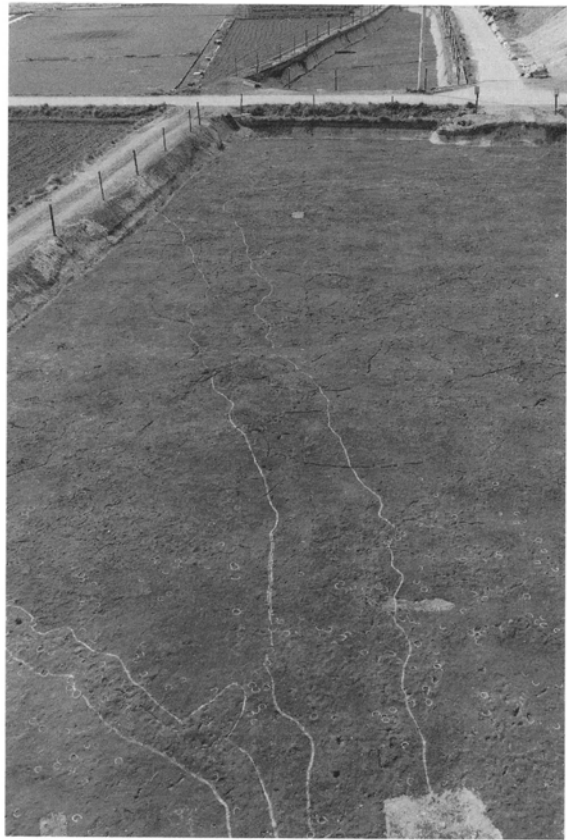


写真89 1号畦状遺構東端部 (東から)

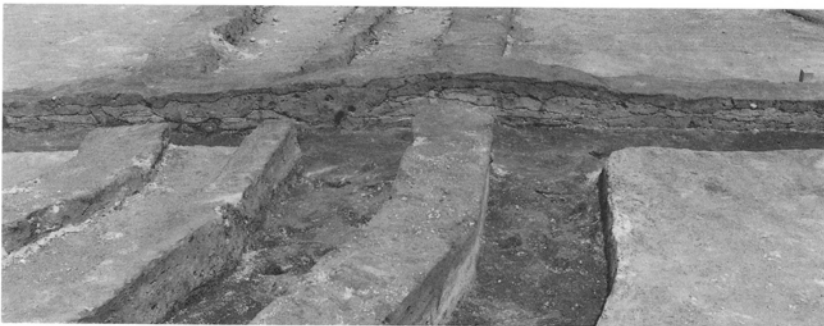


写真88 1号畦状遺構断面(4)

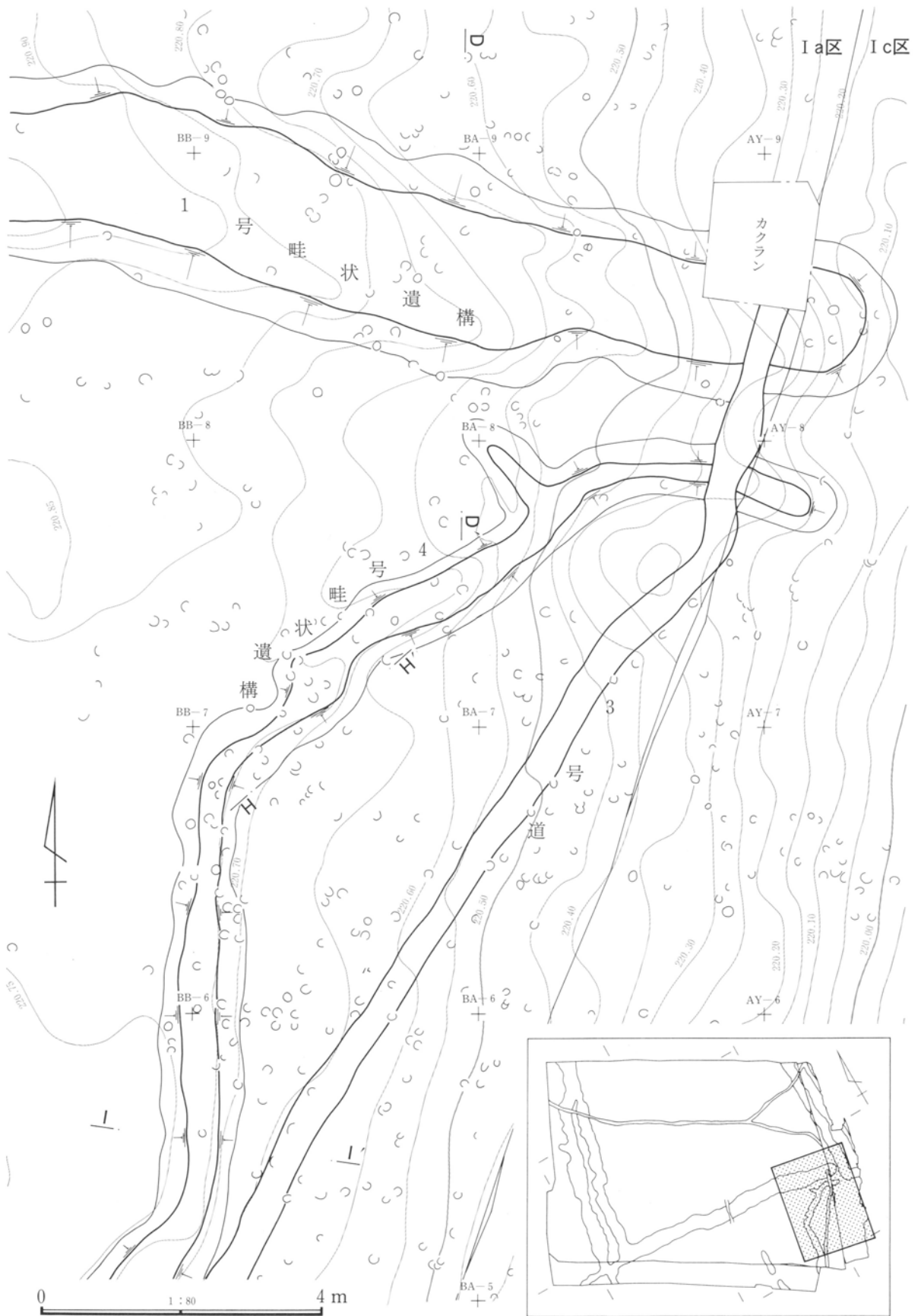


図72 吹屋犬子塚遺跡 I 区 1・4号蛙状遺構、3号道

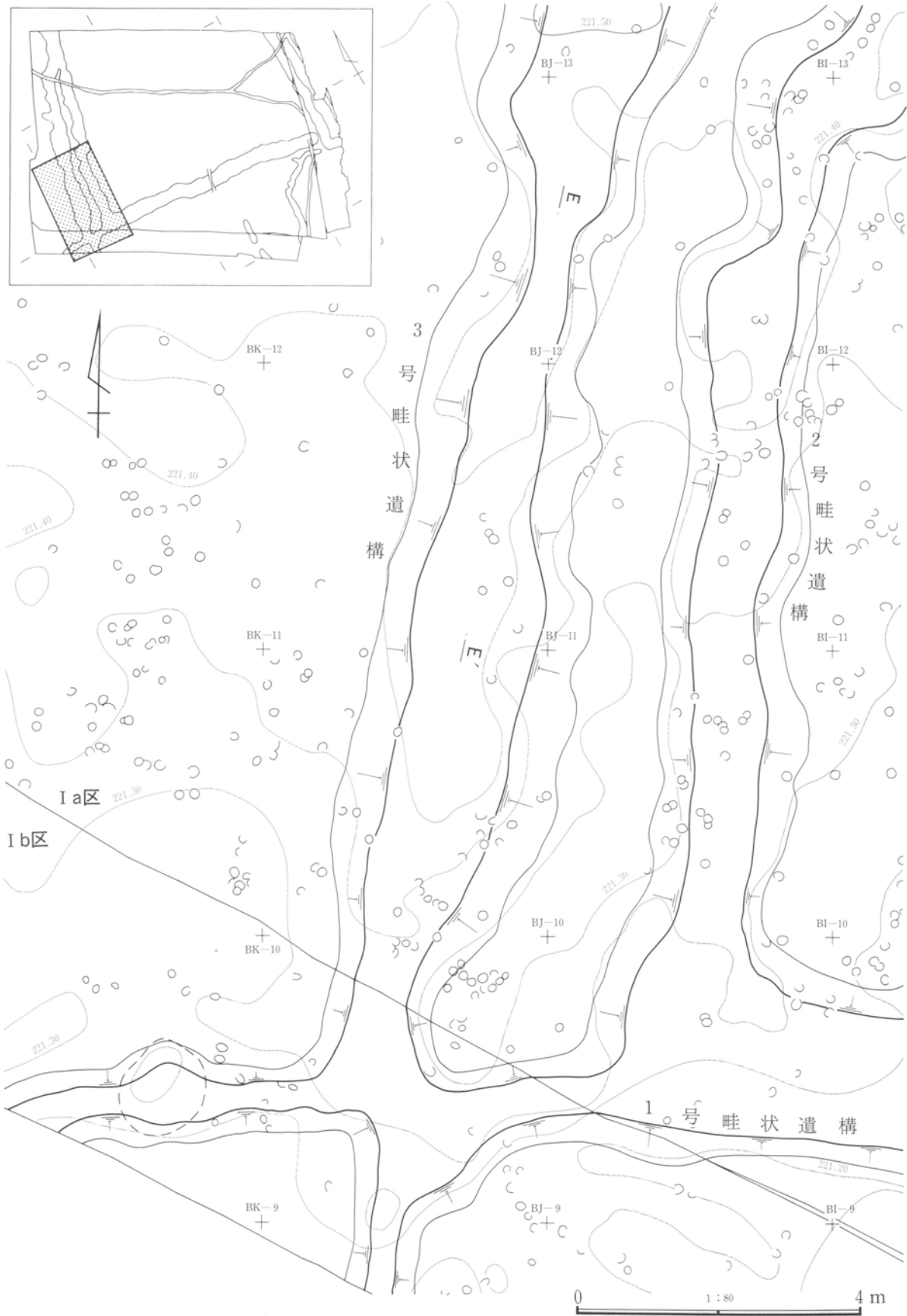


図73 吹屋犬子塚遺跡I区2・3号蛙状遺構南半部



図74 吹屋犬子塚遺跡I区2・3号蛙状遺構北半部

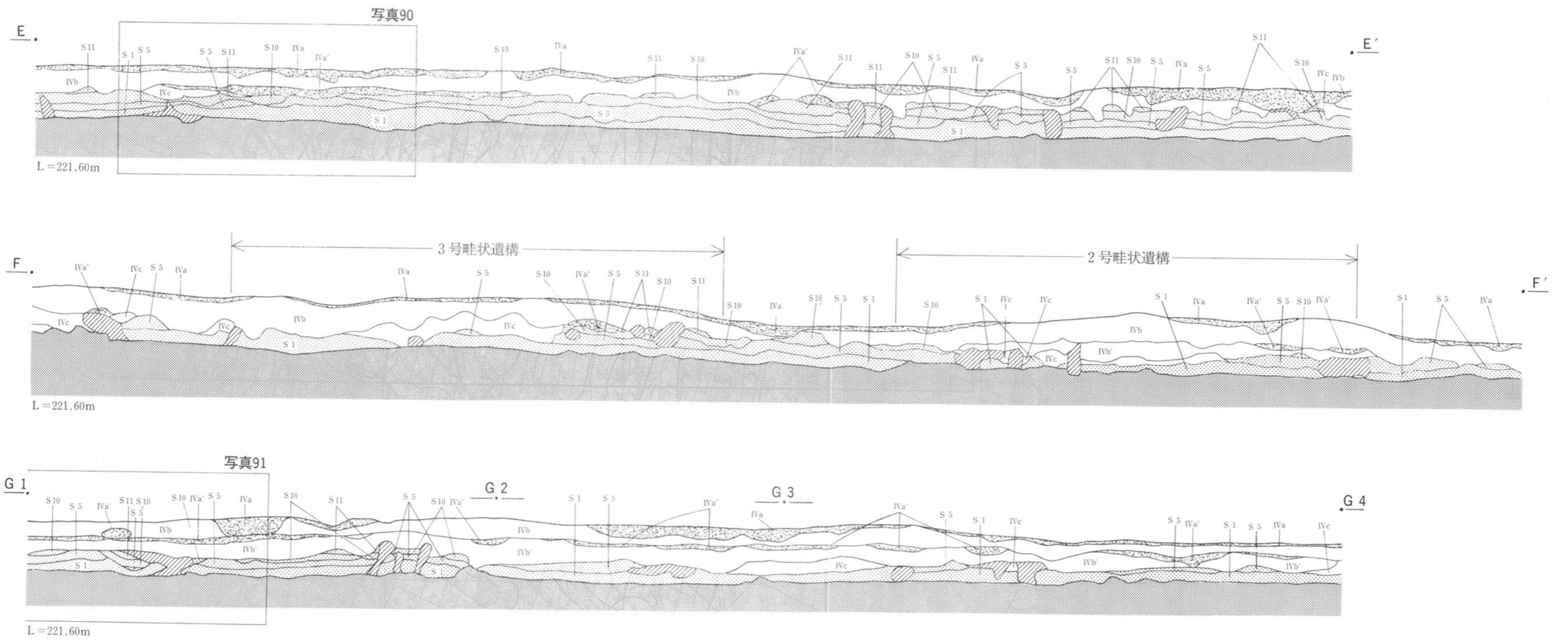


図75 吹屋犬子塚遺跡1区2・3号蛙状遺構断面図



写真90 2号蛙状遺構断面

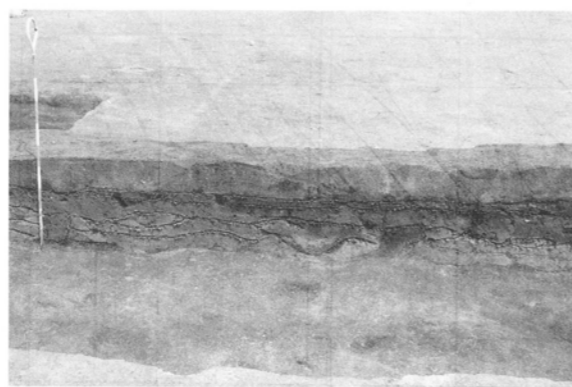


写真91 3号蛙状遺構断面



写真92 1・2号畦状遺構交差部（北西から）

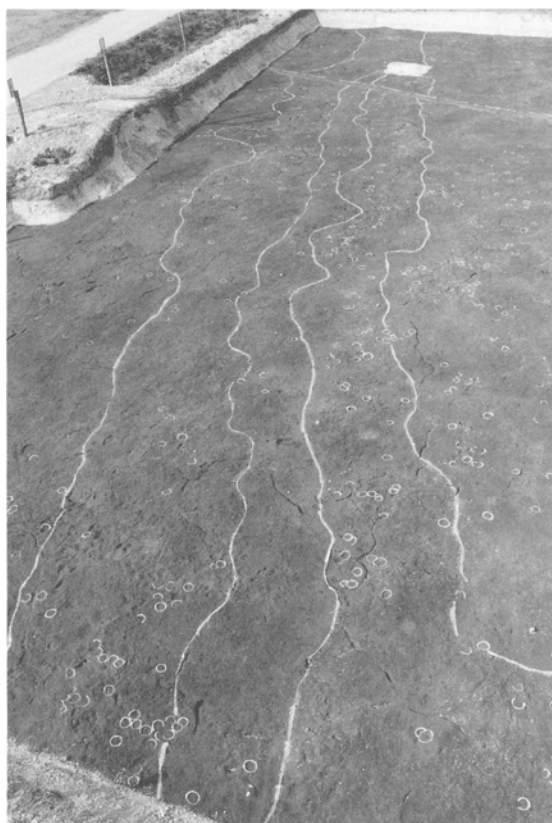


写真93 2・3号畦状遺構（南から）

るのだとすると、それらによって作り出されるこの区画も方形を基調としたものである可能性が強くなるが、発掘した範囲でみる限り（全体図・付図1参照）、この付近の区画にそこまでの整一性はみられない。全体としては東西南北という方向と方形区画という形を意識していることは否定できないものの、ズレや歪みがかかなり大きく、広範囲にわたる計画性を見出すことは困難であるといえよう。

2号畦状遺構（図73～75、写真90・92・93）

I区西側にあり、3号と平行して走る。3号との距離は、心一心で測って3～4mである。1号とはほぼ直角に接続し、以南には延びていない。Ia区北西隅付近で3号と合流し、さらに北へと延びるが、この3号との合流部以北は、2号の延長と考えるべきか、あるいは3号の延長と考えるべきか、いずれとも決め難い。ここでは仮に2号の延長として扱う。方向はN-10°-Eである。幅は1.5～2.5m、3号との合流部以北では広がって2.5～3mである。高さ

は低く、5cm前後のところほとんどである。

1・3・5号と組になって、長方形の区画を作っていると思われる（1号畦状遺構の記述参照）。

IVa層は厚く、2層みられる。縦断面(G1～G4)をみると、この部分では上からIVa→IVb→IVa'→IVb'→IVc→FAと堆積しており、IVa・IVbの組み合わせが2回繰り返されることに気付く。このIVa・IVa'層といった炭化物を多く含む層が野焼きなどの焼き払いに伴うものであるとすれば、この部分ではそれが少なくとも2回行われ、上のIVa・IVb層は1回目の野焼きの後に盛られた土という解釈が可能であり、それが顕著にみえる点が貴重である。

3号畦状遺構（図73～76、写真91・93）

I区西端にあり、2号に並行している。南側で1号とはほぼ直角に交差し、北側では2号と合流する。1号との交差部以南は幅が半減しているが、これは1号の2号交差部以西と同様であり、区画によって畦状遺構の幅に顕著な差がみられることになる。幅

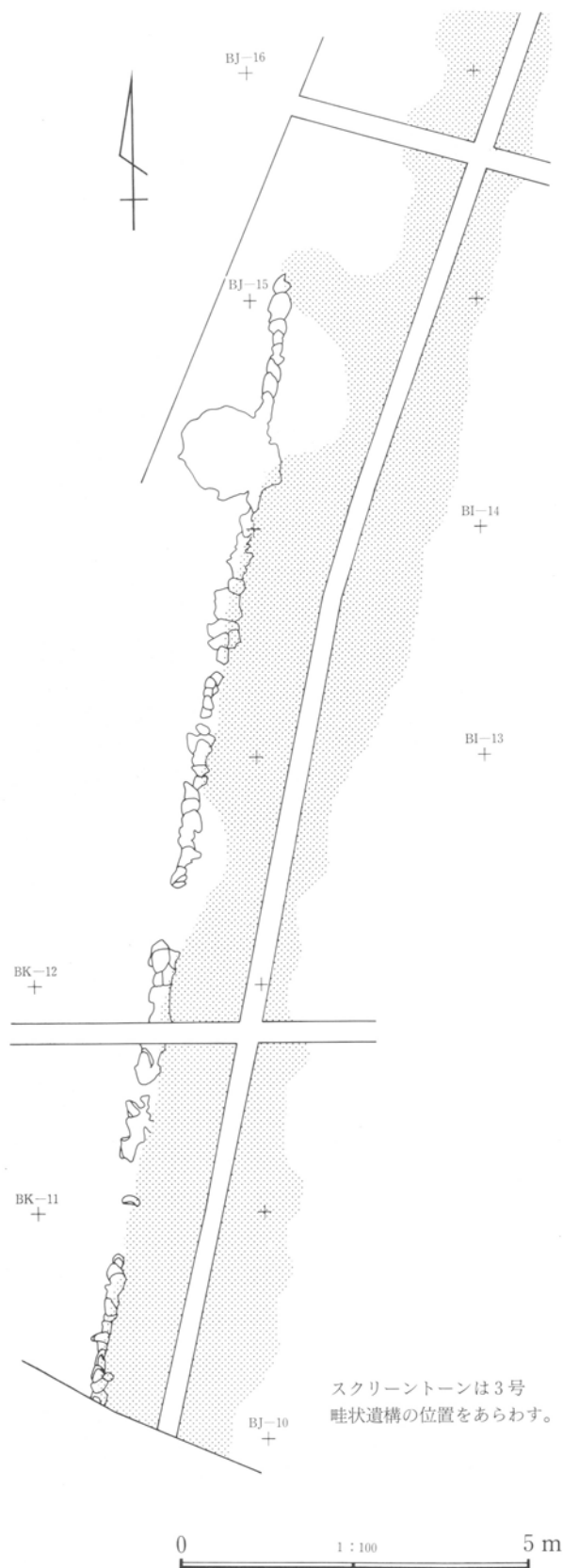


図76 吹屋犬子塚遺跡Ⅰ区
3号畦状遺構西側の溝状遺構



写真94 3号畦状遺構西側の溝状遺構（北から）

は1.5～3mで凹凸が比較的激しい。南端の半減している部分では、幅は0.9mほどになる。高さは低く、5～10cmである。

1・2・5号と組になって、長方形の区画を作っていると思われる（1号畦状遺構の記述参照）。

IVa層は2層みられるが、下層のIVa'層はFA上面に張り付くように存在する。

この畦状遺構の周辺部においてFA上面の精査を行ったところ、西側に並行する溝状遺構が1本みつけた(図76)。FP下面から掘られた溝の底面部分であると思われるが、FP下面では同一場所に溝は発見されなかったため、FP降下時には完全に埋まってしまっていたと考えられる。幅は約25cm、深さはごく浅く、痕跡程度の残存度でしかないが、底面の形状は概ね皿状のへこみが連続するような形であり、鋤や鍬などの農耕具によって掘られたものであろう。その位置が3号畦状遺構の西裾部に並行していることから、この溝状遺構は3号畦状遺構と深く関わっていることは確実であり、そのためこの遺構は、本来溝として掘られたのではなく、畦状遺構の盛り土のための土を掘り取った痕跡なのではないかと思われる。もちろん、この3号畦状遺構以外で

は同様な溝状遺構は発見されていないので、断定することはできないが、畦状遺構の構築に関わる可能性が高い遺構である。

4号畦状遺構 (図72・77、写真95)

I a区南東隅付近にある。南側は発掘区外に延びてしまうのでその延長は不明であるが、北側は何度か屈曲しながら北東方向に延び、3mほど1号畦状遺構に並行した後、I c区にかかったところで端部となる。I 区の他の畦状遺構に比べて方向が不整なので、この遺構のみ性格を異にする可能性が強い。ただし、4号畦状遺構の東西両側の等高線を比べてみれば明らかなように、その位置が傾斜の変わり目に位置していることは注目してよいと思われる。

1～3号に比べて幅が狭く、0.8～1mしかないが、高さは10cm程度あり、比較的是っきりしている。H～H'セクションは遺構の頂部を通過していないが、断面にIVa'層が薄くあるのがみえ、この上にあるIVb'層が畦状遺構の盛土であると考えられるが、横断面(I～I')ではIVb層そのものが薄く、盛土がはっきりしない。この付近は段丘崖に近く、この畦状遺構の東側は傾斜が強くなり始めており、そのため表土が流されているものと思われる。

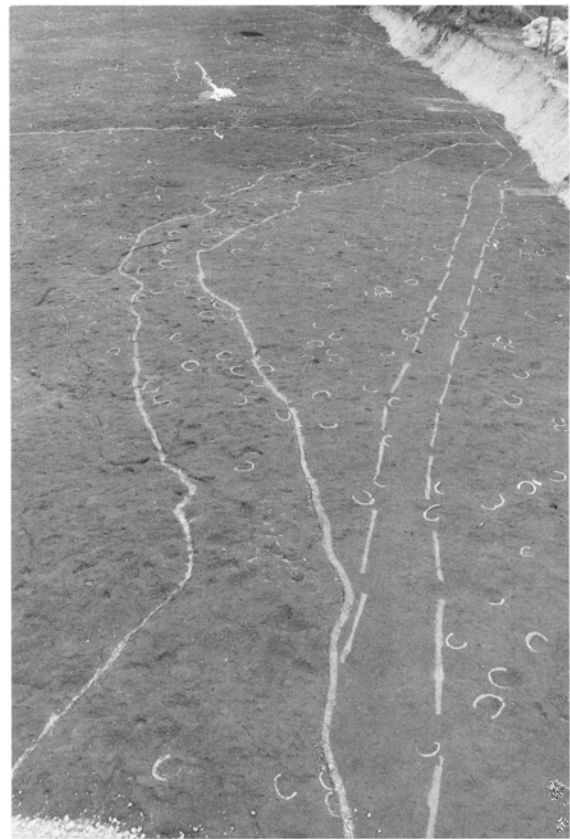


写真95 4号畦状遺構・3号道 (南西から)

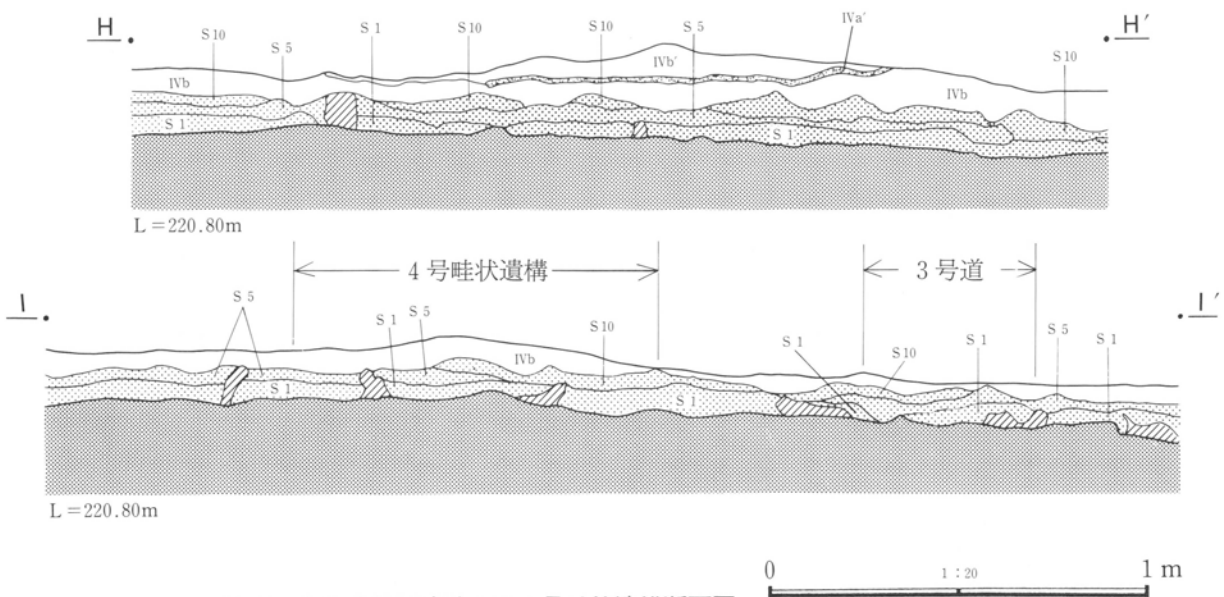


図77 吹屋犬子塚遺跡 I 区 4号畦状遺構断面図

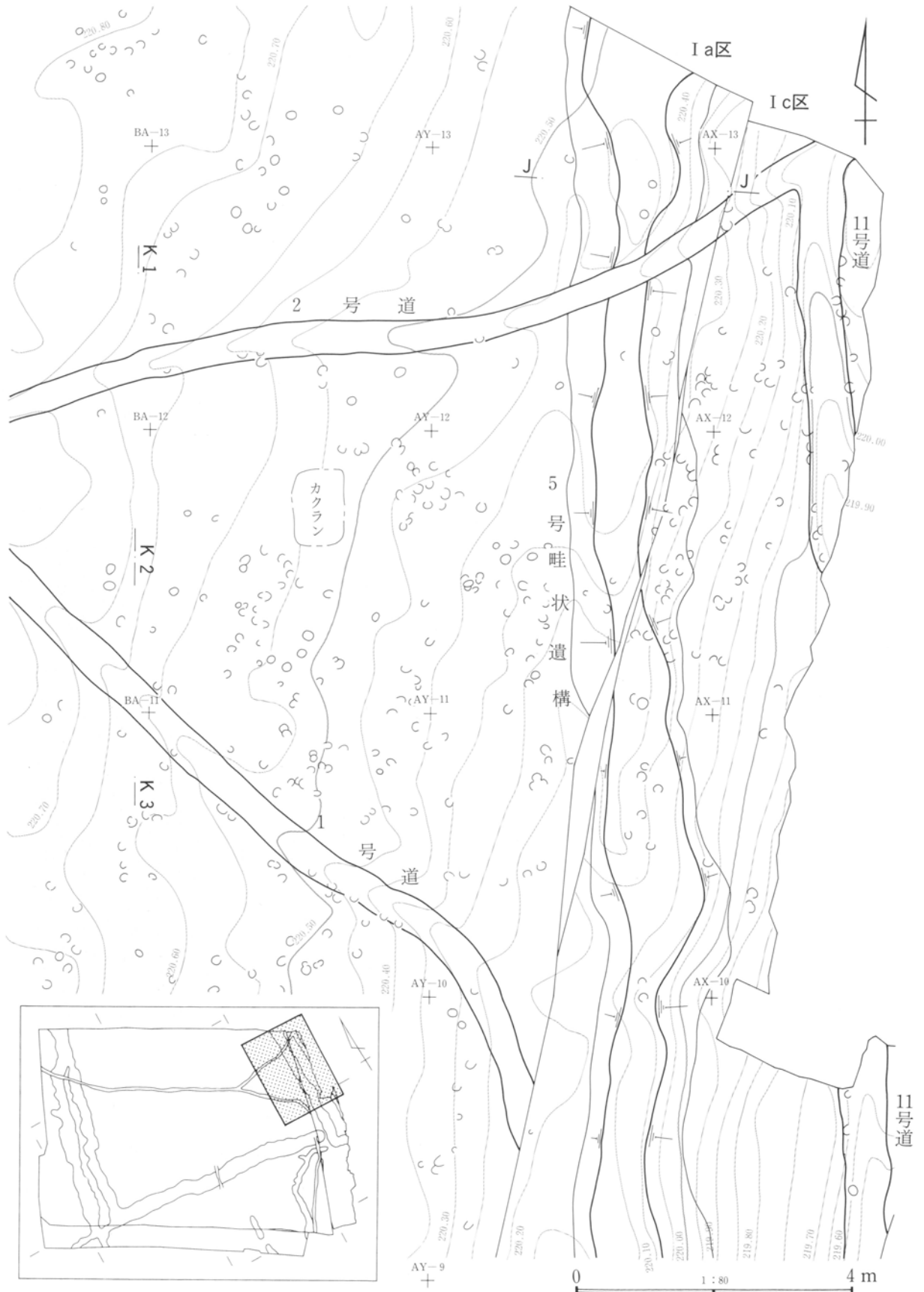


図78 吹屋犬子塚遺跡I区5号畦状遺構、1・2号道

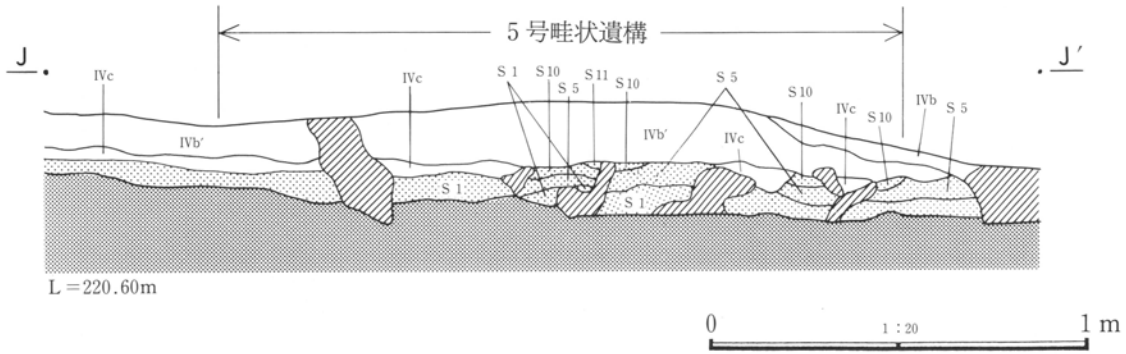


図79 吹屋犬子塚遺跡 I 区 5号畦状遺構断面図



写真96 5号畦状遺構断面

5号畦状遺構 (図78・79、写真96・97)

I 区東端付近にある。I a区北東隅からほぼ南北方向にのび、1・4号の東側で東へと方向を変える。1・4号とは接続していない。ほぼ直線状であり、また、その方向は東西南北を意識しているようにみえる。幅は1.5~2 mで、中規模な畦状遺構である。高さは10cm程度である。

1・2・3号と組になって、長方形の区画を作っていると思われる(1号畦状遺構の記述参照)が、この3本に比べ5号の幅はずっと狭く、やや異質の感は免れない。また、南側で東へと直角に曲がっているが、ここの区画がどのようなものであったのかは、幅約2 mしか残っていないので不明である。

この畦状遺構の東側は3~5 mほどで段丘崖にかかっていたはずで(実際には近年の削平のために段丘崖は削られ、現状では約2 mで崖となってしまっ



写真97 5号畦状遺構 (I c区・北から)

ている)、ちょうど畦状遺構の部分で傾斜が強くなり始めており、4号と同じように傾斜の変わり目に位置していることは注意すべきであろう。

また、段丘崖を上り下りする道と考えられる11号道跡が、この5号畦状遺構と並行している点も注意される。

断面をみると、IVa層はきわめて少なく、図示した横断面(J~J')ではまったくみられない。

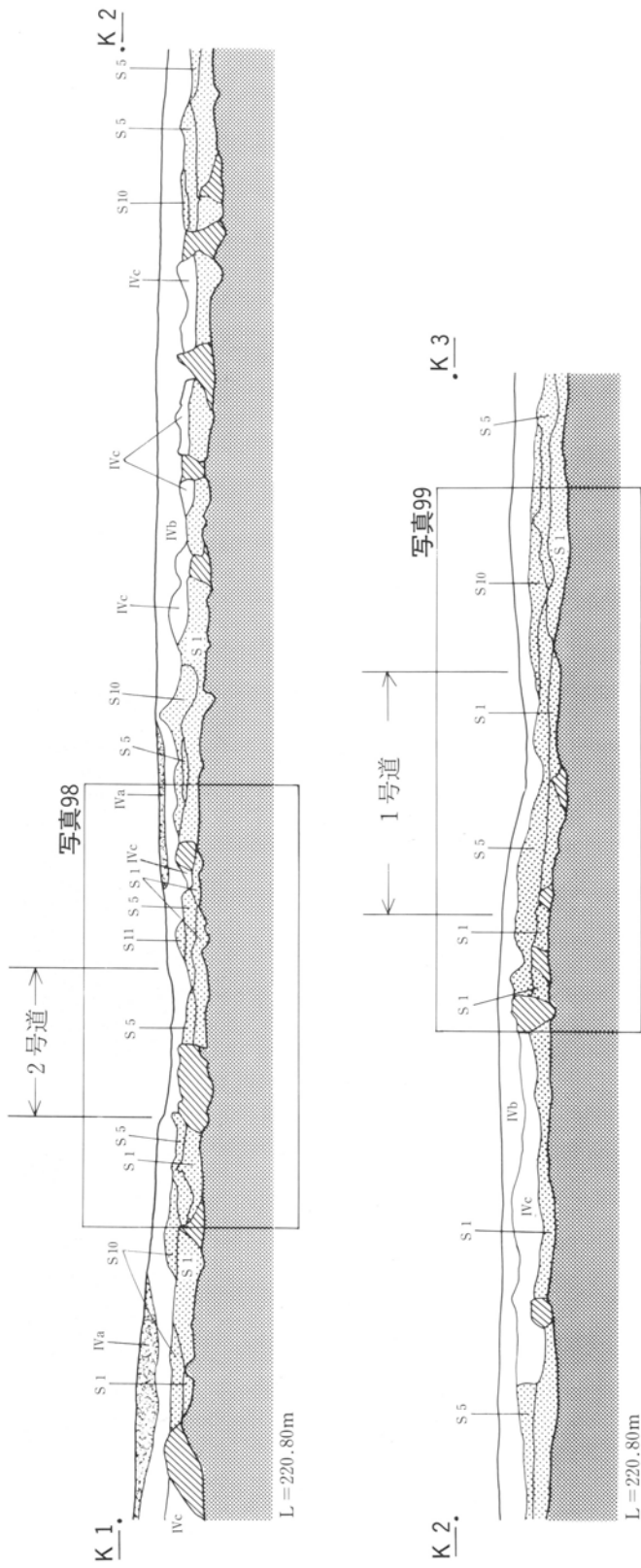


図80 吹屋犬子塚遺跡 I 区 1・2号道断面図



写真98 2号道断面

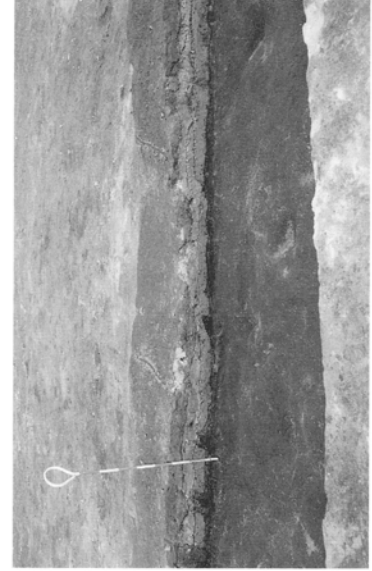


写真99 1号道断面

23号畦状遺構 (図69)

発掘区南東隅にある。高さは低く、しかも途中で途切れており、不明瞭な溝状遺構である。I a区の調査時にはその存在に気付かなかったので、その部分は図上復元した。

幅は約1mあり、長さは約8m確認できたが、北から4.5mのところでは1.5mほど途切れている。このように途切れた畦状遺構は、国道17号線の調査区でも見つかっておりこれが唯一のものではないが、その位置なども考慮すると、この畦状遺構が区画施設として機能していたものかどうかは疑わしいと言わざるをえない。ただし、その方向が南北方向にかなり近づいているのは、I区他の溝状遺構と同様であり、注目してよいと思われる。

1号道跡 (図74・78・80、写真99・100)

中央やや北寄りを北西—南東方向に横切っている。幅は約0.8mでくぼみが著しく(横断面K2～K3・図80)、表面は硬化している。

ちょうどBB-12グリッド杭の部分で2本に分かれるが、I a区の調査時には、緩やかな角度で分かれている南側の道を1号の延長と考え、急角度で分かれている北側の道を分岐した別の道として2号と命名した。しかし、1号の延長と考えた道は、I c区の調査ではまったくみることができなかった。ちょうどI a・I c両区の境にかかっているため、おそらくその部分で急角度にまがり、南側の3号道へと接続するものと考えられる。この3号道は、後述するように、路面のへこみが顕著ではなく、あまり頻繁に使われた道とは思えない。これに対し、分岐点より西の1号道跡は路面のへこみが著しく、よく使われたものであることがわかる。この点からみると、3号道は1号道の延長としてはふさわしくなく、2号道の方がよりふさわしいといえることができる。2号道とその延長にある11号道は路面のへこみが顕著で、よく歩かれていることがわかるからである。つまり、1号、2号、11号が一連の道であると考えられるのである。

III・IV・V区といった、より西側の調査区をみると、この1号道の西側の延長と考えられる道跡がずっと続いている。幅や路面のへこみ・硬化の状態、方向などが類似しているため、1号の延長と考えてまずまちがいないと思われる。つまり、この道の方向は、偶然にも国道353号線の計画路線の方向にほぼ一致しているのである。そのもっとも西側は、吹屋犬子塚遺跡V区9号道跡であり、総延長約300mにわ



写真100 1・2号道 (南東から)



写真101 4号道 (南から)

第3章 調査の成果

たって確認できたことになる。1号道跡は、遺跡内を東西に走る、この遺跡における幹線道で、2号・11号に接続して下位段丘へとつながっているのである。この道を主に使っていたのが人間なのか馬なのかは不明であるが、国道353号線の調査区の中では南北方向の顕著な道跡は犬子塚V区10号道、中原III区の道以外に見つかっていないので、この周辺では東西方向の移動が多かったことが分かる。この事実は遺跡の構造を考える上で重要である。

2号道跡 (図78・80、写真98・100)

B B-12グリッド杭のところで1号道から北に分かれる道である。先述のように、この道こそ1号の延長である可能性が強い。I a区北端部で11号道と接続するが、接続部の形状からみると、2号が鋭角的にまがって11号になるのではなく、2号自体はさらに北東方向へ伸びていくようである。

幅は0.8mであり、よく踏まれてくぼみが著しく、表面は硬化している。

3号道跡 (図72・77、写真95)

I a区南東隅付近にある。北側では4・1号の2本の畦状遺構をこえるが、より北側は攪乱とI a・I c区の境にかかってしまい、不明である。先述のように、その方向から考えて、1号道跡と接続する可能性が強いものと思われる。幅は約0.8m。

この道跡は、横断面 (I ~ I'・図77) にみるようにへこみが顕著ではなく、歩く頻度があまり高いとは思えない。

4号道跡 (図70・71、写真101)

発掘区中には踏み跡と考えられる痕跡が何本もみられるが、はっきり遺構としてとらえられるのは、1号畦状遺構をこえる1本のみであり、これを4号道とした。ただし、断面図 (A 1~A 3、B 1~B 3、C 1~C 3) に明らかなように、表面のへこみはほとんどない。遺構として把握できたのは、周囲の地表面と比べて表面が平坦であり、それが細い帯状になっているからである。

11号道跡 (図78、写真102)

I c区北東にあり、北端で2号道と接続する。幅は



写真102 11号道 (北から)

1 m、へこみが顕著で表面の硬化も著しい。等高線とは緩やかな角度で交差していくので、段丘崖を斜めに上り下りする道であると思われる。段丘崖は平均斜度約25°と急斜面なので (犬子塚遺跡 I 区 A X-8グリッド杭・標高219.8mと北中道II遺跡III区 S F-11グリッド杭・標高207.2mとの間で計算。ただし、犬子塚遺跡の東側は削平を受けているため、本来の斜度はもう少しきつかったものと思われる)、傾斜に直角に登るのは困難であり、そのため、このように斜めの道が設けられたのであろう。東側が削平されているため、下位段丘の白井北中道II遺跡III区の道跡と直接に接続するの否かは不明である。また、実際に崖部分をどのように上り下りするのかも不明であるが、11号と2号とが鋭角的に接続していることから考えると、ジグザクに道が設置されていた可能性が高いと思われる。白井北中道II遺跡IIIb区にみられる、等高線に平行する踏み跡状の痕跡は、そのジグザク道の一部であったと思われる。

〔II・III区〕

II・III区は農道を挟んで南北に隣接する。

この周辺はほぼ平坦な地形で、I区と同様、東から西に向かってごく緩やかに高くなっている。III区で最も高いのは北西隅付近の標高222.46m、最も低

いは北東隅付近の標高221.55mであり、その差はわずか90cmである。

畦状遺構はやや不明瞭なものも含めて3本見つかっている。このうち注目されるのは17号である。17号はIII区中央やや北よりを東西に走る畦状遺構で



図81 吹屋犬子塚遺跡II・III区F P下面全体図

第3章 調査の成果

あるが、その西半分はほぼ正しく東西方向に向かっている。しかもこの付近では、この畦状遺構を境に南北の地表面の高さが食い違っているのである（詳細は後述）。

踏み分け道は2本見つかっている。このうち7号はI区の1号の続きで、先述したように、さらにIV区の5・6号、V区の9号へと続いていくものと思われる。

17号畦状遺構（図82～85、写真104・105）

III区中央やや北寄りを東西に走る。幅1.5～3.5m、高さ約10cmである。西半部はほぼ正しく東西方向に向くが、7号道と重なる部分から東側はやや南に向きを変える。

横断面（図84のC 1～C 3、図85のD～D'、E～E'、F～F'）に明らかなように、畦状遺構の南北の地表面は高さにはっきりとした違いがある。この違いは西半部で特に顕著で、C 1～C 3では15cm、D～D'では20cmほどある。同様な段差はF A下面にもみえる（同一地点の横断面参照）ので、旧地形が反映したものであると思われる。17号畦状遺構はその段差の部分に設けられたものと考えられる。しかし、F P下面にみえる段差はF A下面のそれにくらべて大きく、しかも明瞭である（C 1～C 3など参照）。そのため、単に旧地表を反映しただけではないと考えられる。そこで、F P下面からF A下面までの土層の厚さをC 1～C 3でみてみると、畦状遺構の北（断面図左側）で13～15cmあるのに対して、南（同右側）ではその半分ぐらいしかない。F P下面の段差がより顕著なのは、この土の厚さの違いに起因しているのである。厚さの違いが生じた直接の原因は明らかにしがたいが、南側の方がF A層の残りが悪いことからより深く攪乱を受けていることは明らかである。畦状遺構を境にして、土地を利用

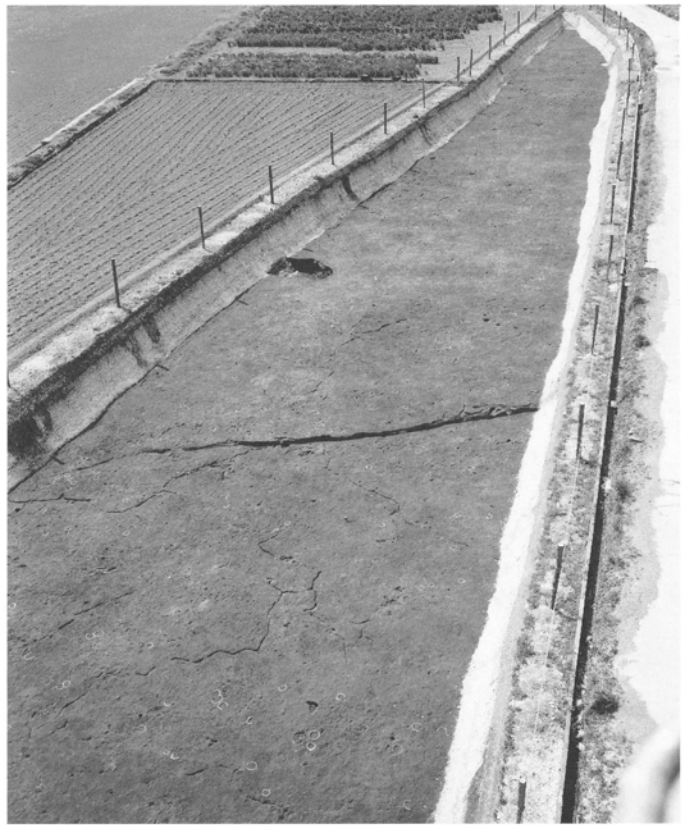


写真103 吹屋犬子塚遺跡II区F P下面全景（東から）

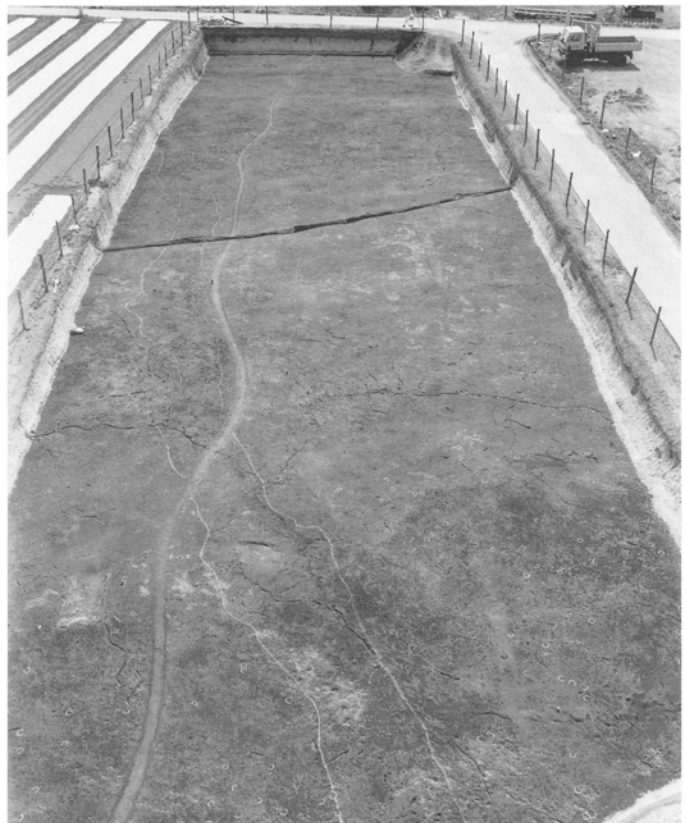


写真104 吹屋犬子塚遺跡III区F P下面全景（北西から）

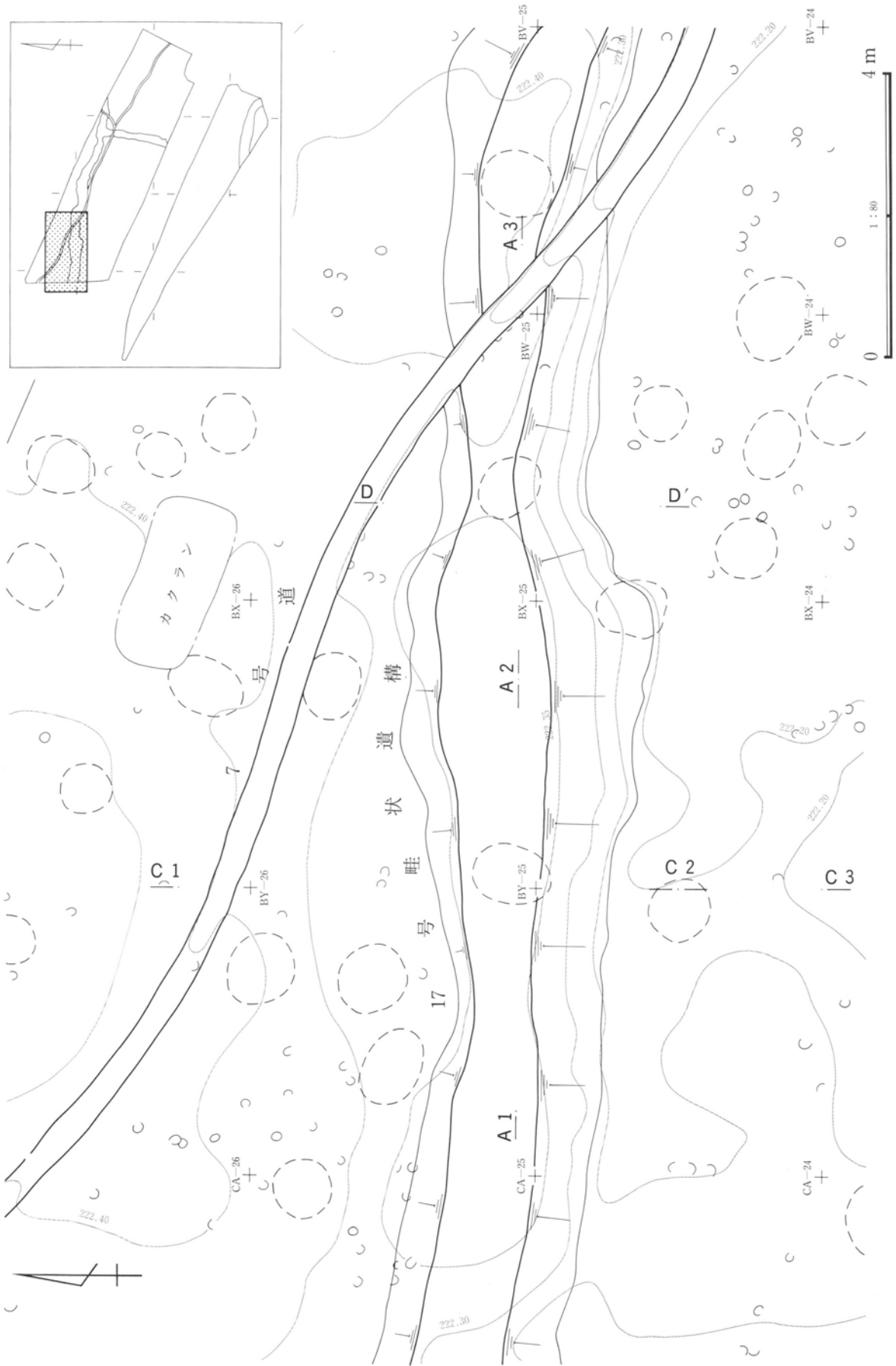


図82 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区17号蛙状遺構、7号道西半部



図83 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区17号畦状遺構、7号道東半部

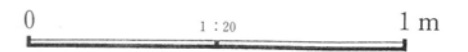
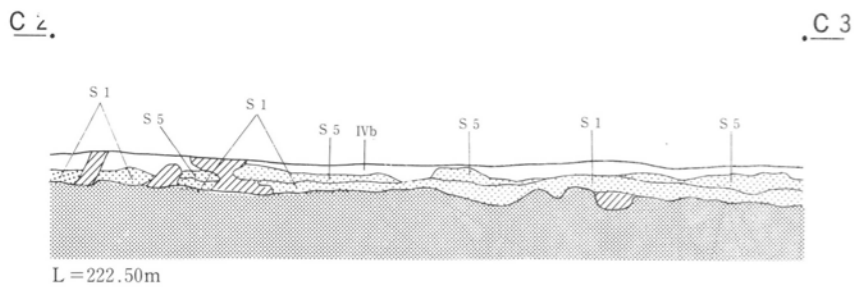
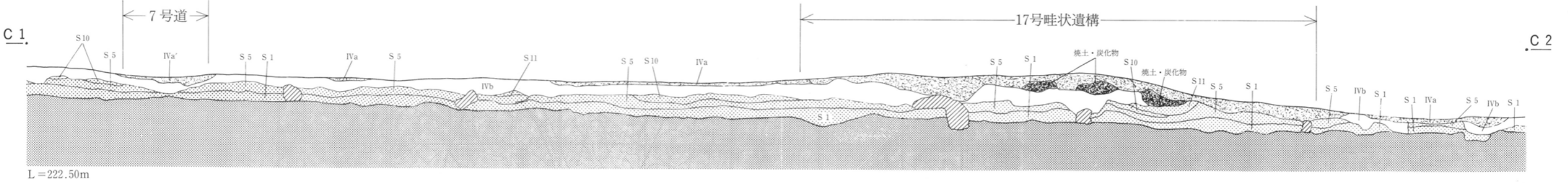
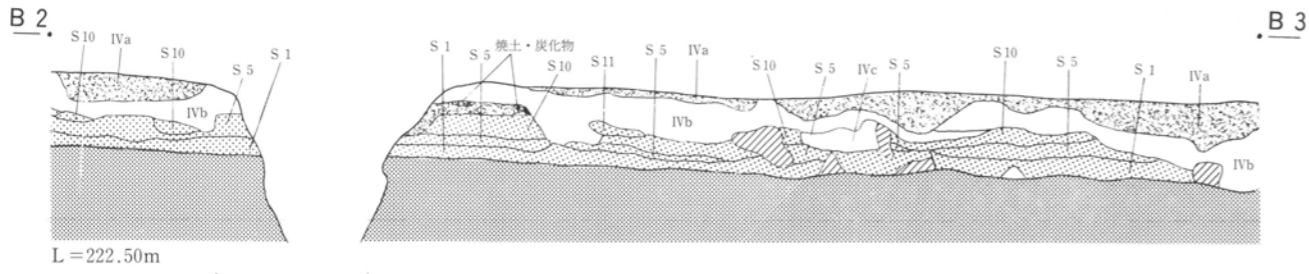
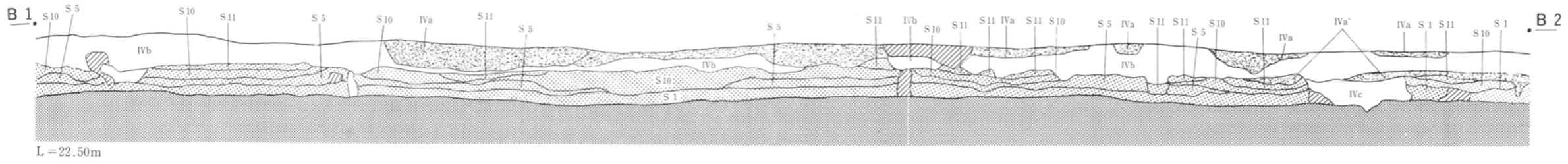
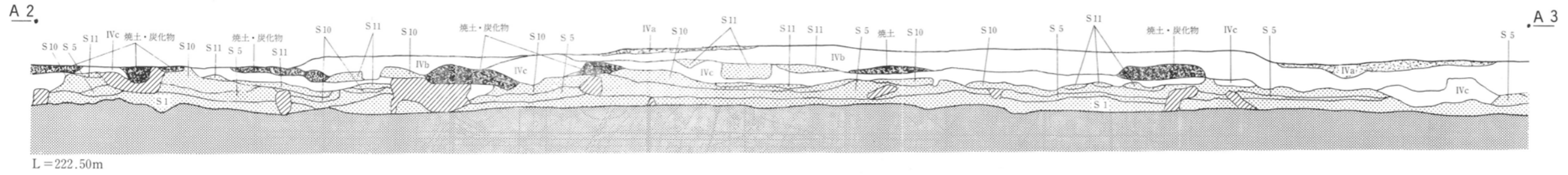
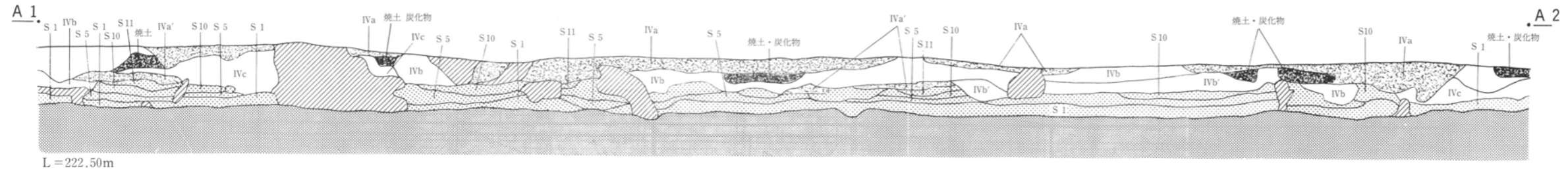


图84 吹屋犬子塚遗迹Ⅲ区17号蛙状遗构断面图 (1)

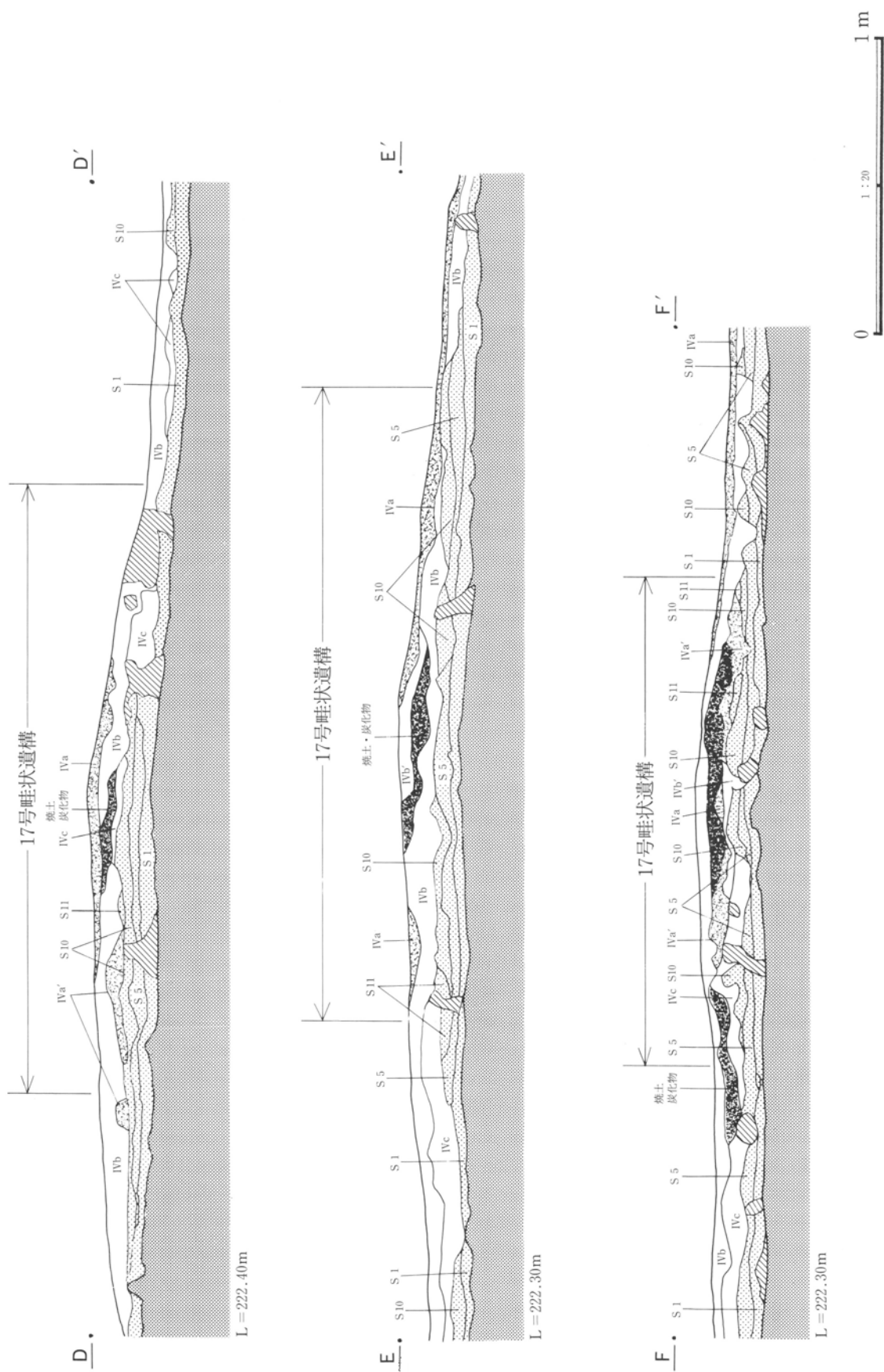


図85 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区17号畦状遺構断面図(2)



図86 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区18号蛙状遺構

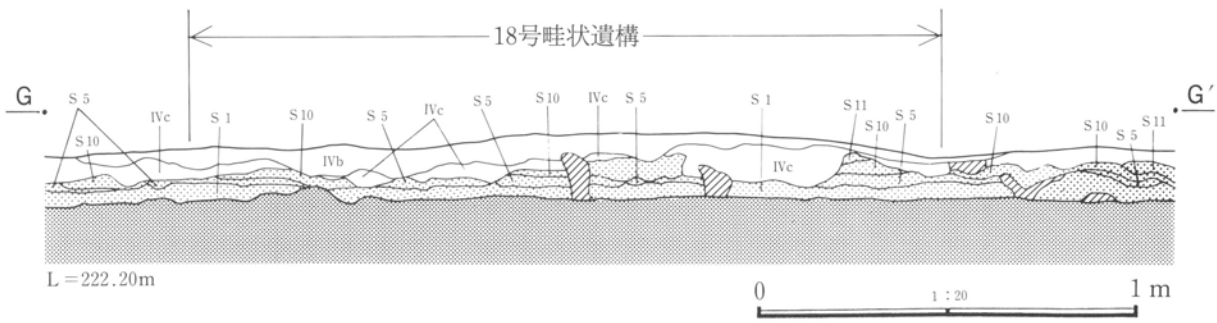


図87 吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区18号畦状遺構断面図

する場合に何らかの違いがあったことは事実であり、この事実は畦状遺構の機能を考える上で注意すべきことであると思われる。ちなみに、畦状遺構の部分のFA層の残りはきわめてよく、攪乱をほとんどうけていないことが分かる。

また、この畦状遺構には焼土・炭化物が多く含まれていることも特徴である。図84の縦断面(A 1～A 3、B 1～B 3)にみるように、上下2層みられる。



写真105 17・18号畦状遺構、7・8号道（南西から）

18号畦状遺構（図86・87、写真105）

Ⅲ区中央やや東寄りに南北に走る。17号畦状遺構とはその東端付近でほぼ直角に接続する。幅は1.5～2.0mあるが、高さは5cm程度で高まりははっきりしない。南側は発掘区外に延びていくのに、Ⅱ区にまったくみることができないのは、そのためであろう。おそらく農道下でそれとわからないほど不明瞭になってしまうものと思われる。

炭化物・焼土などはほとんど含まれていない。

7・8号道（図82・83・86、写真104～106）

7号道の方向はちょうど発掘区の長軸方向に一致しており、東端から西端まで続いている。Ⅰ区の1号、Ⅳ区の5・6号、Ⅴ区の9号と接続するであろう



写真106 7号道（南東から）

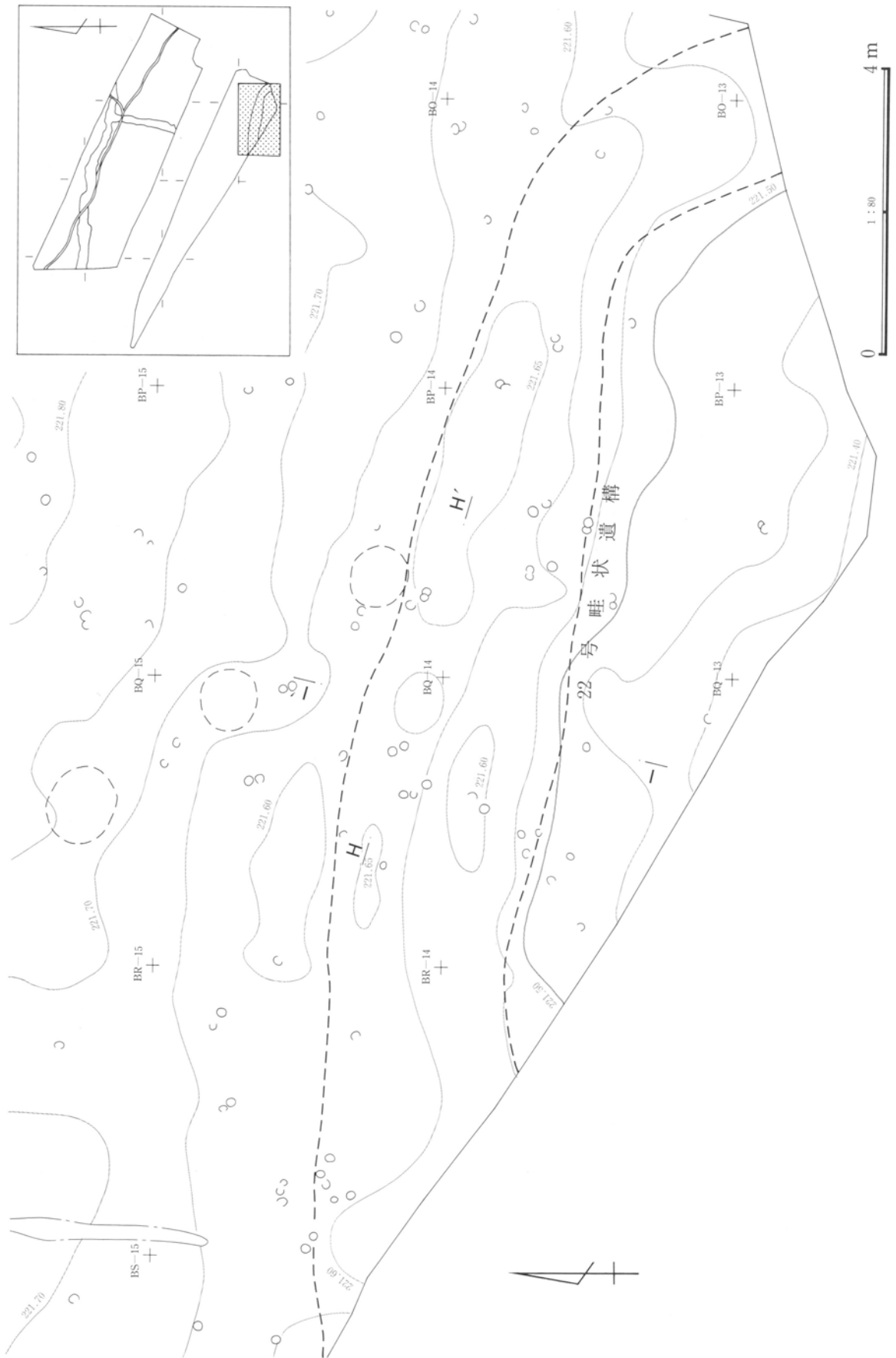


図88 吹屋犬子塚遺跡II区22号蛙状遺構

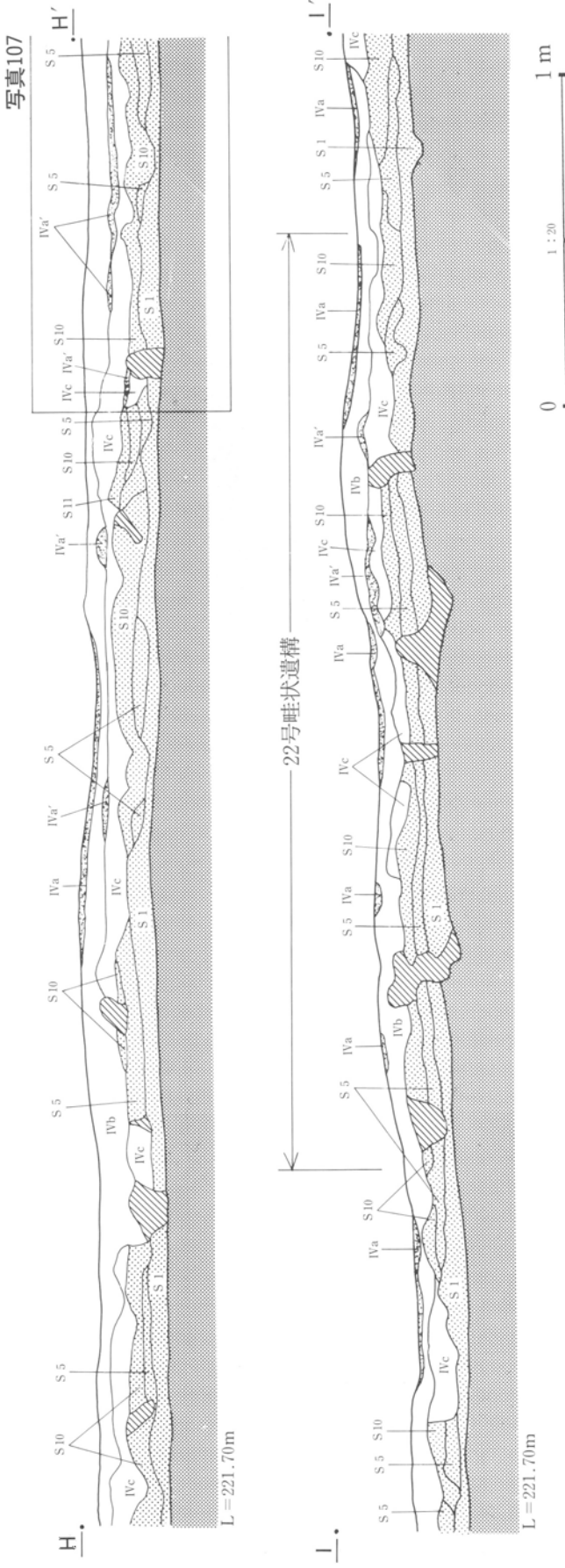


図89 吹屋犬子塚遺跡II区22号畦状遺構断面図

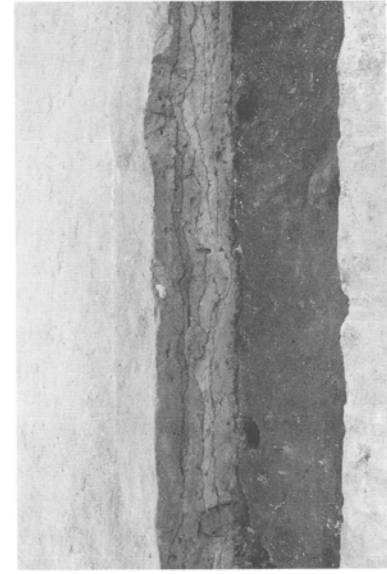


写真107 22号畦状遺構断面

うことは先述した通りである。幅は7・8号とも約40cmで、写真106のように明瞭なへこみをもつ。8号は7号の中央付近から北側に分岐する。7号との接続の方向からみて、発掘区北側とより西方とをつないでいると思われる。

22号畦状遺構 (図88・89、写真107)

II区南東隅にある。きわめて不明瞭で高まりもはっきりせず、遺構の範囲を確定させることはできなかったが、やや高い部分が続いているため、畦状遺構と判断した。図89では高い部分をつないで大体の範囲を示してある。横断面(I~I')では高まりが2列あるように見えるが、これは偶然そのようにみえるだけであり、他の場所ではそのようなことはない。断面をみるとIVa層が複数みえる。IVa層は畦状遺構以外の場所では稀なので、このことからこの部分が畦状遺構であることがわかる。

〔Ⅳ区〕

Ⅳ区は西端付近に村道との交差点部分があるため、発掘区がT字形をなしている。

この発掘区は地形的にはほぼ平坦であるが、傾斜がⅠ～Ⅲ区の場合とは逆となり、東から西に向かって緩やかに低くなっていく。最も高いのは南東隅の6号畦状遺構上で標高約222.1m、最も低いのは南西隅付近の標高約218.8mであり、その差は約2.3mである。

畦状遺構は合計9本みついている。この区については他の調査区とは違う班が調査を担当したため、畦状遺構の命名基準が若干異なってしまった。しかし、今後の混乱を避ける必要から、本書ではあえて調査時のままの名称を使用し、無理に統一することは避けた。

これら9本の畦状遺構は、発掘区の東側にある1群（6～8号）と、西側にある1群（9～14号）と

に分かれるようである。両者は、一部例外があるものの、図90にみるように走行方向が大きく異なり、違う基準で設けられていることが明らかである。

また、この区の畦状遺構の調査にあたっては、焼土・炭化物が多く含まれていたため、その平面的な分布、すなわち、焼土・炭化物が畦状遺構のどのあたりに分布しているかを把握するように努めた。本書にあげた8・9号のように（図96・99参照）、その分布には偏りがある場合があり、畦状遺構の上部構造を考える一資料となろう。

踏み分け道は東西両端に各1本ずつ、計2本見つかった。西側の5号は大きく湾曲しているが、走行方向はほぼ同じであるため、両者は一連のものと思われる。既に何度も述べているように、犬子塚遺跡を東西に走る幹線的な道の一部である可能性が強いものと考えられる。



写真108 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区FP下面全景

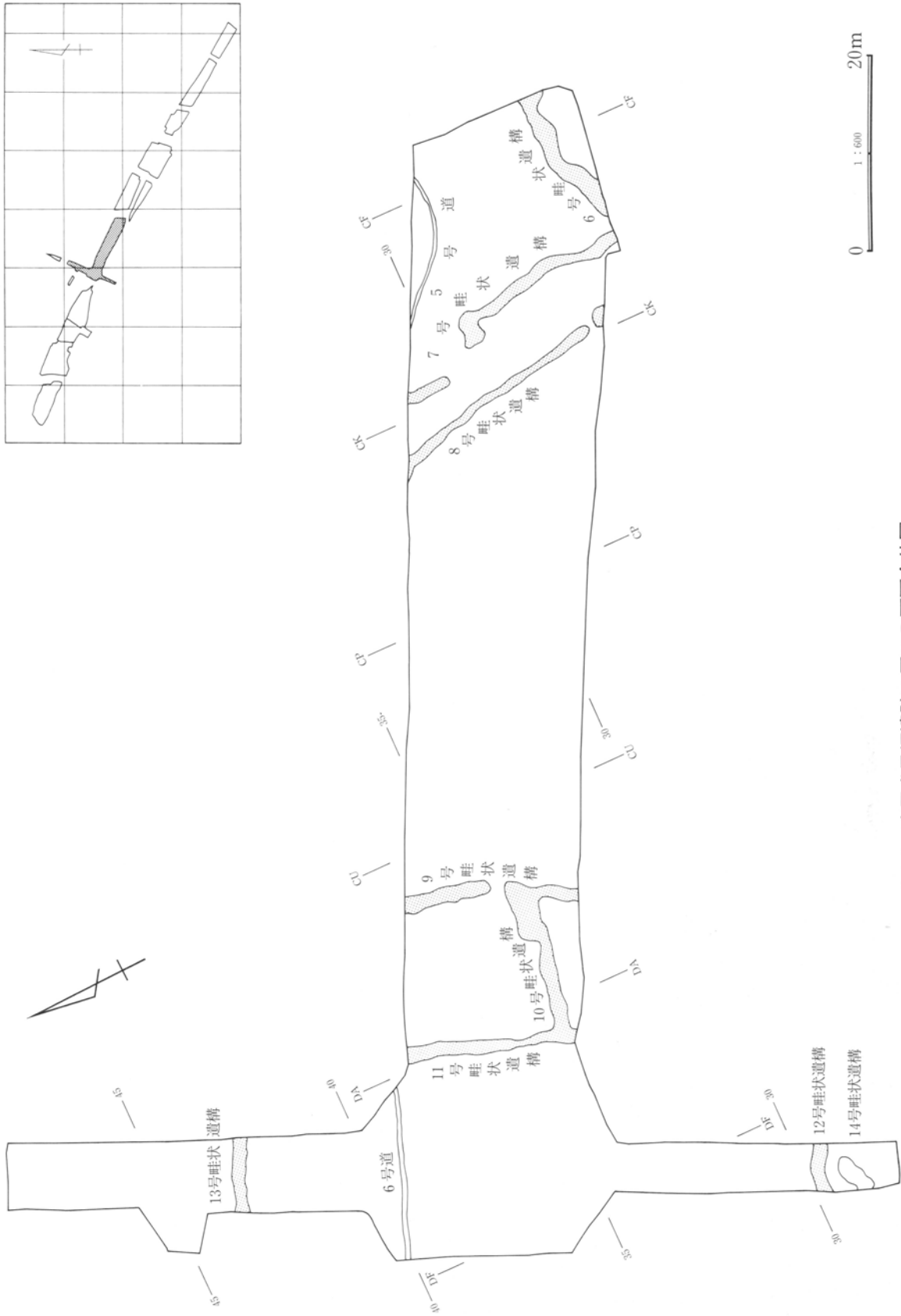


図90 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区F P下面全体図

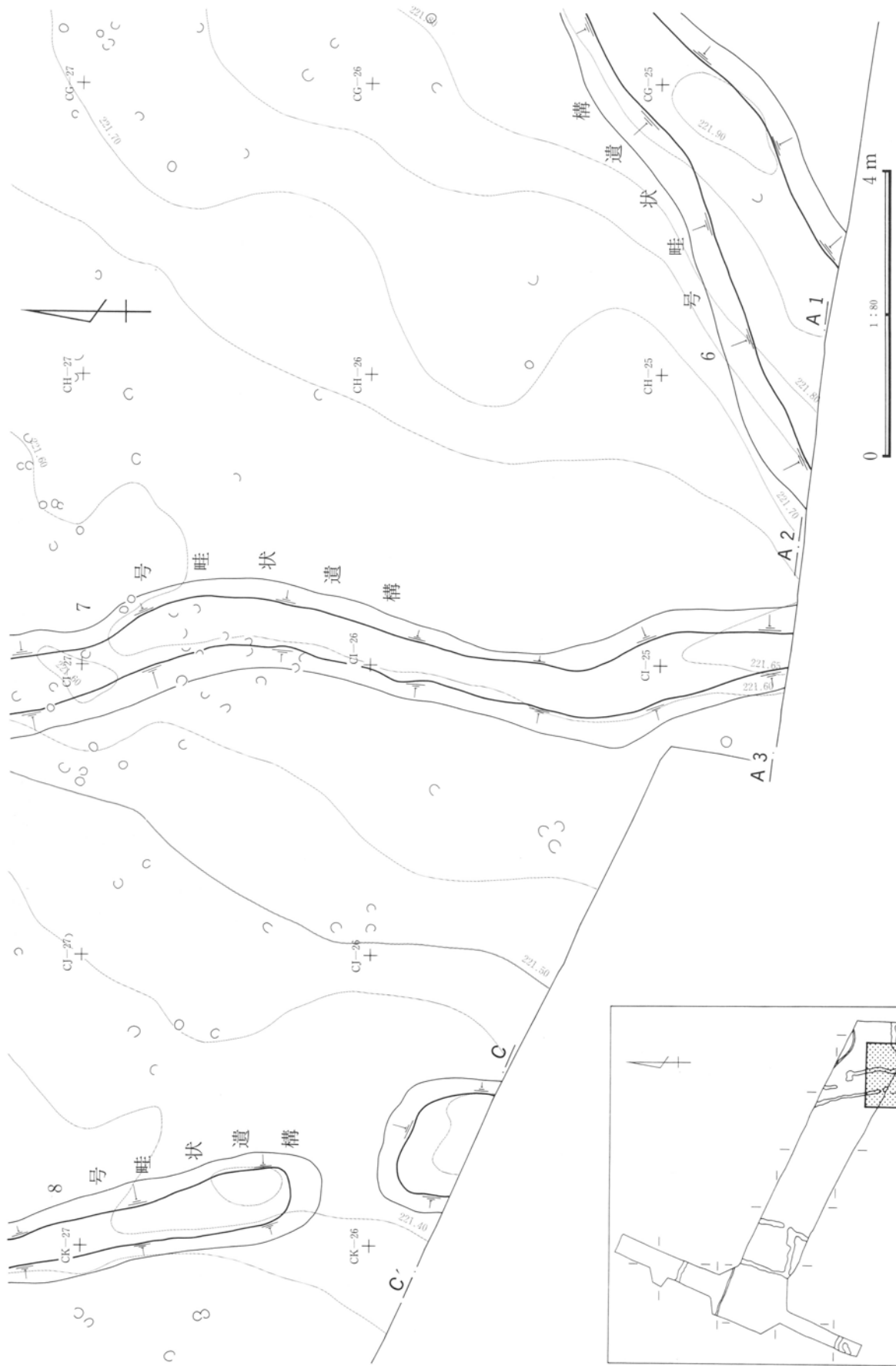


図91 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区6・7・8号蛙状遺構南端部

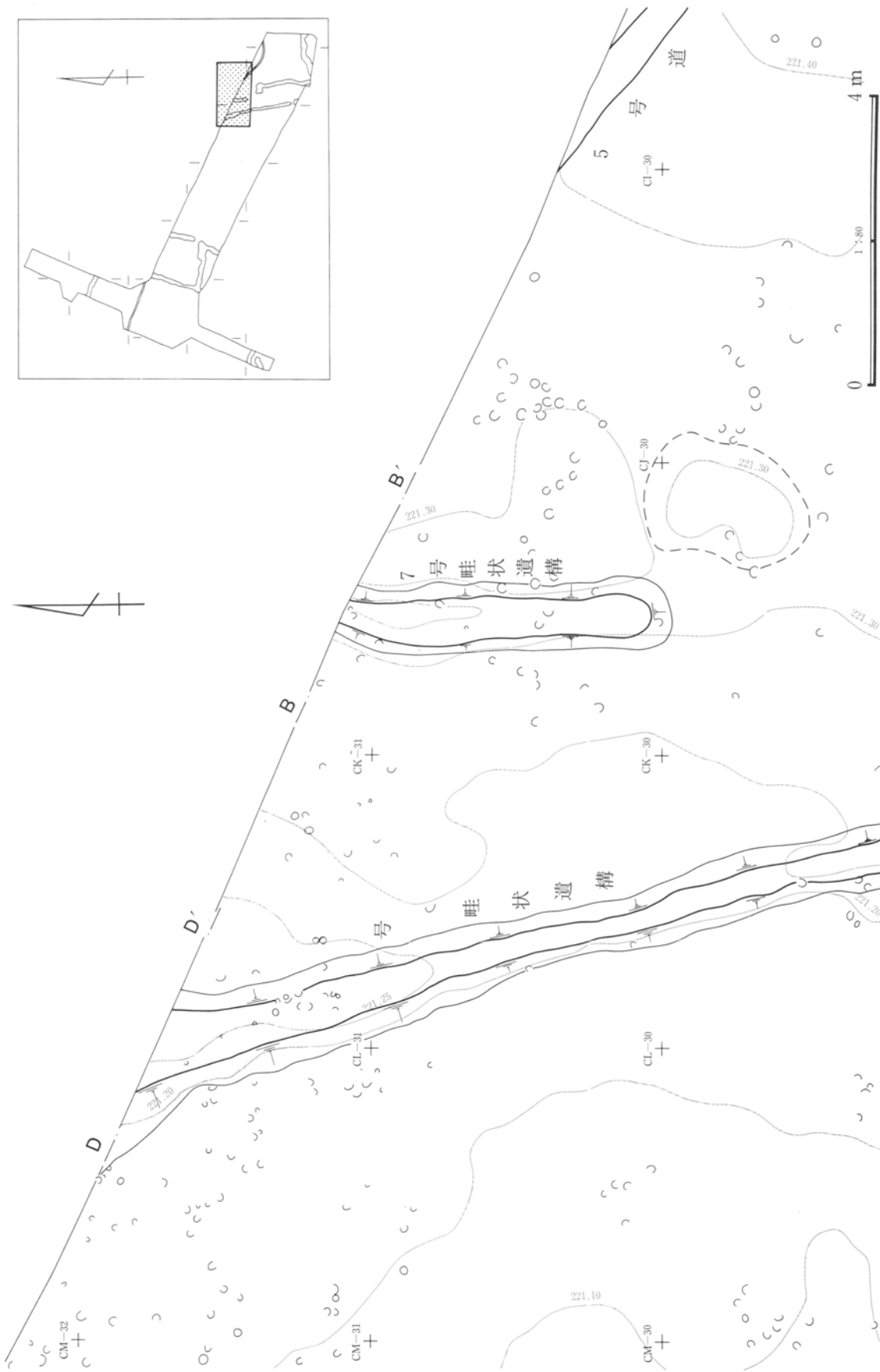


図92 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区7・8号蛙状遺構北端部

6号畦状遺構 (図91・93、写真109・110)

IV区南東隅にある。位置・方向から考えて、III区の17号畦状遺構の延長部分に当たると思われ、全体としては北側にやや膨らんだ弧状を呈している。IV区内における走行方向は、東半部はほぼ真東西方向、西半部はN-55°-Eであり、中央部分で折れ曲がっている。発掘区から少し南に外れたところで7号畦状遺構と接続するものと思われる。幅は1.5~2m、高さは5~10cm程度であり、あまり明瞭な高まりではない。断面図(A1~A2)は盛り土を斜めに切っているため、高まりがさらに不明瞭になってしまっている。注意していただきたい。

断面図に明らかなように、焼土・炭化物を含んだ

層が遺構の西裾部分に厚く存在する。その位置が高まりの部分から西に大きくずれるのは注目されることである。

7号畦状遺構 (図91・92・94、写真111・112)

IV区東側にある。間に4mほどの空白を挟んで南北2本に分かれ、しかもその部分が鉤の手状に曲がっているが、位置・方向から考えて一連のものであろう。南半部は緩やかに蛇行しているので走行方向を確定し難いが、概ねN-8°-W位であり、8号畦状遺構の方向とほぼ平行である。これに対して北側の部分はやや方向が異なって真南北方向に近く、そのため8号とは平行でなくなり北にいくにしたがって離れていくようになる。8号との距離は南半

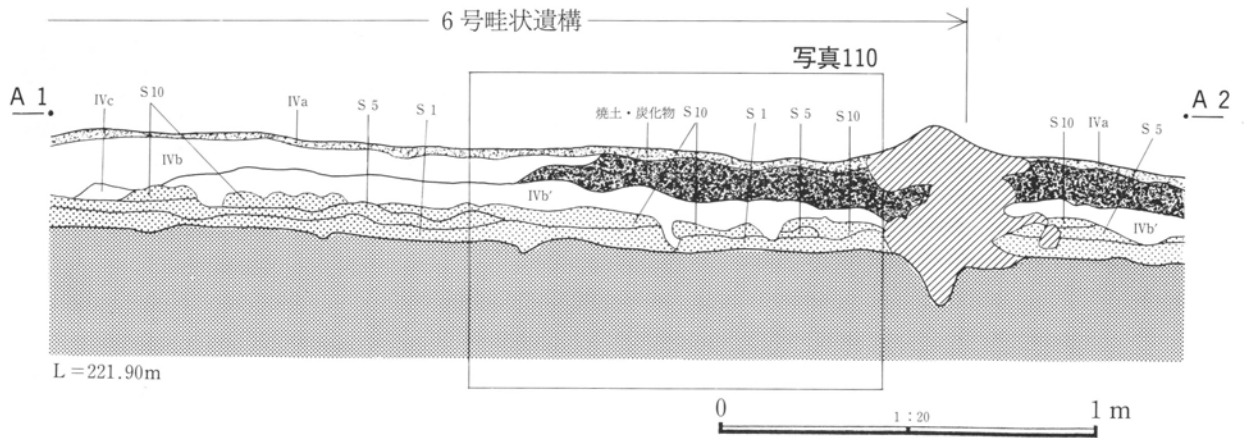


図93 吹屋犬子塚遺跡IV区6号畦状遺構断面図



写真109 6号畦状遺構 (東から)

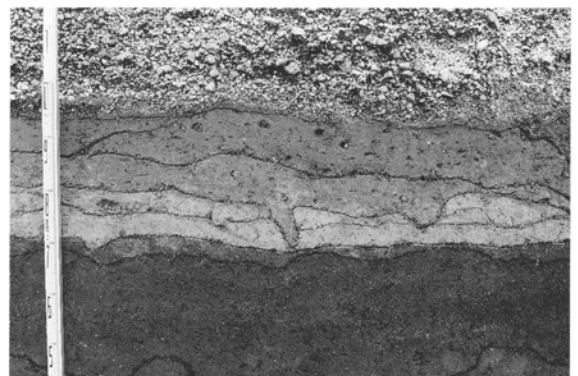


写真110 6号畦状遺構断面

部で7～8 m、北側の狭くなる部分では4～5 mである。北側のものの方向にずれがみえるが、全体としては8号とほぼ平行に走っていることから、両者には深い関連があるものと考えられる。ただし、8号が直線的にのびているのに比べ、7号は蛇行しており、まったく同一の基準に基づいて設けられたものとは考えられない。

幅は1.0～1.3m、高さは5 cm前後で高まりは不明

瞭である。

焼土・炭化物を含んだ層は南半部で厚い（図94・A 2～A 3）が、北半部では薄くなる（図94・B～B'）。

8号畦状遺構（図91・92・95・96、写真113～116）

IV区東半部にある。走行方向は、先述の通り、7号とほぼ平行であり、さほど蛇行することなく直線的にのびている（写真115）。幅は0.6～1.2mで比較



写真111 7号畦状遺構（南東から）



写真112 7号畦状遺構断面

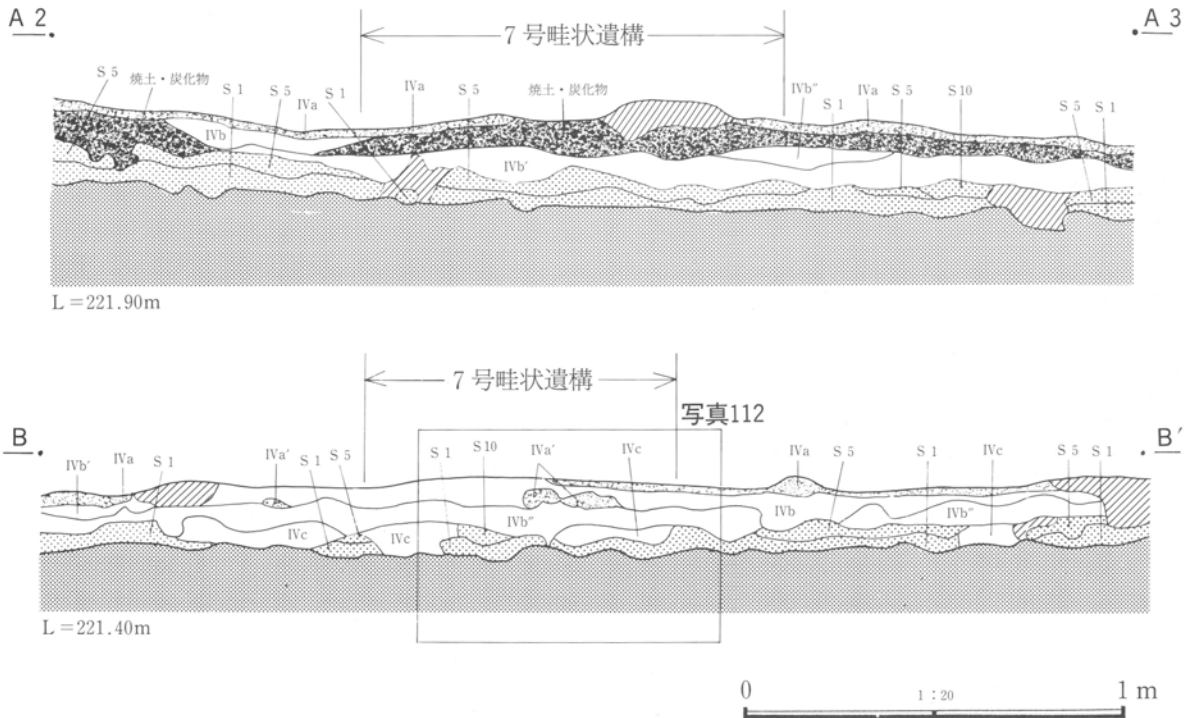


図94 吹屋犬子塚遺跡IV区7号畦状遺構断面図

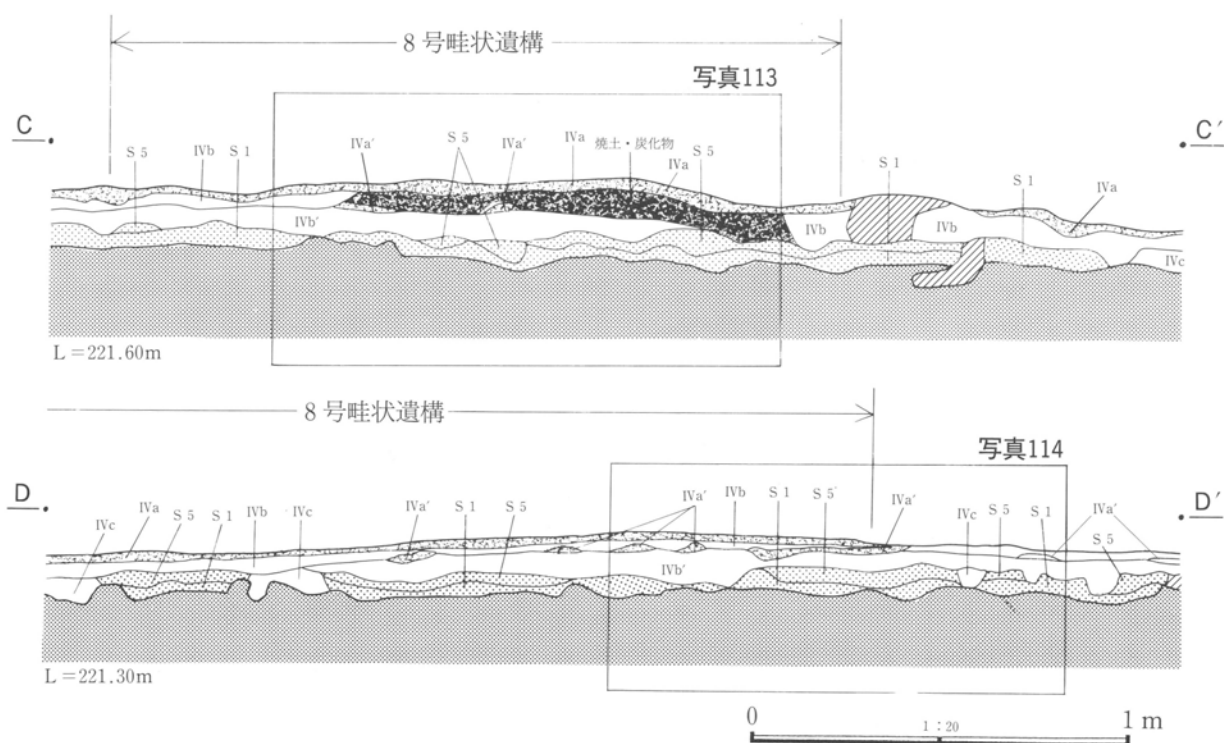


図95 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区8号畦状遺構断面図



写真113 8号畦状遺構断面 (C~C')

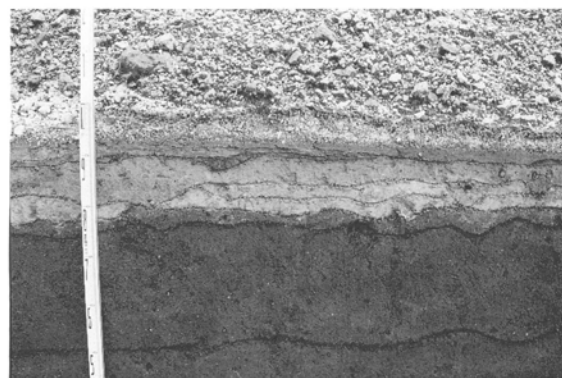


写真114 8号畦状遺構断面 (D~D')

的狭く、高さは5cm前後で不明瞭な高まりをもつ。南端部では0.8mほど途切れている。その南側の盛り土は一部しかみえないが、北側に比べてやや幅が広いようである。このため、両者が一連のものではない可能性もあるが、南側の様相が不明であるので、いずれとも断定できず、本書では一連のものとして扱うことにする。

断面をみると、炭化物を含む層 (IVa層) が2層存在する。この層は層厚1~3cmときわめて薄い

平面的には広く分布し、図96のように畦状遺構の東側に集中している。焼土・炭化物の集中の方向は各畦状遺構によって違うようであり (たとえば、9号畦状遺構では後述のように西側に集中する)、共通の現象ではない。焼土・炭化物がどのようにして形成されたかは明らかでないので、分布が偏ることを明確に説明することは難しい。一案としては、畦状遺構の裾部のどちらか一方に枯れ枝や草の束などが一列に積んであったため、それが野焼きの際に燃え



写真115 8号畦状遺構（南東から）



写真116 8号畦状遺構IV層中の焼土・炭化物の分布

てこの焼土・炭化物が形成されたと考えることができるのではないだろうか。それが正しければ、低い盛り土の上に枯れ枝などの束が高く積まれている景観が復元でき、盛り土のみの場合に比べれば、はるかに目立つ施設となる。ただし、畦状遺構が区画施



図96 吹屋犬子塚遺跡IV区8号畦状遺構IV層中の焼土・炭化物の分布

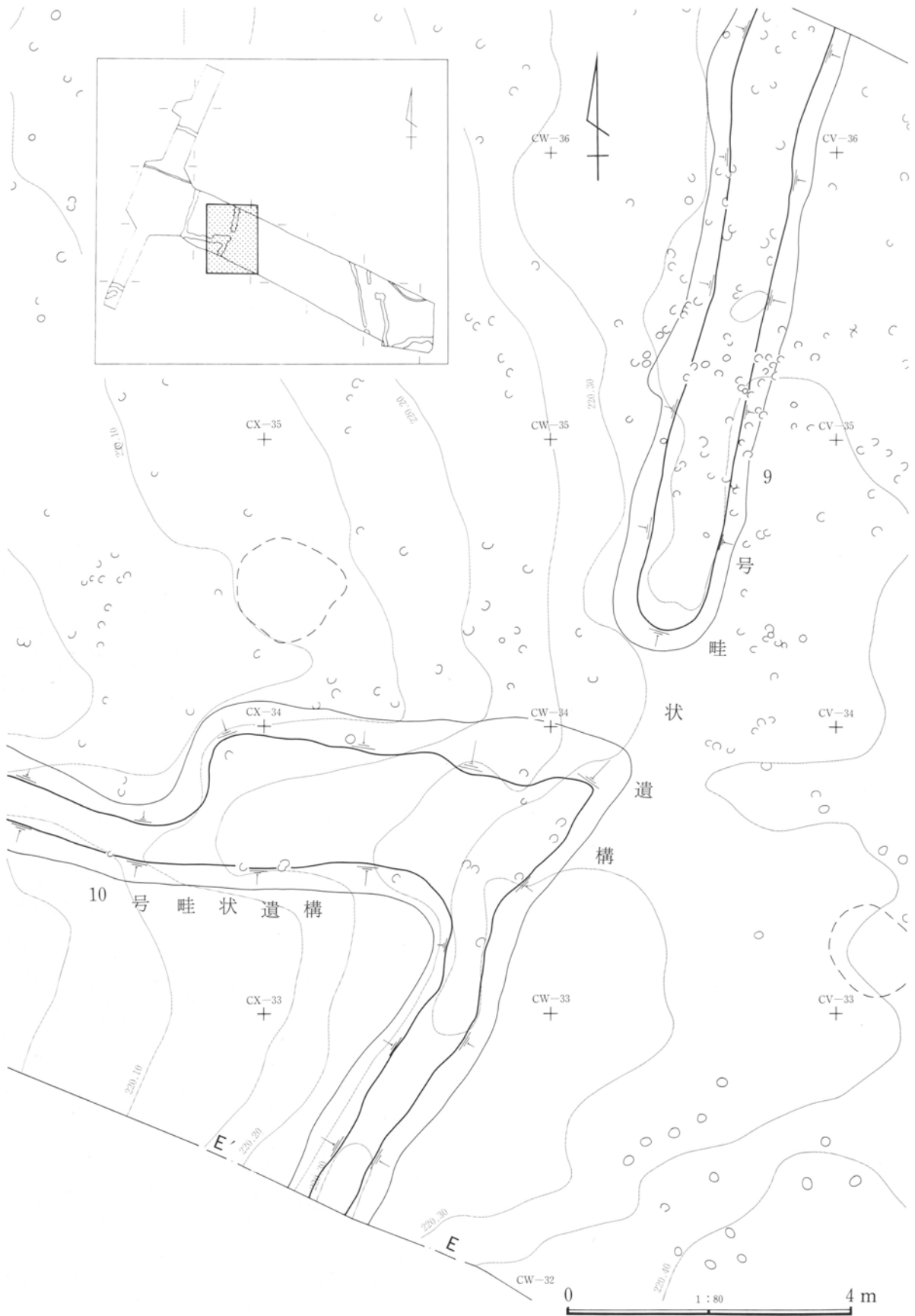


図97 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区9・10号蛙状遺構

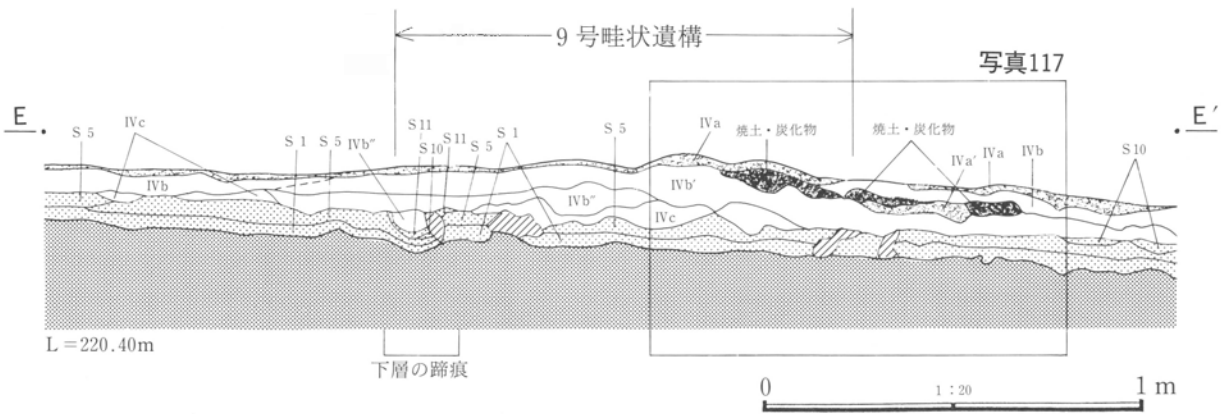


図98 吹屋犬子塚遺跡IV区9号蛙状遺構断面図

設として機能したものであるか否かは、さらに検討しなければならない問題である。

9号蛙状遺構 (図97~99、写真117~119)

IV区中央西寄りにある。間に約1.5mの空白を挟んで南北2本に分かれる。写真118で明瞭に分かるように、両者の走行方向はやや違い、一連のものではない可能性もある。北側の方向はN-12°-E、南側はN-28°-Eである。南側のものの北端部には西側から10号蛙状遺構が接続する。北側の盛り土の幅は約1.5m、高さは5cm前後で高まりはあまり明瞭ではない。南側は幅がやや狭く約1.2m、高さはやはり5cmである。

断面をみると、焼土・炭化物の層が含まれていることが分かる。傾斜の様子からみて、この層はより古い時期の盛り土(IVb'層)の上に形成されているようである。

この焼土・炭化物の平面的な分布は図99の通りである。8号蛙状遺構とは逆に、盛り土の西側に集中している。

10号蛙状遺構 (図97、写真120)

IV区中央やや西寄りにあり、9号と11号とを東西につないでいる。走行方向はN-80°-Wである。調査時点では東端が9号に接続してそこで終わるものと判断したが、平面図でさらに東側の等高線をみると、延長部分にわずかな高まりが続いていることが分かり、本来はより東側にまで続いていた可能性がある。この高まりを追っていくと、緩やかに蛇行し

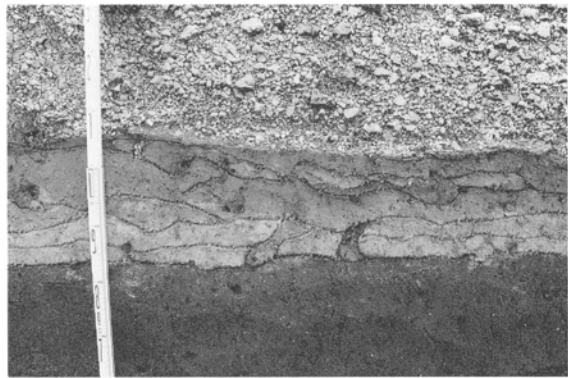


写真117 9号蛙状遺構断面



写真118 9号蛙状遺構(南西から)



写真119 9号畦状遺構IV層中の焼土・炭化物の分布

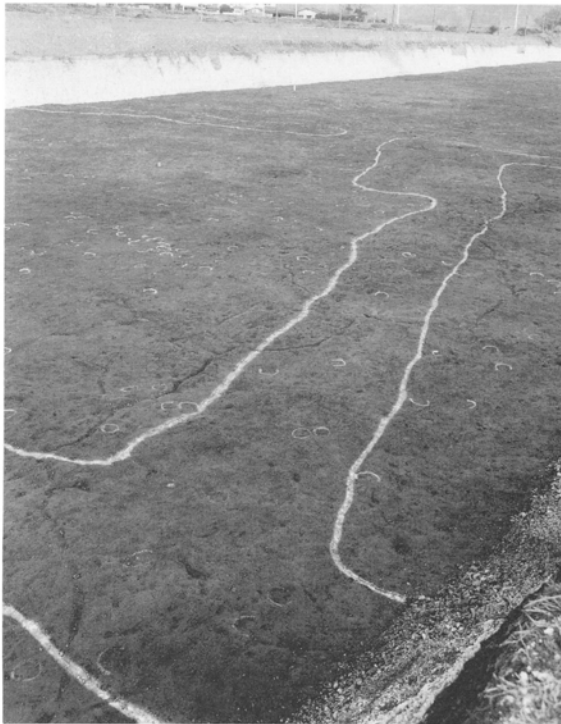


写真120 10号畦状遺構（西から）

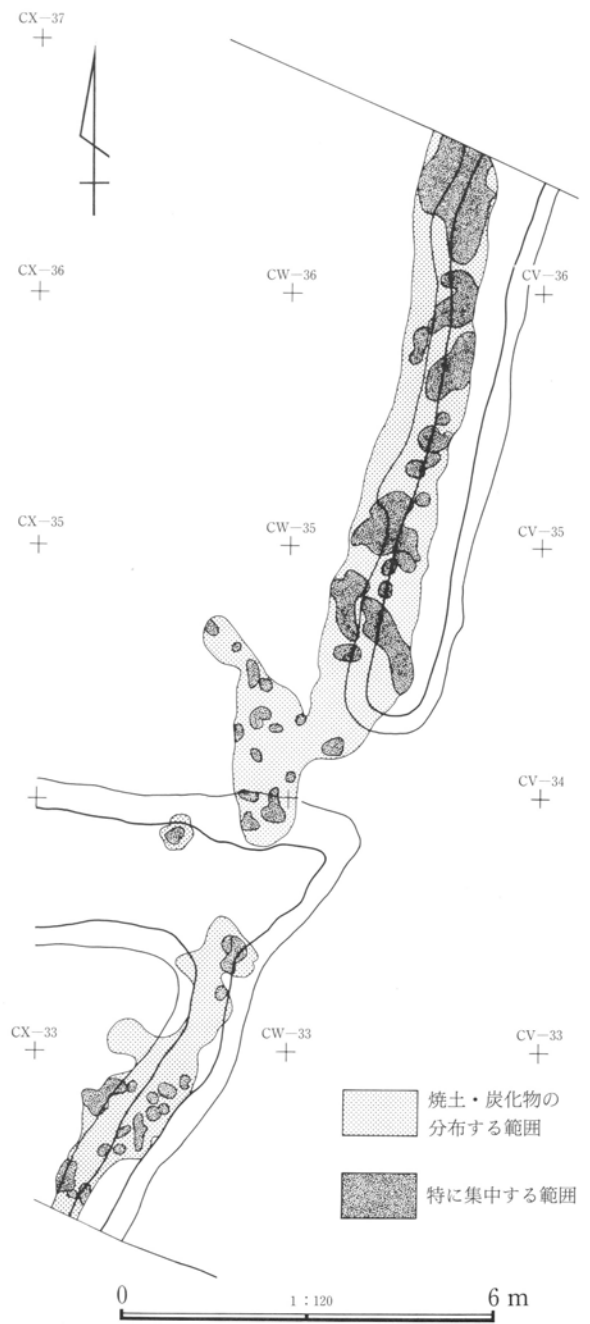


図99 吹屋犬子塚遺跡IV区9号畦状遺構IV層中の焼土・炭化物の分布

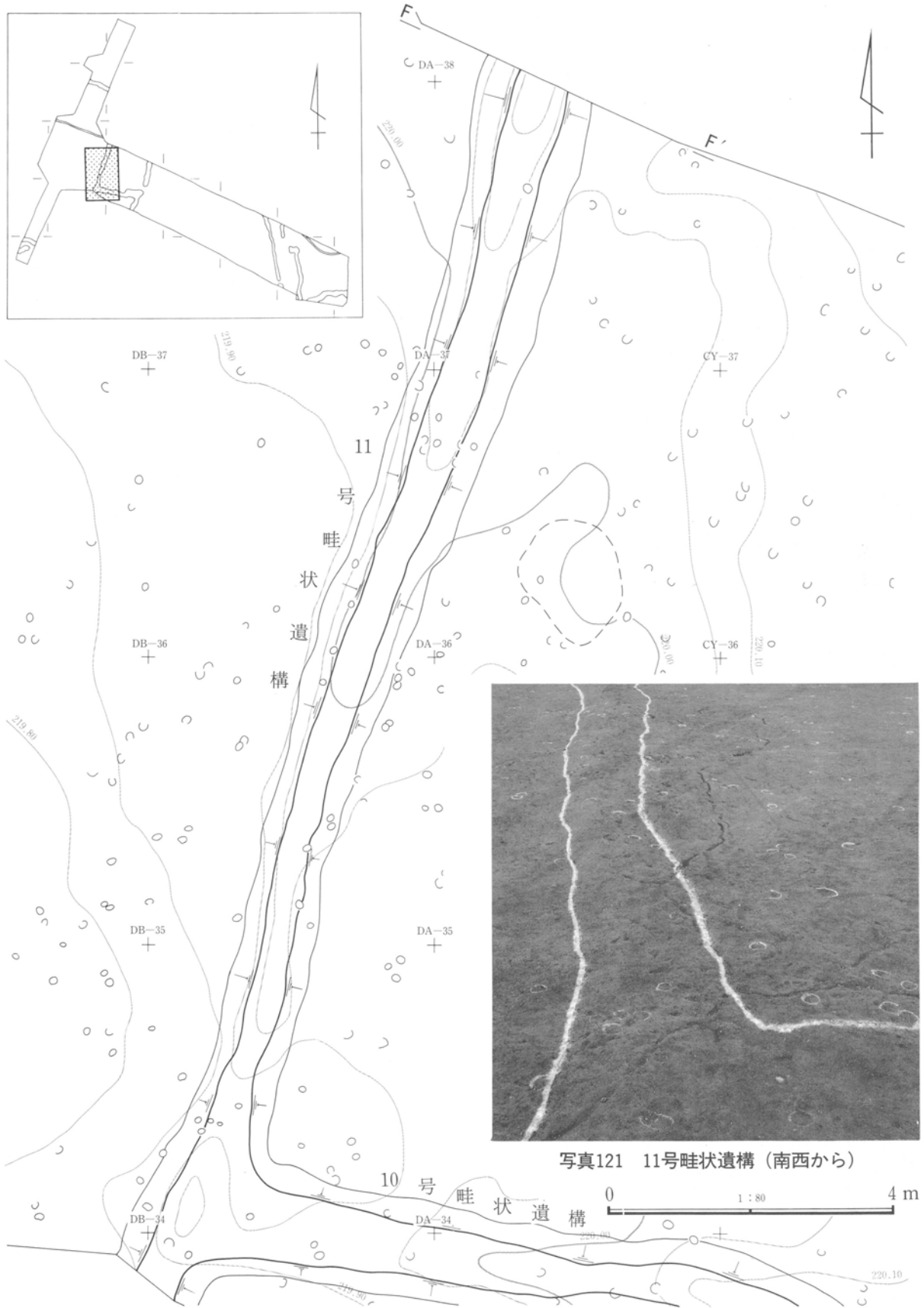


図100 吹屋犬子塚遺跡IV区11号蛙状遺構

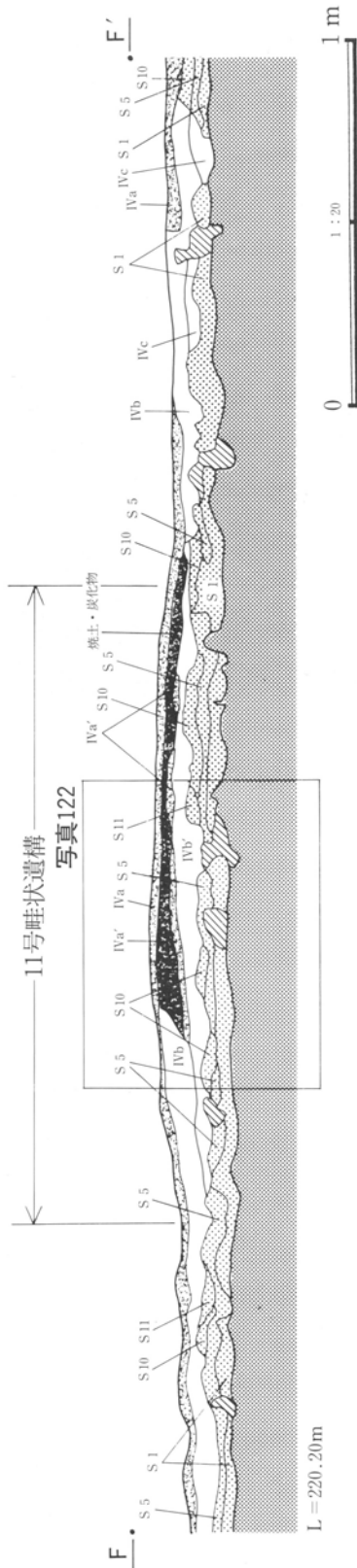


図101 吹屋犬子塚遺跡IV区11号畦状遺構断面図



写真122 11号畦状遺構断面

ながらCRライン付近まで約20m続いている。同様に、西端も11号に接続してそこで終わると判断したが、平面図ではさらに約6m西までわずかな高まりが続いていることが分り、そこまで延長できる可能性がある。

幅は1~1.5m、東端部の約5m分のみは広がって2.5mである。高さは5cm程度であり、あまり明瞭な高まりではない。

11号畦状遺構 (図100・101、写真121・122)

IV区西半部にある。走行方向はN-17°-Eで直線的にのびている。東側を走る9号の北半部の方向とは約5°の差があるが、ほぼ平行しており、何らかの関係があるものと思われる。両者の間隔は、心-心で測って15~16mである。

幅は比較的狭くて0.8~1.6m、高さは10cm前後あり、IV区他の畦状遺構に比べて明瞭な高まりをもっている。ただし断面図(F~F')では遺構を斜めに切っているため、高まりが実際よりも不明瞭となっている。

盛り土中にはIVa層が上下2層認められるほか、焼土・炭化物の厚い層が存在する。横断面F~F'の部分では、焼土・炭化物の層は盛り土の東側に偏っている。

12号畦状遺構 (図102、写真123)

IV区南西部にある。この付近の発掘区は狭いので、わずか5mほどがみえているに過ぎない。この部分では北側にやや膨らんだ弧状を呈している。

IV区北西部に見える13号とはほぼ似たような方向を示している。結果的には、この両者と11号とで方形の区画が作られているようにみえるが、これらの畦状遺構が有機的関係にあるのか否かは明らかでは

なく、さらに検討が必要である。ちなみに、12・13号両者の間隔は心一心で測って約59mである。幅は約1.5m、高さは10cm前後で比較的是っきりした高まりをもっている。

14号畦状遺構 (図102)

IV区南西隅、12号畦状遺構の南側にある。当初その存在に気が付かなかったが、その後IV層の詳細な調査を行う過程でわずかな高まりが連続することを見出し、ここに畦状遺構が存在したものと判断した。ただし、その高さはごくわずかであり、他の畦状遺構のように明確な形を示すことができなかった。そのため、図102の平面図では盛り土と思われる範囲のみを示している。

以上のように不明瞭な遺構ではあるが、範囲として把握した部分では、幅1.8mほどである。方向は、西端に屈曲部のような部分が見えるので、不整方向にのびる可能性がある。平面図の等高線を詳細にみると、東端部より東にわずかな高まりがつづいているので、ここに畦状遺構があったのだとすれば、本来12号に接続していたものと思われる。

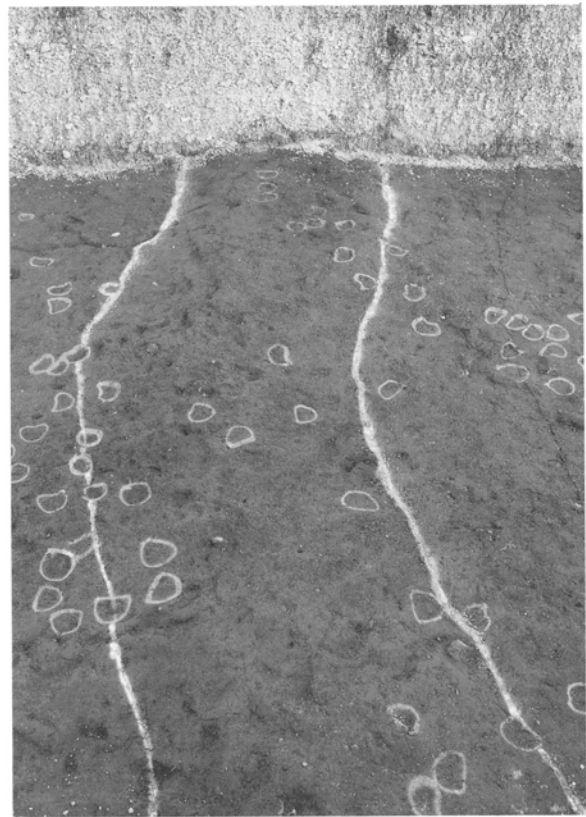


写真123 12号畦状遺構 (西から)

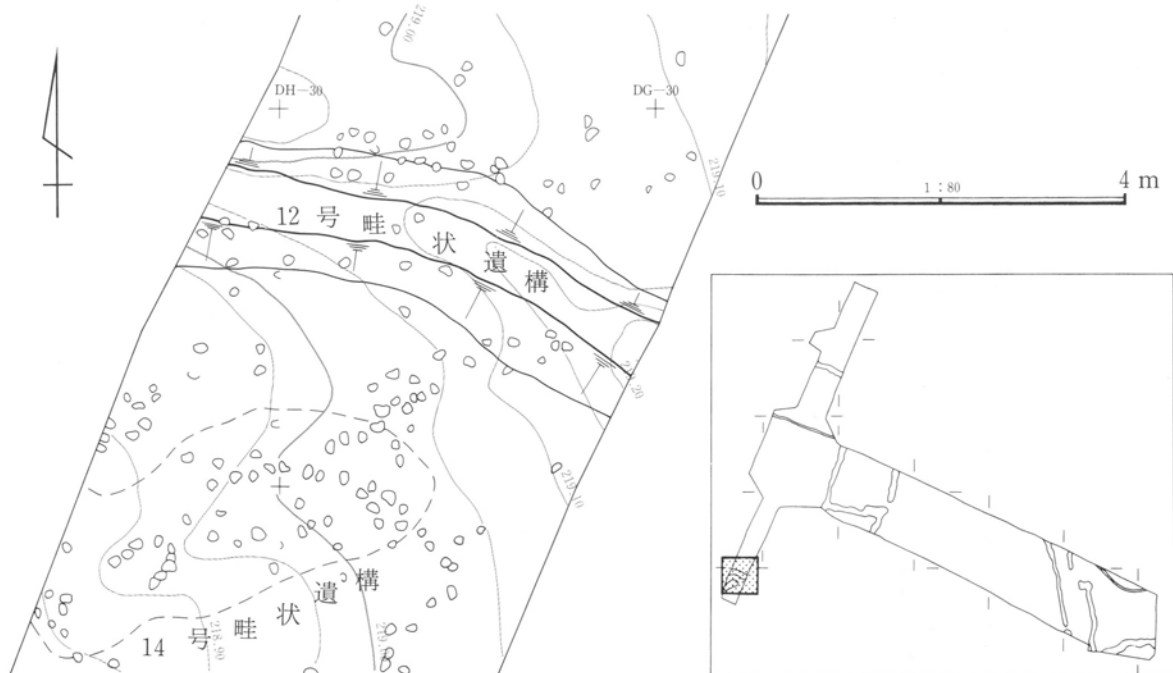


図102 吹屋犬子塚遺跡IV区12・14号畦状遺構

第3章 調査の成果

13号畦状遺構 (図103・104、写真124・125)

IV区北西部にある。この付近の発掘区も狭く、約8mしかみえていないが、方向はN-70°-Wでありほぼ直線的にのびている。南側2.5mほど離れたところ

ろに約5~10cmの段差が平行しているが、これが13号畦状遺構と一体のものであるかどうかは明らかではない。13号自体は幅1.0~1.5m、高さは10cmで、特に横断面図G~G'の部分は明瞭な盛り土をもっている (図104)。

断面をみると、盛り土の部分からその北裾にかけて厚い焼土・炭化物の層が存在する。



写真124 13号畦状遺構 (北西から)



図103 吹屋犬子塚遺跡IV区13号畦状遺構

5・6号道 (写真126・127)

踏み分け道はごく一部が見つかったにすぎない。そのうち、北東部でみつかったものを5号、西端付近のものを6号と名付けた。5号が大きく湾曲しているのに対し、6号は直線的であるという違いはあるが、幅やへこみの状況や方向からみて一連のものであり、遺跡内を東西に走る幹線道の一部であると思われる (121ページ参照)。

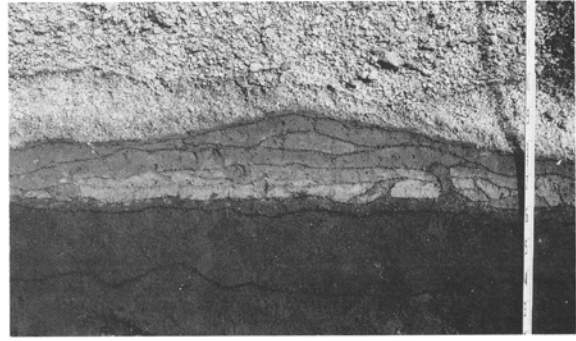


写真125 13号畦状遺構断面

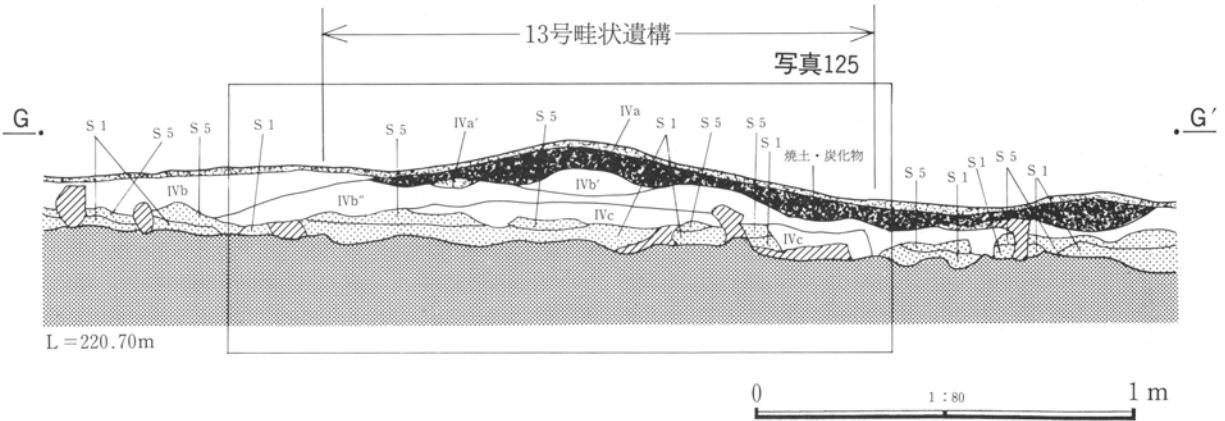


図104 吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区13号畦状遺構断面図



写真126 5号道 (東から)



写真127 6号道 (南東から)

〔V区〕

V区の西には小さな谷が入り、これが遺跡を犬子塚と中原とに分ける境になっている。そのためこの発掘区は、図105の断面図にみるように、谷に向かって、すなわち東から西に向かって徐々に下がり、谷の直前部分で傾斜が増したあと、平坦な谷底部となる。V区で最も高いのは北東隅部で標高219.25m、最も低いのは南西隅の谷底部で標高214.53mであり、その差は4.72mである。谷に近く地下水位が高いためか、西半部のF P下面是湿気が多く、IV層は粘土化している。谷に近い部分の斜面に馬蹄痕が多く残っているのは、蹄部分に体重がかかって蹄が深くめり込むのと、地表面が粘土で柔らかいためであろう。

谷には現在もF P下面を地下水が流れていたため、排水を行いながらの調査となった。地下水量は豊富で、排水を行わなければ、谷の半分が水没するほどである。発掘区内での最上流にあたる北端部の標高は215.38m、最下流の南端部では214.53mでその差は0.85mであり、その間の距離が31mあるので、

谷の傾斜は2.7%、約1°ということになる。緩やかな傾斜の谷であると言えよう。谷の底部は幅7～8mできわめて平坦であるが、ちょうど発掘区の中央には荒起こしをしたような区画が1ヶ所ある(1号水田跡、211ページ参照)。

畦状遺構は19～21号の3本が見ついている。20号の南半部と21号とはいずれも直線的でしかもほぼ直角に交わるので、その設置に何らかの企画があったように思えるが、その他の畦状遺構は方向が不整であって、相互の関連がまったく分からない。また、3本とも、その方向や場所をみると、地形の制約を受けているようには思えない。このことも畦状遺構の性格を考える上で注意が必要な点であると思われる。

この区の畦状遺構にも焼土・炭化物を多く含んでいるものがあり、IV区と同様、その平面的な分布に留意して調査を行った。

踏み分け道は2本見ついている。発掘区の北辺に沿っているものを9号、発掘区中央を南北に横切るものを10号と名付けた。9号は途中10mが発掘区



写真128 吹屋犬子塚遺跡V区F P下面全景

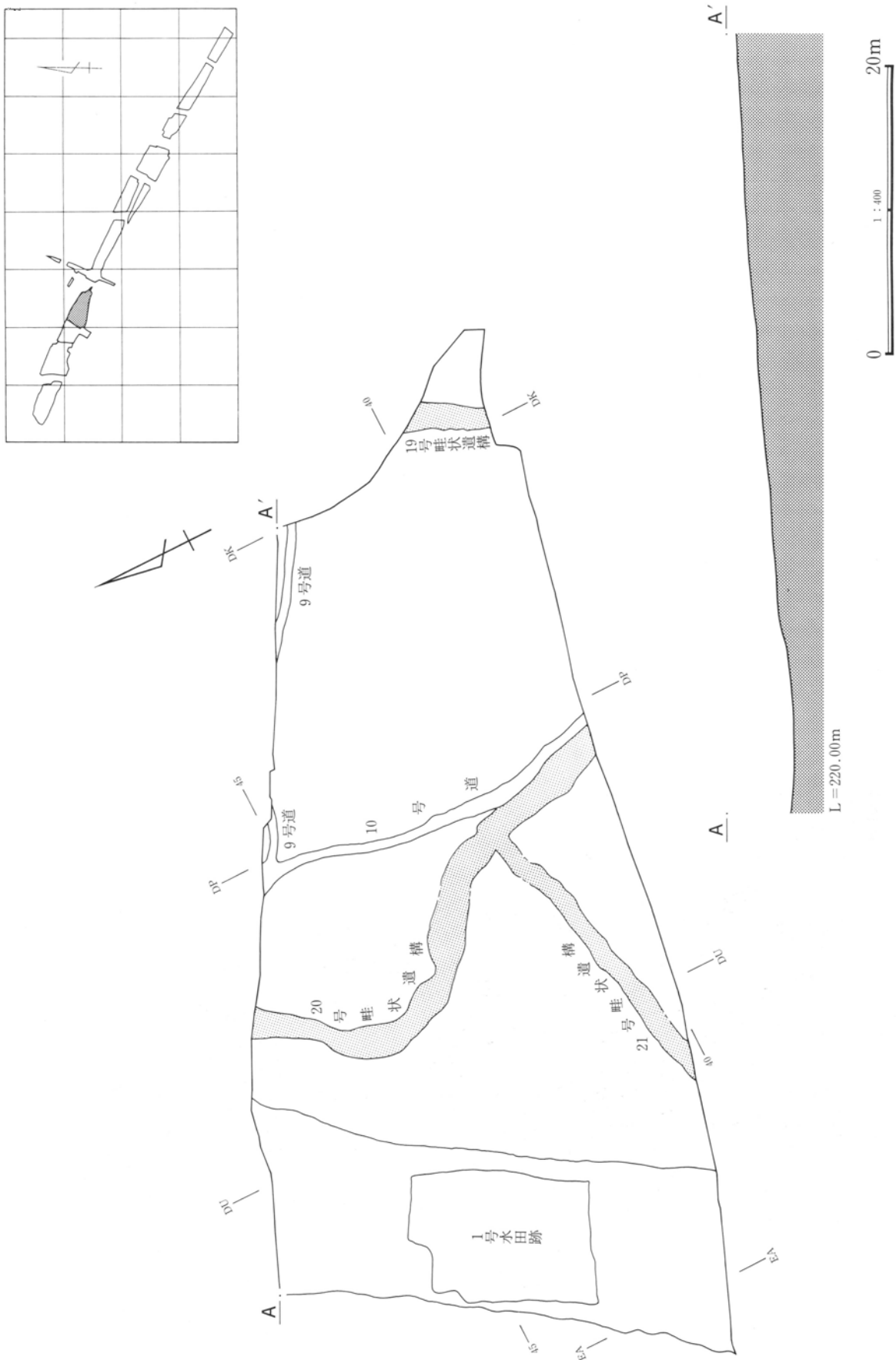


図105 吹屋犬子塚遺跡V区F P下面全体図

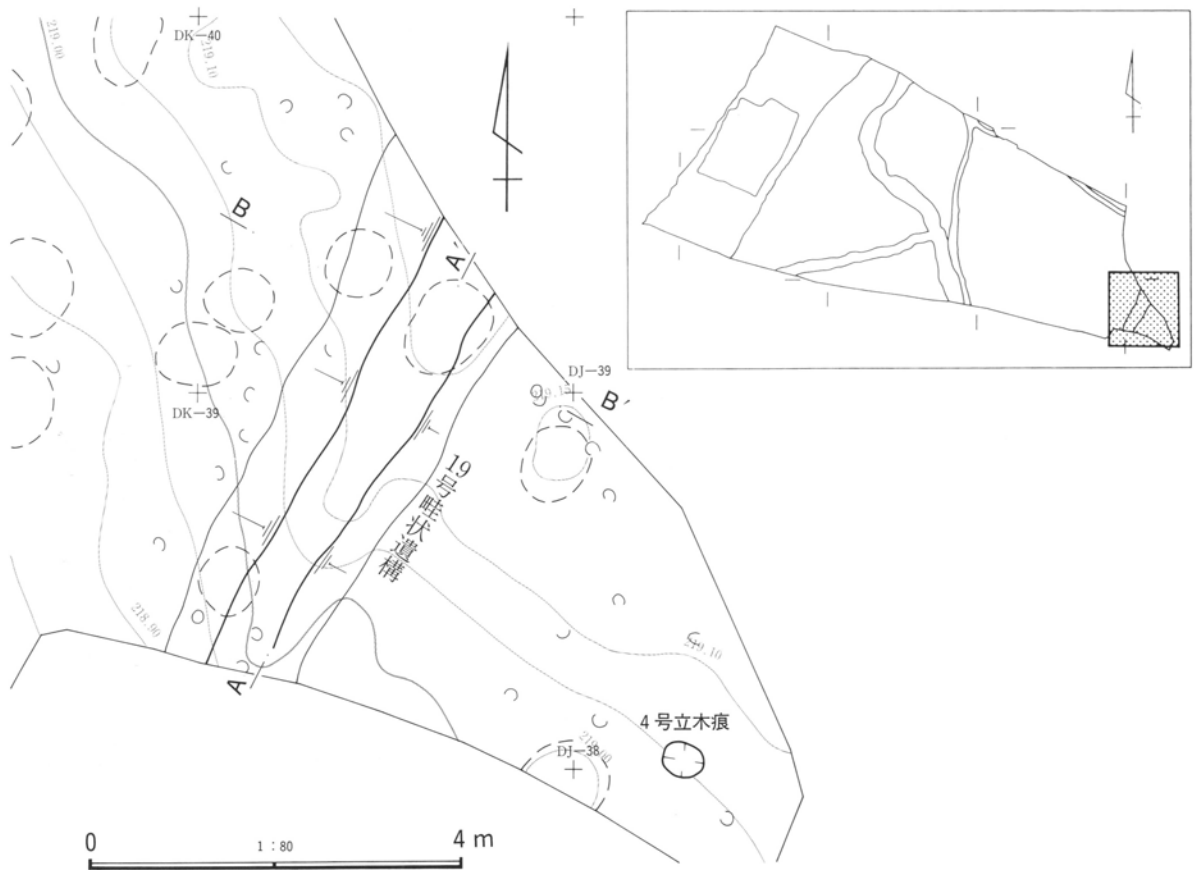


図106 吹屋犬子塚遺跡 V区19号畦状遺構

外に出てしまうが、方向から考えて一連のものであり、犬子塚遺跡東端のI区からつながっている幹線道の一部であろう。10号は20号畦状遺構の裾を通り、北端で9号道に合流する。いずれの道もよく歩かれており、路面のへこみが顕著である。

19号畦状遺構(図106～108、写真129～132)

V区東端付近にある。この付近の発掘区は狭く、わずか5m分しか見つかっていない。

発掘区にかかっている部分でみる限りでは、直線的にのびる畦状遺構で、走行方向はN-30°-Eであ



写真129 19号畦状遺構(北東から)

る。幅は1.4~2.0mで北にいくほど広くなる。高さは5~10cmであり、高まりは比較的是っきりしている。走行方向からみると、この畦状遺構に近い、あるいは90°異なる方向のものは周辺にみられず、ど

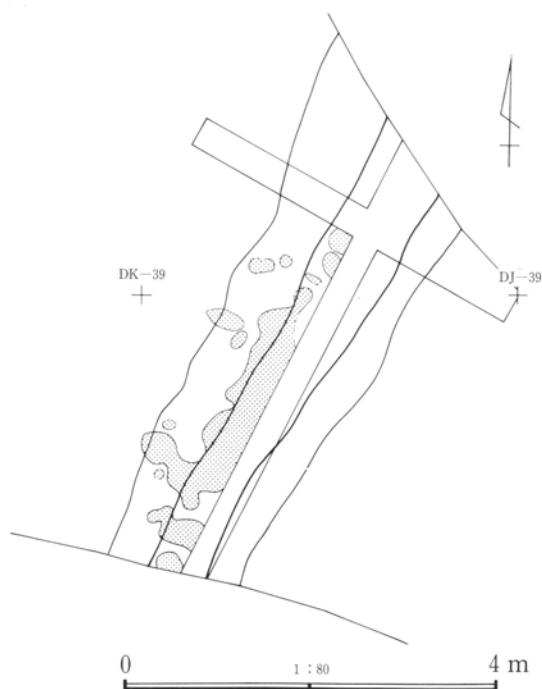


図108 吹屋犬子塚遺跡Ⅴ区19号畦状遺構
Ⅳ層中の焼土・炭化物の分布

の畦状遺構との関連を考えればよいのかは明らかではない。

断面にはIVa層が上下2層あるほか、焼土・炭化物の層がみられる。この焼土・炭化物の層は、地表面を薄く剥ぐとすぐに現れるほど浅い位置にあった。その平面的な分布は図108にみる通りで、盛り土の西側に偏っていることが分かる。ただし、ここの焼土・炭化物は他の畦状遺構（特にIV区のもの）に比べてはっきりしたものではなく、層の厚さも薄い。

20号畦状遺構（図109～113、写真133～137）

IV区中央部にあり、大きく屈曲しながら南北にのびる。21号畦状遺構との接続部以南は等高線に平行する方向で直線的にのび、しかも21号とは直角に交わっている。より南側が発掘区外に入ってしまうので断定はできないが、この点を重視すれば、この2本の畦状遺構の設置には一定の企画性を認めることができると思われる。これに対して、接続部以北は大きく屈曲して等高線と斜めになり、さらに約12m下ったあたりからまた大きく屈曲し、等高線に平行な方向となっているなど、位置・方向が不整となっており、対照的な様相を示している。



写真132 19号畦状遺構Ⅳ層中の焼土・炭化物

この畦状遺構は斜面を塞ぐように設けられており、斜面を流れる雨水を堰き止めるような形になっている。そのため、特に、発掘区内で最も低い北側屈曲部付近には水や泥が溜りやすく、発掘調査時も排水に苦勞するほどであった。こういった点も、畦状遺構の設置目的を考える上では考慮が必要なところであろう。

幅は凹凸があって一定しないが、21号との接合部以南の直線部分では約2.5m、北側ではやや狭くなって1.2～2.5mである。高さは斜面に作られているため計測しにくい、10cmを越える部分も多く、比較的明瞭な高まりをもっている。

土層は、北側ではごく単純で、炭化物を含むIVa層も地表面に1層みられるのみである（図110・C～C'、D～D'）。北側の屈曲部付近から北端にかけては、横断面C～C'にみるように、盛り土の部分でもFAの残りがきわめて悪かった。その要因は明らかにしがたいが、雨水が流れる斜面であることが関係しているのかもしれない。FAの残存度はちょうど縦断面D～D'付近以南でよくなるようになる。これに対し、南側ではIVa層が上下2層みられるほか、

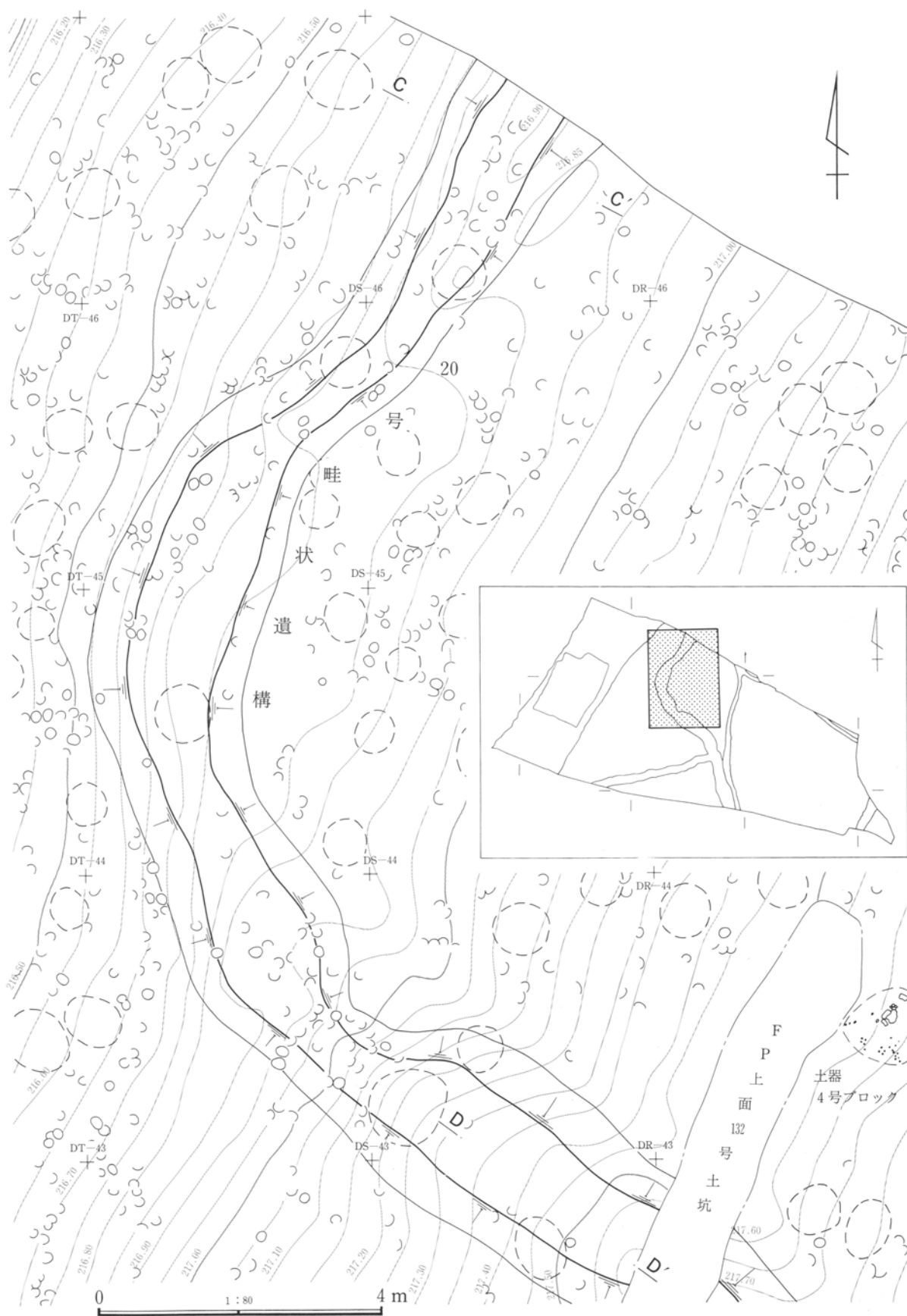


図109 吹屋犬子塚遺跡V区20号蛙状遺構北半部

第3章 調査の成果

その間に間層を挟んで焼土・炭化物の層がみられる。南端に設けた横断面(F~F')では、そのIVa層と焼土・炭化物層がよく観察できるほか、盛り土の部分のFA層の残りがそれ以外の場所に比べてよいことが明瞭に分かり、畦状遺構の盛り土の仕方を考える上で良好な事例になると思われる。この焼土・炭化物層の平面的な分布は図113のとおりである。傾向としては盛り土の西側に多く、南にいくにしたがって頂部に分布が移っていくことが分かる。

また、21号との接続部以南では、踏み分け道が盛り土の裾部を走っていることも重要であろう。畦状遺構と踏み分

け道とが平行して走っているところは遺跡内で何ヶ所かみられるが、このように接するようになっているところはここのみだからである。



写真133 20号畦状遺構（北西から）

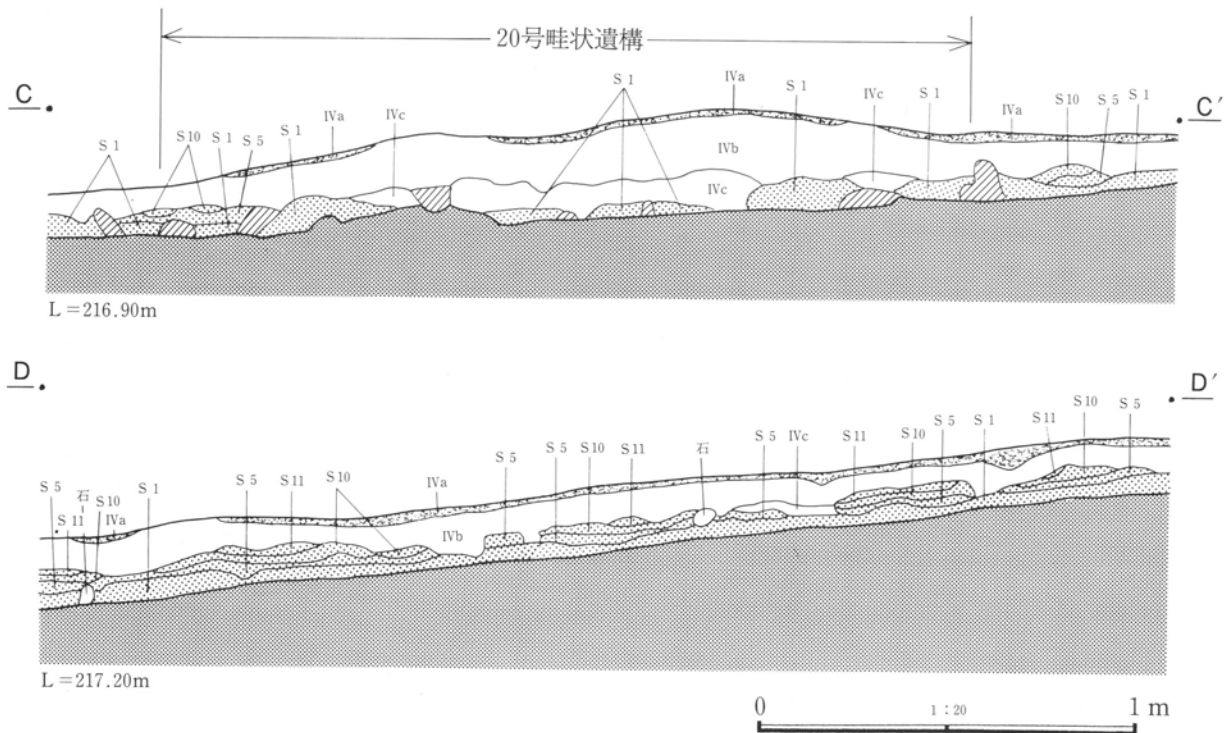


図110 吹屋犬子塚遺跡V区20号畦状遺構断面図(1)

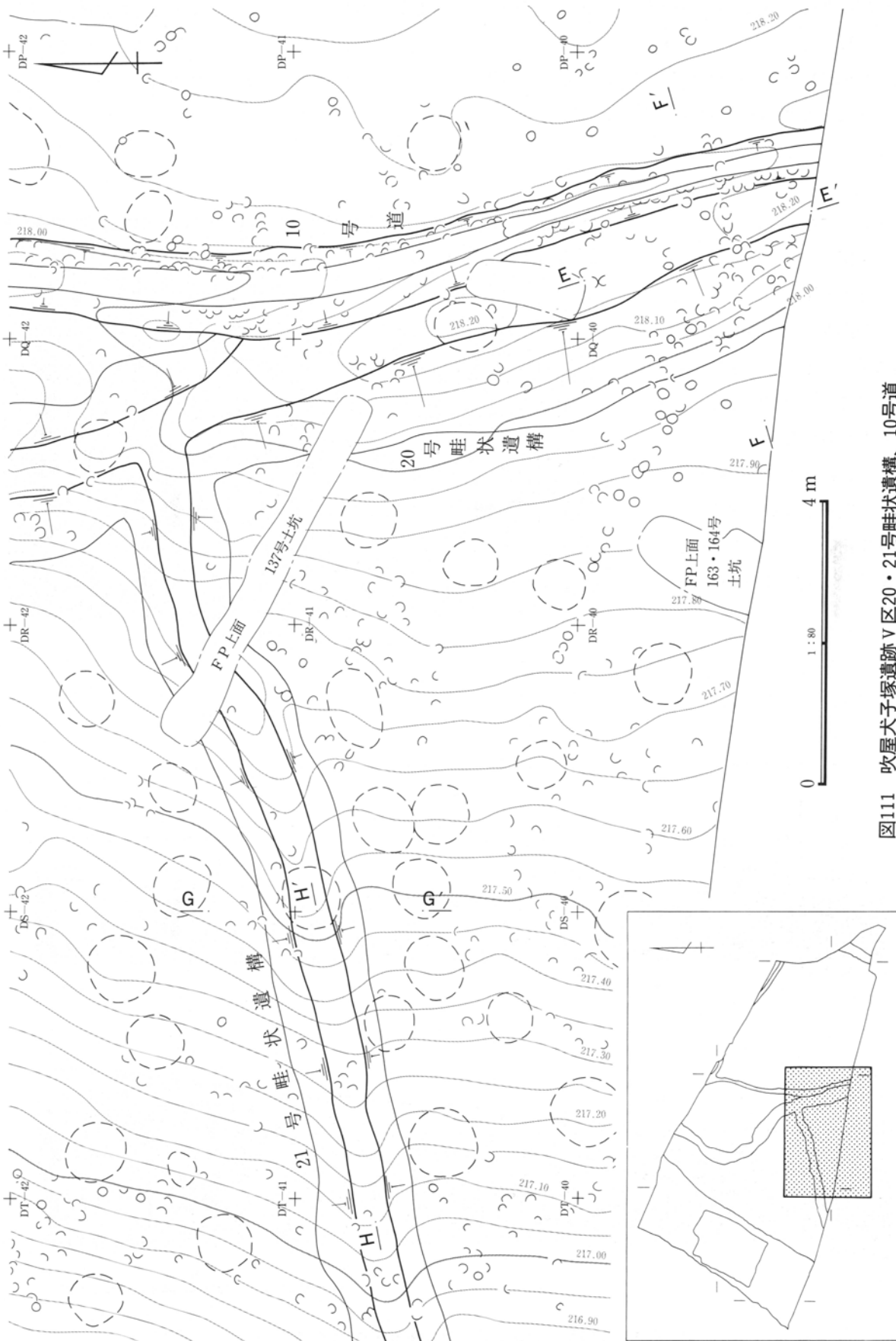


図111 吹屋犬子塚遺跡V区20・21号畦状遺構、10号道

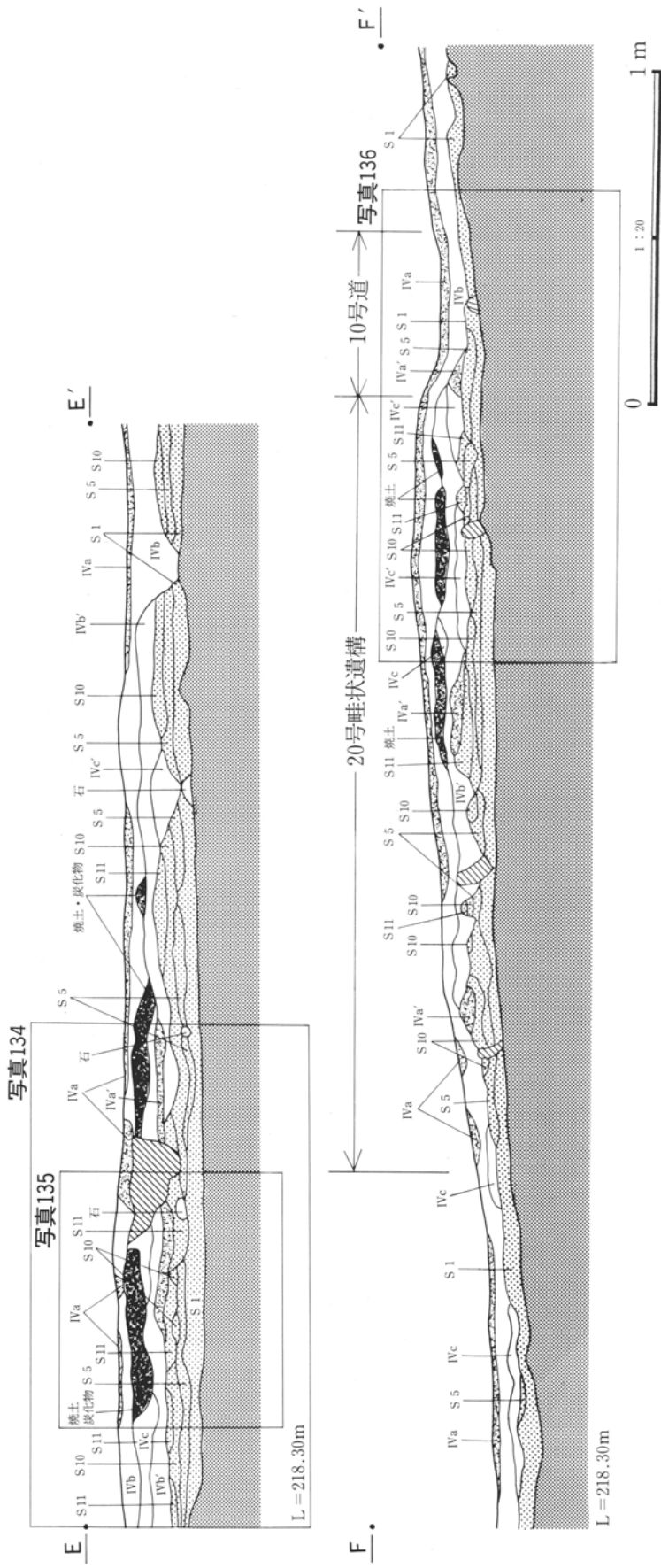


図112 吹屋犬子塚遺跡V区20号畦状遺構断面図(2)



写真134 20号畦状遺構断面 (E~E')

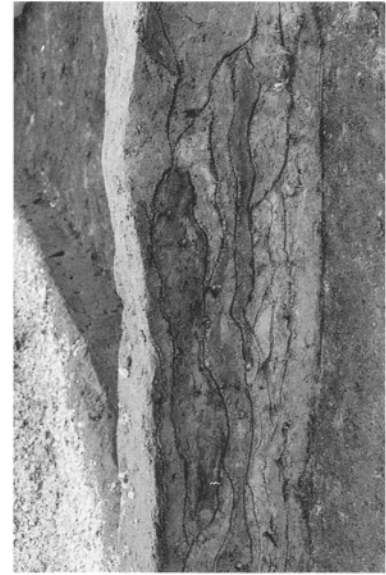


写真135 20号畦状遺構断面 (写真134の拡大)



写真136 20号畦状遺構・10号道断面

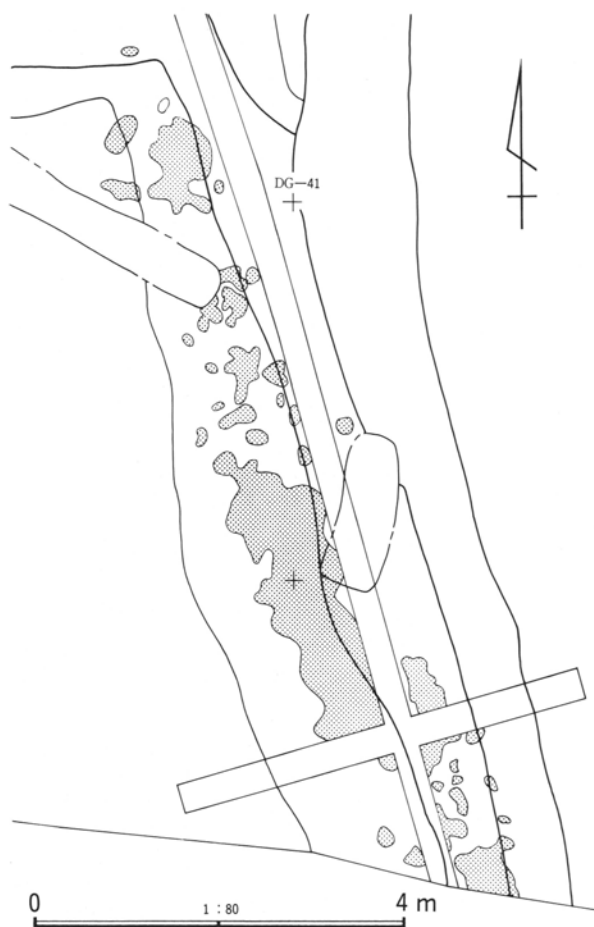


図113 吹屋犬子塚遺跡V区20号蛙状遺構南端部
IV層中の焼土・炭化物の分布

21号蛙状遺構 (図111・114、写真138・139)

V区西半部にある。ほぼ直線的にのび、方向はN-78-Eである。直線的であることと、20号蛙状遺構と直角に接続していることは注目すべきで、先述のように、20号の南側とともに一定の企画性をもって設けられたものであると思われる。

幅はほとんど一定で1.3~1.5mあり、比較的狭い。高さは5~10cmであり、部分的には明瞭な高まりをもっている。

盛り土中には焼土・炭化物の明瞭な層はみられな
いが、IVa層が2層存在する。

9号道 (図115、写真140)

V区北東部、発掘区の北壁に沿って走る。発掘区北東隅に約10m、中央付近に約5mがみついているが、その間は発掘区外になってしまっている。方



写真137 20号蛙状遺構IV層中の焼土・炭化物

向や幅、へこみの様子からみて一連のものであることは間違いないものと思われる。その位置・方向から、I区からつながっている幹線道の一部であると思われ、確認されている限りではここが最西端となる。ちなみに、9号道西端からI区の東端までは約300mあり、さらにこの幹線道が北中道II遺跡の3号・1号につながっているのだとすると、1号東端までは約430mある。

道の幅は、東側ではへこみが深いこともあってやや広く60~70cm、西側ではややへこみが浅くなるためか若干狭くなり50~60cmである。へこみの深さは、東側の部分で4~8cm、西側の10号道と接続するあたりでは、2~4cm程度である。

10号道との関係は、接続部がちょうど発掘区の境にかかってしまうので詳細は不明であるが、9号が

第3章 調査の成果

10号を越えてさらに西にのびているようにもみえ、それが正しければ2本の道は交差していることになる。

10号道(図115、写真141・142)

V区中央部をゆるやかに蛇行しながら南北に横断する。へこみが著しく、きわめてはっきりした踏み分け道である(写真141)。幅は、ほとんどの部分では約70cmであるが、20号畦状遺構の裾を通る部分では盛り土の斜面と区別がつかないため、倍近い幅にみえるところもある。へこみの深さは10cmに及ぶことも珍しくなく、さらに北端部付近では北にいくほど深くなり、その部分に設けた横断面(G~G')では16cmにも達する。したがって、深さだけからみれば9号道よりもよく歩かれていることが明らかである。この部分では東西方向よりも南北方向の移動の方が顕著であったのであろう。



写真138 21号畦状遺構(北東から)



写真139 21号畦状遺構断面

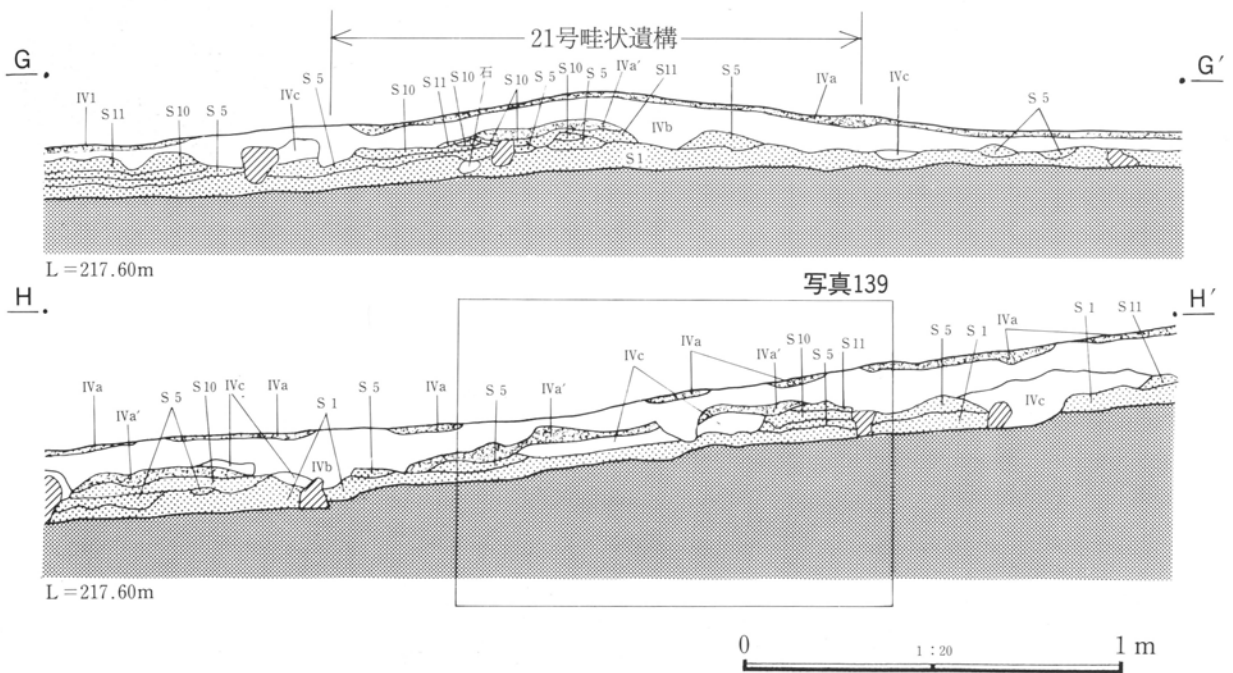


図114 吹屋犬子塚遺跡V区21号畦状遺構断面図

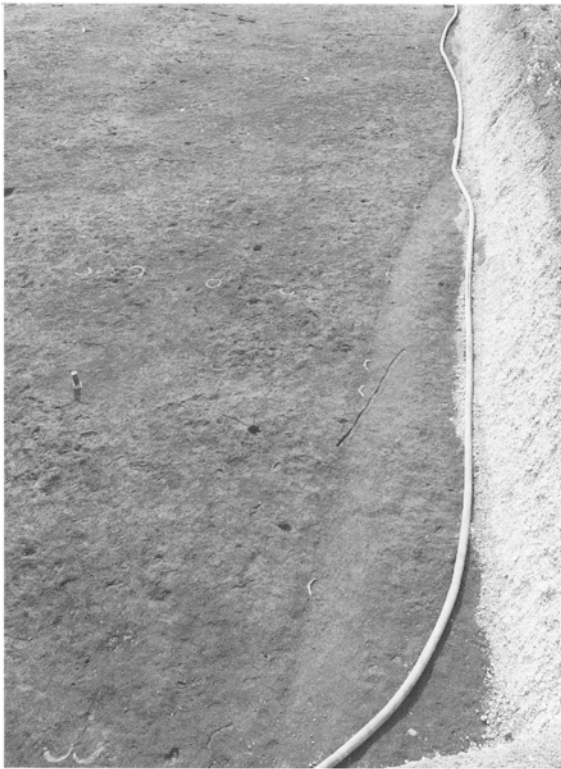


写真140 9号道東端部（南東から）



写真141 10号道（北から）

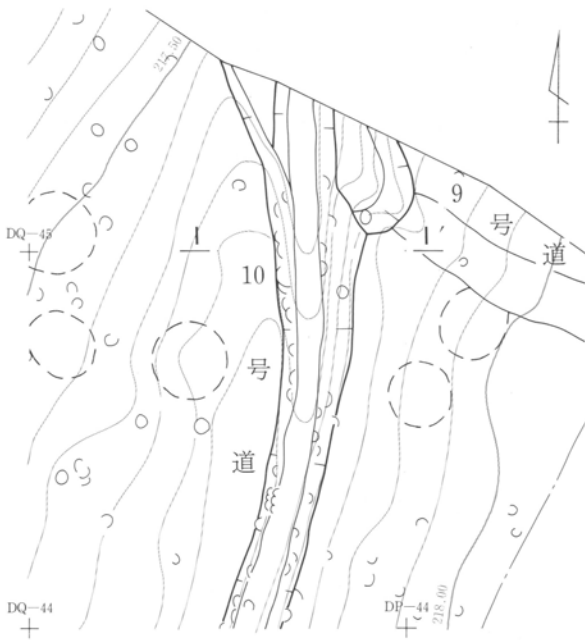
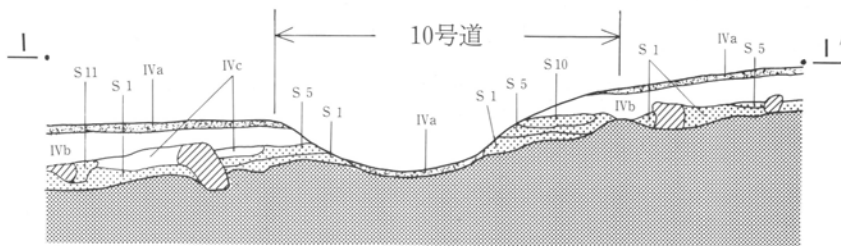


写真142 10号道断面



0 1 : 80 4 m

0 1 : 20 1 m

図115 吹屋犬子塚遺跡V区9・10号道接続部

〔VI区〕

この部分も発掘区の幅がきわめて狭い。畦状遺構は16号の1本がみつがっているが、わずか6m分がかかっているにすぎず、詳細は知り得ない。しかも、高まりが顕著ではなく、焼土・炭化物などもみられないため、畦状遺構ではない可能性も考えられるほどである。

なお、VII区もきわめて狭い調査区であり、畦状遺構がみつがっていないので、ここでは取り上げていない。

16号畦状遺構 (図117、写真143)

VI区中央にあるが、この部分の発掘区は狭いので、わずか6m分しかかかっている。盛り土の幅は2.8~3.5m、高さは5~10cmである。走行方向は6m分しかないのでやや不正確であると思われるが、N-28°-Wである。幅が広いので高まりは顕著にみえず、横断面図(A~A')でも不明瞭にしかみえない。

この横断面にみえるように、高まりは2列あるようであるが、いずれも低い上、土層からは盛り土を把握できず、しかも炭化物や焼土の層もみられない。以上のように他の畦状遺構と比べて不明瞭な遺構であることから、畦状遺構ではない可能性も否定できない。

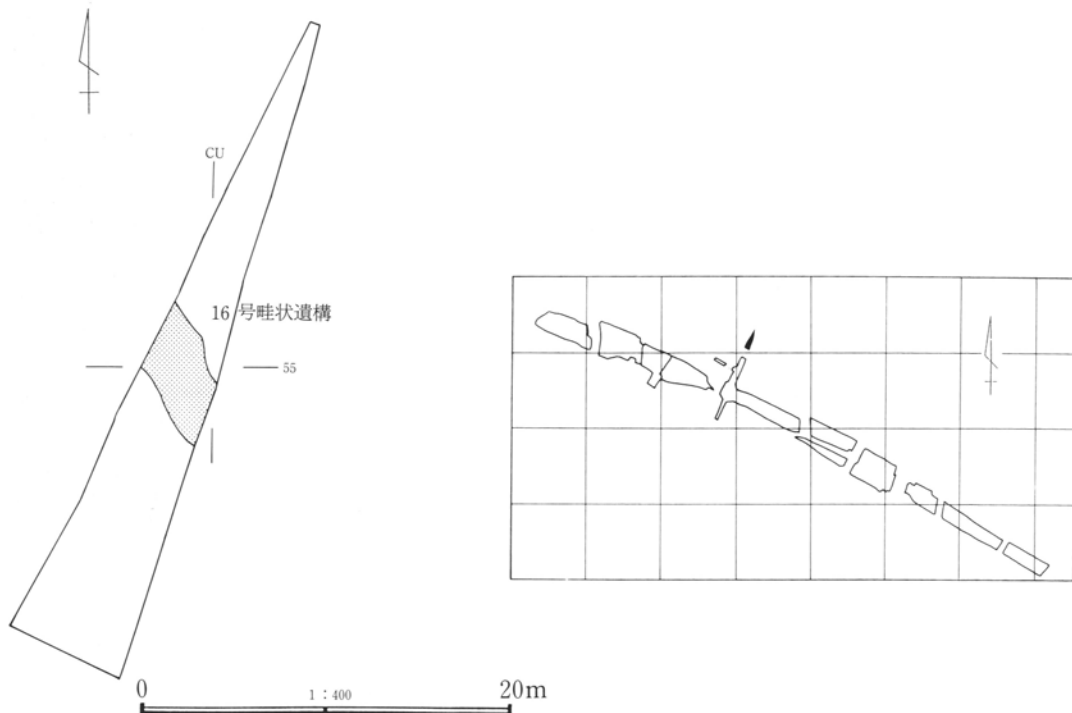
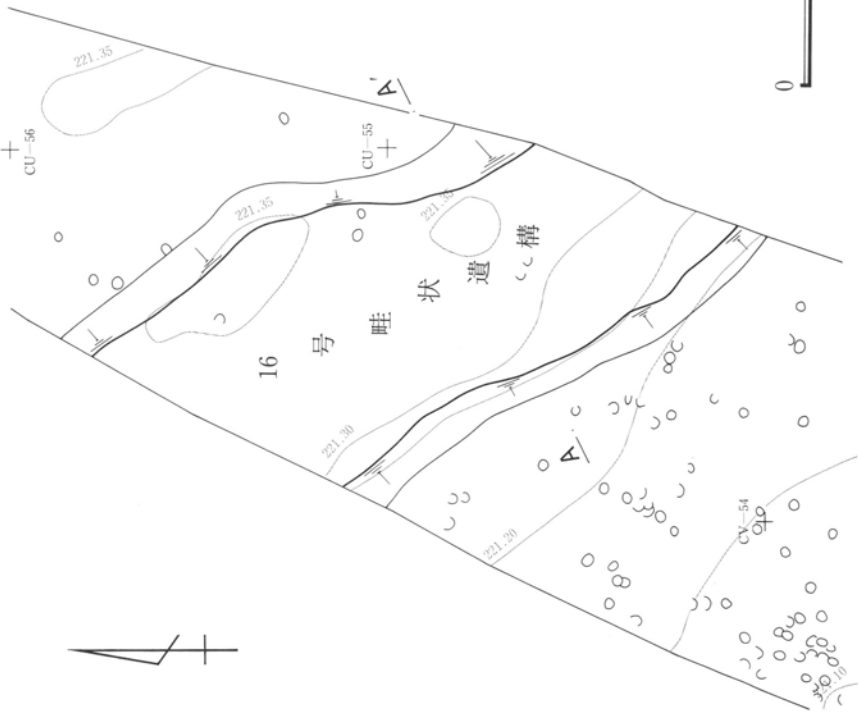


図116 吹屋犬子塚遺跡VI区F P下面全体図



写真143 16号畦状遺構 (北西から)



0 1 : 80 4 m

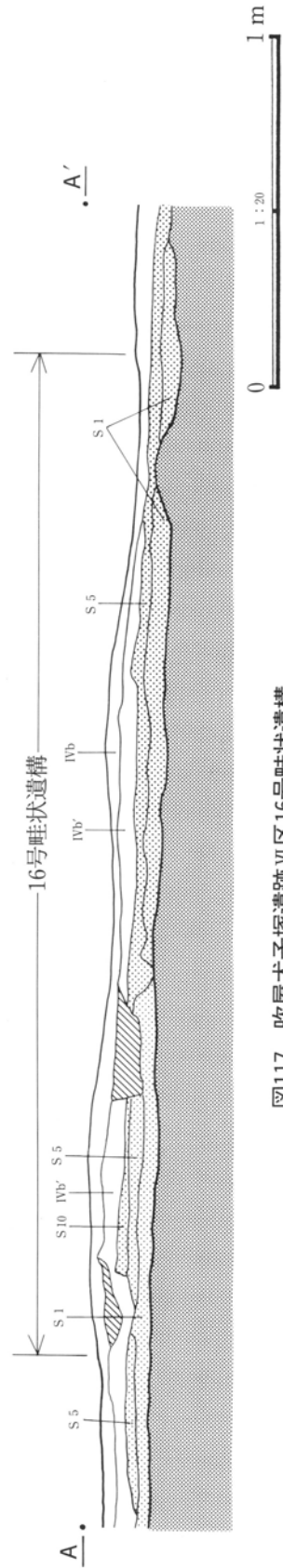


図117 吹屋犬子塚遺跡VI区16号畦状遺構

(4) 吹屋中原遺跡

〔I区〕

I区は犬子塚と中原とを分ける谷の西側にあたり、南東から北西に向かって高くなっていく(図118)。発掘区内でもっとも標高が低いのは3号畠跡の拡張部分の南東隅で214.25m、もっとも高いのは北西隅で218.20mであり、標高差は約4mである。傾斜は谷近くはきついが、それ以外はごく緩やかである。

畦状遺構は3本みつがっている。付図1でわかるように、中原遺跡内の畦状遺構の方向は、犬子塚遺跡とはやや異なる傾向にある。1号は直線的で、東側の屈曲部はほぼ直角に曲がっており、さらに走行方向が西隣のII区の畦状遺構に近く、一定の企画性が認められる。これに対して2号は緩やかに湾曲し、しかも途中で消えてしまい、様相が異なる。また、2号・3号の両遺構は、西に隣接するII B区の調査で見つけることができず、いずれも両調査区間で不明瞭となってしまいうらしい。

踏み分け道ははっきりしたもの2本、不明瞭なもの数本見付き、1~4号と名付けた。

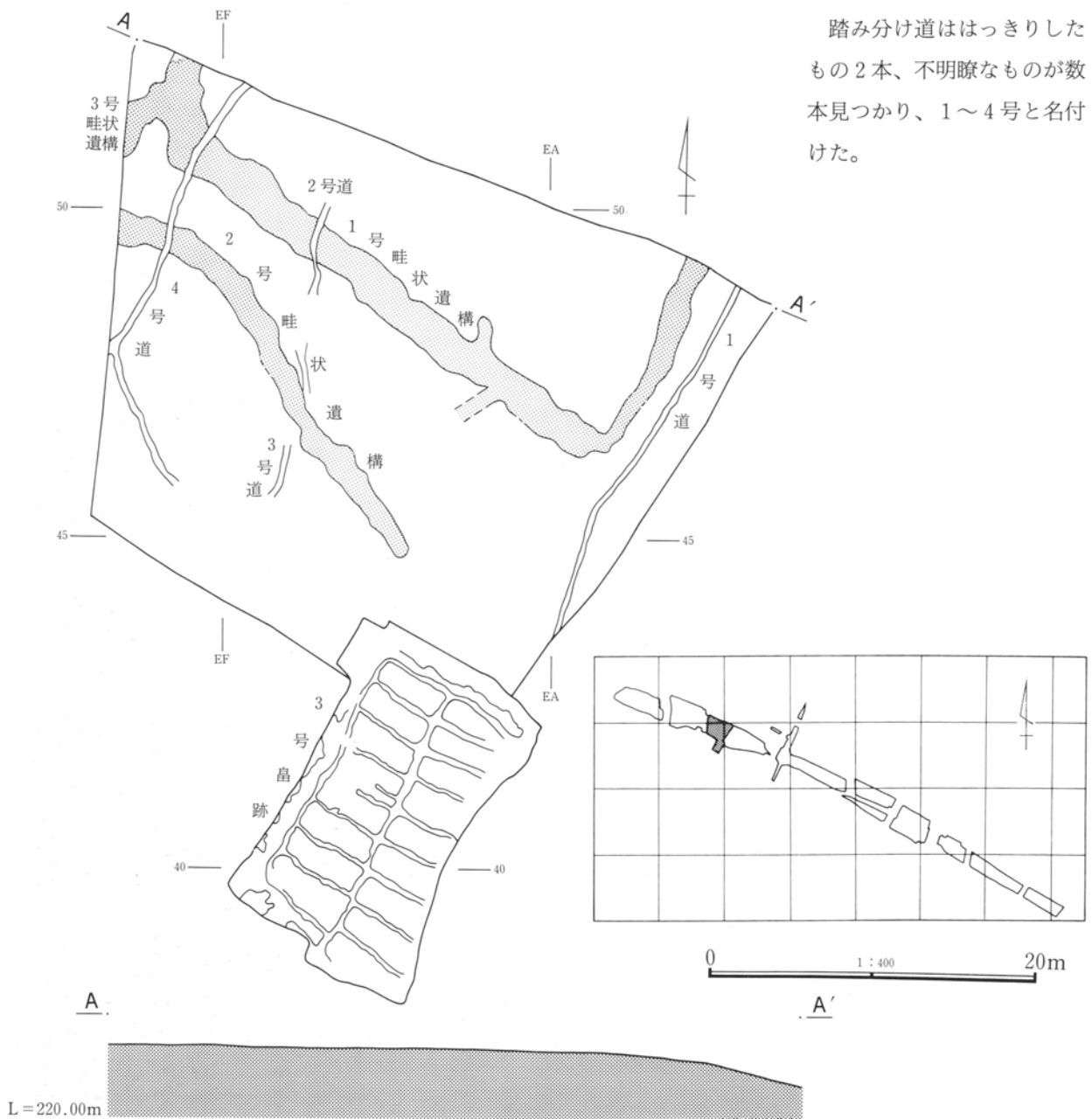


図118 吹屋中原遺跡I区F P下面全体図

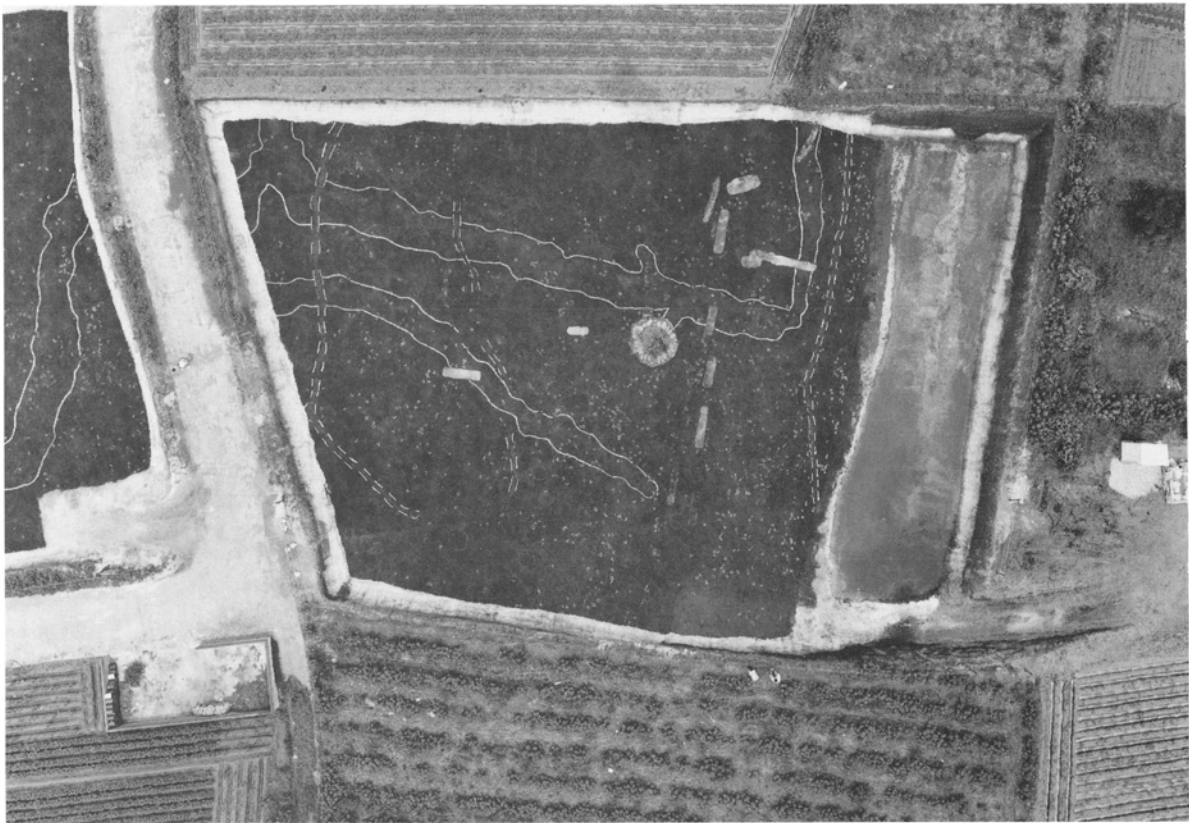


写真144 吹屋中原遺跡 I 区 F P 下面全景

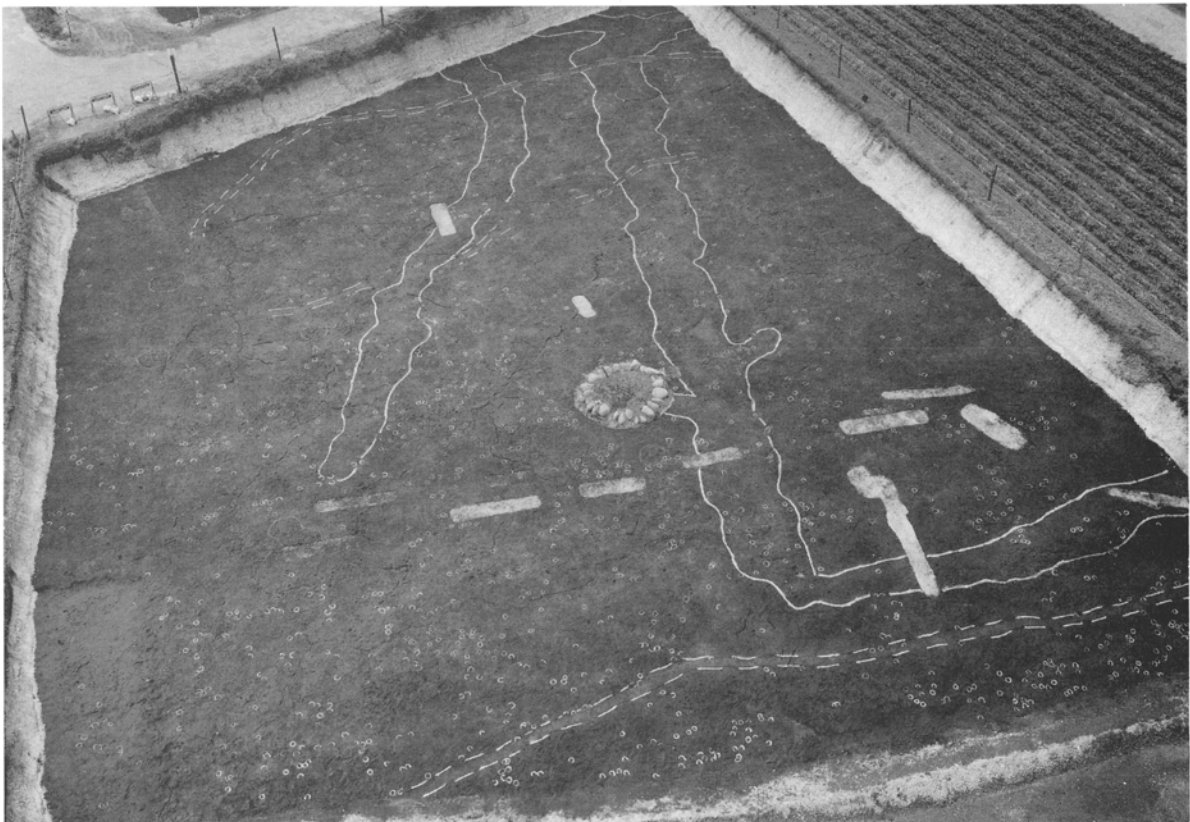


写真145 吹屋中原遺跡 I 区 F P 下面全景 (南東から)



図119 吹屋中原遺跡 I 区 1・3号畦状遺構北端部

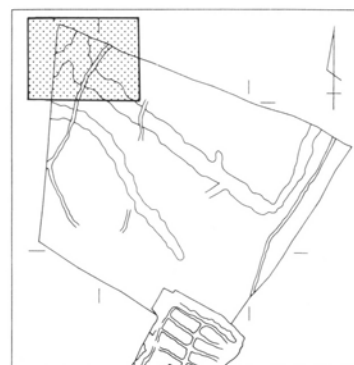


写真146 1・3号畦状遺構北端部（北西から）

1号畦状遺構（図119～121、写真146・147・150・151）

I 区北半部にある。調査区北西隅付近からほぼ真南に向い、それから方向をN-55°-Wに変えて直線的に南東に向い、谷の急斜面にかかる付近で約80°向きを変えて（N-25°-E）北東へと向かう。直線に

のびる部分が長いこと、東側の屈曲部が直角に近いことなどから、一定の企画性を認めることができるように思う。幅は2.0～2.3m程度のところが大部分であるが、東側の谷に沿う部分では細くなり、1.0～1.5mとなる。盛り土の高さは10～15cmと比較的



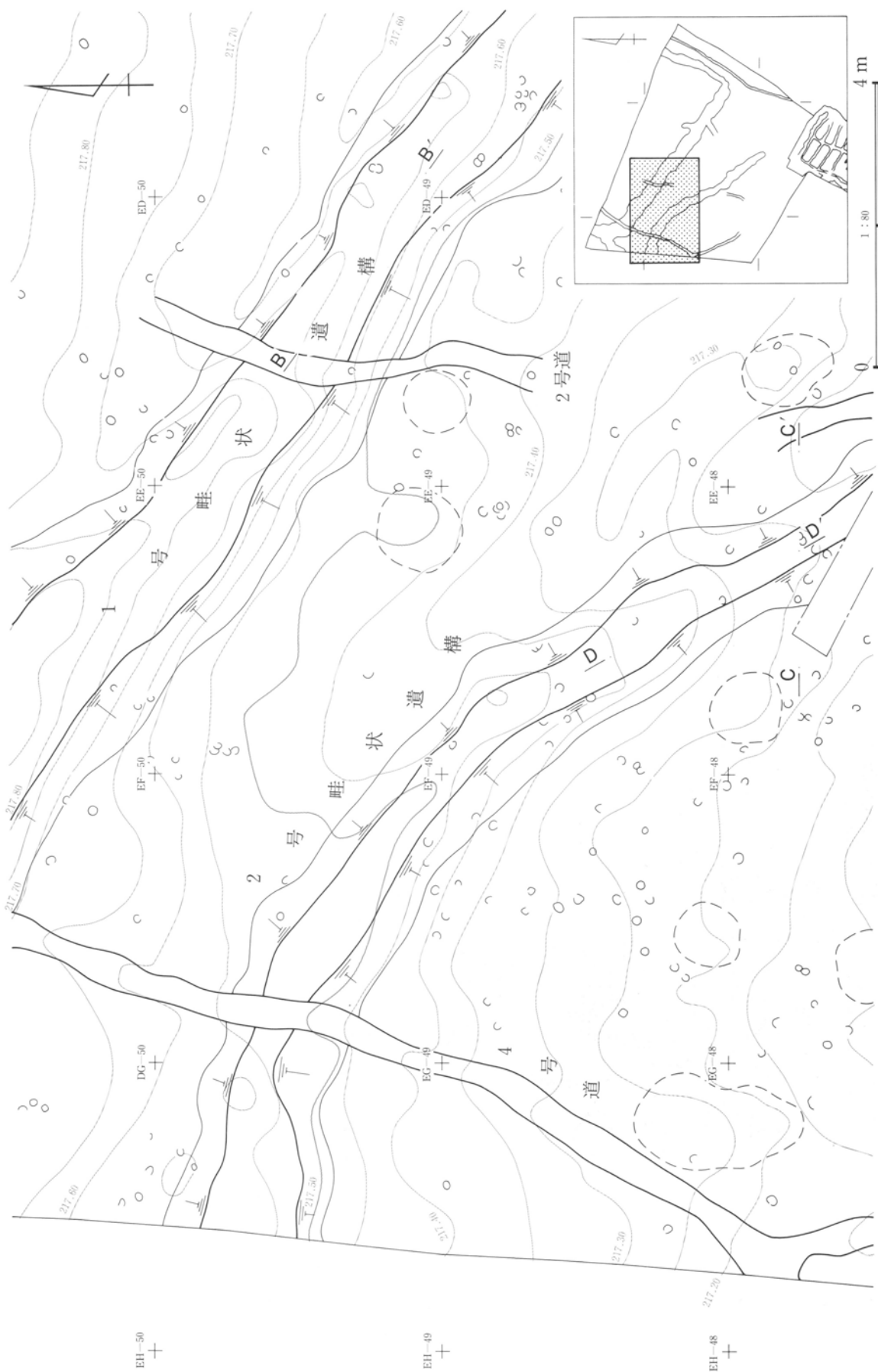


図120 吹屋中原遺跡I区1・2号畦状遺構西半部、2・4号道

第3章 調査の成果

高いが、東側の細くなる部分では5cm程度で目立たない。このように、東側の屈曲部を境にして幅・高さが大きく異なる。そのため、1号全体が一時期に設けられたものと断定することはできない。

断面をみると、IVa層が部分的に2層あることがわかる。ただし、下にあるIVa'層は、FA直上に密着しているところが多い。

2号畦状遺構 (図120・122、写真148・150・151)

I区中央にある。1号の南側にほぼ並行するが、直線的な1号とは異なって緩やかに湾曲し、しかも東端はEC-45グリッド付近で途切れてしまう。西側は、先述の通りIIb区では発見できなかったため、両区の境部分で不明瞭になってしまうらしい。このため、この畦状遺構の性格は1号とは異なっているものと思われる。

幅は1.0~1.5mで、西端付近はやや太く2.0m程度となる。高さは西半では高く10~15cm、東側では低くなり10cm以下である。

断面をみると、IVa層が上下2層あるのが分かる。下のIVa'層の大部分がFA直上に密着していること

は1号と同様であるが、層厚が5~10cmと厚いのが特徴的である。なお、C~C'セクションは盛り土を斜めに切っている上、ちょうど高さが低いところにあっているため、高まりが不明瞭にみえているので注意が必要である。

3号畦状遺構 (図119、写真146)

I区北西隅にあり、1号畦状遺構の西端部付近から南西方向にのびる。ちょうど発掘区隅にあたるので4m分が見つかったに過ぎないが、I区の調査時



写真147 1号畦状遺構断面

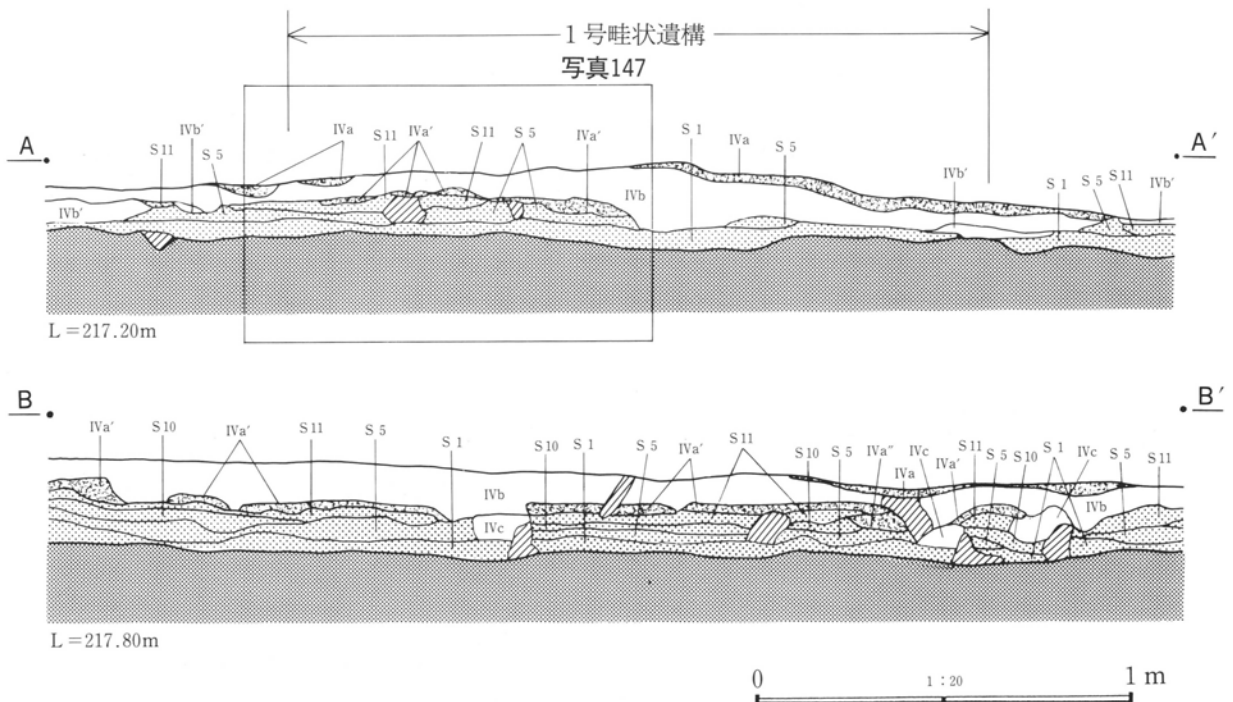


図121 吹屋中原遺跡 I区 1号畦状遺構断面図

には盛り土と思われる高まりが続いていたので畦状遺構と判断した。ところが、西に隣接するIIb区の調査では、その延長を発見することができなかつた。3号の盛り土の高まりは、両区の境付近で不明瞭になっしうと考えざるを得ないが、だとすると、3号の長さがあまりに短すぎることになる。このため、3号を畦状遺構と断定することはできず、226ページで述べるような株痕状の高まりが1号畦状遺構に接して存在した可能性

も否定できない。残念ながら、現状ではいずれとも断定できない。

I区にみえる範囲では、幅は1.5~2.0m程度、高さは約5cmであり、あまり目立つ高まりではない。

1号道 (写真149)

I区東端にあり、谷の斜面を谷に沿って走って



写真148 2号畦状遺構 (北西から)

る。北半分は1号畦状遺構と平行、つまり、等高線と平行であり、南半分になると斜面をゆるやかに下るように設けられている。より南側は犬子塚V区へのびているが、この付近は地下水に水没してしまうため、延長部分を確認することはできなかった。おそらく3号畠跡の下側(南東側)を通り、より南

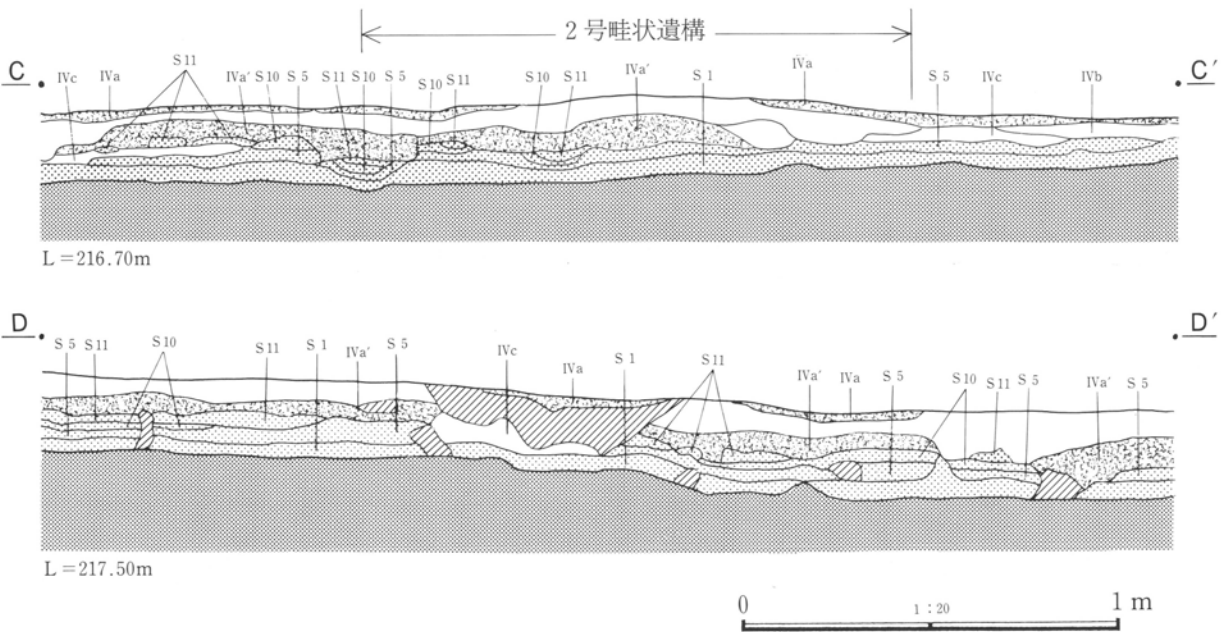


図122 吹屋中原遺跡I区2号畦状遺構断面図